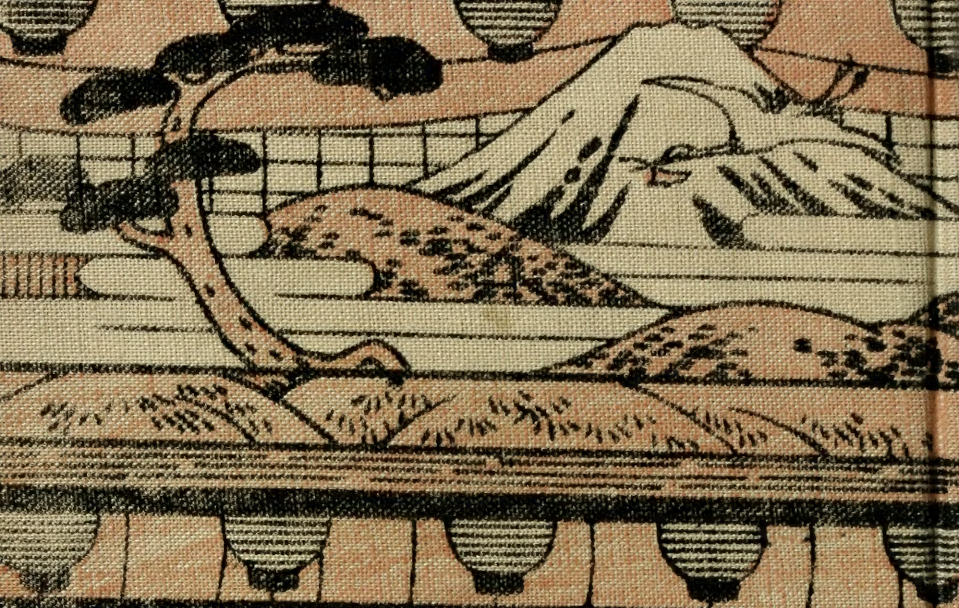


第九巻

伊勢音頭恋寝刃（いせおんどこひのねたば）

明烏夢泡雪（あけがらすゆめのあはゆき）

小春治兵衛 心中天網島（しんぢうてんのあみじま）

増補月桂川（ぞうほつきのかつらかは）

PL Kawatake, Shigetoshi
767 Sewa kyogen kessaku shu
K32
v.9

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

河竹繁俊
濱村米藏
渥美清太郎
共編

第九卷

# 世話狂言傑作集

東京
春陽堂發行

PL
767
K32
v. 9

# 目次


伊勢音頭戀寐刃（伊勢音頭　四幕）……一

明烏夢泡雪（明烏　一幕）……一七五

小春治兵衛 心中天網島（河庄・炬燵　二幕）……二一五

増補月桂川（お半長右衛門　三幕）……三〇一

巻末に……一一〇

## 挿繪の目次

桂川の場……………………………………口繪
（天保十一年三月河原崎座。　海老藏の長右衞門、菊五郎のお半、國貞繪）
代々講の場……………………………五三頁の前
（嘉永五年四月河原崎座。　八代目團十郎の貢、粂三郎のお紺、三代目豐國繪）
油屋の場………………………………一三七頁の前
（同。　八代目團十郎の貢、粂三郎のお紺、三代目豐國繪）
浦里雪責の場……………………………二〇九頁の前
（嘉永四年二月市村座。　八代目團十郎の時次郎、しうかの浦里、三代目豐國繪）
河庄と炬燵の場…………………………二五五頁の前
（文政十二年八月市村座の繪本。　簑助の治兵衞、三津五郎の孫右衞門）
桂川……………………………………三四七頁の前
（三代目豐國の五十三次。　源之助の長右衞門、粂三郎のお半、三十郎の幸左衞門）

# 伊勢音頭恋寝刃

いせおんどこひのねたば

# 伊勢音頭戀寢刃

相の山の場
妙見町宿屋の場
二見ヶ浦の場

## 序幕

役名　福岡貢、藤浪左膳、岩田萬次郎、奴林平、德島岩次、熊本角太郎、横山大藏、桑原丈四郎、黑上主鈴、御師娘榊、油屋抱お岸、同小てる、禿三よし、仲居千の、同蔦の、相の山お杉、同お玉、歌比丘等。

勢州相の山の場　本舞臺三間の間一面の杉林、眞中に松の葉にて屋根を造り、常足の草土手の上に九尺屋體、床几にお杉お玉三味線を彈いてゐる、參宮の仕出大勢、此の中に比丘尼びんざさら杓ふつてゐる、子供二人揃ひの振袖、あや竹をふつてゐる、都て勢州相の山の體。大阪はなれての木

遣唄にて幕明く。

子供二人　でんちうぢやはりしぢゝや。

比丘　しまサアこんサアなかのりサア、あちらの姉サアこちらの坊サア、こゝばかりぢやヤテカアンセ〳〵。

ト此間仕出お杉お玉に錢を投げる事あつて、上下に別れて入る、やはり右鳴物にて花道よりお岸、蔦の、千の、小照、兎の三よし、いづれも仲居の拵へ、着附の上に揃ひの浴衣を着て、いづれも打連れて出る。

千の　コレお岸さん、もそつと靜に歩かしやんせいなア。

蔦の　なんぼ、そのやうに急がしやんしても、萬樣はちつとやそつとで。

お岸　又蔦のが惡口かいの、此伊勢詣の面白い事、長い年月此伊勢に勤はしてゐれど、遂に道中を歩いた事がないによつて、京大阪の參宮さんすお方がうらやましかつたが、歩いて見るとなほ面白いによつて、つい足が早うなつたのぢやわいなア。

千の　そりや、尤いなア、萬のさんの思付で、參宮の扮裝をしての此趣向、二見や淺間の遊山とは、格別面白いぢやないかいの。

小照　お前方は面白いか知らぬが、私や、しんどうてならぬわいなア。

三よ　それ〳〵お岸さん、チト休んで行かしやんせぬか。

お岸　オヽさうであらう〳〵、内宮さまの八十末社廻りで、私も餘程草臥れたが、萬様をこゝで待合さうではないか。

お杉　コレ女中さん、そこ退いて下さんせ、錢儲けの邪魔になるわいの。

お岸　ほんにこれはこちが誤つた、蔦の、お錢進ぜてたも。

蔦の　ツイ遣らうより、此錢投げて樂まうぢやないかいの。

千の　こりやよからうわいの、サア子供衆も投げさんせ〳〵。

ト錢を皆々へ渡す、又きやり唄になり、お杉お玉は三味線を彈きゐる、女達錢を投げてやる。花道より萬次郎、大藏、丈四郎衣裳の上に、絲の浴衣を引張り、駕をかつぎ出る。

萬次　エツサツサ〳〵。

丈四　さや豆コ。

萬次　枝豆コ。

大藏　さや豆ぢや〳〵。オツト肩ぢや。

ト杖をする、後より林平奴の拵へにて、柳樽に提重と、三人の大小を三尺手拭にて括り、わりがけにて持つて出る。

林平　オヽイ／＼。これはしたり若旦那、お遊びなさるゝとて大概の事をなされませ、大藏樣も丈四郎樣も外聞の惡い、モウよしにたされませ。

萬次　なんのわれが知つた事ぢやない、かまはずとやれ／＼。

丈大　合點ぢや、エツサツサ／＼。

ト本舞臺へ來る、林平も迷惑の顏にて來る。

蔦の　エヽ萬樣かいな。何をして居なさんすぞいなア、其形はなんぢやぞいなア。

萬次　何ぢやどころか、參宮人に施行駕ぢや、サア皆もこゝで休め／＼。

丈大　オツトセイ、ヨンヤサ。

ト駕を降し、皆々床几へかゝる。

お岸　申し萬樣、お前もマア駕舁の眞似をせねば、遊ばれぬかいなア。モシ怪我でもあつたら、どうせうと思はしやんす、モウよしにして下しやんせいなア。

林平　さうで御座ります、おらが云うてもお聞入れがない、急度云うて下さりませ。

萬次　サア私もどんな事ぢや知らぬけれど、大藏や丈四郎が云ふには、我身を參宮人の眞似さして、街道を歩かすとようねれるげな、それがきつい樂しみぢや程に、わしもねれるやうに駕舁けと云うた故、それでしんどいけれど駕舁くのぢやわいなう。

お岸　エヽお前方も大概な、惡戯を敎へたがよいわいなア。

丈四　オツト腹を立て給ふな、此施行駕に數多の女を乘せて、お岸女郎に比ぶれども、いつかないつかな叶はぬ〳〵。

大藏　これと云ふも、そなたの器量を、若旦那へ自慢せう爲ぢやわい。

萬次　それはさうと、今の娘は風俗と云ひ、ほつそりとした好い器量ぢやないかいなう。

丈大　左樣でござりまする。

萬次　あゝいふ奴を釣らねば役に立たぬ。

お岸　其娘子が、お前氣に入つたかエ。

萬次　ムヽ氣に入つた。

お岸　オヽ憎い〳〵。（ト萬次郎をつめる。）

萬次　アイタヽヽヽ。

お岸　誰に逢ひたいのぢやな〳〵。

萬次　その娘に。

お岸　又そんな憎らしい事、いはしやんすかいなア。

　ト萬次郎が胸倉を取る、大藏丈四郎中へ割つて入り。

丈四　コリヤ門中で、痴話喧嘩かいナ。

大藏　こりや中直りに、大道で雲助酒はどうであらうな。

萬次　よからう〳〵、酒を持て〳〵。

林平　ネイ〳〵。

　ト件の樽と提重を持出す、仲居皆々手傳ひて、鶯の毛氈を敷き、その上に酒の肴を並べ、皆々はよろしく住ふ事、右合方。

お玉　コリヤあんまりぢや〳〵、最前から店先をふさいで、どうするのぢやぞいなア。

丈四　えいはい〳〵、そち達には旦那より、金子を遣はさるゝ、暫くの間だ、こゝを貸せ。そりや金子を遣す。

　ト林平の持ちし萬次郎の紙入より、一兩金を取出し、お杉お玉にやる事よろしく。

お玉　ヤアこりや小判ぢや、ホヽヽヽ結構な旦那ぢやわいなア。
お杉　アノお若いのが旦那様かえ、テモよい御器量。
お玉　あれなら、娘があつちから、ナウお杉。
お杉　それ〳〵、ずる〳〵べつたり〳〵。
比丘　これ〳〵子供衆、こゝにゐては、旦那方のお酒の邪魔になる、まつと先へ行かうぢやないか。
杉玉　オヽさうせう〳〵、サア比丘や、ごんせ〳〵。
皆々　ずる〳〵べつたり〳〵。
ト矢張右合方にて、比丘、お杉、お玉、みな〳〵下手へ入る。
丈四　さて〳〵かしましいやつらぢや。しかし、今のを、若旦那、お聞きなされたか。女の方からずるずるべつたりとは、秀句をやりをつたぢや御座いませぬか。
大藏　これを肴に、雲助酒ぢや。
ト此時駕の内にて
榊　申し、どうぞ駕やつて下さりませぬかいなア。（ト御師の娘の拵へにて、駕の垂を上げる。）
萬次　ほんに、とんと忘れてゐた、酒の相手にする、こゝへ呼べ〳〵。

文四　こりやよい思付、サア〳〵いきつぎに、一つあひをして下され。

　ト文四郎鶴より榊が手へ取り、萬次郎が傍へ突きやる。

榊　私や恥しい、堪忍して下さんせ。

　ト逃げようとするを、萬次郎捕へて、

萬次　オット逃してよいものか。

お岸　萬様、そんなら今云はしやんした娘御は、此お方かえ。

榊　私がいやと云ふ盃を、無理に乗せてから、モウいなして下さんせ。

お岸　コレ性悪の悪性男、私が見る前で、見事その盃を、あの娘御にさして見やしやんすか。

萬次　オヽさす〳〵、から呑みかゝつたからには、さして〳〵さしぬくのぢや、サア娘、一つ呑んでくれ、男が立たぬ〳〵。

榊　私やいやで御座んすわいなア。

お岸　イヤさゝす事はならぬ〳〵。

萬次　イヽヤさすのぢや。

榊　私やいやぢやわいなア。

お岸　ならぬわいなア〱。

萬次　イヤ呑さにやおかぬ。

榊　堪忍して下さんせいなア。

ト榊逃ぐるを萬次郎追へば、お岸萬次郎を追ふ、これについて皆々廻り、此一件ごちや〱になる。林平氣の毒なるこなし。此時右合方にて、向うより藤浪左膳、羽織袴吹そらしの陣笠大小にて、仲間二人を連れ出る。榊は左膳の蔭へかくれる。

萬次　何でも、此盃を呑さにやアおかぬのぢや。(ト盃を持ち、左膳を見て悔り。) やア。あなたは、南無三。(ト逃げようとする。)

左膳　コリヤ〱萬次郎、待て〱。見れば往來にて女を捕へ、刀を帯せず、此有様は何事ぢや。

ト上手へ逃る、大藏丈四郎慌しく酒肴を片寄せ、林平は女共を圍ひ、件の大小を主人に渡す

萬次　これは〱、思ひよりませぬ所で、お目にかゝりまして御座りまする。あなた様には輕々しく、何處へお出で御座りまするな。

左膳　當時鎌倉の執權職は、古今に秀し博學多才、昔の北條時頼にも劣らぬ賢人故、自身に諸國を巡檢あるとの知らせ、夫故我支配内の地頭代官の者共、邪曲の計ひあつては、國の名折故。身

共が衛の見廻り、其方は誰あらうぞ、阿波の家老今田九郎右衛門が倅の身を以て、其身持は何事ぢや。シテ青井下坂の刀、手に入たか、どうぢや〳〵。

萬次　サア其刀の儀は。

大藏　アイヤ、恐れながら、其刀の儀は、處々方々と尋ねましたなれ共、相知れませぬ處、大神宮様へ祈誓をかけし德により、やう〳〵此頃手に入りました、其お禮詣、それで此扮裝で御座ります。

左膳　ハテそれは仰々しい參宮ぢやな、そちが主人阿州殿より、武將家へ差上ぐる下坂の刀、大切なる役目、油斷なきやうに致したがよい。ム、見れば、それに居るは孫太夫が娘の榊でないか、何故に此所へ。

榊　ハイ貢様が、松坂へお出なされて、お歸りがおそい故。

左膳　ハア迎ひに來たか、ハ、、案じるやうではあるわい、貢は身が用事あつて遣はした。追付戻るであらう、山田の宿屋で相待ち居れ。萬次郎そちには態と申し聞す仔細がある、山田の宿屋まで罷來やれ。

萬次　御用も御座りませうならば、追付後より參りませう、先づお先へお出下さりませう。

左膳　然らばさうせう、榊參れ。家來供せい。

ト唄になり、上手へ榊を連れ左膳入る、あと合方。

萬次　ヤレ〱恐しや〱、きつい所で小舅殿に出會うたことぢや。

お岸　萬さん、今のお方は、お前の何ぢやえ。

萬次　アリヤ神領一萬石を支配する、藤浪左膳樣といふ御仁ぢやわいなう。

林平　それ御覽なされ、手前がおやめなされといふ時に、おやめなさると、藤浪樣に見付かる事も御座りませぬ、今のやうに御意なされたれば、早うお出なされずばなりますまい。

萬次　ほんにさうぢや、大藏丈四郎我等達は、女子共を連れて先へ行きや、私は後から行く程に、早う行け〱。

丈四　成程藤浪樣は氣味が惡い、然らば古市へ先へ參りませう。

お岸　そんなら萬樣、早う來て下さんせえ。

蔦の　待つて居りますぞえ。

萬次　合點ぢや〱、早う去ね〱。

大藏　サア皆來やれ〱。

トわや〳〵云うて、お岸、蔦の、千の、小照、三よし、大藏、丈四郎下手へ入る。

林平　イヤ申し若旦那、シテ下坂の刀は、どう遊ばしましたのぢやなア。

萬次　サア其刀は買取つたけれど、茶屋の入用金に詰つた故、山田の町人胴脈の金兵衞とやらいふ者に質物に入れたが、其者は出奔して行方が知れぬ故、それでこのやうに居なずにゐるのぢやわいなう。

林平　滅相もない、左膳樣が刀の事お尋ねなされたら、何とせうと思し召すな。

萬次　サア私もそれが氣にかゝる、しかし折紙は私が持つてゐる、どうぞ刀を取戻す、思案してたもいなう。

林平　こりや篤と、思案せねばなりませぬわい。

トやはりきやり唄になり、上手より黑上主鈴、撫付繼上下大小、御師の形にて、下坂の刀を持ち出で、萬次郎林平の前を通り、花道へ行きかける、此跡より北六、着流し大小の拵へにて出で來り、兩人共下手にて、

主鈴　アイヤ〳〵卒爾ながら、其許は、山田の佐野屋善兵衞方に、止宿なさるゝ御浪人では御座りませぬか。

北六　いかにも左樣で御座ります、ムウ、シテ其許はどなたで御座るな。
主鈴　拙者事は、御長官の支配下黑上主鈴と申す、御師で御座るが、貴殿には此度名作の刀をお求めなさるゝとあつて、手前所持の下坂の刀を、半金五十枚に所望致させくれよと、佐野屋善兵衞より段々の頼み故、只今持參仕る所で御座る。
北六　それは幸ひ、シテ其靑江下坂の刀は、所持致して御座るか。
主鈴　いかにもこれに所持して居りまする。
　　ト此臺詞を萬次郎林平聞いて、あの刀を取返してくれいといふこなしよろしく。
北六　然らば宿許へ同道致し、金子と引替に致さう。
主鈴　左樣仕りませう、サアお出なされい。
北六　御免下され、お先へ參る。
　　ト主鈴北六連立ち、花道へ行かうとする。
林平　アイヤ〱、御兩所共、ちとお待ち下されい。」
北六　手前の事で御座るかな。
林平　いかにも左樣で御座る。

北六　お留めなされしは、何ぞ御用でも御座るかな。

林平　イヤ別儀でも御座りませぬが、青井下坂の刀をお求めなさるとの儀、その刀は元手前主人が遠國より參りて求めました一ふり、ちと仔細あつて人手に渡りしが、今その刀を外へやつては、主人の一命にもかゝはりまする、何卒其刀此方へ所望させては下さるまいか。

北六　そりやお心安い事、拙者は此刀に限らず、名作でさへあればよい、御入用なれば隨分御勝手になされい。

林平　ナニお聞き入れ下さりまするか、先は大慶、シテ又あなたは御得心で御座るかな。

主鈴　イヤモウいづれへつかはしても、構ひは御座らぬ。

林平　然らば其刀、一寸拜見仰せつけては下されぬか。

主領　何より心安い事、サ、御覽なされい。

ト主鈴刀を林平に渡す、林平取つて萬次郎に見せる。

林平　御旦那、これ御覽なされませ。

ト萬次郎受取り、改め見て。

萬次　こりや下坂の刀ではないわいなう。

林平　スリヤ是では御座りませぬか。

主鈴　アコレ〳〵麁相仰せられな、下坂の刀に相違ない證據は、折紙がこちらに御座る、これ見さつしやれ。

ト折紙を出して林平に見せる、林平見て。

林平　ハ、、それで化の皮が現はれた、其折紙は此方に所持してをるわい。

主鈴　ハ、、下坂の折紙が、二枚有らうやうは御座らぬわい。

萬次　イヤ〳〵其折紙は、身共がこゝに持つてゐるが、何と是でもあらがうか。（折紙を出して見せる。）

北六　ドレお見せ下され。（ト双方の折紙を取って比べて。）ムウ、ハテ能く贋せをつたな。

林平　シテ此下坂は、いつ頃より所持めされたな。

主鈴　三年以前より、手前所持致して居りまする。

林平　ムウそれでがらりと脈が上つた、當春當所支配人より詮議して、手に入つたる刀、人手に渡したはあとの月、年月が相違致したわい。

主鈴　スリヤ當所の支配人は知つて御座るか。

林平　知れた事だ。

主鈴　南無三、しまうた。

ト逃げようとする主鈴を、北六引捕へ。

北六　うぬ、憎いやつ、おのれ騙りに相違ない、すんでの事に五十枚騙らうとしろいだ、大盗人め、うぬがやうな奴はかう〳〵。

ト北六此間に折紙を摩替へ、萬次郎の出せし本統の折紙を懐中する、刀にて主鈴をむね打に打据える事よろしく。

主鈴　アイタヽヽ、ハイ〳〵お赦なされて下さりませ〳〵、ハイ〳〵ふとした出來心で御座ります、あなたが佐野屋に御座つて、刀をお求めなさるゝと聞いた故の思付、これといふのも一人の母者人が大病、人參代に詰つたからの騙事、どうぞ御料簡なされて下さりませ。

北六　まだ〳〵のぶといやつの、うぬ、眞二つに。

ト切らうとするを、萬次郎割つて入り。

萬次　マア〳〵お待ちなされませ、憎い奴とは申しながら、親孝行とあれば、命は助けておやりなされませ。

主鈴　ハイ〳〵命ばかりは、お助けなされて下さりませ。

北六　うぬ、助けにくいやつなれ共、お侍の御挨拶に免じ、赦してくれる、扨て貴公のお陰ですんでの事に騙らるゝ所を遁れまして、サア此折紙は二枚共に、貴殿へお渡し申す、サ、しつかりとお受取下されい。

ト折紙を林平に渡す。此時土手より仲間一人出で來り。

仲間　ハツ、萬次郎樣、これに御座りまするか、主人左膳お待ち兼ね故、お迎ひに參りまして御座りまする。

萬次　成程それへ參らう。イヤナニ御浪人、あの者の事は幾重にもお赦されて下されい。

林平　ハテあやつの事はお構ひなされず、早うお出なされませ。

萬次　左樣ならば御浪人、重ねてお目に懸りませう。

ト唄になり、萬次郎林平、仲間を連れ上手へ入る。

主鈴　ア、ゆるされませ〳〵。

ト主鈴を連れ行かうとする、大藏丈四郎下手より出で、四人共顏を見合せ。

大丈　北六殿。

北六　こりや。（トあたりへこなし。）

大丈　シテ貴殿はいかゞで御座るな。

北六　まんまと折紙はすりかへて、身が手に入つて。（ト懐中より出して見せる。）

大丈　うまい〳〵。

北六　これといふのも、按摩の了庵、太儀〳〵。

了庵　モウよろしう御座りまするか。

ト衣裳上下を脱ぐ、下に木綿の袷、大小上下を衣裳と一緒に引括り、肩に引かける。

北六　ソレ骨折代ぢや、太儀であつた、此場を早く〳〵。

ト北六紙入より金を一分出してやる、主領取つて。

了庵　こりやお金、エヽ有難う御座ります。

北六　物数云はずと早く行け〳〵。

ト了庵金を戴き、按摩の笛を吹きながら、向うへ入る。

まづ一方は片付いた、シテいよ〳〵刀の持主の行方は知れぬか。

大藏　さればさ、洞脈の金兵衛といふやつに、預け置いたが、こやつかいくれ知れませぬ。

北六　これとても、遠くは行かう筈はない、金さへやれば取戻される、シテ阿波からの便りはなか

りしか。

丈四　追々大學様から、角太郎様への書狀が參れば、詳しい樣子は知れまする。

北六　よし／＼まだ話す事もある、何かは宿屋で、どりや。（ト兩人へ囁く。）

大丈　心得ました。

ト兩人呑込み思入あつて、下手へ入る。あと本釣鐘、暮六つゴンとうつ。

北六　何かの手筈も、全備の晝ではない、もはや暮六つ、ドリヤ宿屋へ行つて休まうか

ト風の音にて、北六編笠を持ち直し、きつとこなし、よろしく此道具。ぶん廻す

山田妙見町宿屋の場　本舞臺三間の間常足の二重、上手附屋體、見付暖簾口、上下鼠壁、軒口に講中の目印札掛けあり、都て山田妙見町宿屋の體。こゝに熊本角太郎、ぶつさき羽織野袴大小代官の拵へにて立懸り居る、前の拵へにて左膳これを留めてゐる見得、下手に百姓大勢わや／＼云つて、角太郎に詰めかけ居る。合方ばた／＼にて納る。

百姓皆々　すまねえぞ／＼。

角太　慮外な奴、手は見せぬぞ、それへ直れ、眞二つに。

多作　なんぼ御代官でも、云ふ事は云はにやアなりませぬわい。

角太　ヤアその頬桁を。

ト此時左膳支へて。

左膳　イヤ角太郎殿お待ちなされい、見ますれば百姓共を對手に立騒いで見苦しい、かやうな事もあらんかと自身に見廻る藤浪左膳、こりや百姓共、樣子があらう、身共へ申せ。

多作　扨はあなたが、藤浪樣で御座りまするか、さうとは存ぜず無禮の段、眞平御免下さりませう。

左膳　其斷りには及ばぬ、サア早く其譯を言へ、どうぢや。

皆々　サア〳〵多作殿、こなた、いはつしやれ〳〵。

多作　ヘイ〳〵私共は、御神領一萬石の百姓で御座りまするが、紀州領と前々から水論が御座りまして、此あとの御役人の御挨拶で、其儘に捨て置き御座りましたが、あの角太郎樣がお捌きで、紀州領へ御贔屓の御沙汰。

角太　ヤイ〳〵ソリヤ何ほざく、此角太郎が贔屓の沙汰とは、憎い奴の。

左膳　ハテいふ事はいはしたがよい、さうしてどうぢや。

多作　此水論に負けましては、私共難儀致しまする故、御願ひ申上げましたれば、金子三百兩出せ、

あの方へ挨拶してやらうとある故、其金を差上げまして御座りまする、又もや其上に　私共の田地に角太郎様が棹入れらうと仰りまする故、お赦しなされて下さりませと、お詫申しましたを、慮外者とあつて、庄屋をお咎めで御座りまする故のせり合、ハイ／＼どうぞよろしうお願ひ申上げまする。

左膳　オヽ聞届けた、なに角太郎殿、お身は百姓共より、金子をば何故あつて取り付された。

角太　イヤアノ其儀はかやうで御座りまする、此方の領分は長袖の事、對手は大名、禍は下からと主と主との遺恨になつてはと、双方を穏め、あの方の侍分へ賄賂を以て、事を無難に納めうと存じ、其金を百姓共より取りましたので御座る。

左膳　シテ其賄賂を致して、水論には勝つたか、どうぢや／＼。

多作　イヤやつぱり其儘で御座りまする。

角太　サアそこで御座ります、鎌倉の執権職巡検に恐れ、賄賂を取る者一人も御座らぬ故、其金子を百姓共へ返さうと思うてゐる所で御座る。

左膳　シテ又神領へ棹を入れるとは、其許が一存か。

角太　サアそれもさう聞けば、間違が御座る、手前武将のおめがねを以て、當所の代官を勤むる身

が、國中を知らいではと存じ、棹を入れるではない、大様を心得の爲當つて見ようと存じての事さ。

左膳　コリやさうありさうな事ぢや、此神領は昔より藤浪が家の支配、縱へ武將の御意でも、いざとあつて關白職へ申上げなば、何處へ飛沫が行かうも知れぬ、ムヽハヽヽヽ。しからば右の金子を、百姓共へ御返しあるか。

角太　ムヽいかにも急度返濟仕るテ。

左膳　さうなくては叶はぬ、こりや百姓共、今聞く通り金子は角太郎殿より返すとある、之より棹入なぞは決してない、安堵して立歸れ。

多作　エヽ有難う御座ります、コレ皆の衆聞かつしやつたか、藤浪様のお捌きで、金は返して下さるといなう。

畔六　その上棹入れる事はないと仰る、これにて日本晴のしたやうでは御座らぬか。

角太　エヽ無駄を云はずと、切り／＼失せう。

皆々　理屈に詰つて、腹立てるのか、ハヽヽヽ。

角太　その舌の根を。

皆々　ハイ〳〵。

ト角太郎急度なるを、左膳留める、百姓皆々はわい〳〵捨臺詞にて下手へ入る。

左膳　ハテ扨百姓づれに見苦しい、今の一條も詮議致さば貴殿の身の上、所存あつて今日は赦す、以後は急度嗜みめされ。

角太　イヤハヤ今のお捌き感心致した。

ト角太郎悄氣るこなし、在郷唄になり、向うより貢着流し大小の拵へ、宿駕に乘り雲助兩人これを舁ぎ出て來る。

雲助　オヽこゝだ〳〵、立てろ〳〵。（ト舞臺へ來り下手へ立てる。）ヘイモシ旦那、急げと仰る故、早駕で參りました。

ト駕の垂を上げる、内より貢出る。

貢　オヽ早かつた〳〵、太儀々々。ト錢三百文出してやる。）殘りの所は酒手にしやれ、持つて行け。

兩人　エヽ有難う御座ります。

ト兩人の駕や下手へ入る。

左膳　そちや貢ではないか。

貢　オヽ藤浪様、これに御座りまするか。」

左膳　其方の歸りを相待居つたわい。

榊　オヽ貢さん、戻らしやんしたか、あんまりお前の戻りの遲さに、わたしや迎ひに來てゐたわいなア。（ト榊奥から出て來る。）

貢　それはよう迎ひにおぢやつたなう。

左膳　貢、これへ〳〵。

貢　ハツ。

ト合方になり、貢着し羽織なぞを取り、よき所へ住ふ。榊髪を直したり、茶を汲んで來たり、始終女房のやうなことをしてゐる。

左膳　シテ申しつけしお客人に、對面致したか。

貢　さればの儀で御座ります、御意の通り松坂迄參りました所、いまだお出もなく〳〵、それ故津の本陣へ參りしが、早やお立ちの所、則ちあなたさまの御紙面を渡し、御返事を請取りまして立歸りました。則ち御客人は直に東海道へお越しなされまして御座りまする。

左膳　オヽさうあらう。

ト此間角太郎目を付けて聞いてゐる。

貢　則ちこれが御返書。(ト左膳に文箱を渡し。)まだ外に御口上は。

左膳　ア、コレ。(ト角太郎にめくばせして教へる。)

角太　アイヤ藤浪殿、見れば御内々の御話もある様子、拙者はお先へ歸り、百姓共へ金子を返して遣しませう。(ト下へ降りる。)

左膳　それよう御座らう、身は用事もあれば、跡より歸らう。

角太　然らばお先へ。

ト唄になり、貢へ心殘して下手へ入る。

左膳　コリヤ榊、其方は先へ歸れ。

ト貢に見惚れてゐる。

コリヤ〳〵榊々、コリヤ榊々。(ト大きな聲でいふ。)

榊　ハイ御用で御座りますかえ。

左膳　貢に用事があれば、跡より歸す、其方は先へ歸れ。(ト件の狀を開き讀んでゐる。)

貢　ほんにそなたは先へ去んでたも。誰ぞ一寸頼みませうぞや。

ト手を鳴らす、奥より男一人出て來る。

男　何ぞ御用で御座りますかな。

貢　太儀ながら、此娘を福岡孫太夫迄送つて下され。

男　ハイ〳〵、畏りました。

榊　イエ〳〵大事御座んせぬ、わたしや待つてゐて、お前と一緒にいぬわいなア。

左膳　ハテ歸れと云はゞ、先へ歸れ。

トきつといふ、榊氣味惡さうにして。

榊　ハイそんなら先へ歸ります、貢樣、どつこへも寄らず、早う戻つて下さんせ。

貢　ハテ何處へ寄るものかいなう。

男　サアお出なされませ。

榊　オヽせはしない人ではあるわいなう。

ト榊男に連れられて下手へ入る。

左膳　貢近う〳〵、シテ口上の趣は。

ト合方になる。

貢　ハツ此度伊勢參宮と云立て、鎌倉へ參り直訴致す思案、もし此願ひ叶はずば、再び國へは歸らぬ心底、倅萬次郎、殿の御意を受け、青江下坂の刀を其地へ求めに參り、今に歸らず、若し身持惰弱もあらば、某になり替り、萬次郎を勘當なされて、下坂の刀は貴殿御詮議なされよとの、御口上で御座りまする。

左膳　ハ、ア天晴、遉は阿波の家老今田九郎右衛門殿あつて、義臣と云ひ忠臣と云ひ、ハテ阿波殿には善い家來を持たれたなア。

貢　藤浪様、今度の願ひ叶はずば、再び國へ歸らぬとは、氣遣しい、何故の儀で御座りまするな。

左膳　貢、そちや何故、それを尋ぬるぞ。

貢　何をお隱し申しませう、手前親は元今田九郎右衛門様の御家來の由、過ぎ行かれし母が話、仔細あつて幼少の時、志州の鳥羽へ引越して人となり、今福岡孫太夫殿の養子の私、則ち御家へ御奉公、そのあなたの御娵御は、古主九郎右衛門様の嫁君、かれこれ重なるお主筋、案じまするも此故で御座りまする。

左膳　ハテ思懸けなき其方が身の上、始めて聞いて驚き入つた。然らば古主と云ひ、今某が縁ある九郎右衛門が家の爲ならば、身が頼む一大事、何によらず勤むるか。

貢　これはお言葉とも覺えませぬ、御主人の御意と申し、殊に古主の爲とあるからは、一命に關はる事たりとも。

左膳　しかと左樣か。

貢　御意に及ばず。

左膳　ム、其魂を見るからは、申し付くる其仔細は、これを見よ。

ト貢に持つて來た狀を出し見せる、貢開き見て恟りのこなし、左膳始終四邊へ氣を付ける。

貢　ム、スリヤ、阿波の伯父大學樣の野心によつて。

左膳　サア其如く國を押領せんとの工み、禍を除かんと、參宮の儀にもてなし、九郎右衛門は鎌倉に下り、伯父大學を押込め隱居の願ひ、そちが親孫太夫を鎌倉表へ遣はせしも一家の某、御前體を首尾能く致さんと内緣ある評定衆へ密事の使、サ頼みといふはこゝの事、右萬次郎は忠臣の家を繼ぐべき身なれ共、放埓にして一旦手に入りし下坂の刀を、質物に入れし不所存者、其刀の持主相知れず、某匿ひ置い一は家中の思惑他門の聞え、何卒其方それがしになり代り、萬次郎を匿ひ右の刀を詮議仕出し、歸國させてくれなば、某が志も相立ち、妹に連る萬次郎は古主の片割れ、身共へ忠義、頼みといふのは此事ぢやわい。

貢　私をお見立なされ一大事を明かして、御主人樣の御身の上、縱へ此身はししびしほになりましても、下坂の刀を尋ね出し、萬次郎樣を歸國致させませう、お氣遣ひなされまするな。

左膳　先は安堵、併し、鎌倉表の首尾相知れるまでは、只何事も大學へ聞えては一大事、必ず他言無用。

貢　何しに他言致しませう。

左膳　此上は汝に逢はす人こそあり。萬次郎これへ參れ。

ト奥へこなし、暖簾の内にて。

萬次　ハア、、、。

ト奥より萬次郎、林平付いて出て來る。

左膳　イヤナニ萬次郎、それに居るは福岡貢とて身が家來、其方にも處緣の者、下坂の事もこれなる貢を頼み取返し、歸國致すやうに致せ。

貢　扨てはあなたが萬次郎樣で御座りまするか、私はあなたの御親父、マアかやうなお話は追つての事。シテ其刀は何者にお預けなされましたな。

萬次　サアわしは知らぬが、家來の計ひにて、山田の町人に預けたが、その預けた者は出奔して行方

知れぬ故、折紙ばかり此方に有るわいなう。

貢　シテその折紙は持つて御座りますか。

萬次　林平、最前の折紙出してたも。

林平　ネイ。

ト折紙二枚出して貢に渡す、貢開き見て。

貢　こりや二枚の折紙、どう致したので御座ります。

萬次　こなたには分るまい、どれ〳〵私が見分けてやりませう。（ト双方共能く〳〵見て恟り。）ヤ、コリヤ二枚の折紙が、まつかな贋物ヤ、、。

林平　ナニ折紙が贋物となヤ、、。

貢　さうして、マアどういふ事で、折紙が二枚あるので御座りまするナ。

林平　さればの事で御座ります、下坂の刀詮議せうと思ふ矢先、黒上主鈴といふ御師が、下坂の刀を浪人者に賣らうと申すをば聞付け、其刀を此方へ賣つてくれいと望みし處。

貢　アイヤその黒上主鈴と申す御師は、此伊勢中には御座りませぬが、ハヽア大方それは騙りで御座りませう。

萬次　サアその騙めが折紙を持つてゐた故、ツイこちらの折紙をば出して見せたれば。

貢　ハヽア扨はその時の浪人者も同類で、摩り替へられたに違ひは御座りませぬ。

林平　そんなら、そやつも騙りの同類。ムヽ、さうぢや。（ト乾度こなし逸散に花道へ行くを。）

左膳　こりや待て、林平、氣相變へていづくへ參る。

林平　騙りを捕へて一詮議。

左膳　ハテ左程の工みをする者が、汝が詮議に參らうかと、氣を長々と待つて居らうか、今は急く場合ではない、控へて居らう。

林平　ムヽ。（ト切齒して跡へ戻る。）

左膳　金銀に眼をかけず、折紙を望むからは、下坂の名刀を望むものゝ仕業に相違ない。その書狀に先達大學が家來徳島岩次といふ奴、當所へ入込みしと九郎右衛門が知らせ、察する所、手を廻して下坂の刀を奪ひ取り、萬次郎に罪を拵へ、親九郎右衛門に蟄居させん工みと見えた。

貢　シテその徳島岩次といふ奴を、御存じで御座りまするか。

萬次　年の頃は廿八九、中肉にて色白く、眼中鋭く、慥か左の眉の上に黒子があつたと思つたわいの。

貢　それさへ聞いて置けば、よろしう御座ります。

左膳　今聞く通り、大學も當所へは犬を入れ置けば、油斷はならぬ、まだ外に、篤と談ずる仔細もあれば。

貢　こゝは端近、奥へ參つて。

萬次　何かの仔細を。

貢　左樣なれば藤浪樣。

左膳　両人共に、奥へ來やれ。

ト唄になり、左膳、萬次郎、貢奥へ入る。林平は殘り。

林平　エヽ口惜しい、己れが付いて居り乍ら、騙られてはどうも申譯がない、どうぞ騙りめを詮議したいものぢやなア。

ト手を組み思案してゐる、奥より足音する、これにて林平思入あつて小隱れする。奥より大藏丈四郎出で來り。

大藏　丈四郎殿。

丈四　大藏殿、最前からの樣子をば。

大藏　殘らず聞いた、角太郎樣へ此事申上げたいものぢやが。

ト此時下手より角太郎出て來て、兩人を見て。

角太　大藏、丈四郎、

兩人　角太郎樣。

大藏　申し合せた通り、とう〳〵萬次郎は馬鹿者に仕立ました。

丈四　下坂の刀がなければ差詰め勘當、親の九郎右衛門はこれを言立て、蟄居致さす手筈も上首尾。

角太　シテ下坂の一腰は。

大藏　山田の町人胴脈の金兵衛と申す者に、預け置きましたが、出奔して行方が知れませぬ。

角太　大馬鹿め、身共に渡して置けばよいのに、大學殿と心を合し、江戸表の首尾は身共が取繕ひ、事成就せば九郎右衛門が所領は身共が拜領する約束、邪魔になるは藤浪め、今宵の内に打放す。シテその折紙は。

丈四　手を廻して騙取り、岩次殿が持つて居らるゝ。

角太　それもよし〳〵。此一通は大學殿より、岩次殿へ、手渡してくりやれ。

大藏　心得ました。（ト大藏手紙を受取る。）

角太　シテ藤浪めは。

丈四　アノ奥の間に。

角太　こりや。

ト大藏丈四郎に囁く。此間林平聞いてゐる。

合點が行たか。

大丈　心得ました。

角太　丈四郎來やれ。

ト角太郎丈四郎奥へ忍び入る、大藏思入。

大藏　夜明けぬうちに、此狀を、ム、さうぢや。

と行かうとする、此時林平出て立塞り。

林平　大藏待て、其狀おれに見せさつしやい。

大藏　何を、うぬらに見せる狀ではない、そこ退け。

林平　イヽヤ大學樣より、密事の書狀。（ト取りにかゝる。）

大藏　何をこしやくな。

ト兩人狀を取合ひ立廻り、大藏下手へ逃げて入る、林平追駈け入る。あと合方になり、奥より萬次

郎、左膳、貢、小田原提灯を持ち出で來る。

萬次　左樣なら藤浪樣、何かとよろしくお賴み申しまする。

左膳　今申付くる通り、萬次郎が儀、貢賴んだぞよ。

貢　お氣遣なされまするな、二見村には私が知邊も御座りますれば、當分あの方へ預けてお置き申しまして、急度歸國致させまする、サア夜の明けぬ間に、少しも早うお越しなされませ。

ト小田原提灯に火をうつし、貢と萬次郎下へ降りる。

萬次　藤浪樣には隨分御無事で。

左膳　堅固でゐやれ。

貢　サアお出なされませ。

ト唄になり、貢、萬次郎向うへ入る、ばた〳〵になりて下手より林平手紙の半分を持ち、逸散に出で來り。

林平　藤浪樣にはこゝに御座りましたか。

左膳　慌しい、何事ぢや。

林平　ハツ只今大學樣の密書をば、大藏が所持なせしを、此方へ取らうとする、爭ふ機勢に引ちぎれ

て、まづこの通り。

ト左膳に片われを渡す、左膳見て思入。

左膳　宛名はちぎれてなけれ共、詮議の手懸り、萬次郎にぼつゝいて手渡しやれ。（ト林平に渡す。）

林平　シテ萬次郎様は。

左膳　貢が供して、二見村へ。

林平　心得ました。

ト行からとする所へ、丈四郎角太郎出て。

丈四　其狀こつちへ。

ト丈四郎林平にかゝる、立廻りあつて。

角太　藤浪覺悟。

ト左膳へ切つてかゝる、左膳角太郎を刀にて押へ。

左膳　少しも早く。

林平　ハツ。

ト丈四郎を見事に投退け、見得、鳴物曲撥になり、逸散に手紙を持ち向うへ入る。左膳見送つて。

左膳　下郎に似合はぬ。

角丈　何を。

ト三人立廻つて、きつぱりと好き見得にて、知らせにつき道具幕を切つて落とす。

本舞臺一面の松並木の道具幕。

ト浪の音になり、ばた〳〵にて向うより大藏手紙のやぶれを持ち、逸散に出て來る、後より林平これを追うて、この跡より丈四郎もこれを追うて、三人共に出て舞臺へ來り、狀の奪ひ合の立廻存分あつて、鳴物いたでんに替り、これより又三人おかしみの立廻、都て引裂きし狀を枷にあるべし、尤も東の通ひ、中の歩みなぞ廻る事あり、立廻存分好み通りあつて、三人共に又向うへ入る事よろしく、知らせについて此道具幕切つて落す。

二見ヶ浦夜の場　本舞臺一面の二見ヶ浦の夜の景色、松の釣枝にて、七五三を張りし二見ヶ岩、磯端の模樣、本釣浪の音にて納る。

トやはり、ごん浪の音にて、貢先に小田原提灯を下げ、萬次郎を案内して出て來る。

貢　磯端で道が惡う御座ります、お氣をおつけなされませ、しかし、モウ七ツ半でも御座りませ

う。夜の明けぬうち行きたいもので御座ります。

ト両人捨臺詞にて本舞臺へ來る

萬次　ほんに貢、今よう思うて見れば、あの大藏丈四郎めが下坂の刀を質に入れさしをつたが、それにマア宵から顔出しもせぬは、合點が行かぬわいなう。

貢　ハテそれも私が詮議致しますろ、お氣遣ひなされまするな。

此時ばた／＼になり、以前の大藏手紙の半分を持ち、花道より逸散に走り出で、貢に行當り、萬次郎と顔見合して。

大藏　ヤア萬次郎ぢやないか。

萬次　ム、大藏ぢやないか。

大藏　こりや堪らぬ。（ト逸散に上手へ入る。）

貢　何の事か、とんと狂氣の沙汰ぢや。

萬次　コレ／＼今のが大藏といふ、刀を質に置いた者ぢやわいなう。

貢　そんなら今のが。

ト上手を見る、向うよりばた／＼にて、林平逸散に出て貢に行當り、萬次郎と顔見合し。

林平　萬次郎樣か。
萬次　オヽ、林平ぢやないか。
林平　今こゝへ大藏めが參りませなんだか。
萬次　たつた今この道筋へ。
林平　刀の手掛り、此一通。（ト萬次郎へ手紙を渡し行きかゝるを。）
萬次　さうして樣子は。
林平　それ云つてゐる間は御座らぬ、おのれ大藏。
ト林平逸散に下手へ入る。
貢　何の事ぢや、これも半氣狂ぢや。
萬次　マア此狀讀んで見やいなう。
貢　飛札を持つて申遣はし候、愈其地にて下坂の刀手に入り候はゞ、早速歸國可有候。あとは破れて、宛名はなけれど、詮議の手がゝり、よいものが手に入つた。
ト此間ばた〳〵にて丈四郎走り出で、萬次郎を見て。
丈四　萬次郎、うぬを。

ト萬次郎に切つてかゝるを、貢止めて。

貢　萬次郎様に慮外を働くうぬには、詮議があるわい。

丈四　何、ちこざいな。

ト振解き立廻りのうち、萬次郎提灯を持ちうろついてゐる、上手よりばた〳〵になり、林平大藏狀を奪合ひ出て來る。

萬次　林平、最前の狀の片われは。

林平　その片われは。

大藏　何を。

ト切つてかゝる、貢、丈四郎を投退け、大藏が持つてゐる狀を引取りしが、手紙見えぬ故萬次郎へこなし。

貢　萬次郎様、その提灯を。

ト萬次郎思入あつて、提灯を差出す、此時丈四郎提灯を切落す、大藏は貢に切りかゝる、いづれもくらがりの見得になる、忍び三重へ浪の音をあしらひ。

萬次郎様、おあぶなう御座ります。

トやはり右鳴物にて、大藏は狀を取らうとする、林平は大藏丈四郎を捕へようとする、丈四郎ト萬

次郎を切らうとする、貢は萬次郎に怪我をさすまいとする、此さぐり合、あやうき立廻あつて、トヾ貢、大藏丈四郎をしつかり捕へ、林平萬次郎とさぐり合ひ。

林平　若旦那か。

萬次　オ、林平か。

貢　奴殿、こゝ危い、萬次郎様にお供して、この場を早う。

林平　合點ぢや。

ト三重になり、萬次郎の手を引き、逸散に向うへ入る、大藏丈四郎それと行かうとする、貢兩人を一寸當てすかし見て。

貢　萬次郎様はお出なされましたか。ア、嬉しや〱、それで落付いた。扨此狀の宛名が讀みたいものぢやが、モウ夜が明けさうなものぢやが。

ト狀をすかし見る、丈四郎大藏起き上り。

大丈　それを。

ト切つてかゝる、又浪の音三重になり、立廻の内、夜あけがらす所々に鳴く、正面の向うへ、四間餘りの紅張の日の出だん〱に出る。

貢　アリヤモウ夜明け。

大丈　何を。

貢　嬉しや、日の出が。

ト丈四郎を押へ、大藏を捻上げし見得、狀を開き。

何、宛名は、徳島岩次殿、蜂須賀大學より。

ト兩人ふりほどき、起上るを見事に投退ける、又かゝるを見得よく押へ。

讀めた。

ト膝を叩くを、チョンと木の頭、兩人おこつくを大藏を投げ、丈四郎を捻ち上げる見得、鳴物一つとせい、浪の音にてよろしくキザミ。

拍子幕

## 二幕目　代々講の場

役名　福岡貢、猿田彦太夫、正直正太夫、胴脈の金兵衞、入方左介、彌宜六

人、構中大勢、孫太夫娘榊、神子さよし、貢伯母おみね、油屋抱お紺等。

福岡孫太夫内の場　本舞臺三間の間三方折廻し、向う唐紙襖、正面に大神宮の宮あり、小高き段に荒莚を布き、三寶に造酒洗米葛皮の箱御祓鈴扇など飾りあり、此四方に竹を立てこれへ七五三を張りあり、上手障子屋體、下手板塀切戸口出入ある事、此前に木の常夜燈籠、いつもの所門口に福岡孫太夫と記せし木札掛けあり、都て宇治御師内の體。白丁の禰宜大勢神前の左手に並び、神樂太鼓小鼓羯鼓笛どびやうし銘々に構へ神樂の體、右鳴物にて幕明く。

ト障子屋體内より代々講頭町人上下にて、三寶に銀包を乘せたるを持ち出る、神子さよし外に神子一人、孫太夫娘榊これも振袖の神子にて緋の白丁千早をかけ、これに禰宜三人附いて出て、神前の左右に並ぶと、下の横より猿田彦太夫御師にて、萌黄の狩衣差貫折烏帽子中啓を持ち、正直正太夫同じく御師の拵へ、貢も御師にて出て、舞臺端、見物へ背向き筋違ひに並ぶ、右三人神前へ車座になる、始終神樂にて、彦太夫立つて神前へ向き拍手を打ち拜み、それより代々講頭の側へ出て、幕の内から皆々ホヽオヽヽヽいふ事よろしく納りて。

彦太　これは／＼御執行御目出度存じまする。

講頭　どなたも御苦勞に御座ります。

彦太　主人孫太夫は長官の用事につき、江戸發足の留守中、手前は孫太夫が弟猿田彦太夫と申す者、留守を預る名代で御座れば、當主同然に御用を仰付けられい。

講頭　これは〳〵久々代々も怠りました上、當年は講中も餘程殖えました故、金子六貫の代々即ち百兩持參致しました、よろしう願ひまする。

ト三寶の金を出す、彥太夫見て。

彥太　御奇特に存じまする、然らば代々を始めるで御座らう。

ト立つて三寶を神前に置き、元の座へ付く、正太夫立つて神前へ叩頭して、洗米を四邊へ撒くと、代々の祝詞になる。

禰宜皆々　オヽヽヽオヽヽヽ。

ト皆々代々の模樣、さよし鈴と扇を取り舞ふ、元の座へ付く、又一人立つて同じく鈴を取り、舞ふと、正太夫立つて榊を引張り花道へ行き。

榊　アレ又惡い事をしなさんすかいなア。

正太　やかましういふまい、いつぞや〳〵と思うても、アノ貢殿が邪魔に出てどうもならぬ、皆代々で夢中になつてをる、此間に一寸口せう〳〵。

榊　エヽいやらしい、いやぢやわいなう。

正太　ハテサテから見入つたら動かす事ぢやない、ソレ新內節にも唄はぬか。咲くや此花林田ばし思

ひに胸は板やばし。

ト唄ひ乍らしなだれかゝる、舞臺は代々の祝詞をうつてゐる。貢は向うを見て腹立てるこなし。

榊　あたしつこい、いやぢや〳〵。

ト振切り逃げるを引捉へ。

正太　どつこい〳〵、返事聞して玉江ばし、抱いて寢たればよしやばし。

トいろ〳〵して榊を花道へ突す。

彥太　オヽヽヽ。

禰宜皆々　オヽヽヽ。

ト皆々祝詞を上げてゐる。貢振返つて。

貢　榊殿〳〵々々、正太殿〳〵々々々。

ト呼びながら貢花道へ來り、正太夫を引分ける。

正太　オヽヽヽ。（トそしらぬ顏してこちらへ退く。）

禰宜皆々　オヽヽヽ。

正太　オヽヽヽ。

ト返事と祝詞とごつちやになり、正太夫眞面目に舞臺へ來り、代々の中へ入る。

貢　榊殿、こなたも晝中に正太夫を捕へて、じやらくらとたしなんだがよい。

ト云ひ捨てこちらへ來る、榊その袖を捉へて。

榊　貢さん、正太夫とじやらくらとは、そりや聞えませぬわいなア。

貢　それを今いふ事か、マア放さつしやれ。

榊　いゝえ云はにや成らぬわいなア、鳥羽から養子に御座んしたお前、末々は私と夫婦にすると父さんの言付。

貢　ハテそりや云はいでも知れた事ぢや。

榊　そんなら女夫ぢやぞえ。

貢　オヽ女夫ぢや〳〵。

榊　オヽ嬉し。

ト兩人抱付く。此途端に。

禰宜皆々　オヽヽヽ。

ト祝詞を上げる、正太夫こなしあつて。

正太　貢殿はどこへ行かれた、貢殿〳〵。

貢　オヽヽヽ。（トこちらへ退く。）

正太　貢殿〳〵。（ト呼びながら花道へ行く。）

貢　オヽヽヽ。

ト返事を祝詞の拍字に合せて、舞臺へ戻り、代々の中へ交る、榊も附添ひ戻るを、正太夫引留めて。

正太　これはしたり、榊さん、お前のつゝをにほだされて、鳩めがぐう〳〵まだ〳〵ぐう〳〵。

ト無理に抱付く。

貢　正太夫殿〳〵〳〵〳〵。

ト呼立てる、榊振切り、代々へ入る。

正太　オヽヽヽ。

禰宜皆々　オヽヽヽ。

ト返事と祝詞とごつちやにて、正太夫戻り榊を捕へんとする、彦太夫隔てゝ。

彦太　サア蒔錢〳〵。

ト講頭かつら桶から錢を出し蒔く、禰宜皆々競合うて錢を拾ふ、神樂しどろに打つて袂へ錢を入れ

るおかしみ、正太夫皆々の取つた錢を引たくる、皆々これを追ふ、此間に貢は榊を連れ奥へ入る、正太夫皆々摑み合ふ、彦太夫やかましいと支へる、此間捨臺詞ごつちやに云つて競合ひながら、此人數殘らず奥へ入る。彦太夫跡より金包の三寶を持つて。

彦太　これはしたり靜らぬかいやい／＼。

ト云ひつゝ續いて入ると、直に正太夫榊を引張り出る。

榊　いやぢや／＼しつこうしやると、爺様につげて聞く事ぢやないぞや。

正太　サアその告げると云はしやる、親御孫太夫様は、お江戸の留守中、其留守事に此正直正太夫惡い事はいはぬ、マア／＼下に居給へ／＼。（ト無理に坐らせる。）

榊　エヽモいやぢやといふに。

正太　ハテ扨惡い合點ぢや、なんぼおれを嫌つても、アノ貢殿はお前を嫌つていやるぞえ。

榊　エヽ。

正太　それ／＼貢殿の事をいふと、忽ち顏色が變るぞえ、尤も親御孫太夫様があの貢殿を此家の養子にして、末々お前に娶すと云うてござる、あの貢殿といふは元阿波のさぶの息子、おちぶれて鳥羽の一家へ引取られ、今では此家の養子、なんぼお前が女夫にならうと思うてもナ、古

市の油屋にこつてりとした馴染があるぞえ。

榊　ヤア、そりやマアほんかえなア〳〵。

正太　ほんのうそのと、貢殿と妍妻の其仲は、天にあらば比翼の鳥餅、地にあらば連理のすりこぎ、並大體の中かいな。

榊　エヽモとつとそんな事して、私へ濟むかいなア〳〵。（ト正太夫が胸倉を取つてふり廻す。）

正太　オヽ道理ぢや〳〵、そこがあるによつて、此正直正太夫が思案といふは。

ト此時奥にてせわしなく呼立つ。

さよ　正太夫さん〳〵。

正太　オイ〳〵〳〵。コレ榊さん、おれが思案に乗る氣はないか。

榊　あたいやらしい、いやぢやわいなア。（ト奥へ行かうとする。）

正太　どつこい〳〵、返事聞かぬうちは、やらぬ〳〵。

トいろ〳〵あるところへ、奥より神子さよし出で。

さよ　モシ〳〵正太夫さん〳〵、伯父御さまが呼んで御座りまする、サア〳〵お出なされませ〳〵。

ト正太夫が手を取る。

正太　エヽそこどころか、退いてけつかれ。

ト突飛し、榊へかぢりつく。

さよ　でも連れて來いと仰るわいなア。

ト又手を取ると、突飛して、右の通り此模樣幾度もありて、トヾ正太夫取違へて神子さよしを引張る、此間に榊は遁れて入る、正太夫これと知らず。

正太　何ぢやあらうと、かうなつたら一生懸命、叶へてもらはにやならぬ、善は急げぢや、こゝでこで。

ト さよしに抱付き、顏を見てびつくり。

ヤアさよしか。(ト突飛す。)

さよ　正太夫さん、私に叶へてくれとは、そりやお前眞實かえ。

ト寄るを突飛し。

正太　ナニ吐かす、そこどころかえ。

ト奥へ走り入る、さよし起き上り

さよ　正太夫さん、待たんせえなア〱。

ト神樂になり、駈け入る。流行唄になり、向うより油屋抱お紺、着流し抱帶丸綿帽子を著けて町風の拵へ、入方左介やつし一本差にて附き出る。

左介　モシ／＼、さうお仕立なされた姿は、古市の色さまとは見えませぬ、きつしりの町風と見えますテ。

お紺　さればいなア、貢樣には急に逢はねばならぬに依つて、內の首尾を仲居衆に賴んで、かうした趣向。

左介　お前は町風、入方の私が小者になつて、貢樣への御奉公、アレ／＼あの燈籠が覺えの目印、マアマア御座りませ。

ト始終神樂にて本舞臺へ來る、お紺左介に囁く、これにて呑込み門口へ來り。

賴みませう／＼。

ト奥より、貢着流し小脇差にて出で。

貢　誰ぢや、どなたで御座りまする。（ト云ひながら戶口へ出る。）

左介　さう仰るは、貢樣で御座りますか。

貢　オヽ、入方の左介か、マア／＼入りや／＼。

左介　ハイ〳〵御免なされませ。（ト内へ入る。）申し貢様、來ましたぞえ〳〵、連れて來ましたぞえ。

貢　連れて來たとは、そりや誰を連れて來たのぢや。

左介　誰とはしらぐ〳〵しい、お紺の君を。

お紺　貢さん。（ト門口より招く。）

貢　ヤアお紺か。

トびつくりして奥へ憚ることなし、お紺ずつと入る。

お紺　貢さん、此間は久しう音信もなし、御家内に御用があらば、せめて文でなというておこしては下さんせぬ、あんまり氣がゝりぢやによつて、かういふ形で人目を忍び、逢ひに來ましたわいなア。

貢　サアおれも行かうと思へど、春先で參宮人は多し、とんと出る首尾がなかつた、したが古市からは餘程の所、ようおぢやつたなう。

左介　申し〳〵何かの話はごゆつくりなされませ、渡すもの渡したら私は先へ歸ります。

貢　左樣々々、夜に入つたら、こつちから送つて届ける。コレ待ちや〳〵。（ト紙入より金を出して。）少しばかりぢや、今日の酒手ぢや。

左介　ヤア一角仙人御來迎か。
お紺　モシ内の首尾を頼んだぞえ。
左介　そこはぬからぬ、お紺樣、久しぶりでゆるりとお話しなされませ。お暇申さうか。

ト下手に入る。あと合方になる。

お紺　申し、誰も叱りはせぬかえ。
貢　大事ない／＼、さう仕立てた所は、とんと町の生女房ぢや、から出來たら。（ト一寸思案する事あつて。）これ／＼からぢや、誰ぞがこゝへ來て咎めた時は、あれは鳥羽から來た伯母ぢやといふ程に、その口を合したがよい。
お紺　そんなら、おばさんになるのかえ。
貢　さうぢや／＼、時に伯母さんとから引付いては居られぬ、マア／＼そつちへよりや。（ト上手へやり貢盆を持ち行き。）これは／＼遠い所を伯母さまには、ようお出なされました。
お紺　ハイ／＼よう參じました。

ト慇懃にいふ、貢あたりを見て。

貢　それはさうと、此間おこした文に、田舍の客が何のかのと云ふさうなが、その事はどうなつた

ぞえ。

お紺　さればいなア、仲居の萬のが世話を燒いて、私をくどくと思はしやんせ。

貢　あの萬のめは、大抵の爪ぢやない、さうして其客といふは町人か侍か。

お紺　アイ侍で御座んす、國は阿波とやら云うたわいなア。

貢　何といふ、阿波の侍ぢや、阿波とあれば、もしや。（ト思入あつて。）さうして其侍の名は何といふ。

お紺　慥か岩とやら云うたわいなア。

貢　阿波の侍で、名は岩。（トこなしあつて。）脊格好、年はいくつばかりぢや。

お紺　サア私もとつくりとは見ぬけれど、年は四十ばかりで御座んせう。肥肉で色の黒い髭のたんとある、憎らしい侍ぢやわいな。

貢　ム、そんならそれでもない、マ、それはそれにして、其侍はまだ逗留してゐるか。

お紺　居る段かいなア、私がいやがる程猶附纏つて、此頃は身請して國へ連れていぬるなんのと、無性にいぢるによつて、私やモウうるさうてなる事ぢや御座んせぬ。

貢　何ぢや、身請するといふか。

お紺　大事ござんせぬ、親方のおさきさまが云うての事には、本人の得心せぬ内は、何處へも身請はさゝぬと云ひ募つてぢやわいなア。

貢　イヤ／＼なんぼ親方は粋でも、アノ萬のめが口車にかけては、どうならうも知れぬ。

お紺　そこも御座んすわいなア。

貢　こりや一思案せねばなるまい。

お紺　どうしたらよからうぞいなア。

ト思はず側へ寄る。

彦太　貢々。

ト呼び／＼彦太夫出る、兩人驚きちやつと左右へ分れるこなし。

貢、そこに居るか、扨マア代々も滯なく納つた、殘物で一獻酌まう、サア／＼奥へ來やれ。

貢　それはよう御座りませう、マアお先へ御座りませ。

彦太　ハテサテ連立つて行かうてや。（ト此時お紺を見て。）コレ貢、此方は誰ぢや。

お紺　ハイわしかえ、わしや、アノ。

貢　ア、これ／＼、伯母ぢや／＼、今いうた通り伯母ぢや程に、必ず共に滅相な事云ふまいぞ。

彦太　エヽ扨は伯母かいやい。

貢　親仁様へはかね〳〵お噂申した、鳥羽に居られます伯母貴で御座りまする。

彦太　その又伯母貴が、何用あつて御座りました。

お紺　サア私が参りましたは、アノ。

彦太　何用で御座つた。

貢　イヤ伯母が見えましたは、アノソレ鬼の腕を見たいと仰つて。

彦太　羅生門があきれるわい

お紺　かうぢやわいナ。

彦太　どうぢやぞい。

お紺　此伯母が来ましたは、今日はお日和もよし、お岩の観音様へ参りましたによつて、序に甥の殿の顔も見たし、養父孫太夫さまに御目にかゝつて、何かの礼も云ひたし、それでわざ〳〵よつたので御座んすのでおぢアり申すわいなう。

彦太　オヽさうか、ようこそ〳〵、したが折悪い、兄孫太夫の他行、逢しやれいで残念々々。

貢　サア其親仁様が留守ぢやによつて、化の皮が現れぬのぢや。

彦太　シタが伯母御にしては、はなやかな形ぢや。
貢　イヤ／＼あのやうに見ゆれども、年は六十七になられます。
彦太　ハテなう。
貢　一體に年より氣の若い、大はで粹で御座ります。
彦太　さう見えるとも、マア／＼何かの話もあらうし、幸ひあの小座敷へ連れまして、お枕も上げまして、お腰も揉んで御馳走申したがよいぞや。
貢　でも晝中で御座りますろ。
彦太　晝とて伯母と話しするに、誰が何と云ふものぞ。
お紺　さうで御座んす、サア御座んせ。

ト貢が手を取るを、振放し。

貢　これはしたり、そんナいやらしい伯母御がどこにあるもので。
彦太　ハテマア伯母御から先へ。
お紺　エヽ辛氣な伯母御ではあるわいなア。

ト老年のこなしにて一間へ行き、貢を招き、貢いや／＼とかぶりを振る。

彦太　マア御酒たとあげぬかい。

貫　イエ／＼伯母貴は下戸で御座ります。

　ト お紺手を叩いて招く。

彦太　アレ／＼御用があるさうな。いて來やれ／＼。

貫　ハイ／＼これは又忩しない。（ト障子屋體の傍へ行く。）御用で御座りまするか。

お紺　御用がある、こゝへおぢや。

貫　ハイ。

お紺　ハテ、おぢやいなう。

　ト貫を引込み、障子を締め、唄になる。彦太夫あと見送りこなし。

彦太　六十七とは見えぬ、まだみづ／＼してゐらるゝ、氣をひ口にはいけさうな伯母ぢや、ハヽヽヽ。

　トいふ所へ、正太夫出て。

正太　おぢき、こゝにか。

彦太　正太夫か。

正太　コレ講頭が油斷を見て、してやつた代々の百兩。（ト金包を出す。）

彥太　こりや。（トあたりを見廻し。）兄孫太夫殿は宇治の長官藤浪殿の家來、社中の內で格式ある家柄・おれが爲には甥のわれに、此家の娘を娶はせ、此跡式をやりたい望み、所へ志州の鳥羽から養子にうせたあの貢、あいつがあつては何かの邪魔、落度を拵へぼいまくつて了へば、其のあとはどうせうと心のまゝ。

正太　それについて德島岩次といふ、阿波のさぶが此伊勢路で質物に入れてある靑井下坂、手まへてくれいと賴み、褒美には侍に取立てくれんとの此密書。（ト手紙を出して見せる。）

彥太　そんならその下坂の刀を、手に入れて渡しなば。

正太　御師の跡式取らうより、一足飛に大きな出世。

彥太　どうぞその刀を手まへたいものぢやが。

ト正太夫落ちてある貢の紙入を取つて見て。

正太　こりやア貢が紙入、百兩の盜賊を貢めに塗りつけるは、此紙入を玉に使うて、コレ。（ト囁く。）

彥太　ム、出來た〳〵。

ト奧にて神樂になる。

正太　アリヤ賽しの大神樂。

彦太　どさくさ紛れに、何かの手筈。

正太　必ず共にぬかるまいぞや。

彦太　合點ぢや。

ト彦太夫奥へ入る、始終神樂にて向うより伯母おみね着流し綿帽子にて、刀を風呂敷へ包み持ち出で、花道にて燈籠の書付を見て、こゝぢやといふこなしにて門口へ來る。此内正太夫紙入を懐へ入れ、狀と金包とを兩手に持つて。

正太　此狀の刀を手に入れたら、出世のほり出し、こちらでは百兩の掴取りとは今此時、旨い〳〵。

ト此うち捨臺詞金を隱す事よろしくあつて、門口より。

みね　頼みませう〳〵。

正太　どうれ。（ト仰山にいふ、金を隱す事。）

みね　御亭主孫太夫樣は、御在宿で御座りますかな。

正太　イヤ亭主は江戸へ行かれて、留守中でござる、何ぞ御用で御座りましたか。

みね　私は志州鳥羽に居ります る、貢が伯母で御座りますると、此通りお取次お頼み申しまする。

正太　エヽ面倒な、取次いで進上、待つて御座れ。

ト云ひながら、二品を持ちろ〳〵して、密書を懐へ入れ、それより神前の萬度の御祓を取り、金包の封を切り、手早く解いて、みだけ小判を、御祓の内へねぢ込み、元の所へ置く。此うち外よりおみね一寸見る事あり、正太夫いろ〳〵あつて。

正太　どりや取次致さうか。

トツイと奥へ入る、これにて神樂やめる。

みね　心得ぬ今の素振、ハテナ。

トこなし、奥より彦太夫出て來り。

彦太　ハテ面妖な、貢が伯母とは。（ト云ひながら出て來り。）マア〳〵これへ入らつしやりませ。

みね　左様なら御免下さりませ、承れば孫太夫様はお留守とござりまする、あなたはお内衆でござりますかな。

彦太　イヤ拙者は孫太夫が弟、彦太夫といふ者ぢやが、合點が參らぬ、只今貢が伯母と云うて參られた女中が御座る、あの一間に話の最中、又もや見えた伯母御、こりやどちらぞ紛者に極つたわい。

みね　何と仰ります、私より先へ、貢が伯母と申して參つた者が御座りますかえ。

彥太　あるとも／＼、是非一人は騙りの伯母、並べて置いて詮議せうわえ。

ト此時上　の障子の内より。

正太　イヤ伯母の詮議はおれがする、二人共うせろ／＼。

トばた／＼にて、一間より貢お紺しどけない形にて、正太夫引立て出る。みねこなしあつて片脇へよる、貢振放し。

貢　正太夫、コリや伯母貴を捕へて、何とするのぢや。

正太　伯母とはどつこい／＼、ぬかすまいやい、衒妻め、うぬは慥に古市の油屋のお紺であらう、古狐の化の皮、きり／＼引剝げ。

お紺　コレ麁相いはしやんすナ、わしや貢の伯母に逢ひはないわいなア。

彥太　こりやヤイ、其手めはもう上つた、志州の鳥羽から誠の伯母がわせたわやい。」

貢　エヽ。（ト振返りし母を見て。）ヤ、ヽ伯母者人が、ホイ。（ト赤面する。）

お紺　そんなら、あの伯母御さんが。

ト驚き逃げうとするを、正太夫引戻し引据ゑる。

正太　どつこい動きやアがるナ大騙りめ、賣女を引込み晝日中、我家を穢した天罰で、二人ながら祕

道の法に行ふ、マア此女郎めを。

ト引付ける、貢とめる、彦太夫隔てる、おみね正太夫を留めて。

みね　コレ待つしやれ。

正太　エヽ邪魔ナ、退かつしやれ。

ト突退けてお紺を打たんといろ〳〵ある、伯母は押隔て留めながら、お紺を見て。

みね　ヤアそなたは妹のお雪ぢやないか、どうしてマアこゝへおぢやつたぞいなう、二人共麁相千萬な、こりや私が妹ぢやわいなア。

彦正　何ぢや、妹ぢや。

トお紺うろ〳〵する、おみねお紺の袖を引き。

みね　ハテ妹ぢや〳〵うろたへて、姉の顔を見忘れたか、エヽどんな子ぢや、わしや姉ぢやわいなう。(ト二人を指さして、いろ〳〵仕方をして。)ホヽヽヽ此子とした事が、現在の姉の顔を見忘れるといふ事があるものかいの。

ト呑込ませる、お紺得心して。

お紺　ほんに姉さんであつたものを、とんと見忘れましたわいなア。

正太　ム、そんなら古市の女郎ではなうて。

彦太　伯母御の妹。

彦 正　ハテナア。

みね　お聞遊ばせ、鳥羽を出ましたは妹と二人連、往來の衆の仇口にもどうでもあれは親子ぢやと申しました、云うたも道理此子と私は異母の姉妹、年は十五の相違、貢の爲には伯母なれど、年は妹より五つ下、伯母姪のよしみとて親しう話すを、知らぬ目では夫婦ぢやと思召した方に無理はない、貢、何故ありやうにいやらぬぞいなう、エヽ二人共しんきな者ではあるぞいなう。

ト貢お紺と顔見合せ、面目なきこなしにてうつむき。

正太　エヽもつてまわつた兄弟の因縁、どうやらあぢな、ノウ伯父御。

彦太　ハテ潔白な言譯、もつれをつけるはこつちの誤、此場はこのまゝ。（ト正太夫へ目配せして）二人の伯母御、こゝでゆるりと。（ト正太夫おこつくを彦太夫押へて。）ハテマアよいてや。

ト唄になり、彦太夫正太夫に来いといふこなし、奥へ入る。あと合方になる。貢お紺伯母が左右へ坐り、一寸愁ひのこなし。

貢　伯母者人態と何共申しませぬ、久振でお目にかゝり好い事は聞かしませず、逢ふとそのまゝ御心

づかひ、面目ないと有難いとで、胸は二つに裂けるやうで、御詞を交すさへ恥しうてなりませぬ。

お紺　私は古市の色里油屋と申す方にて、お紺と申して勤の身の上、貢さんとは末々まで言交した心の堅め、急な手詰の談合で逢はねば叶はぬ事あつて、伯母様の御名を騙つて今日の仕儀、あなたの爲には大事の甥御を、そゝのかすとお憎しみ遊ばさう、御叱りは悲しけれど、かうなつた惡縁は、どうも思ひ切られませぬわいなア。

ト泣く、おみねこなしあつて、

みね　家内の衆が咎めるも道理、譯ある中とは一目見ても知れるもの、大膽者いたづら者とサア叱るは一旦、世の中の有爲無常は此伯母も知つてゐる、色も活氣も若い同士、それをいかにと叱るやうな胴慾な伯母でもない、とりわけて此貢は生付いた短氣者、其短氣を鎭めるは連添ふ者の柁の取りやう、まだ此上にどのやうな辛棒、生きる死ぬるの場になつても、無分別な氣を持たぬやうに、ナウ兩親もない此貢、伯母一人甥一人、先祖は地行も取つた家筋、今此樣におちぶれて便に思ふは此伯母より外にはない、此後とても見捨てぬやうに、不便がつて下され頼みましたぞや。（トほろりと泣くこなしあつて。）淚次手に今一度泣かねばならぬ事がある。其樣子と云

ふは、（トあたりを見て表の戸を締める、合方きつぱりとなる、おみね風呂敷包の中より刀を取出し。）此刀見知りがあらう、改めて見や。

ト差出す。貢取つて。

貢　縁頭目貫まで、世の常ならぬ拵へ。（ト一寸拔いて見て。）ム、刄は砂流し、無名なれども疑ひもなき下坂、先頃山田に於て藤浪様より仰せ渡され、尋ね求むる折柄、伯母者人、どういふ事で御手に入りました。

ト鞘へ納める、おみね刀を取上げて一寸泣き。

みね　此刃物につき悲しい話の一通お紺殿も聞いて下され。元我等は阿波の家中、先祖は青井刑部とて貢の爲には祖父様、御持筒の鐵砲大將百五十石取つた御人、同家中に、濱田十平といふ千石取の旗頭、祖父様とは無二の入魂、或時他所より賣りに來りし此刃物、疑ひもなき下坂、祖父様のお目に留り買求めたい志、彼の朋友の十平にも望をかけ、代物問へば半金五十枚の折紙、當座の興とは云ひながら、十平の麁忽の一言に、小身者の青井刑部、其方が風體で此刀を求むるかと、ふと云ひしが互の不運、苦笑して其場所は濟んだれど取沙汰は國一杯、いはれぬ刑部が刄物好、高知行の十平殿と張合つて人中で恥辱をうけ、あれでも武士か侍かと、口々誹

るを祖父樣の御耳に入り、此刀を買はいでは一分立たぬ武士の意地、武具馬具夜の物まで賣代なして、極の價に買求め、靑井の名字をそのまゝに、靑井下坂とこれを名づけ、あくれば五月四日朝、登城の道に待受け、十平やらぬと聲をかけ、尋常に打果し、屋敷へ歸つて、祖父樣は娘子供に暇乞、命に替へし此下坂必ず人手に渡すなと、お腹へぐつと押立てゝ、右の脇腹ひとすぢに、只一言の義に因りて、御身の上を果されたわいなう。其方の父御、わたしが爲には兄さま、其節より御暇賜り、志州の鳥羽に緣を求め、鄕士となつて暮す内、兄樣は御病氣、貧苦には迫れども、遺言なれば此刀、餓死するとも放さじと、藥も呑まず、祖父樣の三回忌、五月四日の月日もかはらず御臨終、悲しいともつらいとも、情なやお袋も又歎死、跡に殘るは伯母とそなた、まだ九つの頑是はなし、三年に三人まで同じ月に死ぬること、不思議と思ふに氣がついて、刃物の相性見る人に、刀の目利を賴みしに、祖父さま父さま同じ火性、刀は砂のながれやき、もつての外不吉の刀、是をそのまゝ持つならば、子孫迄祟るとの目利、力及ばず賣代なし、そなたは此家へ養子となし、廻り廻つて十七年、古主の爲に此刀尋ねると聞きしを幸、心を盡して買求め、持つて來たは伯母が寸志、靑井の血筋は代々祟る此刀、手に觸れると早や今の難儀、親祖父の命を斷ち、子孫までおちぶれしは、みなこれ故と科のない刃物

に恨が遺り、折りても捨てたい心なれど、今では古主へ忠義の刀、善ともなり悪ともなり、吉凶は持手による、刃物の因緣、此身の懺悔、樣子といふは此通でござるわいなう。

ト両方へ云ふ。貢こなしあつて。

貢　家に祟る刃物のあらまし、承つたは只今が始、とは云ふものゝ、祖父樣の魂籠められし此刀、こゝで祖父親人にも御對面致すやう思はれて。（ト刃を見てはら〳〵と泣く。）伯母者人のお志、エヽ忝い。（ト戴く。）

お紺　伯母御樣のお慈悲な御言葉、此上共に私が事も。

みね　何の見捨てう。世が代であらうなら、青井刑部が孫の嫁取、吉日よ輿入よと、時めくであらうものを。

貢　かくまでにおちぶれて、

お紺　お二人樣の御艱難、

みね　歎の種は其刀、

貢　悦ぶも又此刀、

お紺　伯母御樣、

みね　貢。（ト二人が手を持つて引寄せ。）ハテ思ふに任せぬ、

三人　世の有様ぢやなア。

ト顔を見合せて泣く、各〻こなし。此時向うより、胴脈の金兵衛、金貸、旅の形にて出で。

金兵　コウツ、榎から五軒目に門構、こゝぢや／＼。（ト門口へ來り、戸を明けんとしても明かぬ故。）何ぢや、背中に戸を鎖いたわ、コレ頼みませう、明けて下され／＼。

ト叩く、これにて三人おどろき、貢お紺に囁き障子屋體へ忍ばす、伯母は刀を風呂敷包に包み片脇へ隱す。外でしきりに叩く、貢は戸をあける。

貢　けたゝましい、誰ぢや／＼。

金兵　イヤおりやちつとこゝの内へ、尋ねる者があつて來た。

ト云ひながら内を見込む、此時おみね金兵衛を見て、びつくりして逃げ出す。

金兵　コリヤ待て、見付けたぞ／＼。

トツカ／＼と行き、貢を引退け、伯母を引戻す。

コリヤおれを見てふけらうと、さう旨くはさゝぬわ、大騙りの衒妻め、でんどへ引摺つて行く、うしやがれ。

ト引立てる、貢、金兵衛を引廻し。

貢　コリヤ何を致す、伯母者人を騙りぢやの、でんどへ引摺つて行くのと、エヽこりや人違ひであらう、さやうなら料簡する、とつとゝ歸りをらう。

金兵　ハヽヽけつかるわ、胴脈の金兵衛といつて、山田では指のさしてもないお兄さんぢや、樣子あつて下坂の刀をその御妻に賣つた所が、刀を取つて金を渡さぬに依つて、騙りと云つたがあやまりかい。

貢　スリヤ何といふ、下坂の刀は。（ト伯母にこなし。）

みね　サア騙りと云ふに無理はない、そなたの忠義が立たせたいばつかりに。

ト貢ぎつくりとこなし。

金兵　今聞くに、伯母者とぬかすからは、うぬも同類退きやアがれ。

ト貢を引退け、伯母を引付ける、貢よるを睨付ける。

何ぢや〳〵、何をぎしやばるのぢや、あの刀はさる侍から質に取つた代物、留めて置いてはちつと手めの上る事が出來たによつて、山田をふけつて鳥羽の城下、郷士の家を見込み賣らう買ふとなり、からりと手を打つて、所で百兩の金は明日渡さう、マア刀を渡せと云うたによつ

て、ア、氣ぶさなと思うたれど、女子でも郷士といや、麁相もあるまいと呑込んで大まいの代物を預けたぞよ、明の日早く行たれば、家内の奴等が留守ぢやとぬかす、それから五六度も足をひかして、畢句には駈落同然、大方こゝと睨んだによつて、跡を慕うて來たのぢや、サア金渡せ、渡せ、渡しやアがれ。

みね　サア尤ぢや〳〵道理ぢや〳〵、兄様は死しやんしても、門を絶やさぬ郷士の家筋、何の非道な事をしませう、鳥羽の家へ歸つたら、着類きそげを賣代なしても、こなさまには損はかけぬ程に、腹は立たうが、そこを料簡していぬるまで待つて下され、これ頼みますわいなア。

金兵　いやだ〳〵、ならねえやえ、四も五もない、でんどへ引摺つて行く、うしやアがれ。

トきつとなつて引立にかゝる。貢留めて。

貢　まて、金渡さう。

金兵　なんと。

貢　下坂を質に取つたとは、あやのぬけぬ山田の町人、急度詮議。トサア云うては物がない、刀の代は此貢が遣はさうが、それも今と云うてはなり難い、一兩日中には急度調達して濟まさう程に、こゝは一つ其許が呑込んで。

トいふうち、金兵衞詞をうち消し。

金兵　コレ、コレ、コレ／＼／＼やかましいわえ、貴樣の顏で一兩日は愚か、半日も待たれぬ、御長官の家などと、帶刀は見せびらかしても、内證は素寒貧、ア、聞えた、こりや伯母が伯母とぐるになつて、金になる刀を衒つたか、イヤサ衒りやアがつたか、アノこゝな大衒りめ。

ト貢むつとして、脇差へ手をかける、伯母留めて貢をいさめ、何にもいうてくれなといふこなし、金兵衞尻込みしてこはがりながら。

金兵　何ぢや／＼、伯母片棒をていねくつて、此金兵衞を切る氣だな、面白い切られよう、サア切れ、サア突け、きり／＼と切りやアがれ。

ト體を突きつける、貢きつとなる、伯母留める故、無念を堪へるこなし。

サア切らねえか、どうだ、へゝ、御長官の御家人樣でも、お力が強うても、理といふやつには勝れめえ、サア衒妻め、うしやアがれ。

ト又おみねへかゝる、貢留めるを突退け。

エヽきり／＼とうしやアがれ。

ト引立んとする、此時奥にてばた／＼騒しく。

彦太　代々の金が紛失した、家内の者一人も動くまいぞ。

ト奥より彦太夫正太夫、禰宜殘らず、娘榊も附いてどや〳〵と出る、金兵衛うろ〳〵して下手へ寄る。

貢　彦太夫殿、代々の金がどう致したと仰りまするナ。

彦太　サ先に講頭から受取つた百兩の金、奥の帳箪笥へ入れて置いたを、錠をねぢ切つて聚んだ盜賊、外へ行から筈がない。（ト伯母を尻目にかけて。）そこらあたりも迂散なてや。

ト當付ける、伯母氣の毒さうにして下にゐる、貢もこなし。

禰宜の一　役目で來てゐる我々も、身晴ぢや。

禰宜の二　さうとも〳〵、彦太夫殿。

皆々　吟味さつしやれ〳〵。

彦太　ハテ此方衆より、兄貴から留守を預つたおれが、潔白を立てにやアならぬ。（ト御祓串を取つて來て火入にて燒き、茶碗の水にうつし持ち。）サア此御祓串を一人々々に呑んで貰はにやアならぬ、盜んだ者は忽ち血を吐いて死ぬる事は、皆知つてゐるであらう。

正太　いかさま、熊野の牛王よりは慥な誓言、こりや皆呑ずばなるまい。

彦太　正太夫、マアわれから呑んで廻はせ。

正太　エヽ。

彦太　ハテ扨、おれが爲には、甥のわれぢや、身内の者に先へ呑すが、おれが身晴ぢや、サア呑め。

ト茶碗を眞中に置く。

正太　エヽ滅相な〳〵、これぱかりは、どうも呑まぬ〳〵。

彦太　何ぢや呑まれぬ、そんなら代々の金は、おのれが盜んだナ。

正太　エヽこれ〳〵〳〵、伯父御々々々、そりや何を云はるゝぞいの、何のおれがそんな事をせう、名さへ正直正太夫、曇かすみはござんせぬわいなう。

彦太　そんなら呑むか。

正太　サアそれは何ぢやわいの。（ト術なき思入して思案を極め。）オヽよい、おれが身の明り、すつぱりと立てゝ見せう、コレ貢殿一寸會ひませう。

貢　何の用ぢや。

ト貢、正太夫眞中へ出る。

正太　貢殿、何とマア天命はおそろしい者ぢやないか、モウかうなつたら隱すにも隱されぬ、サ有り

やうにいうて了はつしやれ。

貢　これ〳〵正太夫、いうて了へとは、何をいふのぢや。

正太　代々の金を、こなたが盗んだといふて了へ。

貢　默れ正太夫、コレ何をとぼけて、何を云ふのぢや、アレ伯母者人も聞いて御座る、禰宜衆も御座る、寃を云ひかけ、あとであやまつたとは云はさぬぞや。

正太　いはんすまいの〳〵、誰ぢやと思はんす、名さへ正直正太夫ぢやわいの、貴様が盗んだといふ慥な證據があるわえ。（ト以前の紙入を出して。）これを知つて御座るか。

貢　そりやわしが紙入ぢや。

正太　サア此紙入に味な物が入れてあつたぢや、さつきに思はず奥へいつたれば、帳箪笥の錠が捻切つてある、合點が行かぬとあけて見れば、金は紛失、あたりへ落ちてある此紙入、中から落ちたこれ此錠前、よく〳〵見れば捻切つた箪笥の錠前、扨は盗賊は貢殿、取捕へて詮議せんと、サア思うたれど、ア、誰も若い身には覺えのある事、よく〳〵差詰つたことであらう、まゝならぬ事は共々に、問談合もせうし、とつくりと意見もして、金さへ戻れば波風立つまいと、心一つに納めて置いて、云はずに置いたる今の難儀、盗賊は貢ぢや、おれは云はねど、ソレ大神

宮樣が云はつしやる、天命は恐しいぞえ、かうなつたら遁れぬ、盗んだ百兩を、きり〳〵こゝへ出せ。

貢　イヤ證據があらうがどうせうが、盗まぬといふ心が潔白。

正太　其潔白な貴樣が紙入に、捻切つた錠がどうして入つてあつた。

貢　サアそれは。

正太　盗まぬといふ證據があるか。

貢　サア。

正太　白狀するか。

貢　サア。

兩人　サア〳〵〳〵。

正太　こりや外の者を欺すと違ふぞ、名さへ正直正太夫ぢや、叶はぬ所ぢや、何もかも云うてしまはつしやれ。

ト錠を打付けていふ。貢錠を取上げ、伯母の方を見たり、皆々を見廻し、術なきこなし

金兵　貢、わりやいがんだ事をするなア、伯母といふも大騙り、わりや段々と足が付いて、首がほそ

つてくるぞ。

彦太　サア貢、ありやうに云へ、どうぢや。

ト貢こなしあつて、御祓串の茶碗を取らうとするを、正太夫留めて。

正太　こりや待て、貢。

貢　此場の詫び、神水を呑んで。血を吐いて死ぬるか、死なぬか、おのれが身の明を立るのぢや

ト茶碗を取る、正太夫叩落し、そのまゝ貢を引付ける、伯母はこれは留ると、同じく兩手に引付け。

正太　動きやアがるナ大盗人めが、ヤイ誓言立てるは、白い黒いの分らぬ内ぢや、慥な證據で分つてある、伯母といふもいがみの相ずり、揃ひも揃つた大泥棒めが。

ト思入する、奥の障子を明け、お紺堪兼ね出ようとする、貢見付けて。

貢　これ／＼出まい／＼、出ては惡い、イヤサ伯母者人、此方には御存しない此場のしだら、それにこゝへ出さつしやると、よしない事に花が咲いて、誰が身の難儀にならうも知れぬ程に、裏の切戸から廻つて、此場を早う。（ト お紺へこなし、又伯母の方へ思入。）伯母者人お歸りなされて下さりませ。

ト奥へかけて云ふ、お紺是非なく障子を締めると。

正太　イヤいなす事はならぬ、同類の詮議はあとでする。（ト伯母を突退け。）ム、一應では云ふまい、いつそかうして。

ト箒を持つて貢へかゝる、貢きつとなつて。

貢　コレ待て、主に向つて、こりや何とするのぢや。

正太　イヤ主ぢやない、わりや盜人ぢや。

ト貢睨みつける

なんぢや〳〵、なんぼ睨んでも盜人ぢや、ぢやによつてかうする。（ト貢が手をかけた箒を引たくり。）かう〳〵かうする。

ト散々に打据える、伯母留るを突退ける。此立廻りにて、正太夫以前の手紙を落す、伯母そつと拾ひ片脇へ來る。此時榊出て、正太夫を留めて。

榊　正太夫待ちや。

正太　榊樣、お前の知つた事ぢやない、退いて御座りませ。

榊　イヤ待ちや、貢さんは盜人ぢやない。

正太　アノこれ程慥な證據があつても。

榊　サイナウ縱へどのやうな證據があつても、あの貢さんは父さんの養子、末々私と夫婦にして此福岡の名跡を繼さうというて御座るぞや、なりや貢さんは此家の跡取、父様の金は貢さんの金も同然、我ものを我つかはしやんすを、盜人といふ法があるか。

正太　サアそれは。

榊　貢さんに曇りのない事は、どこまでもわしが證據ぢや、慮外しやると聞く事ぢやないぞや。

彦太　イヽヤ孫太夫殿の留守中、社家の支配を頼まれたおれが役目、養子でも頭取でも、盜根性がありや矯直さにやアならぬ、正太夫大事ない、打つて／＼ぶちのめして、金の在所を白狀させい。

正太　合點ぢや、退つしやれ。

ト榊を引退け、又箒にて貢を打据える、此うちおみね以前拾ひし狀をよむ事つて、此時正太夫を留めて。

みね　マア／＼お待ちなされませ。

正太　又留るかいやい。

みね　イヤ留めは致しませぬ、緣につながる貢が惡名、此場の明を立てうと存じて。

正太　アノ此場のあかりを。

みね　サア賣つて下さりませ。
正太　賣れとは何を。
みね　サア元の起りは代々執行、此方へ買取れば、金子の行端も、盗賊の吟味にも及ばぬ道理ぢやによつて、今日の代々を、私が方へ賣つて下さんせ、と云ふのぢやわいなア。
正太　これ／＼お伊勢さまへ、奉納の代々、端金ではいけぬぞや、しかも今日は六貫目の代々、これ大枚小判で百兩、貴様の方へ買取らうといふ金があるか。
みね　成程その金子辨へませう。（ト思入あつて。傍より風呂敷包の下拔の刀を取出し持つて出る。）彦太夫樣一寸お目にかゝりませう。
ト貢こなしある。
彦太　おれにか。
みね　御苦勞ながら。
ト正太夫こなしあつて片脇へ寄る、彦太夫向うへ出て。
彦太　何で御座るな。
みね　只今お聞きなされる通りの仕儀、御亭主の孫太夫樣御兄弟のあなた、なりや孫太夫樣も同然、

紛失の百兩金探索致すまで、質物を取つて下さりませ。

彥太　ナニ質物とは。

みね　サア此刀劍青井下坂の正銘、半金五十枚の折紙附、身に替へぬ大切の品なれど、寶は身のさし合せ、どうぞ此刀を質物に取つて、今日の代々をお讓りなされて下さりませ。

貢　イヤ〳〵伯母者人、その刀を渡しましては。

みね　ハテ惡うはせぬ、默つてゐや。

ト貢こなしあつて控へる。

彥太　なりませぬ、銘作は大名道具、社家の家では三文にもならぬ代物、百兩の代に取る事厭ぢや、何と御得心は御座るまいかな。

いやで御座る。

トいふうち正太夫思入あつて。

正太　これ〳〵伯父貴〳〵、青井下坂とあれば、かの岩印から賴まれた注文の、あいた口へ持ち込んだ質物、こりや代々を賣る方がよからうぞや。

ト貢此詞に氣を付けこなしあり、彥太夫呑込み。

彦太　オヽ、成程さうぢや、下坂に相違がなくば、質物に取つて代々を賣つて進ぜう。
みね　スリヤいよ〳〵此方へゆずり受けますぞや。
彦太　ハテこつちに異變は御座らぬわいの。
みね　左樣ならば此刀。（ト風呂敷包の刀を渡す。）
彦太　慥に受取つた。
みね　かうすれば、アノ貢に盜賊の惡名は御座りませぬぞえ。
彦太　何のあらう、疑晴れました。
榊　伯母御樣のお世話で、此場の納り、私も落付ましたわいなア。
金兵　そちらが濟んだら、おれが方の百兩、工面が出來ずば、御長官へ引摺つて、やりあはす、サア歩め。
みね　尤で御座んす、指圖の通り、何處へなりとも參りませう。
金兵　エヽきり〳〵うせろ。
彦太　此方の譯は立つた、モウ用事はない、歸らつしやれ。
みね　イヤモウ指圖なうても、歸らうと存じて居ります。

トやはり神樂にて思入あつて、神前に飾りある萬度の御祓を持ち行きかける、正太夫びつくりして留め。

正太　ア、これ〳〵、こりやどうするのぢや〳〵。

みね　ハテ代々を讓り受けた上からは、萬度の御祓は此方へ持つて歸ります。

正太　ア、これ〳〵滅相な〳〵、これやつて堪るものか。

みね　ホヽヽ代々の施主故、御祓を持つて歸るに、やるまいとはどうで御座る。

正太　イヤサそれはとんとどんな事ぢやわえ。（トいろ〳〵もがく。）

彥太　正太夫〳〵、御祓の百や二百はやつて了うたがよいてや。

正太　ハテ扨そなたは何にも知らぬによつてぢや、アノ御祓はさつきの。（ト云はうとしてうぢ〳〵もがきて。）エヽと、つとどうなつても此御祓はやらぬ〳〵、やる事はならぬぞ〳〵。（トいろ〳〵もがく。）

みね　たつてならぬと云はしやんすは、此御祓に樣子あつてか。

正太　全くなんの。

みね　名さへ正直正太夫樣、よもやうろんは御座んすまい。

正太　何のうろんがあらうぞい。

みね　サアそれぢやによつて持つて歸ります。

正太　イヽヤ渡さぬ〳〵。

みね　ハテ扨しつこい。

ト兩人いろ〳〵もみ合ふ、これにて御殿のうちより、本小判ばら〳〵と百兩落ちる、貢あつめ取つて。

貢　こりや凡百兩ばかり、此うちにあつたはハテナア。（ト正太夫を見てこなし。）

彦太　そんなら代々の金を、あの内へ。

と肝をつぶす　正太夫立つたり居たりじゆつながる。貢手早く紙に包み、伯母に渡す。

みね　やつぱり神隱し、金子出たれば、代々を買取るにも及ばぬ、彦太夫様改めて其刀此方へ求めませう。

彦太　イヽヤこれは。

正太　伯父貴〳〵、一旦買受けた刀、賣戻す事はなりませぬ。

彦太　オヽさうぢや、戻す事はなるまいぞや。

貢　ム、金に換へて、下坂を欲しがる正太夫、我胸に一物あらう、眞直に白狀しろ。

正太　ハヽヽこりやをかしいわえ、我胸に引比べ、何ぢや白狀せい、どんな事ぬかすナ、くもりかすみのない正直正太夫ぢやぞ。

みね　その正直なこなさんの懷中から、落ちた此密書。（ト出して。）正太夫殿へ岩印より。

正太　南無三それを。

ト取りにかゝる、貢引廻し立廻りあつて一寸當てる、正太夫たぢ〳〵と上手へ行つてウントなる。

みね　貢、讀んでみや。

ト狀を放る、貢取つて開き。

貢　密書を以て申入候、かの青井下坂の刀所持致し候山田の町人、國遠致し行方知れず候間、見當り次第かの刀をば奪取り、相渡さるべく候、首尾成り候上は、國元の伯父大學殿へ申達し、武士に取立申し候、四月廿日。正太夫殿へ岩印より。（トよんで。）ムヽ、先月二日二見の浦にて、手に入つた密書の文體。（ト又手紙を見て。）國元の伯父大學殿、こりや詮議のつるに取付いたわえ。

ト正太夫心付き顏を上げ、これを聞いてちやつとへたり、氣の付かぬ體、金兵衛うぢ〳〵する。芝

太夫こなし。

彦太　下坂の刀賣らう。

みね　御得心かた。

彦太　密書の譯は知らねども、もつれの來さうな此刀、元へ戻せば出入は五分〱、ぢやによつて此刀賣らう。

みね　さうなうては叶はぬ事、サア紛失の百両。

ト彦太夫へ渡す、刀をおみねへ渡す。

彦田　かうすれば、此彦太夫に、言分はあるまいの。

金兵　金が濟んだら、下坂はおれが。

ト取りにかゝる。貢引廻して。

貢　イヽヤ此場の落着、詮議のかゝつた正太夫、何もかも云はさにやアおかぬ。

ト正太夫を目がけ行くを、彦太夫隔てゝ。

彦太　イヽヤ正太夫は死んだ、くたばつて了うた。

貢　なんと。

彦太　脾腹の中身に正氣を失ひ、あれあの如く目を見詰めてくたばつて了うた、密書の宛名が死んだれば、外へ詮議がかゝらぬ筈ぢや。

ト貢こなしあつて。

貢　ハテ死んだとあれば是非がない、御師をあやめた言譯は、此密書を以て後の捌は俺がする、穢れた亡者は、土地に置かぬが伊勢の作法、イヤ禰宜衆、正太夫が死骸を國境の山へ投上げ、火葬にさつしやれ。

ト正太夫びつくり。

禰宜の一　それがよい〱、サア皆、佛を持出しませう。

皆々　合點ぢや〱。

ト寄らうとする、正太夫慌てゝ彦太夫の裾を引張り頼む。彦太夫皆々を留めて。

彦太　アこれ〱待つしやれ〱縱へ呼吸を引取つても、二十四時は見合すが定りぢや、火葬も外ぢやさゝぬ、伯父ぢやわいの、一家ぢやわいの。

みね　イヤ一家にもせよ、法式は破られまい、こりや矢張火葬がよからうわえ。

ト正太夫じゆつながる、彦太夫もうろ〱する。

貢　亡者に未練はかけぬ者ぢや、一時も早う持出したく〱。

皆々　合點ぢや〱。

貢　氣の毒ながら、所の作法ぢや、ドレその死骸を。

ト又皆々彦太夫にわやく〱とかゝる、彦太夫おせり留めて。

彦太　まつたく〱、此死骸買はう。

貢　なんと。

彦太　サア死骸さへ買取れば、火葬も土葬もこつちの勝手ぢやによつて、死骸買はう。

みね　成程こりや尤な言分、死骸さへ買取らば、密書の詮議にも及ばぬ道理、兎角波風立たぬやうに、此佛は賣るがよからう。

貢　いかにも賣らうが、亡者の價は金百兩。

彦　アノ死んだ者が百兩か、そりや又あんまり。

みね　お氣に入らずば、火葬がよからう。

貢　エヽ面倒な、葬つて了ふ。

彦太　アヽこりや〱待つてくれ〱、是非に及ばぬソレ百兩。

ト件の金を打付ける、おみねは金を取上げて。

みね　それで死骸に言分ない。

彦太　ア、嬉しや〳〵。

ト正太夫も落付く、此時下手の切戸の内より、お紺出て外に窺ひ居る。

金兵　シテおれの方の立引は。

みね　ソレ百両。

ト投る、金兵衛は請取りにかゝる。

金兵　慥に金は受取つた、

ト金包を取る所を、貢、金兵衛が胸倉取つて引付ける。

貢　うぬ先程の法外、言分のある奴なれど云はぬぞよ。（と彦太夫の方を尻目にかけ、）云ひはせぬぞや。義理ある養子の血筋でなくば、詮議のしやうもあれど、血を血で洗ふ此場の詮議、何も云はぬ、（トかけて云ひ。）とつとゝ帰れ。

ト金兵衛を突飛す。

金兵　エ、思へば〳〵。

ト寄らうとする。貢きつとして。

貢　言分あらば相手にならうか。

金兵　それには及ばぬ。どりやうまい土場へありつかうか。

ト神樂にて金兵衛金を手玉にして向うへ入る。

彦太　ほんに思へば今の金。（ト刀を見かけよるを。）

みね　詮議の落着、切味を試みようか。

彦太　サアそれは。

みね　何とで御座んす。

ト急度いふ、暮六つの鐘なる。

榊　ありやモウ暮六つ。

ト貢右の密書を一寸見て、

貢　詮議の目當は德島岩次。（ト伯母へ密書を渡す。）

みね　片時も早う此刀を。

ト刀を貢へ渡す。

貢　これより直に萬次郎樣へお渡し申さん。

ト刀を持ち外の戶を開ける。此時お紺出て。

お紺　貢さんか。

貢　お紺か。

榊　そんなら、外に。

ト榊表を見る、正太夫起きようとする、おみね見る故、ちやつと寢る、彥太夫は貢の持ちし刀へ目をつけて立ちかゝるを、おみねは留める、貢此途端に戶をばつたり締める。

貢　伯母者人。

みね　早う行きや。

ト貢お紺を連れ、三重にて向うへ逸散に入る。正太夫堪へ兼ねて起上り。

正太　うぬ、貢め。（ト門口へ走つて行きかけるを。）

みね　よみ返つたら、密書の宛名讀上げうか。

正太　ヤ、。

みね　いち〳〵詮議せうか。

正太　そんなら死んだ。

ト ムヽと行詰り、ぐんにやりとなつて寢る。彦太夫はおこつく、おみねはそろ〳〵と出かけながら。

みね　始て參つて、いかい御馳走。

彦太　思へば〳〵。

ト 無念のこなしにてかゝる、引廻す、正太夫顏を上げる、おみね見て笑ふ。

みね　おさらばで。

ト 門口を締めるを木の頭。

ござりまする。

ト 門口を立付け、會釋のこなし、双方よろしき仕組、キサミにて。

拍子幕

# 三幕目

## 油屋の場

**役目**　福岡貢、料理人喜助、下田萬次郎、徳島岩次實は藍玉屋北六、藍玉屋北六實は徳島岩次、次郎助、若者丈八、同佐助、太鼓持、油屋おさき、油屋抱お紺、同お岸、同お鹿、同おきぬ、仲居萬の、同千の、同吉の等。

古市油屋の場　本舞臺三間の間平舞臺、正面長暖簾、上手九尺の中二階、段梯子抽出入用あり、いつもの所門口、小格子、油屋と記せし掛行燈、都て古市油屋の體。こゝに次郎助立ちかゝり、仲居萬の、若者、おさきみな〳〵なだめ居る、四邊に酒肴取散しあり。踊地にて幕明く。

皆々　マア〳〵旦那お鎭まりなさりませ〳〵。

次郎　いやだ〳〵、おれを阿波の田舍者だと思つて、馬鹿にするのか、あのおれが相方のおきのめは、一向に座敷へ來ぬから、さうわるくされては一座の手前顏が立たぬ。モウ歸る〳〵。

萬の　ハテ其樣に腹をお立てなさんすな、おきのさんの癖は大體強い癖ぢや御座んせぬ、それ故ちつとのうち内證で針をしてゞ御座んす、お客を宥めるは仲居の役、ハテ私がお詫を申しまするに、マア御料簡なさんせ。

さき　マア〳〵、主人の私までが、かやうに出ましてお詫申しまする程に、こゝのところは御料簡なさんせいなア。

丈八　マア旦那、よい加減におしづまりなされませ。

次郎　イヤモウ家内中が、そのやうに留る事なら、料簡しまいものでもないが、いつも〳〵癪の起るも久しいものだ。

佐助　持病なら仕方が御座りませぬ。

次郎　オヽ仕方があるまい、かう云ひ出しては、云條立てにやアならぬ、マア今夜は歸る〳〵。

皆々　ハテマア御機嫌を御直しなされませ〳〵。

次郎　イヤ〳〵歸るぞ〳〵。

トわや〳〵留る、矢張踊地にて、向うよりお岸女郎の拵へ、酒に醉うたるこなし、下男にもたれ、捨臺詞にて花道へ留る。次郎助腹立のこなしにて門に出て、花道にて行合ひ。

ヤアお岸ぢやないか。

お岸　次郎助さん、門中で御座んすぞいなア。

萬の　お岸さん、お聞いなア。治郎さんが又例の歸る〳〵で、私が留めるも聞かず、振切つて行かうといふのを、留めて居るのぢやわいなア。

お岸　ハテ又例の野暮を云はしやんすか、マア〳〵私と一緒に戻つておくれいア。

次郎　イヽヤおらアいやだ、歸るのだ。

ト行くを留め。

お岸　ハテマア戻つて下さんせいなア。

ト矢張踊地にて、次郎助を連れて、皆々内へ入る。

萬の　こりやお岸さん、いつになく酒機嫌ぢやぞえ。

下男　お岸さんは今迄岩さんやお紺さんと、芝居歸りにいつもの茶屋で。

お岸　それ〳〵私や今まで、朝吉の奥二階で岩さんに付合うて、さいつ押へつ呑んでゐた と思はんせ、そこへ又隣の座敷の客衆が付込んで、サア一座がふえたと思はんせ、翌の日まで呑續けても果がつかぬと思ふから、今宵の舞の趣向があると云つて、岩さんに幕を通して、旦那さんからの迎ひぢやというて、ヤウ〳〵脱けて來やんしたが、何で次郎助さん、聲音に腹立しやんすのぢやぞいなア。

次郎　ハテこれが腹を立たずに居られうか、相方のおきのが振つた故、今度は身共が振らうといふのだ、サアサア歸るぞ〳〵。

萬の　イヤモウおきのさんは例の癪、げしなつてぢやわいなア、それを出ぬというて。

お岸　それ見やしやんせ、持病の癪で寝る事は、あの子ばかりぢや御座んせぬ、私も今にも癪が起つて見やしやんせ、揚詰のお客であらうが親方さんの御意であらうが、ハテ病には勝れやせん、客衆に逢うて癪を起すは女郎の常、あの子に限つてさく病ぢや御座んすまい、此岸が證人に立つわいなア。

次郎　そもじがそれ程にいふものを、ナニわしだとてそばへて歸らうといふまいが、かう又云つたらみんながのろく見るであらうナ。

お岸　何のマア誰がお前を野暮ぢやと云はうぞ、お前は粹の骨頂ぢやわいなア。

皆々　ようく粹さまく。

お岸　しかし御機嫌が直つて、私も落着ました、ノウ萬の。

萬の　サイナアぬしに腹を立てさせまいと、私は大てい案じた事ぢや御座んせぬ、シテ北さんはどうなされたえ。

お岸　サイナア北さんは酒が過ぎて、寝てぢやわいなア。

次郎　それくさういふ風に持てる客があるに、おればかりはふりのめされる。エヽお岸ぼう、そもじをおつゝけ身請して、北六が國へ連れて行くとの事、なんと嬉しからうが。

お岸　エヽそれが何のうれしからうぞいなア。
次郎　いろ〳〵とひぞる奴めがハヽヽヽ、時にあのお紺ぼうはまだ芝居から歸らぬか。
萬の　アノ芝居の朝吉で、呑んでゐやしやんすとの事ぢやわいなア。
次郎　ハテモウ歸りさうたものぢやなア。
丈八　イヤモウ今にお歸りで御座りませう、とりわけ今宵は面白い踊の趣向が御座りますから、おつつけお歸りで、
佐助　御座りませう。
次郎　そんならそれを樂しみに、北六が座敷で酒にしようか。
皆々　それがよろしう御座りませう。
次郎　お岸の君もおれと一緒に。
お岸　マア先へ御座んせいなア。
次郎　アレどうでも、おれには、女の相性が惡いと見える。
皆々　サア〳〵御座りませ。
ト賑かな唄になり、次郎助、おさき、萬の、若者わや〳〵と奥へ入る。お岸あとに殘り、かすめし

合方になる。

お岸　ほんにこのマア萬次郎さんは、なぜ御座んせぬ事ぢやゝら、貢さんが兎角尋ね求めさんした下坂とやらの刀、お渡し申したいというてゞ御座んすに、こりやいつそ一筆書いて。（ト思入、硯箱を持つて來て、）ほんに萬次郎さんは、二見村にもゐやしやんせぬとの事、折角狀を認めても、いつそ、貢さんの所へ、一寸便を聞いて來ようか、（ト門口に出ようとして。）イヤ／＼、それもなるまい、ア、それにつけてもあの北六が身請しようの何のというて、それがしみ／＼わしやうるさい、それがつらさに無理酒で心をちらして見ても、どうも、萬次郎さんの事も苦になるし、身請の事も知らせたし、ぬしの在所が、エ、モウしんきな事ではあるわいなア。

トしんきなるこなし、なまめいたる合方になると、向うより萬次郎着流し大小頬冠にて、うか／＼と出で來り内を窺ひ。

萬次　ア、どうぞ今宵は首尾して、逢ひたいものぢやが。

トお岸、内よりすかし見て。

お岸　ヤア萬次郎さんか。今も今とて、お前の事、ようマア來て下さんした、サア／＼こゝへ御座んせいなア。

ト萬次郎内へ入る。

萬次　さうしてマアお前、あの刀の事を知らずであらうナ。

お岸　刀の事とは、あの下坂の事かや。

萬次　アイ貢さんの手に入つたといナ。

お岸　ヤアそりやほんの事か、ア、忝いく、私が四五日二見村へ戻らぬも、騙られた下坂と折紙の事に就て、鳥羽三界までいて、今歸りがけ、シテどうして刀が手に入つたぞいなア。

萬次　サイナア四五日以前、お紺さんが、貢さんの事を案じさんしてナ、内へ尋ねて行かしやんしたら、鳥羽の伯母御さんが來てぢやつて、いろくもやくがあつてナ、胴脈の金兵衛とやらといふ惡者の手から、下坂の刀を買はしやんしたと紺さんの話、それからは、ほんに貢さんは狂氣のやうになつて、毎晩くお前を尋ねてござんすわいなア。

お岸　エ　そりや耳よりナ、忝いく、それにつけても騙られた折紙が。

萬次　サアそれも貢さんを頼んで、詮議して貰ひなさんせいなア。

ト此時奥にて。

萬の　お岸さんく。

お岸　アレ〳〵惡い所へ、萬のが聲、お前の姿を見付けられては。

萬次　何處ぞへ、隱れうかいなア。（ト云ひながら門口に出て。）

お岸　又お前を見付けたら、北六に惡ういうであらう程に、かうしなさんせ、お前は大林寺の裏門に待つてゐて、もそつとしてから來て見やしやんせ。

萬次　そんなら後程に、貢がおぢやつたら、待たして置いてたも。

ト又奥よりけわしく。

萬の　お岸さん〳〵。

ト呼びながら、以前の萬の出て來る、萬次郎は行兼ねるこなし、逃げそくれ門口の外用水の蔭に隱れる、萬の見てこなし、お岸の後へ來り、大きな聲にて。

コレサお岸さん〳〵。

ト お岸びつくりして。

お岸　エヽモウ萬の、びつくりするわいなう。

萬の　コレお前、こゝに何してぢやえ〳〵。

お岸　サア私や、アノ。オヽそれ〳〵、螢が飛んで來たによつて、あんまりしほらしさに詠めてゐた

のぢやわいなア。

萬の　アノしほらしい螢が來てかえ。

お岸　アイ。

萬の　ドレ〳〵螢が何處に。成程晝は顏出がならぬ身の上、夜になるとうろ〳〵と飛んで歩く螢めが。ト川水の蔭の萬次郎を尻目にかけ〇コレお岸さん、あんな虫を追廻さずと、ちやつと奥へ行かしやんせ、女郎の甘味を吸ひにうせるならず螢めが。

ト萬次郎氣色する、お岸顏にて押へる。萬の急度して。

なんぢや〳〵その面なんぢや、螢め、夜に入るとまい〳〵と人の門口へ飛んで來て、女郎の甘味を吸ひにうせる。

トこれにて萬次郎急度こなし。

なんぢや〳〵びこしやこさらすと、引捕へて踏躙つてこますぞ。

ト萬の外へ行かうとする、おきし引退け留めて。

お岸　これ〳〵早う飛んで行きやいなう。これ萬の、モウ螢は飛んで行たわいなう。

萬の　ホ。

お岸　さつきの時飛んで行けばよいにサ、ちやつと大林寺の方へ飛んで、又後にこゝらへ來たがよいわいなう。

ト時の鐘なる、萬次郎しほ〳〵として向うへ入る。お岸きつと外を覗き。

オ、いつの間にやら、飛んで行たわいなア。

萬の　コレお岸さん、螢が飛んだが、うれしいかえ。

お岸　可愛しいあの螢、門中を飛んで歩いて、ひよつといたづらな子供衆に捕へられて、難儀せうより飛んだが、私や氣がやすまるわいなア。

萬の　エ、命冥加な螢ぢやなア。

ト踊地になり。

北六　萬の〳〵、お岸は何處へ行た〳〵。

ト云ひ〳〵奥より北六出る、後より次郎助、おきぬ、千の、吉の附添ひ出る。お岸を連れ萬の内へ入り。

萬の　あんな惡い虫に構はずと、お客のお傍へ行かしやんせ。

トお岸を北六の方へ突きやる、北六直にお岸が手を捕へて。

北六　お岸、俺一人奥に置いて、拔けそとは聞えぬわいやい。今日も行きたい芝居へも行かず、わが身と二人寢ようとすりや、腹が痛いの頭痛がするのと、そのやうに酷う遇うたものぢやない、よくよく思へばこそ、阿波三界からこの伊勢に、流連して居るもわが身故、風來者の萬次郎とは違ふ、藍玉屋北六阿波一番での金持、オヽとさへ云ふと、請出して連れていぬるが、何と次郎助、さうではないか。

次郎　さうとも〳〵應とさへ云へば、其身の仕合を打出すといふものぢや、帶紐解いてくつたりと抱かれて寢て、好い果報に逢うたがよいわいの。

萬の　コレお岸さん、お前は果報が嫌ひかいなア。

お岸　あい、いやで御座んす、何ぼ果報が嬉しいとて、厭なお客に請出さるゝはすかんわいなア。

北六　エヽいま〳〵しい、ならず者の萬次郎めに、心中立が胸が惡い。ドレ共酒々。

千吉　まだ上るかいなア。

北六　けたいぢや〳〵、いつそ呑んで〳〵、呑みすゑてこますのぢや。

次郎　それがよからう、あばれ飮みにして、あばれ次第に取つてしめたがよいてや。

北六　オヽお岸をから側へ引付けて、いやがる代りに、何盃も助さして、酒責にしてこまそ。

お岸　イヽエわしや、エ、呑まぬわいなア。
千吉　お岸様は下戸ぢやわいな。
きぬ　サモウ勘忍してあげなんせいなア。
北六　イヽヤ呑まさにや聞かぬ、サア酌げ〳〵。

トさわぎ唄になり、お岸を引付け、錫の鉢を差出し、萬の酒を注ぐ、向うより、お紺着附はでなる前垂、伊勢女中餘所行の形にて出て來る、後より岩次阿波侍の着附羽織大小にて出で來り。

岩次　オイ〳〵、お紺、マア待ていやい、
お紺　イヽエわしや早ういんで、舞の會が見たいわいなア。
岩次　サア見たくば、一緒に見るわいやい、われぱかり行かうとは胴慾ぢや、何故手を引合うて行てくれぬぞいやい。（トお紺が手を取る。）
お紺　それでもそんなことをすると、人が見て笑ふわいなア。
岩次　何の、別に、客が女郎の手を引いて歩くを、誰が笑ふものぞ。殊に夜に入つてあれば構ふことはないてや。
お紺　それでもわたしや恥しいわいなア。

ト振放し、本舞臺へ來る。

岩次　コリヤ、マア待て〳〵。

ト云ひ〳〵跡より來る、此間北六一盃呑んで、お岸に呑め〳〵といぢつてゐる。萬のも無理に呑まさうとする、お岸いやがる、おきぬ、千野、吉野、拶挨の捨臺詞ある。お紺ずつと内へ入る、お岸見て。

お岸　ヤアお紺さん、戻らしやんしたかいなア。

お紺　サア舞の會があると聞いて、戻つて來たわいなア。

ト云ふ間に、岩次も續いて内へ入る、北六見て。

北六　オヽ、岩次様。

次郎　今お歸りでござりますか。

岩次　オヽ、サ、舞の會があると、北六が使故。

北六　イヽヤ直様とは云はさぬ、芝居はてゝから、朝吉の内で、お紺とたつた二人、出來ましたナ出來ましたナ。

岩次　何を云ふぞい、こつちが出來ても、あつちが出來さし居らぬわい。

次郎　イヤさうは技けさせぬ、此次郎助や皆を先へ戻したは、いはくがなけにや叶はぬ。

萬の　イヤまた岩樣が、思込み遊ばしたも尤、外の色里でない餘所行の前垂姿、何と、どうもいへぬぢやござりませぬか。お紺樣もマア、岩樣のお側へお出なさんせいなア。

お新　オヽ萬の、岩さんの側へ行きたけりや、わしが行く程に、あんまり差出て下さんすないの。

萬の　がをれどの、女郎さん方も氣儘には附り入るぞえ。

ト此時奧よりおさき出て來て。

さき　オヽ岩樣、お歸りなされましたか。其間、モウ舞が始まりまするぞえ、アノマア初手が葵の上、其後が保名物狂、其後が伊勢音頭の座敷踊、どうで今夜は夜明しで御座りまするぞ、サア皆さん、奧へお出なされませ。

岩次　身共はその伊勢音頭が望みだ、國元の土産に致す。お紺そちが手で支度して見せてくれい、サア一緒に行かう／＼。

ト　お紺が手を取る、お紺すげなう振放す、岩次むつとして刀の柄に手をかける、おさき見て、

さき　ソレ萬の、お腰のものをお預り申しや。

萬の　アイ／＼。申し岩樣、お腰のものは、わたしがお預り申しまする。（ト腰の物に手をかける。）

岩次　デモ。

萬の　ハテ里の習ひ、是非がない、何事もわたしの胸に、マアお任せなされませい、よいやうに致しますわいなア。（ト岩次の大小を取る。）

きの　サアお紺もお岸も、皆一緒に奥へ／＼。

皆々　サア御座んせいなア。

ト屋臺になる、此一件皆々奥へ入る、ト直に葵の上の唄になる、向うより貢黒羽二重の袷黒縮緬の單衣羽織、右の下坂の刀をさし、足早につか／＼と出て來て、花道に立止り。

貢　このやうに、毎晩／＼尋ねても、萬次郎樣のお行方の知れぬと云ふは。イヤ／＼どう思うても、油屋へ見えねばならぬ、マア何でも油屋へ行て。

トこなしありて本舞臺へ來て、門口へ入らうとする、奥よりお岸出て來て顏見合せ。

お岸　ヤア貢樣。

貢　オヽお岸殿か。

お岸　コレ萬次郎さんが御座んしたわいなア。

貢　ヤア、シテ何處にござる。

お岸　サイナアもそつと先に御座んしたによつて、此間からお前が毎夜〳〵尋ねてござんす事を云うてゐる内、意地悪の萬のが出て來て、何の角のと憎體口を云ふ故、若しひよつと萬次郎樣の短氣でも起れば悪いと思うて、大林寺の裏門の方へ、ちつとの間やりまして御座んすわいなア。

貢　ム、そんなら、大林寺の裏門に。

と行かうとするを留めて。

お岸　コレイナアまだ何や角や言殘した事もあり、萬次郎樣もわたしに用がある、と云はしやんしたれば、是非追付戻つて見えるわいなア。

貢　ハテ其樣にべん〳〵した事ぢやない、此四五日行方の知れぬも、元は下坂の刀故、其下坂の刀は俺がこゝに持つてゐるわいの。

お岸　アノそこに。

貢　則ちこゝにさしてゐるのが下坂の刀ぢや、これを一時も早う、萬次郎樣の御手へ渡さうと思うて、毎晩〳〵尋ねてゐるのぢや、マア大林寺へ行て。

ト又行かうとするを留めて。

お岸　お前が行かしやんした跡へ、萬次郎樣が御座んして、私が逢へばよけれども、又間違うたら、

せんぐり跡へ〳〵と、尋ね廻らねばならぬわいなア。

貢　いかさま其處もあるわい。

お岸　何の道わしに逢ひに御座んす程に、ちつとの間待つて上げまして下さんせいなア。

貢　そんならさうせずばなるまいか、エヽコレ氣の揉める事ではある。

お岸　そりや道理では御座んすが、わたしも大抵氣の揉める事ぢやござんせぬ、コレ貢様、アノ奥へ來てゐる阿波の客が、わたしもお紺様も身請して、明日は國へ連れて去ぬる、と云うて居るわいなア。

貢　スリヤお紺もそなたも身請して。

お岸　あい。

貢　明日は本國阿波へ出立。

お岸　どうぞお紺さんもわたしも行かぬ、好い思案はあるまいかなア。

貢　ムヽ。

ト手を組み思案するこなし、奥より千の吉の走り出て。

千吉　お岸様〳〵、こゝにかいなア

お岸　オヽ千の吉の、何ぢやぞいなう。

吉の　何ぢやどころかいなア、舞の會の始つてあるのに、お岸は何處へ行た、と北六樣がやかましう云うてゞ御座んすわいナ。

千の　オヽ何誰ぢやと思うたら、貢樣ようお出なされましたわいなア。

貢　そんなら奥に、舞の會があるか。

千の　アイ後は伊勢音頭で、座敷踊が御座んすわいなア。

吉の　阿波のお客の御望みでござんすわいなア。

千の　又御機嫌を損じたらやかましい、サアお岸さん、ござんせ〳〵。

お岸　サア行くわいなう、申し貢樣、今の思案を頼んだぞえ。

千吉　サアござんせいなア。

ト兩人して無理に連れて入り、此間始終合方にて、貢こなしあつて。

貢　先達て藤浪樣のお心添を以て仰下されし、本國阿波の伯父御蜂須賀殿の謀叛に、荷擔の武士徳島岩次、城下の町人藍玉屋北六、此者共密に伊勢へ入込み、萬次郎樣に害をなし、殿より仰付けられし下坂の刀を奪取り、萬次郎樣の越度より、殿をば罪に取つて落し、阿波一國を押領せ

んとの伯父御の工み、折紙を騙取つたも皆此手筋、引捕へて詮議とは思へども、何を云うても岩次といふ侍、藍玉屋北六といふ町人、共に人相恰好、藤浪樣より聞いたるとは拔群の相違、何にもせよ是には仔細ありさうなこと、其上お岸お紺兩人共身請して、明日は本國へ歸るとの事、若し彼奴等が、伯父大學殿の廻し者ならば、國へ歸しては、先達て騙取つたる折紙を、伯父御大學殿へ渡すは治定、さすれば折角手に入つた此下坂の刀も、折紙がなくては何の詮なき鈍刀同然、其折紙は正しく阿波の岩次といふ侍が。コリヤ今宵はこゝは動かれぬわいやい。

トこなし。

萬の　何ぢや、貢樣が來てぢや、どれ〳〵わしが逢うて斷を云はうわいなう。（ト云ひ〳〵奥より出て。）オヽ、貢さん、お出なされたか。

貢　萬の、此間は逢はぬなう。

萬の　毎晩〳〵お出る噂聞いたれど、此間は阿波のお客で、とんと座敷が放されぬによつて、ようお目にかゝりませぬが、貢樣ア、氣の毒ぢやが、今夜もお紺樣はなりませぬぞえ。

貢　そんならやつぱり阿波の客で。

萬の　アイ今日は芝居の初日で、お客と連立つて、見物に行かしやんしたが、戻りは朝吉で立ぢやと

いなア。

貢　そんならお紺は、まだ戻らぬか。

萬の　アイまだで御座んす。（トこなしあつて云ふ。）

貢　エヽ一寸お紺に逢ひたいものぢやが、萬の、どうぞ働いてはくれぬか。

萬の　そりやモウおなじみのお客樣の事ぢやによつて、どうぞしてあげたいけれど、お客は阿波のお侍、もう〳〵ねちみやくで、猝と云ふものは是程も御座んせぬ、所詮一寸の首尾もなりますまい、マア今夜はお歸りなさんせ。

貢　サアそんなら、お紺に逢はれずば逢はいでも大事ないが、ちよつとこゝで待合さねばならぬこともあり、コレ萬のたんと奥の舞の會を見ても、大事あるまいか。

萬の　イエ〳〵そりやなりませぬ、奥のお客は猶席狹いお方で御座んすによつて、外のお客と座敷を一緒にしたら、大抵喧しい事ぢやござんせぬ、舞の場へ顔出しなぞしておくれなえ、私等が迷惑するわいなア。お前今宵中待つて居たとて、所詮お紺樣には逢はれぬ程に、ちやつちやつと去になされ、一文にもならぬお客には合うてゐるのも、欝陶しいものぢやわいなア。

ト貢むつとするこなし。

貢　ホヽヽ私としたことが、ひよかすか、貢さんお氣に障へておくれなえ、したがそのやうにここに居たきや、誰ぞ代りの女郎さんを、呼ばしやんせいなア。

貢　そりやモウどうなりとせうが。

萬の　ムヽ代りを呼びなさるか、やれ〳〵ようお出なさつたなア、そんならマア酒でも出さうわいなア、（トそこにあるとさん銚子を持つて出て。）貢様お遊びなさるなら、お腰の物を預りませう。

貢　アノ腰の物を。

萬の　オヽ此里の習ひを、知らぬか何ぞのやうに、どれ預りませう。

ト貢が一腰に手を掛けるを突退け

貢　イヤ腰の物は、滅多に預けられぬ。

萬の　そんなら去になされ。

貢　ヤア。

萬の　ハテ伊勢の茶屋で、腰の物預るは昔から、それに預けられぬとあれば、こつちもお客にはしにくござんす程に、早うお歸りなさんせ。

貢　イヤサちつとこゝに。

萬の　用があるなら、腰のものを預りませう。
貢　デモこの。
萬の　預けるのが厭ならお歸り。
貢　サア。
萬の　預りませうか。
貢　サア。
萬の　お歸りなさるか。
貢　サア。
兩人　サア〳〵〳〵。
萬の　エヽ埒のあかぬ、きり〳〵いんで貰ひませうぞ。
ト慳貪に云ふ。貢ぎつくり思案のこなしある、ト此時。
喜助　イヤ其腰の物、私が預りませう。（ト喜助料理人の形にて出て。）
貢　オヽ料理人の喜助。
喜助　貢樣、毎晩お出なさるゝさうで御座りまするが、私も此間は居續のお客で、一向忙しうござ

りまして、ようお目にもかゝりませぬ。

萬の　コレ喜助どん、そんならそなたが預るのかえ。

喜助　ハテ貢様も、今でこそ藤浪様の御家來なれど、元はお歴々のお侍様と聞及んでゐるぢやによつて、輕卒に女子のこなさんへはお渡しなされまいと推量して、身こそ卑しい料理人の喜助なれども、男のはしくれ俺が預る、ハイ私がお預り申しますからは御氣遣はござりませぬ。

貢　ム、然らば、其方に預ける大事の一腰、麁末のないやうに頼むぞよ。

喜助　しつかりと預りまして御座ります。

萬の　ドレそんなら小口の茶の間へやりますやうに、喜助どん、あとから連れまして御座んせ、お紺様の代りに、わたしがよい女郎を世話してあげようか。

ト奥へ入る、喜助こなし、内門口を見ることあつて。

喜助　イヤ申し貢様、憚りながら一寸申上げたい事が御座ります。

貢　アノ俺にか。

喜助　どうぞ一寸あれへ。

貢　オイ。

ト合方になる、貢、喜助兩人向ふへ出て下にゐる。

喜助、何の用ぢや。

喜助　ハイ今改めて申上げまするも如何なれども、私が親共はあなたの御親父樣に仲間奉公、親旦那のお供をして阿波より志州の鳥羽へ御逼塞、其故親共も奉公を引き此伊勢に僅なくらし、老病の枕許へ私を呼寄せ、今福岡孫太夫殿の御養子の貢樣は、我々親子が古主の若旦那、隨分陰ながら心をつけて、忠義を盡せと親共の遺言、此事はあなたにもよう御存知の儀、申出しましたは及ばずながら、此樣に毎日毎晩遊所へお出なされましては、御身の禍を招く道理、若しひよつとあなたの越度にならうかと、古主を大切に存じますから、ちよこざいた御異見、貢樣必ずお心に障へられて下さりまするな。

貢　下樣に似合はぬ古主を忘れぬそちが異見、惡うは聞かぬ忝い、其心を存じ居る故それ其一腰も、そちに預ける、何をかくさう、その一腰は、此度本國阿波より今田萬次郎樣へ、殿の御意を以て求め歸れとある青井下坂の刀。

喜助　エヽ、アノこれが

ト此話の間萬の出かけ、聞いてびつくりしてつッと入る。

貢　伯母者人の志を以て、貢が手に入つた此刀を、萬次郎樣へ持たせ、本國へお供申さうとは思へども、刀の折紙を騙取られ、此詮議をせう爲に毎晚〱これへ來るのぢや。必ず放埒ではない程に、心遣無用〱。

喜助　ム、そんなら、其折紙を騙つた奴等が、此油屋の。

貢　サアしかとは知れねど、若しやと思ふはアノ。（ト囁き。）ぢやテ。

喜助　そんなら、アノ。

貢　コリヤ大事の詮議、密に〱。

ト喜助氣をかへ。

喜助　申し、奥で一つお上りなされませぬか。

貢　いかさま呑まうか。

喜助　サアお出なされませ。

ト奥にて小袖物狂の報猿の唄になる、貢、喜助奥へ入る。やはり右の合方に鼓入る。奥より萬の、次郎助、北六右三人窺ひ出て。

萬の　申し、今の樣子お聞きなされましたか。

北六　貢がさいてゐる一腰が靑井下坂とは、これを盜めと云はぬばかりの今夜の首尾。
次郎　此次郎助、盜んで國元へ高ぶけりとしませうか。
北六　イヤ〳〵それでは詮議の足がつく〳〵、ハテどうしたものであらう。
萬の　そんならかうせうわいなア、わたしが盜んでこゝを駈落、ハテ二三日も影を隱すわ、そのうちにお前方はお國へお歸りなさんせ、そこへわたしが下坂を持つて下つて、お渡し申したら何とよいやないかいなア。
北六　さう手番が行けばよいぢやテ。
次郎　萬のあぢようやるかよウ。
萬の　やらいでかいなア、申し、あぢようやつたら、ずつしりとおくれるであらうなア。
北六　そりや知れた事いやい、內外の事まで打ち明け置いた我がこと、こつちの望み成就したら褒美所ぢやない、阿波へ引取つて一生樂々と暮さすわいやい。
萬の　エヽ有難い、それ聞いたら一杯精を出さねばなるまいかいなア。
次郎　そんなら、貢めが歸らぬうち。
萬の　イヽエ滅多にいぬことぢやござんせぬ、奧の舞のどさくさの間にやりかけうわいなア。

北次　早う〳〵。

萬の　合點でござんす。

ト矢張右の合方にて三人こなしあつて入る。ト入違うて、岩次我刀と貢が腰の物を兩手に持ち窺ひ出て。

岩次　まだな事を云ふ奴等ぢや、此刀の寸尺が恰度合うたが幸、身を入替へて置きやよい事を、馬鹿らしい。

ト云ひ〳〵、兩方の目釘を拔き、刀の身を入替へる、此時、喜助そつと出かけ、此體を見てびつくりし、又ちやつとすつ込む、岩次刀の身を入替へ、元の樣にして兩手に持ち。

貢めが去にをる時、先刻に預けた刀をくれいと吐すわ、我物ぢやによつて取つてさしをるわ、去にをつた跡に殘つた、これ此おれが刀の身は青井下坂、うまい〳〵。

トこなしあつて、岩次二腰を持ち奧へ入る、トゆとりして喜助、右の岩次の刀を持出でいろ〳〵あつて。

喜助　是をかうして、あれをあゝして、オツトよし〳〵。

ト喜助奧へ入る、ト貢奧より出て來て。

貢　此又萬次郎樣はモウ見えさうなものぢやが。

ト云ふうち、奥より女郎お鹿着附緋扱帶にて、手に小杉を持ち出る。

お鹿　貢樣、何處へいきぢやえ、マア下に坐りいなア。

ト貢が手を取り下に置き、煙草盆引寄せ煙草を喫む。

貢　オヽお鹿かはることもないか。

お鹿　アイよう問うて下さんしたなア。

ト吸付けた煙管を貢へさし出す、貢取つて喫む。

貢さん、きつと嬉しいぞえ。

ト貢合點のゆかぬこなしあつて。

貢　ムヽそんなら、萬野が、あのこなたを。

お鹿　アイお紺さんといふ馴染のあるお前に、何の角のと云うたは皆わたしが惡性なれど、どうも思切られぬ、度々あげた文のお返事、見る度にわたしが嬉しさ、推しておくれいなア。

ト聞いて貢合點のゆかぬこなしにて。

貢　何ぢやゝら、どき／＼とをかしい物の言ひやう、こなたの方から状の來た覺えはなし、又こつ

ちから返事した覺えはなほないぞや。

お鹿　エヽ。（ト驚きたるこなしにて、氣をかへて。）ホヽヽ、オヽ笑止、わたしとした事が、何のマア今こゝで改めて臺詞せいでもよいことを、お紺さんと譯をつけてわたしに逢つてやろと、云うて下さんした時の嬉しさ、どうなとしてお氣に入つてと思うて、云うておこしなさる度毎に、只の一度も返事をおあげなんだ事は御座んせぬわいなア、ちつとなりと可愛がつて貰ひたさで御座んすわいなア。

貢　とんと合點が行かぬ、一體そりや何を云ふのぢや。

お鹿　何を云はうぞいなア、一體お前へ文でわたしが云うてあげた事、得心しておくれたぢやないかいなア。

貢　何をいなう。

お鹿　イエ／＼そのやうにしら／＼しう云はしやんすな、お前の方から返事をおこしやんしたぢやないかいなア。

貢　何日いなう。

お鹿　マ確な返事をおこして置いて、今更そんな事云はしやんすは、そりや胴慾ぢや／＼、胴慾でご

ざんす〳〵わいなア。

ト貢の膝に取付き泣くを突退け。

貢　さま〴〵の事を云ふわいなう。

ト此時奥より。

岩次　サア〳〵來やれ〳〵。

ト岩次お紺が手を引き、跡より北六お岸を連れ、次郎助、おきぬ、定七、丈八、千の、吉の出る。

貢、お紺を見て、

貢　オヽお紺。

お紺　貢さん、きつう華美な事ぢやなア。

岩次　ハテそれを、何そちが構ふこと、サアこゝで云まう〳〵。

千吉　アイ〳〵。

トとさん菓子を持つて行く、上の方へお紺、岩次、北六、お岸、次郎助、おきぬ、丈八、定七、千の、吉の、ぐるりと並ぶ、舞臺先皆々の眞中に、貢、お鹿ゐる。

貢　そんなら、我身は内にゐたか。

お紺　知れたこといなア。

貢　ム、内にゐるものをまだ戻らぬとは、何の爲に萬のに嘘をつかすのぢや。

お紺　わしや知らぬわいなア、そりやお前の心からぢやわいなア。

貢　俺が心からとは。

お紺　此間こゝに御座んす御客樣で、間違うて逢はぬを幸ひ、ちやんとモウ代りを呼んで、ほんに殿達程水臭いものはない、岩樣、お前もさうで御座んせうなア。

岩次　ハテ滅相な、身共はあんな無茶はせぬてや、なうさうぢやないか。

北六　さうとも〳〵、こちらがやうに、一人をこのやうに守つてゐる者は少いでや。

次郎　ちよこ〳〵顔を持へるも、又面白からうわい。

定七　イエ〳〵あれもこれもはきあるくと、箒家ぢやと、異名をつけまするわい。

三人　何ぢや、箒ぢやと。

ト貢の顔を見て。

皆々　ハヽヽヽ。

ト笑ふ、貢むつとして又こなしあり。

萬の　用があるなら、腰のものを預りませう。
貢　デモこの。
萬の　預けるのが厭ならお歸り。
貢　サア。
萬の　預りませうか。
貢　サア。
萬の　お歸りなさるか。
貢　サア。
兩人　サア〳〵〳〵。
萬の　エヽ埒のあかぬ、きり〳〵いんで貰ひませうぞ。
　ト慳貪に云ふ。貢ぎつくり思案のこなしある、ト此時。
喜助　イヤ其腰の物、私が預りませう。（ト喜助料理人の形にて出て。）
貢　オヽ料理人の喜助。
喜助　貢樣、毎晩お出なさるゝさうで御座りまするが、私も此間は居續のお客で、一向忙しうござ

りまして、ようお目にもかゝりませぬ。

萬の　コレ喜助どん、そんならそなたが預るのかえ。

喜助　ハテ貢様も、今でこそ藤浪様の御家來なれど、元はお歴々のお侍様と聞及んでゐるぢやによつて、輕卒に女子のこなさんへはお渡しなされまいと推量して、身こそ卑しい料理人の喜助なれども、男のはしくれ俺が預る、ハイ私がお預り申しますからは御氣遣はござりませぬ。

貢　ム、然らば、其方に預ける大事の一腰、麁末のないやうに頼むぞよ。

喜助　しつかりと預りまして御座ります。

萬の　ドレそんなら小口の茶の間へやりますやうに、喜助どん、あとから連れまして御座んせ、お紺様の代りに、わたしがよい女郎を世話してあげようか。

ト奥へ入る、喜助こなし、内門口を見ることあつて。

喜助　イヤ申し貢様、憚りながら一寸申上げたい事が御座ります。

貢　アノ俺にか。

喜助　どうぞ一寸あれへ。

貢　オイ。

ト合方になる、貢、喜助兩人向うへ出て下にゐる。

喜助、何の用ぢや。

喜助　ハイ今改めて申上げまするも如何なれども、私が親共はあなたの御親父樣に仲間奉公、親旦那のお供をして阿波より志州の鳥羽へ御逼塞、其故親共も奉公を引き此伊勢に僅なくらし、老病の枕許へ私を呼寄せ、今福岡孫太夫殿の御養子の貢樣は、我々親子が古主の若旦那、隨分陰ながら心をつけて、忠義を盡せと親共の遺言、此事はあなたにもよう御存知の儀、申出しましたは及ばずながら、此樣に毎日毎晩遊所へお出なされましては、御身の禍を招く道理、若しひよつとあなたの越度にならうかと、古主を大切に存じますから、ちよこざいた御異見、貢樣必ずお心に障へられて下さりまするな。

貢　下樣に似合はぬ古主を忘れぬそちが異見、惡うは聞かぬ忝い、其心を存じ居る故それ其一腰も、そちに預ける、何をかくさう、その一腰は、此度本國阿波より今田萬次郎樣へ、殿の御意を以て求め歸れとある靑井下坂の刀。

喜助　エ、、アノこれが

ト此話の間萬の出かけ、聞いてびつくりしてつツと入る。

貢　伯母者人の志を以て、貢が手に入つた此刀を、萬次郎樣へ持たせ、本國へお供申さうとは思へども、刀の折紙を騙取られ、此詮議をせう爲に毎晩〱これへ來るのぢや。必ず放埒ではない程に、心遣ひ無用〱。

喜助　ム、そんなら、其折紙を騙つた奴等が、此油屋の。

貢　サアしかとは知れねど、若しやと思ふはアノ。（ト囁き。）ぢやテ。

喜助　そんなら、アノ。

貢　コリヤ大事の詮議、密に〱。

ト喜助氣をかへ。

喜助　申し、奥で一つお上りなされませぬか。

貢　いかさま呑まうか。

喜助　サアお出なされませ。

ト奥にて小袖物狂の靱猿の唄になる、貢、喜助奥へ入る。やはり右の合方に鼓入る。奥より萬の、次郎助、北六右三人窺ひ出て。

萬の　申し、今の樣子お聞きなされましたか。

北六　貢がさいてゐる一腰が青井下坂とは、これを盜めと云はぬばかりの今夜の首尾。
次郎　此次郎助、盜んで國元へ高ぶけりとしませうか。
北六　イヤ〳〵それでは詮議の足がつく、ハテどうしたものであらう。
萬の　そんならかうせうわいなア、わたしが盜んでこゝを駈落、ハテ二三日も影を隱すわ、そのうちにお前方はお國へお歸りなさんせ、そこへわたしが下坂を持つて下つて、お渡し申したら何とよいやないかいなア。
北六　さう手番が行けばよいぢやテ。
次郎　萬のあぢようやるかよウ。
萬の　やらいでかいなア、申し、あぢようやつたら、ずつしりとおくれるであらうなア。
北六　そりや知れた事いやい、内外の事まで打ち明け置いた我がこと、こつちの望み成就したら褒美所ぢやない、阿波へ引取つて一生樂々と暮さすわいやい。
萬の　エヽ有難い、それ聞いたら一杯精を出さねばなるまいかいなア。
次郎　そんなら、貢めが歸らぬうち。
萬の　イヽエ滅多にいぬことぢやござんせぬ、奥の舞のどさくさの間にやりかけうわいなア。

北次　早う〳〵。

萬の　合點でござんす。

ト矢張右の合方にて三人こなしあつて入る。ト入違うて、岩次我刀と貢が腰の物を兩手に持ち窺ひ出て。

岩次　まだな事を云ふ奴等ぢや、此刀の寸尺が恰度合うたが幸、身を入替へて置きやよい事を、馬鹿らしい。

ト云ひ〳〵、兩方の目釘を拔き、刀の身を入替へる、此時、喜助そつと出かけ、此體を見てびつくりし、又ちやつとすつ込む、岩次刀の身を入替へ、元の樣にして兩手に持ち。

貢めが去にをる時、先刻に預けた刀をくれいと吐すわ、我物ぢやによつて取つてさしをるわ、去にをつた跡に殘つた、これ此おれが刀の身は青井下坂、うまい〳〵。

トこなしあつて、岩次二腰を持ち奥へ入る、トゆとりして喜助、右の岩次の刀を持出でいろ〳〵あつて。

喜助　是をかうして、あれをあゝして、オツトよし〳〵。

ト喜助奥へ入る、ト貢奥より出て來て。

貢　此又萬次郎様はモウ見えさうなものぢやが。

ト云ふうち、奥より女郎お鹿着附緋扱帯にて、手に小杉を持ち出る。

お鹿　貢様、何處へいきぢやえ、マア下に坐りいなア。

ト貢が手を取り下に置き、煙草盆引寄せ煙草を喫む。

貢　オヽお鹿かはることもないか。

お鹿　アイよう問うて下さんしたなア。

ト吸付けた煙管を貢へさし出す、貢取つて喫む。

貢さん、きつと嬉しいぞえ。

ト貢合點のゆかぬこなしあつて。

貢　ムヽそんなら、萬野が、あのこなたを。

お鹿　アイお紺さんといふ馴染のあるお前に、何の角のと云うたは皆わたしが悪性なれど、どうも思切られぬ、度々あげた文のお返事、見る度にわたしが嬉しさ、推しておくれいなア。

ト聞いて貢合點のゆかぬこなしにて、

貢　何ぢやヽら、どき／＼とをかしい物の言ひやう、こなたの方から状の來た覺えはなし、又こつ

お鹿　ちから返事した覺えはなほないぞや。エヽ。（ト驚きたるこなしにて、氣をかへて。）ホヽヽ、オヽ笑止、わたしとした事が、何のマア今こゝで改めて臺詞せいでもよいことを、お紺さんと譯をつけてわたしに逢つてやろと、云うて下さんした時の嬉しさ、どうなとしてお氣に入つてと思うて、云うておこしたさる度毎に、只の一度も返事をあげなんだ事は御座んせぬわいなア、ちつとなりと可愛がつて貰ひたさで御座んすわいなア。

貢　とんと合點が行かぬ、一體そりや何を云ふのぢや。

お鹿　何を云はうぞいなア、一體お前へ文でわたしが云うてあげた事、得心しておくれたぢやないかいなア。

貢　何をいなう。

お鹿　イエ／＼そのやうにしら／″＼しう云はしやんすな、お前の方から返事をおこしやんしたぢやないかいなア。

貢　何日いなう。

お鹿　マ確な返事をおこして置いて、今更そんな事云はしやんすは、そりや胴慾ぢや／＼、胴慾でご

さんす〳〵わいなア。

ト貢の膝に取付き泣くを突退け。

貢　さま〴〵の事を云ふわいなう。

ト此時奥入り。

岩次　サア〳〵來やれ〳〵。

ト岩次お紺が手を引き、跡より北六お岸を連れ、次郎助、おきぬ、定七、丈八、千の、吉の出る。貢、お紺を見て、

貢　オヽお紺。

お紺　貢さん、きつう華美な事ぢやなア。

岩次　ハテそれを、何そちが構ふこと、サアこゝで呑まう〳〵。

千吉　アイ〳〵。

トとさん銚子を持つて行く、上の方へお紺、岩次、北六、お岸、次郎助、おきぬ、丈八、定七、千の、吉のぐるりと並ぶ、舞臺先皆々の眞中に、貢、お鹿居る。

貢　そんなら、我身は内に居たか。

お紺　知れたことといなア。
貢　ム、内にゐるものをまだ戻らぬとは、何の爲に萬のに嘘をつかすのぢや。
お紺　わしや知らぬわいなア、そりやお前の心からぢやわいなア。
貢　俺が心からとは。
お紺　此間こゝに御座んす御客様で、間違うて逢はぬを幸ひ、ちやんとモウ代りを呼んで、ほんに殿達程水臭いものはない、岩様、お前もさうで御座んせうなア。
岩次　ハテ滅相な、身共はあんな無茶はせぬてや、なうさうぢやないか。
北六　さうとも〳〵、こちらがやうに、一人をこのやうに守つてゐる者は少いてや。
次郎　ちよこ〳〵顔を替へるも、又面白からうわい。
定七　イエ〳〵あれもこれもはきあるくと、箒家ぢやと、異名をつけまするわい。
三人　何ぢや、箒ぢやと。
ト貢の顔を見て。
皆々　ハヽヽヽ。
ト笑ふ、貢むつとして又こなしあり。

貢　イヤコレお紺、此お鹿は俺が方から呼んだのぢやない、此間から我身に一寸逢はねばならぬによつて、毎晩〱來て見れば、流連の客で逢はれぬ故、今宵待合して逢はうと思つて、萬のを頼み、奥の舞を見せてくれいと云へば、ならぬと云ふ、酒一つ呑まうと云や、誰なと呼べと云ふ、呼ばねば今夜はいんでくれい、と追ひ出すやうに云ふによつて、是非なく誰なと酒の對手に呼ばうと云うたら、このお鹿をおこした、なんにも譯のある事ぢやない、我身に逢はうとはんのせうことなしに、呼んだのぢやわいなう。

ト聞いてお鹿むつとして。

お鹿　コレ貢さん。（ト貢が胸倉を取つて）お紺さんの前ぢやと思うて、そんな事云はしやんすと、皆さんの聞いてぢや手前でなりと、有樣に云はにやならぬわいなア、ならぬわいなア。

ト振廻す、貢お鹿を突退け。

貢　有樣に云ふとは、何を云ふのぢや。

お鹿　云はいでかいなア、コレ皆樣聞いて下さんせ、わしや此お方に惚れました、アイ文付けました。其時貢さん、何故に厭ぢやと云うて下さんせぬ、生中そもじの志嬉しいの、イヤ近いうちに逢うて話せうのと、可愛らしい返事をして置きながら、今更覺えがないとは、そりやお前

卑怯でござんすわいなア。

貢　ほんに、マアまざ〳〵しい事を云ふわい。

お紺　如何に私への當付ぢやと云うて、お鹿さんを呼ぶとは、ほんにあんまりの事で、何と皆さん、をかしいぢやないかいなア。

北六　いかさま、蓼喰ふ虫もすき〴〵と云はうか。

次郎　餘程のへちもの喰ひぢやわい。

丈八　ほんにこりや可笑しうござりますな。

皆々　ハヽヽヽ。

ト笑ふ、お鹿腹立ち、ずつと行きお紺の傍へとんと座る。

お鹿　お紺さん、お前の目からは、成程可笑しうござんせう、アイ私が顔が皆様も可笑しからう、したが何程不器量でも、見事人並に商ひもして通る、又きれることもきれやんす、大勢のお客様方へ無心のたら〳〵云ひさがして、身付の着替もござんした、簪まで工面のなるだけ仕盡して、ほんに今ではわたしや貢様故に、大抵不自由な目をしてゐるわいなア。

ト貢、お鹿を引廻して。

貢　大概な事は女子と思ひ聞捨にもせうが、大勢の中で貢に金をやつたとは、そりや何日ドヽどう云ふ事で金をおこした、聞捨てにならぬ、サア其譯云へ〳〵。（ト急いて云ふ。）

お鹿　イヽエ譯を云はうより、確な證據は、お前からおこさんした文見せうか。

貢　オヽ見よう。

お鹿　今取つて來る、待つてゐなんせ。（ト奥へ走り入る。）

岩次　アヽこゝで又呑まうと思うたら、しゆんだ臺詞で理に入つた、コリヤ枕おこせ。

青の　アイ〳〵。

ト枕を持つて行く、岩次横になる。

北六　ハテ此臺詞を肴に呑めるではないか。

お岸　そんな意地の惡い事は云はぬものぢやわいなア。

トお鹿状を二三本程持つて走り出る

お鹿　サアこれいなア、確な證據は今讀んで聞かすぞえ。

ト文を開き讀む、此間お紺木幕んで岩次に凭れかゝり、煙草を喫んでゐる。

ようぞや御文下され、淺からぬ御しんもうじの程うれしく存じ候、左樣候へばちつと〳〵

手支へ致し候事候まゝ、御無心ながら金子五兩、御旅へ下され候へば、山々悦び申候。此文には五兩、又此文には三兩二兩と、ほんに／＼文の來る度々に、無心云うておこさんせぬ事はないぞえ、其度々に一兩もことはり云つた事はないわいなア。

ト此文を讀むうち、貢、お紺が顏を見ると、お紺ツンと顏をそむけ煙草喫んでゐる　貢、お岸と顏見合せ、お岸氣の毒なこなし、貢、皆の顏を見たり立つたり、いろ／＼こなしある。

貢　ドレ。（ト狀を取つて殘らず見てびつくりして。）こりや俺が手ぢやない、皆僞筆ぢや。

お鹿　エヽ。

貢　元より金の無心云うた覺えはない、一體こりや誰が頼んだのぢや。

お鹿　アイ仲立は、仲居の萬のでござんすわいなア。

貢　何ぢや、萬のぢや。

お鹿　アイナ。

貢　萬の呼べ。

お鹿　萬のや。

貢　もつと呼べ。

お鹿　萬のや。

貢　エヽ、早ら呼べ〳〵。

お鹿　萬のや。

敵役皆々　萬のや〳〵〳〵。

ト敵役皆々呼ぶ、奥より。

萬の　アイ〳〵せはしない。

トずつと萬の出る、ト貢、萬のを引寄せ。

貢　コウ萬の、マア下に居や、コレそちが仲立で、お鹿から文の來た覺えもなし、況て金を取つた覺もないが、何であんな事云はすのぢや。

トお鹿、萬のを引付け。

お鹿　コレ萬の、其方を頼んだは、今や此頃の事ぢやないぞや、あとの月の初、マア文をやれと云やつたによつて、恥しながら書いてやつたれば、直に返事が來て、其次へコレ〳〵五兩の無心狀、それからあとへ二兩三兩、云うて來る度々に、皆其方へ渡したが、其金はどうしやつた。

萬の　コレお鹿さん、何をうか〳〵した事云ひぢやぞいなア・お前から請取つた金は、殘らず貢さ

んに渡したわいなア。

貢　ヤイ〳〵萬の、私が何處に金を受取つた。

萬の　それお前に。

貢　いつい。

萬の　アレまだいなア。

貢　ヤア。

萬の　エヽじやら〳〵と云ひないなア、お前があれ程請取つて置きながら、アヽ聞えた、お紺さんがそこにゐなさるによつて、それでそのやうにとぼけかいなア、そりやお前無得心ぢやぞえ、折角お鹿さんがあげなさつた金を、取らぬとは、ほんに餘りしらにせではあるわいなア。

貢　覺えもない貢に、われら云掛をするのぢやナ。

萬の　覺えのないものが、此無心状はどうぢやいなア。

貢　コリヤ俺が手ぢやないわい。

萬の　サイナアお前の方で、人に書かせておこさんした事、私が知つた事かいなア。

トずつけり云ふ、貢堪へ兼ね、萬のの方へ行かうとする。

お岸　ア、コレ。

ト留めに行かうとするを、北六お岸を留めて。

北六　何もわれが構ふことはないわい。

萬の　貢さん、お前言譯がないとて、私が知らうか、サアどうなとしい、わしや女子ぢや、サアして見いナア、いつそ殺しくされい。

ト體を貢に突付ける、貢摑付かうとしてこなし、氣を變へ。

貢　女を相手にするは大人氣ない、此禮は重て云ふ、萬のさう心得てゐい。（ト胸を鎭める。）

お鹿　萬の、今の一言でそなたの疑ひは晴れた、ほんに女郎が客を欺すはお定り、それに女郎を欺すは、アノこゝな男傾城めが。（ト貢を睨付ける。）

北六　ハヽヽヽ皆聞いたか、俺等は阿波の田舍者なれど、藍玉を商ふお陰で、見事金も澤山に持つてゐる、こちらが國で云ふには、伊勢と云ふところは、無性に錢を欲しがると聞いたが違ひはない、お山を欺して金を取るとは、ハテ變つた事が流行るなア。

次郎　とりわけ御師の中で、薄い奴等は、錢金見るとひり〳〵と顫ひさらす、大方あれが、伊勢乞食と云ふのであらうぞい。

丈八　ア、俺も男がよか、女郎を欺して金を貰ふになア。
北六　テモあつい奴等ぢやナ。
皆々　へ、、、ハ、、、。

ト皆々貢を見て笑ふ。

お鹿　ほんにマアどうしたら、腹が癒ようぞ、いつそ喰付いてなとこまそ。

ト貢に武者振り付くを、取つて引付け。

貢　身不肖なれども福岡貢、女をたばかり金を取る所存はない、なに馬鹿な奴の。

トお鹿を取つて突放す。

お紺　イ、エ滅多に、潔白には云はれますまい。
貢　そりや又何故。
お紺　お鹿さんと譯もなし、金も借らしやんせぬお前が、何で今宵お鹿さんを呼ばしやんした。
貢　それもアノ萬のが。
お紺　サイナア今宵お鹿さんを呼ばしやんしたばつかりで、お鹿さんと譯もあり、無心状をやらしやんしたも、金を取らしやんしたも、皆お前ぢや。

貢　ヤア。

お紺　トサア、かういふ私から思ふもの、外の御方は尚の事。

貢　デモ。

お紺　其程手詰の金なら、マア私に云うてくれたがよい、僅な金を見とむない仕方、所詮私に云うても埒が開くまいと思つての事かえ、そりやモウ腑甲斐ない私でござんすによつて、さう思はしやんすも尤でござんす、忝うござんす、よう隔てゝおくれた、急度禮云うたぞえ、これから隨分お鹿さんをいとしぼがらしやんせ、私への面當ぢやと云うて、同じ内の女郎を捕へ、何の角のとまだ其上に金の無心、ほんに見下果てたと云はうか。殊に女郎は互に張のあるもの、欺されたの騙られたの、大勢の中で聲山立てゝ傍で聞いてゐる其つらさ、ほんに餘りさもしい事さしやんしたと思や、口惜しいやら、耻しいやら、わしや今こゝへ消えたうござんすわいなア。（トこなしあつて泣く。）

貢　イヤサ譬へ、どのやうな事があつたとて、女を欺し金を取るやうな貢と思ふかい。

お紺　イエ〳〵モウ何も云うて下さんすな、聞きたう御座んせぬ。お前の方から隔てゝ置いて、今更何を云はしやんしても、わたしが耳へは入らぬわいなア。

貢　サヽヽヽ其腹立も尤ぢや、こりや正しう、アノ萬野めが所爲、と云うて女の事、云へば云ふ程馬鹿になる、何も云ふ事はない、追付國へ歸ると元の身に立歸る、其時そなたを請出し武士の女房。

お紺　いやでござんす。

貢　やア。

お紺　お前國へいんで、侍になると云はしやんすが、わしや其侍がきつい嫌ひでござんす。

貢　ナニ侍は嫌ひぢや。

お紺　アイわたしが爺樣も元は侍、朋輩の讒言とやらで永々の浪人、常々言はしやんすには、コリヤ必ず侍と二世の約束などすなと、くれ〴〵との御詞、それぢやによつてわしや侍はいやでござんす。

貢　そんなら初からなぜさう云はぬ、今となつて何で侍がいやになつた。

お紺　ハテ初から云はうにもお前は御師、何時なりと私が身儘になつたら、御師を止めさせまして町家住居、町人と女夫になれば爺樣の御詞も立つ、わしや侍は嫌ひ、町人がよいわいなア。

ト貢こなしあつて。

貢　ムヽおがくづも結へばいはるゝと出來ぬことを云ふは、こりや何ぞ急に思案が變つたナ、そんならいよ〳〵女房になることはいやぢやナ。

お紺　イヽエ厭ぢやないぞえ。ハテ侍を止めて町人にならしやんしたら、譬へ貧しい生活でも得心でござんす程に、町人になつて下さんすか。

貢　ぢやと云うてそれがマア。

お紺　ならぬかえ。お前が變らにや、私もいやでござんす、ナア岩様、さうぢやないかいなア、コレ寢た顔せずと起いなア。

ト岩次に凭れかゝりこなしある、貢も此體を見てこなし。

貢　よいわ、われが侍嫌ひなら、俺も町人は嫌ひぢや、いやな侍に今迄よう付合うてくれた、忝い、禮は又ゆるりと云はう。（トずつと立つ。）

お紺　そんならいよ〳〵是限りでござんすぞえ。

貢　念には及ばぬ、勝手にしやれ。

トお紺の方へ行かうとするを、萬の留めて。

萬の　コレ大事のお客の付いたお紺様に、指でもさいて貰ひますまい、こなたのやうな無法者は情夫

貢　客にはせぬ、きり〲去んで貰ひませうぞ。

萬の　オヽ去ぬる、鄕へ居いと云うても、こゝには居ぬ、先刻に預けた腰の物をよこせ。
最前喜助さんに、こなさん預けたぢやないかいなア。

貢　その喜助を呼べ。

萬野　お前呼びいなア。

貢　喜助〲〲。

ト喜助奥より出て。

喜助　ハイ〲〲。

貢　腰の物ぢや〲。

喜助　エヽ畏りました。（ト内へ入り、刀を持ち出で。）ハイ左樣なら、お預り申した此喜助、しつかりと御渡し申しまする。

ト岩次が刀を貢に渡す、貢腹立紛れに引たくりさす。

お紺　コレ待たしやんせ、いよ〲これぎりでござんすぞえ。

貢　ウムその頰げたを。

ト刀の柄に手を掛け息込むを、萬の捉へて。

萬の　エヽ去ぬるなら、きり〳〵と去んだがよい。（ト表へ突出す。）

お鹿　コレわしを欺した譯立さんせ。

ト貢に取付く。

貢　エヽ知らぬわい。（ト蹴飛し。）マア萬次郎樣に逢うて、さうぢや。

トついと向うへ走り入る、喜助跡より門口へ出て、花道際にて貢が跡を見送り、マアあれでよいと云ふこなしあつて、一寸天を拜しツイと奥へ入る。

萬の　ほんにマアきつい無法者ではあるぞ。

お鹿　とうぞわしをさゝほうさにしくさつた。

お岸　アヽ何卒、今のお方に逢うて下さんしたらよいが。

北六　エヽ又ならずが事か、こりやわいら、お岸を奥へ連れていて、寢床へいれて置け。

千吉　畏りました。

丈定　サアお鹿樣もお出。

お鹿　わしも奥で酒なと呑まう、しかし貢めをどうぞ仕樣はないかいなア。

萬の　サアよいわいなア、わしが臺詞してやるわいなア。

千吉　サア〳〵ござんせいなア。

ト合方になり、千の、吉の、お岸を連れて入る、丈八、定七、お鹿、萬の入る。岩次、北六、次郎助の三人お紺の側に寄り。

岩次　お紺出來した、貢をよう退いてくれたなア。

お紺　そんなら今の樣子を。

岩次　寢た顏して、殘らず聞いた。

北六　貢と今の詞詰。

次郎　えらいものぢや。

岩次　貢とさへ手を切つたら、身共が請出し國元へ連歸り、コリヤ德島岩次樣といふお侍の奧樣だ、悅べ〳〵。

お紺　オヽ辛氣、今云うたを何と聞かしやんしたぞいなア。

岩次　何と聞いたとは。

お紺　わしや、侍は大嫌ひでござんすわいなア。

岩次　サアそれは貢と手を切る爲の僞ではないか。
お紺　イヽエ。
岩次　そんなら眞實、侍は嫌ひか。
お紺　アイほんまに侍は嫌ひでござんす、申しお前もわたしを請出し、女房にせうと思うてなら、侍をやめて町人になつて下さんせ。
岩次　ハテかはつた物好き、お紺、すりや此岩次、武士を捨て町人になつたならば、いよ〳〵そちや女房になるぢやまで。
お紺　町人にならしやんしたら、女房になるわいなア。
岩次　嘘とさうぢやな。
お紺　オヽくど。
ト岩次、北六、次郎助の三人顏見合して。
北六　北六、戀が叶うて、嘸滿足であらうナア。
岩次　岩次樣、お紺があの心底を聞いては、コリヤ化の皮を顯はさねばなりませぬ。
實の岩次　オヽ町人なれば、女夫にならうとは、よい壺へ持込んだそちが仕合、身共が指圖の通り、能く

實の北六　岩次になり了せた、出來したたく。

岩次　此褒美には國へ歸りましたら、藍玉を買込んでぢつしりと儲けさする、此お願ひ、御前へよろしう願上げまする。

北六　氣遣しやるな。伯父大學殿は身共次第、其願は聞屆けて遣さう。

岩次　エ、有難うござります。

次郎　お紺そちが望みの通り、北六は町人。

岩次　藍玉屋の女房に、お紺とはきつしり嵌つたわい。

岩次　エ、こゝな、

お紺　あやかり者めが。（ト背中を叩く。）

岩次　マアたく待つておくれいなア、わしやとんと合點が行かぬ、藍玉屋の北六樣と云ふは、お前ぢやないかいなア。

お紺　されば サ、藍玉屋の北六と云うて、町人となつて居たには深い樣子のある事さ。

北六　ム、そんなら阿波の御家中德島岩次樣と云うたは。

北六　まことはお出入の町人藍玉屋の北六ぢや。

お紺　何の爲に、そのやうに入替つてござつたのぢやえ。

北六　これには段々曰く因縁のあること、藍玉屋の北六が、岩次樣と入替つて、此伊勢に逗留する其譯はナ、アノ貢めが古主今田萬次郎と云ふ奴、殿の仰を請けて、靑井下坂の刀を求めに此伊勢へ出立、又俺等は伯父御大學樣に頼まれ、其下坂の刀を横合から引つたくつて、國へ持つて去んで、伯父御の手から武將へ差上げさつしやると、大學樣には上首尾、殿は不首尾、そのあやまりで萬次郎めはれこサ、しかし伊勢支配の藤浪めは、萬次郎とは緣者、そこで阿波淡路と隔てゝ、萬次郎めは岩次樣をろく／＼知らぬを幸ひ、道中から入替つて此北六が岩次樣となり了せ、まんまと伊勢路へ入込んだ、所に萬次郎が身の上を世話する福岡貢め、こいつぐるめに仕舞うてくれよとさま／＼に手を廻して、大方十が九つ、二人ながら命はない、時にアノ貢めをこのやうに意趣遺恨を含む元はと云へば、お紺われぢやテ、逗留のうちにふと此油屋へ來て、われを見るとえらう惚れたによつて、とつくりと萬野に聞けば、われと深い馴染ぢやげな、それからモウ／＼けたいがわるうて、おのれ貢めを片付けて、われを女房にせうと思うた、願ひが叶うて、このやうな有難いことはないわいやい。

お紺　とんとそれで樣子が知れたわいナア、アノそんならいよ／＼わたしを國へ連れて去んで、女房

に持つて下さんすかえ。

岩次　ソリヤ北六、お紺の方から女房に持つてくれるかと、詞を詰めたぞよ。

次郎　今迄辛苦したとは引替へて、お紺の方から急が來たぞや〳〵。

北六　コリヤモウどうも堪へきれぬわいやい、岩次樣、この悦びに金は何ぼでもつゞけまする、お前樣もお岸を請出さつしやりませ。

岩次　そりや過分な、これまで段々世話になる其方故、身共も遠慮いたしてをつた、さうしてたもれば身が戀も叶ふと云ふものぢや。

お紺　申し、北六さんえ。

北六　ヤア〳〵。

お紺　わしや又お前に問ひたい事が御座んすわいなア。

北六　何なりとも問うたり〳〵。

お紺　外の事でも御座んせぬが、お前の懐に入れて、大事にしてゐやしやんす袱紗包、ありや何でござんすえ。

北六　ヤア。あれは。

お紺　何やら變つた物さうな。一寸私に見せて下さんせぬかえ。
北六　イヤありや女子の見るものぢやない、ありやァ、さうぢや、金毘羅樣の守ぢやわいなう。
お紺　テモきついうそ〱。
北六　何で〱。
お紺　あのやうに肌身放さず、大事にかけてゐやしやんすからは、あゝやうでもお前の色さんの起證ぢやナア。
北六　何のマア。
お紺　見せともなきやおかさんせ、ようござんす、そのやうにお前の心にかけごがありや、私がなんぼ誠を盡したとて、何の役に立たぬこと、エヽ辛氣な事ではあるわいなア。
ト腹の立つこなし、北六眞面目になる、岩次、次郎助氣の毒がり。
岩次　コレサ北六、お紺があのやうに實を盡すに、何故物を隱すぞい、其懷中の袱紗包を出して見せてやりやいなう。
次郎　心が變らぬ内に出したへ〱。
北六　エヽ二人ながら喧しい、コレ此懷の袱紗包はかの折紙。

岩次　ヤア。

北六　ナア折、ナア紙々の御札や御守でござるわいなう。

岩次　ム、それなれば迂濶に出されぬは尤ぢや。

お紺　よいわいナア、見せられぬものを見ようと云ふは、私が無理ぢや、北六さんモウわたしや請出さゝことはいやでござんす、女房になりやせぬぞえ、變替でござんす程に、さう思うて下さんせ、こんなところに居ると一倍腹の立つこつちや、二階へ行て、ドリヤ寢ようか。

ト二階へ行かうとするのを、北六引留め。

北六　コレヤ待つてくれい、テモ扱ても女郎に似合はぬ悋氣深い奴、大事の物なれど、そなたの疑晴しに、袱紗包渡す程に、こゝであけると若しひよつと外の者が見ては大事ぢや、二階へ持つて行てそつと明けて見やいなう。（ト渡す。）

お紺　そんなら二階へ行て。

北六　明けて見て疑晴しや。

お紺　待つてゐるぞえ。

北六　早う行きや。

お紺　アイ。

ト唄になり、お紺右の袱紗包を持つて、中二階へ上る。

岩次　時に北六、あの折紙があつても、肝腎の下坂がなうては、明日出立もならぬ、今宵中に貢めをば殺して、下坂を奪取る手短な思案せずばなるまいてや。

北六　オツト其處等はぬからず、我等があぢようしておいた。

岩次　あぢよう出來たか〳〵。

北六　生文殊が智慧をふるうた〳〵。

岩次　出來た〳〵。

ト奥より萬の刀を持ち出て來て。

葛の　コレしてやつたぞ〳〵。

三人　何ぢや。

萬の　先刻にお紺さんと貢と口說の跡が喧嘩になり、何が去ぬると云うて、預けた腰の物をおこせと云ふ所へ、喜助が持つて出で渡したは岩樣のお刀、貢は狼狽眼で岩次樣のお刀をさいて、ツイと去にをつたわいなア。跡に殘つたはコレ此刀、コリヤ貢がさいてをつた下坂の刀、何と手を

濡さず、こつちへせしめたは目出度いぢやござんせぬか。

ト これを聞いて北六大に仰天のこなし、岩次刀を取つて見てよろこぶこなし。

岩次　成程こりや身共の刀とは相違、すりや貢めが取違へて、こつちの刀をさいて、青井下坂を置いてうせたか。

次郎　折紙と云ひ、下坂まで手に入ると云ふは。

岩次　これもみな萬のがはたらき。

萬の　何とえらからうがな。

岩次　えらい〳〵。

萬の　祝うて一つ打たうかいなア。

三人　ヤアシヤシヤン〳〵のシヤン、も一つせいシヤシヤン〳〵、も一つ祝うて三度おシヤシヤンのシヤン。

ト このうち北六皆を突退け。

北六　ア、違うたわいやい〳〵。（トもがく。）

三人　何が違うた。

北六　先刻に貴樣達の知らぬ内に、貢めが預けた下坂の刀と、こつちの刀と二腰共そつと盜んで來て、見れば丁度寸尺が合うたを幸に、貢めが下坂の刀の身を、こつちの鞘へはめて置いたれば、其刀の身はやはりこつちので、貢めが取違へてさいて去にをつたが、誠の下坂ぢやわいの。

三人　ヤア〻。（ト三人びつくり。）

北六　ア〻折角物したものを、又元々へ戾してのけた。

岩次　エ〻忌々しい。（ト持つたる刀を打付ける。）

北六　エ〻何の事はない、生文殊をうりにしくさつた。

萬の　大事ござんせぬ、仕樣がござんす。コレ喜助どん〳〵。

喜助　オイ〳〵。（ト喜助奧より出る。）

萬の　コレこなたも大槪の事したがよいわいの。

喜助　何ぢやいなう。

萬の　コレ岩次樣の御刀と、貢の刀と取違へて渡したぞや。

喜助　エ〻。（トわざとびつくりのこなし。）

萬の　行て取返してござんせ〳〵。

喜助　ハイ〳〵ようござりまする、私が一走行て取返して參りませう。

岩次　コリヤ、此貢が刀を持行き、そちが麁相でござりますと云うて、此方の刀と取替へて戻りをらう。

喜助　ハイ〳〵畏りました。

皆々　サヽ早う〳〵。

喜助　オツとまかしよとな。

ト刀を腰にさし、尻からげして、花道の眞中程まで行き、舞臺を見返り、皆々の顏を見て舌を出しにつたりと笑ひ、いかい白痴めと云ふこなしにて、向うへ走り入る。萬の思出したこなしにて。

萬の　ア、鈍な事をしたわいナ〳〵。

三人　何ぢや〳〵。

萬の　よう思へば、あの喜助は貢が家來筋といふ事、ちらりと聞いたわいなア。

三人　ヤア。

萬の　下坂の刀と知つて、取違へた顏で、貢に渡しくさつたかも知れぬわいなア。

三人　ヤア〳〵。

萬の　よい〳〵、コリヤわしが行て取返して參じませう。
岩次　いかさま此方の顏出しては、後日の邪魔。
北六　追駈けやうにも、腰も足もふぬけだまになつた。
岩次　そんなら北六。
北六　我等は先へ御免〳〵。
次郎　萬の、一時も早う〳〵。
萬野　合點でごんす。

ト萬の向うへ走り入る、岩次、次郎助は奥へ入る、北六は二階へ上る。トこれより川崎音頭になる。内にて踊子大勢の聲にて、よい〳〵〳〵よいやサ、トかけ聲すると、向うよりばた〳〵にて、貢逸散に走り出てつか〳〵と内へ入り。

貢　喜助、萬野〳〵。（ト方々を呼喚き。）ム、このやうに呼んでも、二人ながら出て來ぬは、扨は二人とも件の奴等と一つになり、こつちの心せくまゝ贋物を掴ましをつたのぢやわい。

ト云ふうちお紺二階の障子あけて。

お紺　貢さん、又ござんしたか。

貢　お紺か。(ト下よりきつと見上げる。)

お紺　わしやどうあつても、侍は厭でござんす、書いて置いた此退状、これ取つておかしやんせ。

ト巻紙の中へ、件の折紙を入れ投付ける、貢取上げ開き、折紙を見てびつくり。

貢　スリヤコレ。

トお紺びつしやりと障子を鎖す、貢行燈のあかりにて篤と見て。

コリヤ先達て騙り取られた誠の折紙、エ、忝い。(ト懐へ入れ右の状を見て。)人目繁く候故、退状と見せ認めたく、先程はお鹿づらと譯あるやうに申し、其上金迄出し取被成候やうに申し候へども、さら／＼お前に覺のないことは、私がよく存じ居り候、皆これは萬野とお鹿が馴合ひ、お前に惚れたと云ふも、金をやつた云ふも皆嘘にて、眞は阿波の客に頼まれ、お前に無實の難題を言掛け、顏の立たぬやうにして、私に愛相盡かさせ、お前と手を切らせ、國へ連れて去なうといふ巧にて候、其事推量致し候故、態とお鹿づらの事を言ひあがり、其上迄に侍は厭ぢやと難題を申し上げ、態と縁を切る樣に見せかけ候を、阿波の客が心をゆるし、いつぞや萬次郎樣の騙られなさつた折紙を取返し遣したく、又折紙持つてゐ申し候徳島岩次といふ侍は嘘にて、實は藍玉屋北六といふ者にて御座候、又北六と申す者は、徳島岩次と申す

侍にて、皆國元の伯父御の廻し者とやら、態と町人と入替つてゐたのに候、眞實縁を切る心にては御座なく候まゝ、必ず〳〵御心變らせ下されまじく候、かしくこム、スリヤ彼奴等が身の上を聞いて知さう爲、まつた此折紙を取返さうばつかりに、すげなう云うたか、お紺、さうとは知らず踏打擲、堪へてくれ、そちが志過分なぞよ、マア此折紙は手に入つた、これから下坂の詮議、腹立紛れ氣の急くまゝ、其處へ付込んで外の刀を渡しをつたは、大方萬のめが所爲に極つた。

ト向うより、萬のばた〳〵にて出て來り、貢を見付け。

萬の　オヽ貢さん、此刀を。

ト貢が一腰に手をかけるを留めて。

貢　萬の、人の腰の物も返さず、よう贋物を渡したなア、身が刀を出せ〳〵。

萬の　オヽ何云ひぢやいなア、お前の刀は喜助が預つたぢやないかいなア、それを私が知らうかいなア、マア其刀はお客のぢやによつて、此方へおこさんせ。

ト取りにかゝるを、兩方より引張り。

貢　マア俺の刀から出しおれやい。

萬の　知らぬわいなア。

貢　知らぬとは野太い奴め。（ト持つたる刀の鞘共萬野を叩く。）サア出しをれ〳〵、出しをらう。

ト散々に打擲えると、仕掛にて鞘われて思はず萬野を切る、萬野ひいやりとする故、撫ゝて見て血だらけになる故びつくりして。

萬野　アヽ切つた〳〵〳〵。

ト貢きつとなつて。

貢　おどぼね立てな。

トぽんと切る、萬野一刀に死ぬる、次郎助奥より寐惚顔にて欠伸しながら出る、此内貢刀を捜しに奥へ行かうとする、次郎助、萬野の死骸に躓き見てびつくりして。

次郎　ヤア切つたわ。

ト云ふ聲に貢切つて行く、次郎助いろ〳〵狼狽へ逃廻り、トヾ一刀切られ逃げて入る、これより貢正面の暖簾落すと、内にけん鐙筒のやうな戸棚あり、此鏡戸を外し内にある刀掛に客の腰の物三本掛けあり、これを持つて出て、行燈の灯にて一々検め見て、さうではないと投捨て、又血刀提げて二階へ行かうとする。此間岩次奥より出て、貢を後抱きに抱きよろしく立廻つて、トヾ貢岩次が眞向を切割る、岩次ウンとこける、此内北六二階より下りて貢に切掛るを、立廻にて北六が片腕切

落す、北六ウンとこける、岩次起上つて又貢に掛るを切立つる、岩次二階へ逃げて上る、貢後より岩次が尻こぶたを切る、切られながら二階へ逃込む、貢續いて二階へ追かけ入る、チョン〲にて引迄具。

## 返し

此間始終奥にて川崎音頭の掛聲、右切る度々に本蘇枋にて見得物凄く、道具段々東へ引く。道具立中二階組幕にして、正面奥座敷の見得、花道廊下の見得、よき所に大きな手水鉢、餘り高くない小柴垣、是も共に引出す、廊下のとまりは奥座敷の體にて道具納る。

トばた〲にて中二階よりお紺飛降り、廊下を走り、あちこちと狼狽へる事ありて庭へ飛降り、柴垣へ隱れると、岩次これも中二階より廊下へ飛下り、手水鉢の後へ隱れると、二階の内よりワアと云うて、お鹿一かせ切られ、飛んで下り廊下へ逃げるを、貢續いて飛下り、廊下にてお鹿を切殺す。これより定七、丈八出て切らるゝと、踊子大勢笠絆縮緬の拵へにて、奥より逃げて出る。

皆々　あれい〲〲〲。

ト廊下へ走る、貢此者共へ拔身を觸へまいと身を避けるこなし、此跡へ千の、吉の、おきぬ逃げて出る、貢これも避けるこなしにて、怪我に一寸手を負せるこなしよろしくあつて、皆々逃げて入る。おさき跡より出る。

きの　貢様、待たしやんせ。

ト抱留めるを、退かつしやれといふこなしにて振解く、機におさきが横腹を突く、ウンとこける。貢見て南無三と心緩む所を、岩次縁の下より貢が足に取付き、庭へ引卸さうとする。貢岩次を蹴飛し續いて庭へ飛降り、立廻にて又岩次を一かせ切る、岩次切られながら、柴垣へ逃込む、お紺驚き逃げて出るを岩次と思ひ、疊みかけて切つてかゝる、お紺あつちこつちと逃廻り、トヾ身を縮めて手を上げ悚うてゐる、貢拔身を振上げながら、お紺を見てぎつくりとなつて、じつと心を落しつける體、お紺震ひ〳〵貢が後へ廻り背中をさすりおろす、貢氣を落しつけ、顔にてお紺に早う逃げいとして見せる、お紺此體を見て、先へは逃げぬとかぶり振り、泣くを、貢足手纏ぢやといふこなし、お紺是非なく、そんなら先へ行く、早うごんせと、兩方共物言はずに、始終こなしにて、お紺頷ひ〳〵あとさき見送り〳〵向うへ入る。貢はつか〳〵と花道の隅へ行き、お紺が跡を見送り居ると、此お紺が足音を貢と思ひ、岩次顔も體も眞赤にすはうだらけになつて、柴垣よりぬつと出て、手水鉢へよう〳〵と取付き、切られて聲の出ぬこなしにて。

岩次　人殺しぢや。

ト悲しい聲にて云ふ、貢これにてきつと拔身を構へ、岩次を見る、岩次身を縮める、貢よろしく見得。

幕

但此幕引くと、直に雷夕立の音凄じく鳴る、此間道具飾替へ、早幕にて四幕目を明ける。

# 四幕目　　福岡貢切腹の場

**役名**　福岡貢、藤浪左膳、今田萬次郎、料理人喜助、奴林平、次郎助、貢伯母おみね等。

貢伯母おみね内の場　道具立二重舞臺、上の方折廻し障子屋體、向う押入、赤壁、納戸口、橋がゝり淺垂入口ありて物置の體、いつもの所に門口、舞臺先草井戸、右二重舞臺よき所に簞笥直しあり、幕の内より雷大夕立の趣向激しくあつて、よき程に幕明ける、ト雷やんで、夕立ばかりの音にて、向うより次郎助米俵を被ぎ、夕立を凌ぐ體にて走り出で、花道よき所まで來ると夕立止む。次郎助止り俵を脫ぎかけて。

次郎　ヤレ〳〵えらい夕立であつた、雷の嚴しさ、ヤレ恐しや〳〵、したが夫より恐しいはあの貢の跡から追駈けてこうせるやうに思はれて、滅多無性に逃げて來たが、こゝは何處ぢや知らぬア、まゝよ、何處でも大事ない、夜通しに逃げたによつて、體がばんやのやうになつた、何處へな

と入つて、ちつとの間寢たいものぢやが。（ト云ひ〳〵本舞臺へ來て、物置を見て。）よいわ、こいつ物置さらな、暫くこゝへ入つてくつたりとやつてこまそ、よし〳〵。

ト戸を開け入ると合方になる、本釣鐘明六つの鐘、方々にて鷄の聲すると、向うへばた〳〵にて貢、右の姿にて拔刀提げ走り出て、本舞臺門口へ來て立留りこなしあり、拔刀を下に置き、草井戸の釣瓶を取り水を汲上げ、刀の血を洗ひ袂に付いてある血汐を洗落し、頰冠にしたる汗手拭にて刀を拭ひ、右の拔刀を引卷き腰にさし、門口をそつと明け内へ入り二重舞臺へ上り、件の拔刀を隱さうとする内、納戸より。

みね　誰ぢや〳〵。

ト云ふ聲に、貢そこにある簞笥の引出へ、拔刀を入れる所へ、おみね納戸より云ひ〳〵ずつと出る、貢手早く簞笥を締めて、お峰と顏見合せ。

貢　伯母御人。

みね　貢、おぢやつたか。

貢　ハイ。

みね　今やう〳〵夜が明けたが、夜道をおぢやつたは、何ぞ過急なことであらう、氣遣なことぢやないかや。

貢　イエ〳〵なんにも氣遣な儀はござりませぬ。
みね　それにまだ夜の内におぢやた樣子は。
ト貢ぎつくりとすることなしあり。
貢　イヤお案じなされることはござりませぬ、目出度いことでござります。
みね　何ぢや、目出度いことぢや。
貢　さうでござります。
みね　ヤレ〳〵嬉しや、今日は五月の節句、朝早々から目出度いことゝは嬉しい、さうしてその目出度い事とは何のやうな事ぢや、ちやつと聞かしてたも〳〵。
貢　サアその目出度いと申すは、かの、オヽそれ先日あなたより請取りました下坂の刀、萬次郎樣の御手に渡し、則ち今日、本國阿州へ出立、私も萬次郎樣の御供仕まするゝ、それ故一寸お暇乞に參りましてござりまする。
みね　それは誠に目出度い〳〵、が貢や、見ればそなたの着物はしつぽりと濡れてある、さつきの夕立に、雨具の用意もなしに滅相な、そのやうなもの着てゐると、きつい毒ぢや、さいはひ〳〵。

ト簞笥へかゝる、貢は伴の拔刀を見られうかと心遣のこなし、おみね抽斗より貢が紋付の單衣物、帶共に出し。

エヽ貢、この簞笥のこの單衣物は、そなたの爺御の定紋、そなたへ送つたかたみの内で、せめて此單衣一つは、わしが方に留置いたるは、朝夕兄さんのお顏を見る心、紋も幸に同じこと、サアこれを着て、目出度う萬次郎樣のお供しや、ドレ〳〵わしが着せてやりませう。

貢　それはお慮外、さやうならばお借り申しまする。

みね　オヽ借るの貸すのと、親の物は子の物ぢやないかいなう。

ト云ひ〳〵着せる、貢帶を解く、此時懷中より折紙とお紺が退狀落ちる、ちやつと隱し、着替へて帶仕替へる、おみね、貢が脫いだ袷を袖疊みにする、此時袖口裾などに血の付きあるを見て、びつくりのこなしあつて、貢に見せぬやう疊みて、片側へ寄せて。

オヽそれでよい〳〵、テモさても親子とてよう似合うた事わいの、それにつきそなたに見せる物がある、待ちや〳〵。

ト障子屋體を明ける、内に毛氈を布き、机の上に刀掛に大小掛け、其前に本膳平燒物つけて供へある。

コレコヽに飾つたは、そなたの爺御の差料、昨日は五月四日、祖父樣と云ひ、そなたの二親の

祥月命日の精進日、今日は又武家方に祝ふ端午の節句、一人の下女は親許へ二三日私用あつていぬる、せめて心ばかりの祝ひと思うて、七つ起してわしが手づから膳の拵へ、所柄とて生鰹の煎燒物、かくの如く大小を飾り、御膳を据えたも、そなたの武運勝つてかつをの門出よし、夜の内におぢやつたれば、朝飯もまだであらう。祝うて此膳に坐つて行きや、給仕は伯母がしませう、サアサ〱早う。（ト右の膳を取つて、貢に据える。）

貢　左様ならば、私が自由に仕りませう、モウお構ひ下さりますな。

みね　イヤ大事ない、遠慮しやんな、お汁がぬるうなつたであらう、盛りかへて來てやりませう、サア一寸喰べかきやいなう。ドレ〱。

ト汁椀を持ち入る、貢跡見送り。

貢　何も知らずと、伯母者人お赦されて下さりませ。（ト一寸手を合せ納戸の方を拜み。）親人の差料とは幸ひ〱。

ト飾りある大小を取つて、差添を差し刀を側に置き膳に坐る、おみね丸盆に汁椀載せて持つて出て。

みね　サア〱お汁も暖つた、ちやつと喰べや〱。

貢　ハイ〱左様ならば。

ト飯椀取つて喰ひかけるこなしあつて、汁をかけがさ〳〵かき込む。

みね　そのやうに急いで喰べるは、大な毒ぢやわいなう、靜に喰べや〳〵。

ト云ふ間に、貢喰仕舞ひ。

貢　御馳走でござりました、モウ宜しうございまする。

みね　もそつと喰べやいなう。

貢　イヤ心急にござりますれば、モウこれでよろしうござります、時に伯母者人に御無心がござりまする、此親人の差料は、何卒拙者に暫くお貸し下さりませう。

みね　オ、改つた事云やるわいの、親の物はそなたのもの、さいて行きやいなう。

貢　左様ならば、申請けませう、エ、忝い、最早萬次郎様にもお待兼ね、拙者はお暇。

みね　そんならモウ行きやるか。

貢　伯母者人、おさらばでござりまする。

ト刀をさし、表へ行かうとする、おみねこなしあり。

みね　貢、待ちや。

貢　イヤ心が急きますれば。（ト又行かうとする。）

みね　それでモウ云ふ事はないか、死んで再び物は言はれぬぞや。

ト きつと云ふ、貢ぎつくりと立留り。

貢　エヽ。

みね　死ぬなら、何故潔う、伯母にも暇乞して行かぬぞ。

ト貢つか／＼と戻り。

貢　何と云はつしやる。

みね　そなたは人を殺さうがの。

ト貢きつとして。

貢　なんと。

みね　知つたはこれ、この着替。（ト貢の脱ぎし袷を出して。）袖にも裾にも血汐の滴り。

ト貢ぎつくりとなる。

何と、人を殺しやらうがの。

ト貢ホイと俯向く、おみね、貢の胸倉を取つて。

コレ貢、身にも命にも替へて、大切に思ふ此伯母に、何故物を隠してたもるぞいなう。夜道を

來るに丸腰にて、着物はひつたり血だらけ、御飯を喰べかねて、お汁をかけた一膳ぎり、科人の牢舍の時缺椀に一杯ぎり、其心であらうがの、サアどう云ふ譯で人を殺したぞ、様子を云うてたも、其様子によつて助るすべもあらう、何の様子も云はず、このまゝ此處を出て、切腹する覺悟と見た故呼留めた、貢、伯母に隠して死なうとは、ソリヤならぬ、胴慾ぢや〳〵、胴慾ぢやわいなう。

ト泣く〳〵貢打明けて、様子を云はうか、イヤ〳〵云うてはと、いろ〳〵こなしあつて、胸を据ゑたる體。

貢　御尤もぢや、成程委細打明けて申しませぬは拙者が誤、いかにも人をあやめましたが、何も氣遣ひはござりませぬ、其様子と申しまするは、先達て萬次郎様が下坂の折紙騙取られた、盗賊共が古市の油屋と申す遊所に居る事を存じ、難なく折紙は取返し、手向致せし故殘らず切殺し、則ち取返したる折紙は、これにござりまする。（ト懷中より、折紙を出し見せる。）

みね　ム、そんなら、此折紙を騙取つた者共を、切りやつたのか、オヽ出來した〳〵、それなれば幾人切つても大事ない、折紙さへ手に入れば、そなたに渡して置いた下坂に添へ、國へ行きやると萬次郎様は御歸參、そなたも元の通り親の家名を引起すといふもの、そんならいよ〳〵下坂

を、萬次郎樣にお渡し申して置きやつたの。

貢　左樣でござります。

みね　そんなら一時も早う、此折紙を持つて、萬次郎樣と一緒に國へ持參しや。ア、嬉しやなう、さう云ふ事とは知らず、若しやと思うて、大抵案じた事かいの。

貢　左樣ならば、直樣出立仕りませう。

みね　大儀ながら、さうしや〳〵。

ト云ふうち、橋がゝりより、左膳、萬次郎に案内させ出て來て、ずつと兩人門口へ入り。

萬次　ヤア貢、こゝに居やるか。

貢　萬次郎樣、左膳樣。

左膳　貢、さて〳〵出來した〳〵。

ト兩人上へ通る、此時表の物置より、次郎助そつと出て、戸口に立聞きする。

夜前、古市に於ての樣子、委細聞屆けた、よくも德島岩次、藍玉屋北六兩人共に打つて捨てた、併今一人次郎助といふ奴、逃失せしとの事、彼奴等三人は伯父大學よりの廻者、一人にても國へ歸り注進させては、家老今田九郎右衛門の忠誠も水の泡、さるによつて次郎助め

は、身が家來に申付け、見付次第に討放す手配。

ト此事を聞いて、次郎助仰天して、又物置へ逃込む。

萬次　コレ貢、下坂の刀がそなたの手にある樣子、お岸に聞いたによつて、藤浪樣を御同道申したわいの。

左膳　下坂の儀に付き、心勞致した伯母とはそちであらう、まだ對面はせねども某は藤浪左膳、女ながら古主へ忠義を立つる志、過分〳〵。

みね　これはマア有難い御意に預りまして、これと云ふも貢そなたの忠義故、オヽ出來しやつた〳〵。

左膳　イヤモ國へ對して大功ある福岡貢、萬次郎が爲には氏神も同然、貢が事、仇おろそかに思はぬがよいぞよ。貢、オヽ太儀〳〵。

ト扇を煽ぎ立つる、貢じゆつなきこなし、おみね共に悦ぶ。

シテ岩次を手にかけ、取返した折紙は。

貢　則ちこれが折紙でござりまする。

ト左膳取つて見て。

左膳　ム、成程正眞の折紙、シテ下坂の刀は。
貢　サアその刀は。
左膳　其方が所持致して居るではないか。
貢　サアその刀は。
萬次　コレちやつと出してたもひなう。
貢　サアその下坂は。
左膳　どう致した。
萬次　コレその折紙と一緒にして、早う國へ去にたいわいなう。
貢　サアそれは。
　　トうぢ〳〵云ふ、おみね傍よりあせることなしあつて。
みね　コレ〳〵貢、今そなたが云ひやるは、下坂の刀は先達てから、萬次郎様へお渡し申しておきやつたぢやないかいの。
萬次　イヽヤわしやまだ請取らぬわいの。
みね　エイ。

ト聞いて左膳、貢が傍へぐつと寄つて。

左膳　貢、下坂の刀は、ド、どう致した。今聞けば、萬次郎へ渡して置いたと、何やら紛はしい、下坂は何と致した。

貢　サアその刀は。

みね　どうしたぞいやい。

貢　サア。

萬次　出してたもひなう。

貢　サア。

左膳　何故出さぬ。

貢　サア。

三人　サア。

貢　サア。

四人　サア〳〵。

ト三方より取卷き。

左膳　又候や、奪取られたか。

ト きつと云ふ。貢、左膳、おみね、萬次郎三人を見てこなしあつて。

貢　ハア、。

ト 俯向く。左膳、おみね、萬次郎三人顔見合せ。

三人　ホイ。

ト 當惑の體にて、左膳直に貢の首筋取つて引付け。

左膳　こな狼狽者、騙取られし折紙を取返しても、肝腎の下坂なくして役に立たうか、アノ刀がなくては阿波淡路兩國の騷動、殿の瑕瑾、萬次郎は切腹といふ所へ、心がつかぬか、女ながらそれなる伯母が、古主の爲と云ひ、さま〴〵と心勞致して買求めしと聞及ぶ、女すら古主を大切に思ふ志、それに一端請取りし刀を、ド、どういふ仔細で奪取られしぞ、サア眞直に仔細を云へ、サアどうぢや〳〵。

ト 突放す、おみね、貢に詰めかけ。

みね　今あなたの仰る通り、國の騷動、萬次郎樣のお身の上、それ知らぬそなたでもない、伯母の苦勞して買求めた事は是非がない、どう云ふ事でそなた程の人が、あの大事の刀を取られた事

ぢや、サアちやつと譯をいうてたも、譯はどうぢや〳〵。

ト貢俯向いて物を言はぬ故。

左膳　ム、斯程まで尋ぬるに、一言の言譯せぬは、扨は噂に聞及ぶ通り、古市の遊所に性根を奪はれ、茶屋狂の金に手支へ、大切なる刀を賣拂うたな。

貢　イヤ全く左樣では。

左膳　左樣でなくば、刀を出せ。

貢　サアそれは。

左膳　出さねば、そちが放埓故、コナ見下げ果てた不屆者、天晴事を仕損じまじき者と思ひ、大切の儀を申付けたは、某が一生の不覺、ハテ是非に及ばぬ。

みね　藤浪樣が今のやうに仰つても、言譯をしやらぬからは、そんならいよ〳〵遊所の拂ひに（ト貢の胸倉を取って。）此間孫太夫樣でのしだら、けれう其場へわしが行たればこそ、若い女子を伯母でござると僞り事、戀はその身の妨と心が付かぬか、エ、淺猿しい性根ぢやなア。

ト突放す、貢いろ〳〵こなしあつて、親の刀に手をかける、左膳留め。

左膳　刀で切腹とは武士の行儀、不忠不義の身で野太い奴の。

ト引手繰り、おみねの方へ拋ると、貢こなしあつて、又差添にて死なうとするを、おみね直に差添を引取つて。

みね　此差添も親の魂、穢すことは、さアならぬ。

ト貢いろ〳〵口惜しきこなしあつて。

不忠者の貢、萬次郎樣への申譯、伯母甥の緣切つた、勘當ぢや。（ト作の大小を抱へずつと立つ。）

左膳　某とても主從でない。

ト萬次郎を引立て門口の方へ行く、おみね上の方へ入替り。

みね　御兩所樣。

左膳　さらば。

ト貢兩手にて、左膳とおみねが裾を控へ、兩人の顏を見る。

みね　出て行け。（ト刀の鞘にて拂退ける。）

左膳　人外め。

ト蹴飛す、と唄にて、おみねツイと奥へ入ると、左膳、萬次郎を引立てツイと橋がゝりへ入ると、唄一くさりあつて、あとしめやかなる好みの合方になると、貢起直り、左膳とおみねの方を見て、覺悟極むるこなしあり、徐々立つて簞笥へかゝり、最前の手拭に卷きたる拔刀を取出し、本舞臺の

眞中へ坐り腹切るこなしにて、件の拔刀を左の腹へかばと突立つると、納戸よりおみね走り出で、
貢に取付き。

みね　ヤア貢、腹切つたかいなう。そなたに凶事させまい爲に、大小を取上げ勘當したも、まこと色に耽る所存があらば、勘當受けたを幸に、此場を立退くであらうと思ひの外、此刃物は何處にあつたぞ、エ、情ないことしてたもつたなう。

ト取付き泣く、貢こなしあつて。

貢　伯父者人、大切な下坂の刀を、萬次郎様へお渡し申さうと思うて、二見の知邊へ行たれば、萬次郎樣は折紙の詮議にお出なされしお目に掛らず、大方古市の油屋へと、此四五日が間いて見てもいて見ても、間違うて後へんばかり、やう／＼昨夜油屋へお出なさると聞いたによつて、待合すうち仲居の萬のといふ女、里の習慣なれば腰の物を預らうと云ふ、大切な下坂の刀故、預けまいと云へば歸れといふ、是非萬次郎樣を待合さねばならず、所へ料理人の喜助が預らうといふ、此者は親人の家來筋故、確と預け置いた所に、かの萬のめ、阿波の客に頼まれ、お紺と貢が手を切らせ身請せんと、お鹿といふ女郎と馴合ひ、此貢が金子を騙つたと無體を言掛け、その事より馴染んだお紺と縁も切れ、腹立紛れに預けた刀おこせと引奪つてぼつ込み、萬次郎

樣をあちこち搜すうち、ふと見れば腰の物が變つてある、南無三寶と立歸つて、喜助と萬のを搜せども、二人共に行方知れず、何でも客の腰の物と、若しや取違へはせぬかと、一々吟味する内コレ此一通、コリヤお紺が手管を持つて、騙取られた折紙を取返し、則ち徳島岩次と云ふは、伯父大學殿の出入の町人藍玉屋北六、又今迄北六と云うたは誠の徳島岩次、兩人共入替り伊勢路に滯留せしも、下坂の刀折紙共奪取つて、明日は國へ出立の樣子、告知せしはお紺がはたらき、それもその狀に詳しう認めござる。

ト此うちおみね狀を讀んで、びつくりのこなし。

所に萬のめを見付け、サア最前預けた刀を出せと云へども、知らぬとあらがふ故、是非なく持つたる刀にて打据える機みに、鞘は碎けて只一刀にて萬野は最後、それより彼の岩次北六兩人共に腕を切落し眞向切割り、家内の者には怪我させじと避けるを狙へ、向うより肩端、肋、指、背中、みなかすり傷ながら夜中の騷動、騷ぐ間に家内を殘らず詮議すれども、口惜しや下坂の有所知れず、詮方盡きて表へ出れば、ヤレ人殺し、盜賊よ、と所の者共立騷ぐを、やうやう切拔け古市を立退く所、神領に血をあやす穢を流す大夕立、激しき雷を構はずこれへ參つたは、伯母者人、所詮運命盡きたる貢、申譯には腹かつさばく覺悟でござつたわいの。

ト泣く。向うばた〳〵にて、喜助逸散に走り出て、貢が體を見て。

喜助　ヤア貢様、逸まつた事なされましたなア。

ト貢に取付き泣く、貢、喜助が首筋取つてひしぎつけ。

貢　おのれ、ようもみなと馴合ひ、贋物を渡しをつたなア〳〵。それ故に身が切腹、主殺しの大罪人め。

喜助　エヽ情ない、コレ岩次が刀が、則ち下坂の刀でござりまするわいなう。

貢　ヤヽ、何と〳〵。

喜助　申し、お前様に預つた下坂の御刀を、岩次めが盗出して、己が刀の身と入替へ、又あいつが刀の身は下坂と仕替へをつたことを。一寸見付けました所で、預けた刀おこせと仰しやつた故、どうもあいつらが傍では言はれず、取違へた顔で、岩次の刀を渡しました、拵へは岩次の刀、中の身は下坂でござりますわいなう。

貢　ヤヽヽヽ。

ト貢、おみね驚く。

喜助　その事を申上げうと、跡から追駈けましたれど、間違うてお目にかゝらず、跡へ戻つて見れば

家内の騷動、コリヤ何でも鳥羽の伯母御樣へと、飛んで參りましたが、一足遲かつたばつかりで、大事の〳〵御主人樣に、御切腹させました不忠者は、コ、、、此下郎めだ、こいつだ〳〵こいつだ。

ト泣く〳〵握拳にて、我額を擲き、頭を散々に喰はし、身内を搔搖り鬢の毛を引拔きいろ〳〵もがき泣くと、貢こなしあつて突込んだ刀を引拔き。

貢　スリヤこれが。

トきつと見ると、奥より左膳萬次郎を連れ、つか〳〵と出て、貢が持つたる刀の手を持添へ、急ぎ見て。

左膳　燒刄は正しく砂流し、

萬次　これこそ誠の青井下坂、

貢　スリヤ、これが、エヽ、忝い。

みね　そんなら御兩所樣。

左膳　歸りし體にて、裏道より忍入り、委細は聞いた。

萬次　此刀を疾に下坂と知つたならば、貢に腹は切らすまいもの、

ト左膳、貢の傷を見て。

左膳　氣遣ない、急所は外れた、養生叶うぞ。

み喜　エヽ忝い。

ト橋懸よりばた〳〵にて、林平飾馬の口を取り、あとより上下侍、ぶつさき羽織の若徒大勢附き走り出で。

林平　御兩所樣、これに御入遊されまするか。

左萬　林平、その體は。

林平　只今國家老九郎右衛門樣より早打參り、鎌倉表の首尾よろしく、伯父大學殿は押込隱居、萬次郎樣にはエヽ御歸國あらせられませいと、お迎ひの引馬。

侍大勢　我々もお迎ひ。

ト此時次郎助物置より出て。

次郎　萬次郎、うぬを。

ト萬次郎へかゝらうとする、林平引捕へ、貢の方へ投付け、又立上るを、貢持つたる刀にて切る、仕掛にて胴切になる。

皆々　見事。

みね　そんならいよ〳〵、

貢　青井下坂、

左膳　二胴の正銘、

萬次　二品揃ふ上からは、

喜助　お岸様、お紺様も目出度う身請、

林平　お國入は此場より、

左膳　急いで出立、

侍皆々　ハアヽ。

トこの見得よろしく。

幕

# 明烏夢泡雪（あけがらすゆめのあはゆき）

# 明烏夢泡雪

新吉原山名屋格子先の場
同二階浦里部屋の場
同庭先折檻の場

**役名**　春日屋時次郎、山名屋四郎兵衞、近江屋佐助、太鼓持善孝、同氣樂、山名屋若衆大勢、四郎兵衞女房およし、山名屋抱浦里、新造袖の香、同しげり、禿みどり、同ゆかり、遣手おかや等。

新吉原山名屋格子先の場　本舞臺向う一面の朱塗の大格子、上手入口、後へ下げて山名屋と記せし柿の長簾暖、下の方千本格子の張物にて見切り、都て山名屋格子先の體。こゝにみどり禿部屋着の形にてあやまりゐる、おかや遣手好みの拵へにて長煙管を振上げゐる、これをしげり新造の拵へ、

氣樂矜縞着流し、太鼓持の拵へにて留めてゐる。此見得、吉原雀の唄にて幕明く。

みど　アレ堪忍して下さんせいなア。

かや　イヤ〳〵堪忍ならねえ〳〵。

氣樂　どんな事かアしらねえが、こんなひよわなみどりどん、可愛さうにつゞけ打、さうひどくしなくつてもいゝぢやアねえか。

かや　生意氣な事いゝなさんな、いゝ事なら打ちやアしないが、外の子供のしめしにも、こいつを折檻しにやアならねえ。

しげ　そりやアさうでも御座んせうが、今日のところは、私にどうぞ任してくんなまし。

かや　エ、大きにお世話だ、打捨つておくれ、人の事よりお前こそ何をこゝにしてゐなさるのだ、見世出し前だのに、きり〳〵身拵へでもして了ひなせえ。

しげ　その見世出し前に、格子先で手荒い折檻しなさんして、人聞きが惡うざますから、いゝ加減にしなましよ。

かや　イヤ〳〵いゝ加減にしては置れない、子供は愚か新造衆でも、又どんな立派なおいらんでも、目に餘る事があれば、遠慮はない、仕置をするのが遣手の役、それだによつて折檻しまする、

私だつて憎まれ役にしたい事もなけれど、あんまり片意地な性根故。イエサ片意地なのは、しげりさん、お前ではない、あのみどりめが。

ト又立ちかゝるを留めて、

氣樂　コレサおかやどん、今廊下でも煙管で思ふさま打つたぢやアねえか　モウ／＼いゝ加減にしてやんなせえ、內證でおかみさんがあんまり酷い折檻をしねえがいゝと仰つたぜえ。

かや　何だといふと、女郎衆の贔屓をするおかみさん、そのうちにも浦里さんのやつてゐさつしやる事を、一寸でも私が叱ると、直に小言をいひなさるからいゝ事にして、しげりさんを始めこゝにゐるみどりなども、私の云ふ事はちつとも聞かない。あの又浦里さんといふおいらん、今年の春賣られて來て、未だ廓馴れねえ故、目をかけてやればいゝかと思つて、この餓鬼までが同じやうに、いゝ年をしたものを小馬鹿にしやアがつて、ほんに／＼腹が立つて／＼、口惜しくつてなりやアしねえ、エヽじれつてえ。

トおかや、氣樂の肩へ摑みつく故、びつくりして。

氣樂　アイタヽヽ、何をしなさるのだ。

かや　オヤ堪忍しておくれ、ツイ口惜しくつて、門違ひをしたわね。

氣樂　ところでモシおかやどん、その腹立を忽ち直す妙藥を上げやせう。（ト紙に包んだ祝儀を出して。）浦里さんの客人が、お前へ祝儀だ。

トおかや取つて嬉しき思入にて。

かや　オヤ〳〵さうかえ、オホヽヽ、ナニ氣樂さん、氣におかけでないよ、おかみさんが私を叱るもこれも今日の勤めサ、又私が子供等の折檻をするのも勤め。勤といふ字に二つはない。（ト祝儀の金をさぐり見て。）アノコリヤ一分が二つあるわいなア。

氣樂　エヽ何を云ひなさるのだ。しかし、おかやどんの機嫌が直つて、こんな嬉しい事はない。

かや　何しろ、このお客人に一寸お禮を。

ト行きかゝるを、しげり立ちふさがり。

しげ　アヽモシ今行かしやんしては。

かや　悪いかえ。

氣樂　イヤ悪いといふ事はないが、今よく寢入つて御座るから、お起きなすつたら知らせます。コレしげりさん、お前は早くこの子を連れて。（ト思入。）

しげ　アイ〳〵承知で御座んす、サアみどり、わしと一緒に。

ト手を取り引立る。みどり肩の痛む思入にて。

みど　アイタ、、、。

しげ　どうぞしやつたか。

みど　今おかやどんに打れて、こゝが。

かや　もつと性根のつくやうに。

氣樂　又してもそんな事。

かや　それぢやといつて。

ト又立ちかゝるを留めて。

氣樂　ハテ堪忍してやんなせえナ。

しげ　サア氣樂さん、お前も二階へ。

氣樂　ドレ一緒に行きませう。

ト吉原雀の唄になり、しげり、みどりを連れ、氣樂附いて暖簾口へ入る。

かや　今氣樂さんから祝儀をくれた、浦里さんの客といふのは確にせいた時次郎、こつそり二階へ上つたのは、見世にあいずりがあると見える、コリヤ打捨つては置かれぬわえ。

トやはり右の唄にて、下手より近江屋佐助羽織着流しにて出で來り。

佐助　オ、おかやどん、こゝに居なすつたか。

かや　お前は近江屋の佐助さん、さつきにから待つてゐました。

佐助　おれもお前に逢ひたかつたのだ。

トー云ひながら、兩人床几へ腰をかけ。

時に、浦里さんの事はどうしてくんなさるのだ。

かや　この間からのお頼み故、お前の内の大事のお客、山名次郎左衛門樣へおいらんを從はせようと、まづ邪魔になる時次郎が揚代金の溜つたをこれ幸ひに二階をとめ、逢れぬやうにして置いて、意見交りにすゝめるが、しぶとく返事をしないから、何ぞあつたら折檻なし、痛い目させて得心さゝうと、目をつけてゐたところ、誰が手引か、昨日から居續けをしてゐる初會の客、屛風の內に隱れてゐるのは、確に情夫の時次郎、これを越度に折檻して、きつと得心させまする。

佐助　どうぞお前の働きで、得心させてくんなせえ、何を隱さう山名樣は師直公の昵近で、わしが内の大事のお客、浦里さんが得心すれば、直に身請の相談して、御大身のお部屋樣になられるの

だ、さうなる日には、こつちの旦那もしつかり金が手に入るし、お前もおれもしつかりと金になる話だから、骨折つてくんなせえ。

かや　さういふ事と聞いたから、金が欲しさに、是非今夜得心させて、いゝ返事は、明日お聞せ申しませう。

佐助　それは何より有難い、次郎左衛門様をしくじると、身上にかゝはる話、お前の骨は盗まないから、是非得心させてくんなせえ。

かや　お案じなさんすな、儲け口なら、やらずのがさぬ熊鷹おかや、しかしお禮はいくらおくれだ。

佐助　首尾能く行けば、骨折に十兩、お前に貰つてあげよう。

かや　ナニたつた十兩かえ。

佐助　たつたでもないぢやアねえか。

かや　十や十五のお禮では厭だ、少くも切餅一俵。

佐助　二十五兩は相場がいゝねえ。

かや　ハテ何を買つても、五層倍だ。

佐助　所をはやりの六さい市で、二割引して貰ひたい。

かや　二十兩では安いものだ。

ト此時奥にて鈴の音する。

佐助　モウ見世が出ると見えるな。

かや　二階へ行つて嗅ぎ出さうか。

佐助　そんならおかやどん。

かや　佐助さん。

佐助　ドレ出直して來ようか。

ト吉原雀の唄にて、佐助は下手へ入る、おかやは暖簾口へ入る、これにて此道具廻る。

同二階浦里部屋の場　本舞臺一面の平舞臺、上手床の間、續いて違棚、茶道具小箱を乘せし書割、下手夜具棚、桐の簞笥、上の方折廻し障子屋體、下手障子出入、此外下の方三階造りの小座敷、伊豫簀をおろし、この前に二階の上り口、都て浦里部屋の體。上手に屏風を立廻し、内に本夜具、下手に桐の長火鉢へ鐵瓶を掛け、しげり鼻紙で火を煽ぎゐる、傍に行燈を置き、子役のゆかり禿形にて、草双紙を見てゐる見得よろしく、淸搔にて道具納る。

しげ　コレゆかりや、本ばかり見て居ずと、誰ぞ來たら早く知らせなよ。

ゆか　アイ〳〵。

ト此時ばた〳〵になり、下手の障子を明げ、新造袖の香駈來り、しげりびつくりして屏風を閉ひ。

しげ　アレびつくりしたわいなア。

袖の　堪忍しなまし、氣のつかぬ。（ト屏風の内へ指さし、思入あつて。）デありんしたつけねえ。

しげ　ア、コレ必ず知れてはならぬぞえ。

袖の　案じなんすな、私だつてもこんな事は覺えのある事、それはさうとおかや婆アが、何かお前にいつたぢやアないかえ、みどりから一寸聞いたが、かんづかれては油斷がならぬぞえ。それはいゝがお茶を一杯振舞つておくれな。

しげ　ちよつと待なまし、今煮立つところざます。

袖の　それを待つてゐると、又鬼婆アに怒鳴られるから、お茶はよしにしいすから、さつきの羊羹がまだあるなら、私にくれなまし𛀁。

しげ　あれは子供にやんなまし𛀁。

袖の　あれは子供には毒でありんす。（ト云ひながら菓子簞笥から羊羹を出し喰べる。）モシ聞きなまし、あの萬吉の野郎め、急度今夜來る筈にして置いて、日暮前に格子先へ來て、急に用が出來たか

ら、今夜は見世へ出てくれろといひつぱなしで、逃げて行きやアがつて、あんな働きのねえやつに惚れたと思ふと、ほんに／＼腹が立つてならないわね。モウ一切れ喰べてもよからうねえ。

しげ　たんとお上んなんし、今にお茶が出來ると、見世へ持つて行つてあげんすよ。

袖の　ほんにお前に實があるなら、どうして聞きなまし、此中拵へてやつた煙草入れも、どうかしてしまつたとサ、わたしやアモウ何にも願ひはないが、一昨日の晩綾衣さんのところへ上つた初會の客人、どうぞあゝいふ男を色にしたらうござますよ。

ト下手より太鼓持善孝出で來り。

善孝　袖の香さん、取持たうかね。

袖の　オヤ善孝さん、お前聞いてお出か。

善孝　今七里さんのお座敷から歸るところサ。

袖の　お前、千さんにお逢ひなら、近いうちに來なますやうに、言傳をしてくんなまし。

善孝　その言傳は眞平だ。

袖の　なぜざます。

善孝　此間も千さんが旦那のお供で仕方なく、袖の香さんに付合つたが、無法に飲んだり喰つたりして、床へ入ると大いびき、揺ぶつても擽つても、目が覺ればこそ、ぐう〳〵とばかりで、手がつけられなかつたと、滅法惡くいひましたぜ。

袖の　そんな人間さのいゝ事ばかりいつて、座敷と違つて床へ入ると、うろさく話しかけられ、なんぼ惚れた客人でも、あんまりしつこくいぢめるから、寢た振をしてやつたのざます。

善孝　こいつはどつちがどうだか、枕に訊かにやア分らない。

袖の　千さんも平常と違ひ、大層床はひつこうざます。

善孝　口では意氣な事をいつても、みんな内心は助平サ。

しげ　善孝さん、ぬしもさうざいませう。

善孝　どうして〳〵私なぞは、女の方は禪僧同樣、極さとり切つたものサ。

袖の　鈴を振り切つた方でありんせう。

善孝　イヤ當られました。

袖の　それはさうと善孝さん、今おいとさんのところへ、濱町の太夫さんのところから、座敷の事で手紙が來ましたが、ひねくつた手で讀めないから、一寸讀んで見てくんなまし。

ト懐から件の手紙を出す。

善孝　濱町の家元は先代の書風をまね、不昧振りを書きなさるから、女にやア讀み悪い。

しげ　ほんにさうでありんすねえ。

善孝　ドレ／＼讀んでさげよう。（ト開き見て、）淨瑠璃名題、清元云々。（トよろしく讀む事。）

しげ　オヤ／＼そりやをかしな手紙だが、間違やアしないかね。

善孝　イヤ大違ひ／＼、コリヤア、芝居で讀む淨瑠璃の觸書だ。

袖の　イエ／＼手紙でありんす。

善孝　ナニ觸書だよ。

袖の　手紙でありんす。

善孝　成程お前はごうぜうだ。いよ／＼このところ淨瑠璃はじまり、その爲。

袖の　オットロ上はなりんせんよ。

善孝　エヽそれを留られちやア、その爲、ごうぜう左樣。

ト善孝下手へ入る

袖の　ほんに善孝さんはいゝ男で、あんな太夫衆はないねえ。

しげ　又いろにしたからうね。

袖の　アイ、善孝さんなら、心の帯紐解いてまでも。

トいひかける、此時下手の障子をさつとあけて。

かや　袖の香さん、お前何をそこに喋つてゐなさるのだ。

袖の　今羊羹を、ナニ用がありんして。

かや　人の客人の噂より、お前の客人を取留めるやう、ちつと精を出しなさんせ、年が年中名代に上つてゐるばつかりが、手柄ぢやア御座んすまい。何だねえ、口をむく／＼して。

袖の　今虫歯のまじなひを。

かや　エヽきり／＼しねえのかえ。

袖の　なんたねえ、よくやかましい事ばかり。

かや　早く行きなんし。

袖の　今行きんすといふに。

トばた／＼と下手へ入る、おかや跡見送り。

かや　ほんにしやうづれのない新造衆だの、モシしげりさん、おいらんの客人に一寸お話を申したい

ねえ。

しげ　まだよう寝てゞ御座んす、お目が醒めなんしたらば、私がよいやうに。

かや　イエ〳〵お前に取次いで貰つては、私の義理が濟みませぬ、お目が醒めたら知らせて下さんせ、逢つてとつくりお客の顔を。

しげ　エヽ。

かや　イエサとつくりお禮を云はねばなりませぬ。

しげ　そんならお目が醒めんしたら、私が知せて上げんせう。

かや　ほんに今迄寝なさるとは、大層寝好きな客人だなうハアヽ、。

ト合方にて、おかや屏風の内へ目をつけて、下手へ入る、此内しげりは土瓶へ茶を入れ、鐵瓶の湯を注ぎ、湯呑へ茶を汲み盆へ載せて。

しげ　コレゆかりや、これをあすこへ。

ゆか　アイ〳〵。

トしげり囁く、禿ゆかり合點して、盆を持つて屏風の内へ入る、しげりは廊下の方へ心遣ひのこなし、誂への端唄になり、下手にて。

よし　しげり、そこにゐてかえ。

しげ　ハイおかみさん、お入りなさいまし。

　　　ト此内そつと障子を明け、女房好みの拵へにて、上草履を穿き、蓋物を持つて出で來り、ゆかりは屏風の内より出る。

よし　客人は寢さつしやつてか。

しげ　ハイまだ寢て居さつしやいます。

よし　詰らないものだが、浦里が好きなもの故、おいらんに上げてくんな。

しげ　それはなんで御座りますか、有難うござんす、ゆかりや落さぬやうにあすこへ持つて行きや。

ゆか　アイ〳〵。

　　　ト箪笥の上へ載せる、此内下手からみどり出て來り。

みど　しげりさん、今障子を締めようとしたら、屋根の上が眞白になりんした。

しげ　そんなら雪が降つて來たかえ。

よし　サア今しがた降出したが僅な内に松ヶ枝がたわむ程に積つたが、この雪では、又浦里の持病に障るであらうと、さつきから云ひくらしてゐたよ。

ト此内しげり莨を吸付けて出す。

しげ　いつもは雪の前日から頭痛がして、苦しみなんすが、今日はどうした事でやら、どこかどうともいひなさんせぬ。

よし　それは何より仕合な事、人の病も氣の持ちやうで、いろ〳〵になるにつけ、ちつといひたい事があるから、目が覺めてなら、浦里を一寸こゝへ呼んでくりや。

しげ　サア今しがた、おいらんを起し申したら、よう寢入つてゞ御座んした。

よし　さうでもあらうが、逢ひたいから、おいらんを起してくりや。

しげ　そんなら一寸私が、様子を。

ト立ちかゝる、此時屏風の内にて。

浦里　しげりさん、そこへ行つて、おかみさんに今お目にかゝりんせう。

ト合方きつぱりとなり、しげり屏風を明ける、内より浦里部屋着好みの拵へにて出て思入あつて。

おかみさん、まだ今朝から、間違うて。

よし　ほんにせわしないので、今日はまだ今朝から一度も逢ひませんなう、よく此雪に持病の頭痛が起らないのでよいなう。

浦里　有難う御座んす、昨日初會に上りなんしたその客人が、元氣なお人で、それにまた氣樂さんの落話に紛れてやら、今になんとも御座んせぬ。

よし　それは仕合な事であつた、私が案じるばかりでなく、そなたが惡いと、傍にゐるしげりが氣あつかひ、若しもそなたが無分別でひよんな事でも、サアひよつと、病が重つたら、可愛さうなのはあのみどり、何の頑是もないものを、孤兒にしたら、さぞや。イヤモウ木にも萱にも、おいらんを力に思ふが、使はるゝ新造禿のあたりまへ、ノウしげり、そんなものではなからうかいなう。

しげ　おかみさんの有難い、事を分けたるその御意見、世話になるのを姉と呼び、うきを語るを妹とよび交す流れの身は、互の事といふうちにも、どういふ事にか、おいらんが目をかけて下さんしたので、他人のやうには思ひませぬ。

浦里　この子達はいふに及ばず、おかみさんまで、このやうに人並ならぬ病身な、私を思うて下さります、御親切は身にしみ〲、有難う御座んす故、身を大切に無分別な。サア無理な事を致さずに養生して、持病を直し、達者になつて勤めますから、必ずお案じなされて下さりまするな。ほんにマア今迄は、きつう御苦勞かけましたわいなア。

よし　それで私も落付いたわいな、したが、その初會の客人といやるは、確か町人と聞いたが、今日は流して御座んして、又此雪に降込られ、モウ一日と留め申すは、この商賣の常ながら、内外の者もけどつた樣子。イヽエイナア、内方の御首尾も惡からう程に、夜明前にしげりへわしが沙汰をする程に、折を見合せお歸し申しや。

浦里　一方ならぬ、おかみさんの有難いお心添へ、仇には思ひませぬわいなア。

ト浦里なく、およし思入あつて、

よし　これはしたり何を泣くのぢや、人に聞えると惡いわいなう。

ト下手より、以前の善孝出て來り、

善孝　おかみさん、今晩は。

よし　オヽ善孝さん、昨日は有難う。

善孝　お水を上げるのを忘れましたが、後程持つて上ります。

よし　さぞ、田甫が寒かつたであらうねえ。

善孝　隨分寒う御座りましたが、帝釋樣はごはつこうで、滅法參詣が御座りました、おいらんも御信心故、お水を後で上げませう。

浦里　有難うさます。

ト善孝思入あつて。

善孝　イヤお水と云へば、障子越に承つてをりましたが、おかみさんの今の御意見、必ず水になされまするな、大きな辭では云へませんが、邪けんにせいて逢せぬのが、マアつられいの廓の習ひ、それを云はずに、こつそりと夜明前に歸せなど丶、こんなおかみさんがあるものか。

よし　コレ善孝さん、なんぼ世辭をうる商賣でも、あんまり油過るぢやアないか。

善孝　イエ太鼓ときわだの刺身は、油過るのがよう御座ります。

よし　そりやアさうでもあらうけれど、私もほんの間に合せ、きわだ代りのからきとやら、一口には云はれないわね。

善孝　イエお前さんより、ほんの此場の仕合せ、あつてもなくても御座います。

よし　然しもやしのきうりは、一口でも、お客さまがお悦びなさいます。

善孝　おかみさん、あんまり油過ぎますぜ。

よし　その油の乘つた二人が仲、人の目褄を忍んでも、逢たいのは尤なれど、その樂しみのならぬのが例にいふ苦界の勤め、まゝにならぬが浮世ぢやわいなア。

善孝　イヨ紀の國やナア。

ト これをきつかけに、知らせにつき、下手中二階の伊豫簾を卷上げる、こゝに淸元連中袴羽織にて居並び、新内模樣の淨瑠璃になり。

〽白雪の積るも、戀にたくらべて、とけぬ思ひを浦里が、どうした緣でかの人に、逢うた初手から可愛さが、身にしみ〴〵と惚拔いて、堪へしやうなきなつかしさ、人目の關の夜着の中。

ト 此内女房およし思入あつて、下手の障子をあけ奥へ入る、浦里よろしくあつて淚を拂ひ、しげりを呼びさゝやく、これにてしげり、禿兩人を連れ、下手へ入る。

〽あけてくやしき鬢の髮、撫上げ〳〵。

ト 此内屛風をあけて、春日時次郎やつし下着形にて、四邊を窺ひ出て。

浦里　申し時さん、嘸氣詰りで御座んせう。

時次　浦里、モウ誰も差合はないか。

浦里　見世が出たれば、今の間は誰も來る事では御座んすまい。

時次　ヤレ〳〵この廣い二階に、身一つの置所のないといふは、ア、情ない身になつたなア。

浦里　サアそのやうにせきせかれ、嚥氣詰りで御座んせう、それを堪へて下さんすのも、私を可愛いと思うてのお志、うれしう御座んす、忝いわいなア。

〽抱きしむれば、いやおれゆゑ、と引締めて、物をもいはず締合ひて、あとは涙にくれけるが。

ト兩人愁ひの思入よろしくあつて。

時次　ア、いつまでもかうして居たとても、かぎりもなき二人が仲、長居する程そなたの身詰り、此程だん〳〵話す通り、かのお人へいろ〳〵と手を廻し申入れても、叶はぬ望みと願書までもつき戻されし身のほいなさ、それればかりか、そこやかしこに借が出來、親類中は云ふに及ばず、不義理に不義理が重なれば、親の内へは歸られず、世間へ顏の出されぬ身の上、生甲斐のないところから、ツイ愚痴に閉されて、無分別とは知りながら、死ぬる覺悟の時次郎。

〽そなたも共にと云ひたいが、いとしそなたを手にかけて、どうなるものぞ、永へてわがなき跡で、一遍の回向を賴む、さらばやと云捨て立つを、取りついて。

浦里　アヽモシ。〽あんまり酷い、情なや、今宵はなれて、こなさんのまめで居さんす其身なら、まだ逢ふ事のあらうかと、樂しむ事もあるべきが、豫て二人が取交す起證誓紙は、みんな仇、夕の床の睦言に、死後をつゝしむ此白無垢、これ程までに思ふもの、捨てゝ行くとは胴慾な、さりとてはわしややりはせぬ放しはせぬ、殺して置いて行かんせと男の膝に縋付き、身をふるはして泣き居たる。

ト此内時次郎、浦里よろしくこなしあつて、寄添うて泣く。

〽遣手のかやが聲として。

かや　この子供はどこへ行つた、ゆかりや、みどりや。誰もゐないのか。浦里さん／＼。

トこれにて時次郎うろたへ、元の床の内へ入る、おかや出で來り。

オヽ浦里さん、さつきから私が呼ぶのに、お前はこゝに居なさりながら。

浦里　オヤおかやどん、なんの用で御座んすかえ。

かや　アイ外の用で御座んせぬが、あの夕から居續けの客人、ありや何處のお方で御座んすえ。

ト浦里ぎつくり思入あつて。

浦里　サア何處やらの息子さんぢやと云はしやんしたが、初會に上りなんしたお方故。

かや　イエ〳〵さうは拔けさせぬ、憚りながら私を只の遣手ぢやと思ひなさんすか、宗助どんは此頃來て、客衆の顏を知らぬを幸ひ、あの人の番を覗つて、化けて上つたお客の性體、見顯さうとさつきから、廊下で聞いてゐるとも知らず、くんずほぐれつ口說の段、モウ隱しても役に立たぬ、サア旦那が呼んでぢや程に、サア御座んせ。

トおかや、浦里の手を取り、引立にかゝる。

浦里　アヽコレおかやどん、云ふに云はれぬ譯あつて、お前方の目をかすめ、時さんを上げんしたは、私が惡うありんすから、どうぞ後生に見遁して、旦那さんへ、この事を

かや　イヤ見遁す事はならぬ〳〵、後生などゝいふ事を知つて、遣手が勤まるものか。

浦里　そこをどうぞおかやどん、手を合せて拜みんす。

かや　エヽ知らぬ〳〵、きり〳〵と御座んせ。

〽無二無三に引立つるを、一期の大事と身をもだえ、なんと障子のそとより

も、明くる間おそしと亭主は駈寄り、たぶさ摑んでどうと引据ゑ。

ト此内おかや、浦里を引立ようとする、障子を明け、山名屋四郎兵衛出で來り。

四郎　ヤアまだかい〱、そんな甘口できくやつぢやねえ。

浦里　旦那さん、勘忍にして下さんせ。

四郎　イヤ勘忍ならねえ、サアおれと一緒にうしやアがれ。

〽罪も報ひも後の世も、しらがあたまのこめかみも、張切るばかりのやら腹立、引立てゝこそ出て行く。

ト浦里跡へ心の殘る思入、これを四郎兵衛、おかや手を取り、引摺りながら下手へ入る。

〽胸に時つく時次郎、屏風蹴倒し、これまでと駈出る所へ、てん〲に。

ト屏風をあけ、時次郎出る、此時下手より若衆大勢棒を持ち出で來り。

皆々　そりやこそ時次郎だ。

時次　アヽコレ若衆、どうぞ見遁して下さりませ。

○　ソレ逃さぬやう。

皆々　たゝんで了へ。

〽踏むやら、打つやら、むしるやら、叩き据ゑられ、是非もなく／＼箱梯子、表へ突出し、門の戸はつたりさし固め、錠さす音ぞ。

ト若衆大勢で時次郎を打擲して、障子の外へ突出す、時次郎着附やぶられ體の痛む思入、この模様よろしく淺黄幕を冠せる。下手より以前の太鼓持出で來り、跡より若衆出で來り、祝儀包を抛によろしく立廻あつて引込む、と道具出來次第、淺黄幕を切つて落す。

同庭先雪降責めの場　本舞臺二間半の本緣付の高屋體、向う茶壁、瓦燈口、太鼓張の襖出入、此屋體上寄りに飾付け、下手雪の積りし黒板塀、よきところに振好き誂への松の立木、日覆より同じく釣枝、舞臺花道共一面に雪布を引出し、この松の木へ浦里を木綿繩にて括付け、この傍にみどり同じく括られ居る、浦里の傍におかや割竹を持ち立ちかゝり、二重の上に短檠を點し、敷布團の上に絹布の小搔卷を引かけ、四郎兵衛莨盆を控へ居る、舞臺一面に雪積りし體よろしく、日覆より雪頻に降らせる、雲おろしにて道具納る。

〽折節降り來る雪ふゞき、内には亭主が浦里を庭の古木にくゝりつけ、遣手のかやが聲あらゝげ。

かや　サア浦里さん、この苦しみがせつなくば、あの時次郎とすつぽり切れました、といつて了ひな

さんせ。サア切れたとすつぽり云ひなさんせ、云はずばかうして云はすぞえ。

トおかや、みどりを引付ける。

みど　アレエ。

かや　こいつに痛い目させてくれう。

トおかや、みどりを打据ゑる、浦里留めようとして行れぬ思入。

浦里　ア、コレおかやどん、いかに此身が悪いとて、アノいとけないみどりまで、何科あつて此折檻、あまりといへば情ない。

かや　オヽ情ないと思ふなら、早く切れたといひなせえ、いはねえからかうするのだ。

ト又みどりを打つ、浦里これをかばつて。

浦里　モウ堪忍してやつて下さんせいなア。

トみどり、浦里の傍へ寄り。

みど　かゝさん。

ト云ひかけるを冠せかけて。

浦里　アヽコレ。

みど　ではない、おいらん、私やせつないわいなア。
浦里　オ、せつなからう〱、尤ぢやわいなう。
みど　私やせつなうても大事ない程に、どうぞこのおいらんを赦して上げて下さんせいなア。
浦里　それ程までに、私をば。エ、可愛や〱なア。（ト浦里よろしく思入。）
かや　オ、せつなからう〱、その苦しみを助かりたくば、邪魔になる時次郎めとさつぱりと切れてしまひなさんせ、實のところ私ぢやとて、なんのお前が憎かろ、これも役目で仕方がない、この身の手足が冷いにつけ察しやつて、このみどり可愛さうで〱ならぬ故、サア思切つたと云はしやんせいなア。（ト又喰はす。）
みど　痛いわいなう。
浦里　エ、情ない、縱へ此身はどうなるとも、年端も行かぬこのみどり、あの子は赦して下さんせ、モシ旦那さん、御慈悲〱。
〽お慈悲〱と、恩愛の子故の闇に身をもだへ、聲をばかりに泣さければ。
ト浦里、おかやを留め、氣を揉む思入よろしくあつて、四郎兵衛これを見て思入あつて。
四郎　ヤイ浦里、その苦しみは心柄だア、惣別遊女を折檻して客をせく事客の爲め、二つには女郎大

切、身代が猶大事、あの客もまだ若い人だが、あんまりしげ〳〵通はれては身の詰り、親がゝりならば勘當うけ、主持ならば親方の手前を損ふは知れた事だ、此中年季を切替へしも皆あの客の爲め、此上は心中するか駈落か、とゞのくゝりは知れてある詮索だア、これまでおれが度度手前に云つて聞せるが、聞入れぬごうつくばり、この餓鬼が不便なら、おれやおかやの云ふ事を得心して、あの時次郎の事をすつぱり思切り、山名次郎左衞門樣に從つて身請をされて、一生涯樂に暮すがその身の德、みどりを不便と思ふなら、惡い事は云はねえから、思案を變へて返事をしろ。

ト浦里思入あつて。

浦里　旦那さん其御異見、決して惡うは聞きませぬが、あの時さんも私故今では親御の勘當うけ、身の置所に困りなんせば、どうマア切れて了はれませう、人の落目を見捨ぬのが廓の意氣地で御座んす故、どうぞ堪忍して下さんせいなア。

四郎　そりやずつと昔の事、今ぢやア欲の世の中に、落目を見捨ぬなぞといふ、そんな野暮なものは一人もねえ、襟につくのが當世だ。

かや　それを強情いひなさりやア、その憎しみのかゝるはその子、打殺しても可愛くないかえ。

浦里　サアそれは。
四郎　それよりやア思切り、樂をするがいゝぢやねえか。
浦里　サアそれは。
かや　それとも思切られぬか。
浦里　サア。
四郎　思切るか。
浦里　サア。
四郎　サア。
三人　サア〳〵〳〵。
かや　エヽしぶとい根性だなア。
〽箒を取つてめつた打、匐ひ寄るみどりを踏退け蹴退け、情用捨もあら折檻。
トおかや箒で浦里を打ち、みどり傍に寄るを、おかや蹴倒し、さん〴〵に浦里を打つ、四郎兵衛思入あつて。

四郎　ア、コレおかや待ちやれ、所詮うんとは云ふまい、これから今夜、夜通しに得心したといふまでは、おれが手酷く責めてくれよう、おぬしはこれから二階へ行つて、はたの者の締りをしやれ。

かや　そんならあなたが御自身に。

四郎　オ、打殺しても、おれが抱へ、誰に遠慮もありやアしねえ。

みど　それでは又旦那さんが。

浦里　どうせ今宵は責められて、そなたもわしと共々に、打たれて死ぬと覺悟しや。

みど　アイおいらんとなら、死にたいわいなア。

かや　エ、そのいけ口を。（トおかや又立ちかゝるを。）

四郎　コレ跡はおれが引受けた、おぬしは早く二階へ行きやれ。

かや　それだといつて。

四郎　ハテ行けといふに。（ト急度いふ。）

かや　それぢやア二階を氣をつけませう。

〽主の詞に是非なくも、とつかは二階へ急ぎゆく。

ト　おかや思入あつて奥へ入る、四郎兵衛あとを見送り。

四郎　サアこのみどりが可愛くば、次郎左衛門樣へ從ふと、色よい返事をおれにしやれ。サア返事をせねば打つて／＼打据えるぞ。

みど　アレ堪忍して下さりませ。

四郎　ナニ堪忍がなるものか。

〽締おつとりてう／＼と、打つを留むる禿のみどり、脾腹を打れて、その儘に氣を失へば驚く四郎兵衛。

ト四郎兵衛、浦里を締にて打つ、これにてみどり留める、誤つてみどりの脾腹を打ち、そのまゝウント倒れる、四郎兵衛動し見て。

何だ、この餓鬼め、横着な、目を廻した眞似をしてやがる。（ト浦里に向ひ。）コレ浦里、よくものをつもつて見ろ、今もおれが云ふ通り、世間にも間々ある事だが、くゝりの知れた色狂ひ、末も遂げねえその時は、返つて人に笑はれ草、時次郎とてもその通り、親御達は云ふに及ばず、どうせ世間へ顏出しがなるものか、さうなる時には俗にいふ虻も取らず蜂も取らず、それだによつて大事に思ふ男なら、惡い事たア云はねえから、時次郎が事はすつぱりと思ひ切り、

山名様に従へば手前も出世になる事だ、こゝの道理を辨へて、いゝ返事を聞してくれ、ム、これ程云つても默つてゐるのは、不承知か、不承知ならば是非がねえ、可愛さ餘つて憎さが百倍。ドレモウ一變せめてくれうか。

ト四郎兵衛又立ちかゝる、ばた〳〵になり、奥より以前の女房およし出て來り。

よし　ア、モシ旦那、一寸待つて下さんせ。

四郎　ム、何ぞ用か。

よし　浦里の事に就て、近江屋の佐助さんが急にお目にかゝりたいと、內證に待つてゐなさんすから、一寸來て下さんせ。

四郎　そりやア大方山名様の身請の事で來たのだらう。

よし　たしかさうで御座んすわいなア。

四郎　そいつア金になる相談、一寸いつて來ずはなるまい。

よし　浦里はわたしが跡で得心するやう、云ひ聞せませう。

四郎　女は女同士とやら、身の出世になる事だから、能く云ひ聞してくれろ。ドレ近江屋に逢つて來ようか。

へ内證へこそは急ぎ行く、跡見廻して女房は走り寄つて、浦里がいましめの
繩ときほどけば。

ト此内四郎兵衞奥へ入る、女房跡を見送り思入あつて、浦里の傍へ來る、浦里見て。

浦里　おかみさん。

よし　ア、コレ。（ト四邊へ思入、小聲にて。）浦里、酷い目にあやつたなう。

浦里　ハイ切ない目に逢ひましたわいなア。

よし　オ、さうであらう／＼、さぞ切なかつたであらうわいなう。（ト介抱して奥へ思入あつて、）サア惡い事は云はぬから、旦那さんのいふ通り、思切つてしまやいなう。（ト又小聲にて。）さつきから來たかつたが、一途な氣性の旦那どの、所詮留めても留まらぬゆゑ、佐助どんの來たのを幸、切めてそなたの繩目をば、解いてと思つてナ。

浦里　おかみさんのそのお慈悲、有難う御座んすが、旦那さんへ知れたればナ。

よし　却つてそなたの爲になるまい程にナア、もちつとの間ぢや、辛抱しや。この藥をそなたの懐へ入れて置く程に、よい折に呑やア。

ト いましめの繩を元の通りにして、帯の間から、丸藥を出し、浦里にやる。

浦里　何から何まで、有難う御座んす。
袖の　おかみさん／＼。（ト呼びながら出で來り。）旦那さんがお呼びなされます。
よし　何ぞ、急な用でもあつてか。
袖の　急な事で御座りますから、直ぐお出なさいまし。
よし　あゝ今行くといふに。コレ浦里わたしが奧へ行つた跡で必ず短氣な。
浦里　エヽ。
よし　イエサその身を大切にしやいなう。
袖の　サアおかみさん、お出なされまし。
よし　エヽせわしない事ぢやなア。
　　〽呼立られて女房は、心殘して急ぎ行く。
　　ト女房よろしく思入あつて奧へ入る、直に火の用心の柝、時の拍子木になる。
　　〽浦里あとに打詠め。
浦里　おかみさんのお慈悲に引替へ、旦那さんの邪けんな責め、私は是非もなけれど、頑是もないあのみどりをむごたらしいうち打擲。コレみどりやア／＼、返事のないのは氣を失うてか。（ト傍

（行かうふとして、縄に引かれ行れぬ思入あつて、）コレ娘、（ト四邊へ思入あつて、）みどりやアイ〳〵。
（ト聲を忍びに呼ぶ。）

〽呼べど答もあらし吹く、聲を聞付け駈出るゆかり。

ゆか　おいらん逢ひたう御座んした、逢ひたかつたわいなア。

浦里　オヽゆかり、よいところへ來てたもつた、みどりが氣を失うた故、とも〳〵そなたも呼んでくりや。

ゆか　みどりどんは、ドレ何處に。

浦里　コレこゝにぢやわいなう。

ゆか　オヽみどりどん。（ト傍へ來て介抱する。）

浦里　アヽコレ。

ト四邊へ思入、誂への合方になり。

奧へ聲の聞えぬやう、こゝへみどりを伴れて來てくりや。

ゆか　アイ〳〵。

ト下手へ來る、ゆかり、みどりを動かし、動かぬ故いろ〳〵思入。

おいらん、どうせう〳〵ぞいなう。

ト思入あつて、二重にある座布團を取つて、この上へみどりを乘せよろ〳〵引張り、浦里の傍へ連れて行く、浦里介抱なし。

浦里　コレゆかりや、そこらに水があらうから、こゝへ持つて來てくりや。

ゆか　アイ〳〵。

ト四邊を見廻し、手水鉢を見付け、それとこなしあつて柄杓を取らうとする、氷にて取れぬ故こなしあつて氷を碎し、柄杓に水を汲み、そろ〳〵と持來る、躓いて轉ぶ、これにて水の溢れし思入にて、又しづ〳〵と水を汲み持つて來り、浦里一口飲み、みどりに飲ませる、ゆかり思入あつて、

みどりどんやアイ〳〵。

浦里　みどりやアイ〳〵。

〽昨日の花は今日の夢、今はわが身につまされて、義理といふ字は是非もなや。

ト此淨瑠璃の内呼びいける、これにてみどり心づき、浦里見てうれしきこなし、この内ゆかりは以前の笠を浦里にかざしふるへてゐる。

オヽ心が付いたか。

みど　おいらん、こゝがせつないわいなア。

浦里　さうであらう〳〵。（ト介抱なし。）この苦しみに引替へて、あの二階で彈く、三味線を聞くにつけても思出す、いつぞや、ぬしの居續けに、寢卷のまゝに引寄せて、彈く三味線の面白さ、それに引替へ、今頃は何處にどうして居なさんすやら、アヽあじきない浮世ぢやなア。

〽すいた男に、わしや命でも、なんのおしかろ、露の身の消へば、うらみのなきものを。

わしがこの身はどうなるとも。

ト浦里、みどり、ゆかりを對手に、雪に凍え癪の起りし思入、二人はいろ〳〵介抱する。

もうよい〳〵、コレゆかり、さぞそなた悲しからう、惡い女郎に使はれて、思掛けないこの苦しみ、又こゝに居やつたら、どのやうな目に逢ふもしれぬ、そなたは早う二階へ行きや。

ゆか　アイ。

浦里　嘸寒かつたであらう、堪忍しや〳〵。

ゆか　イエ〳〵わしは寒うは御座んせぬが、さぞ時次郎さんがあのやうに若衆に叩かれさんして、口

浦里　惜しう御座んせうと思へば、ぬしの心が思ひやられて、わしや悲しう御座んすわいなア。
オヽよういうてたもつた〳〵。まだ、あのいとけないそなたまで、そのやうに案じてたもる
志、忝い〳〵それにつけてもやりともない、やりともないそなたなれど、こゝにゐて人の
目褄にかゝつては爲にならぬ程に、サヽわしに構はず、奥へ行きや〳〵。

ゆか　アイ〳〵。（ト行兼ぬるを。）サア行きやといふに。

〽心殘して立つて行く。

ト ゆかり思入あつて、奥へ入る。

浦里　オヽ〳〵モウ行きやつたか、ほんに賢いゆかりぢやなア。これにつけても時さんに、どうぞ逢
ひたい、逢ひたいわいなア。

〽譬へ此身は淡雪と共に、消ゆるは厭はねど、此世の名殘りに今一度、逢ひ
たい見たいとしやくりあげ、狂氣の如く心も亂れ、涙の雨に雪とけて、前
後正體なかりけり。

ト此内浦里みどりを相手によろしく愁ひの思入、日覆より雪しきりに降り、以前のばつてう笠をみ
どりに冠せ泣落す。

〽男はかねて用意の一腰、口にくわへて身を固め、忍び／＼て家根傳ひ、見るに浦里嬉しやと、悲しさこわさあぶなさに。

〽なんなく下へ降り立つて。

ト此淨瑠璃の内浦里みどりよろしくあつて、よき程に板塀の内より、時次郎一本差にてよぢ登り、庭の松ヶ枝を足場に傳はり降り、兩人よろしく悦ぶこなし。

浦里　オヽ時次郎さん、ようマア來て下さんしたなア。（ト時次郎に縋り。）逢ひたかつたわいなア。

時次　オヽこゝで死ぬるは安けれど、廓で死ねば恥の恥、一先こゝを立退かん、みどり、おぢや。

みど　アイ。

浦里　嬉しう御座んす、少しも早う。

時次　サア浦里來やれ。

〽みどりを小脇に引抱へ、かい／＼しくも時次郎。

トこなしあつて、時次郎みどりを抱へ、浦里の手を取る、此時若衆一人出て。

○　どつこい、逃してなるものか。

ト捕へるを、時次郎引付ける。

〽かわいとひと聲、あけがらす、後の浮名や殘るらん。

ト時次郎若衆を見事に切返す、双方見得にて。

幕

小春
治兵衛

# 心中天網島

しんぢうてんのあみじま

# 小春治兵衞 心中天網島

## 上の卷　河庄の場

**役名**　紙屋治兵衞、粉屋孫右衞門、紙屋丁稚三五郞、江戸屋太兵衞、五貫屋善六、若者佐助、廻男嘉助、紀の國屋小春、舞妓小糸、花車お松、仲居お長、同お民等。

北の新地河庄の場　本舞臺三間の間常足の二重、正面襖、上手障子屋體、下手窓格子、いつものところ門口、河庄といふ掛行燈、都て北の新地茶屋の體。こゝに仲居お長、お民、佐助廻男の拵へにて腰をかける。此見得騷ぎ唄にて幕明く。

お長　コレお民さん、今日は座敷浄瑠璃があるによつて、お客も多からう、どうぞ氣を付けて下さん

せ。

お民　アイ〳〵そりや合點で御座んすわいなア。」

お長　さうして、紀の國屋へ誰ぞ行たのかいなア。

佐助　そりやさつき呼びに行きました。

お長　それも急がねばならぬ、大儀ながら、佐助どん、急いで來て下さんせ。

佐助　ハイ〳〵畏りました、ドリヤ一走り行て來ようか。

ト唄になり下手へ入る、此時奥より、小糸白人の形にて出で。

小糸　お長さん、小春さんはまだで御座んすかいなア。

お長　ハイ今佐助どんをやつたれば、モウ來やしやんせうわいなア。

小糸　どうぞ早う來てくれたがよいになア。

ト唄になり、向うより嘉助先に提灯を持ち風呂敷包を抱へ、小春跡より白人の形にて舞臺へ來り。

嘉助　ハイ小春さんを送ります。

お長　オヽ小春さん、今呼びにやりましたが、最前から早う〳〵と内がやかましい、サア〳〵ちやつとお上り。

小春　サイナア私も遲うなつたによつて、氣が急くけれど、何やかや隙が入つて、やう〳〵今になつたわいなア。

小糸　小春さん、私はお前に逢ふばつかりに、最前からこゝに待つてゐた、よう來て下さんした。

小春　何の用ぢやぞいなア。

小糸　ソレこの間約束した芝居へ行かうと思うて。

小春　エヽ私や、芝居機嫌ぢやないわいなア。

小糸　そりや又紙治さんの事でかえ。

小春　サアそれでなア。（ト氣にすまぬこなし。）

小糸　此間も心中の仕損じをさしやんしたげな、滅多な事をしやしやんすなえ。

小春　何を云はしやんすやら。

お長　コレ〳〵嘉助どん、よい序ぢや、このお子を送つて上げて下さんせ。

嘉助　ハイ〳〵畏りました、サアお出なされませ。

ト捨臺詞にて、嘉助先に、小糸附いて下手へ入る。

お長　ヤレうれしや、これでよいといふもの、小春さんのお出ぢやというて、落着かさうか。

お民　さうしやじやんせ。

お長　サア〳〵お出。

ト捨臺詞にて奥へ入る、此時向うより丁稚三五郎狀を持出て、門口へ來て。

五三　伯母さん〳〵。（ト招さ狀を見せる。）

小春　オヽどのお子かいなう。びつくりした、治兵衞樣から文かえ、ドレ早う見せて下さんせ。

三五　イエ〳〵旦那からぢやない、お前へ初て來た狀ぢや。

小春　私へ初て來た文とはえ。（ト取つて見る。）紀の國屋小春樣、紙屋内より。

ト びつくりしていろ〳〵思入。

三五　コレ〳〵伯母さん、お家樣が此狀をお前へ持つて行き、必ず旦那に云ふなというてゞあつた。

小春　治兵衞樣の内方から、私への文とは、どうやら氣の濟まぬ。（ト讀む思入。）

三五　伯母さん、私やこゝにゐて、旦那樣に逢うたら、お家樣に叱られる、早う返事して下され。

ト小春よく〳〵讀んで。

小春　よく〳〵せつなさが餘つてのこの文、道理で御座んす、尤ぢや、嘸腹が立つたで御座んせう、此文の樣子では、治兵衞樣の素振が。太兵衞づらに、身請されては、片時も生きてはゐぬ

この身。

ト泣く。

三五　伯母さん、お前何で泣かんす、腹でも痛いかえ、但しひだるいか、コレちやつと返事をして、こちや叱られん間に去にたいわいナア。

小春　成程返事しませう。（ト硯、紙を出し、返事を書く）コレ、コリヤ大事の狀ぢや程に、必ず誰にも見せぬやう、ちやつと持つていなしやんせ。

三五　アイ／＼ドリヤちやつといんで、お家樣に、賃を。（ト行かうとして。）コレ／＼おばさん、肝腎の事忘れた、今の狀を誰にもいうてくれな、というてゞあつたぞえ。

小春　そりや氣遣ひしやしやんすな。（ト懷より守袋を出し。）コレ此守袋は大事なものが入れてある、此中へ入れて、此通りにして置けば、氣遣には御座んせぬ、とよういうて下さんせ。

ト云ひ／＼泣く。

三五　エヽ又泣かんすかいなう、ドリヤ去んで賃を貰ふ、おばさん、お前は旦那樣の使ひに來る時は、何やかや下さんすが、今日は何にもないかえ。

小春　ほんに何ぞ上げたいが。（ト思入あつて、貢入の中より金包を出し。）サアこれを上げる程に、必ず

此文の事、私が返事した事を、誰にもいふ事はならぬぞえ。

三五　合點ぢや〳〵、かういふ好いものを下さるもの、人に云うて溜るものかい、そんならおばさん。

小春　早ういなしやんせ。

三五　そんならおばさん、往んで來るは。

ト流行唄になり、丁稚三五郎向うへ入る、小春思入あつて泣く、此時奥よりお杉花車の形にて出て。

お杉　オヽ小春さんどうぢやいなア、太兵衛様の伊丹へ往かしやつた事、又きつう揉めると聞いたが、マア治兵衛様の事ばどうなつたえ。

小春　イヤモウ何ぢやゝら、やくたいぢやわいなア、いとしなげに紙治様〳〵と、それ程にもない事をあの太兵衛づらが浮名を立て、氣晴し同様に五貫屋の善六づらまで粋がつて、私やモウ腹が立つて〳〵ならぬわいなア。

ト此内善六太兵衛酒に醉ひ、橋懸より出て門口に立聞きしてゐる。

お杉　ほんにあの太兵衛様は可愛氣のないなめくさり、したが大金持の太兵衛様請出されて行かしや

んすは、お前の出世といふものぢやぞえ。

小春　何云はしやんすやら、あんな男と添ふより、牛にはじかれた方が優しぢやわいなア。

兩人　ハヽヽヽ。

トこれにて兩人むつとして內へ入る。

太兵　コリヤ小春、あんまりぢやぞよ、何ぼう陰でそしつても、やがて此男が女房、あの小判の光で可愛がられて見せうわえ、ナア善六。

善六　オヽそれ〳〵、大阪三郷に人も多いが、紙屋治兵衛は二人の子の親、女房は從弟同士、舅は伯母聟、その世話になる身體で、十貫目餘の身請金、何として〳〵。

太兵　そのやうな男がやつぱり可愛う御座りますか、イヤサお前は治兵衛殿がそれ程に可愛いか、おれは女房なければ舅なし、又伯父持ず、身すがらの太兵衛と名を取つた男、色男で僣上いふ事は、治兵衛めに叶はねども、金持つたばかりは太兵衛が優つた、金の力で押したれば、ノウ善六。

善六　ナニ勝たうも知れぬ、今宵の客も治兵衛めぢや、貰へ〳〵貰うた。

太兵　サアコレ花車、酒を出せ〳〵。

お杉　何を云はしやんすやら、今宵のお客はお侍衆で、追付こゝへ見えませう。お前方はどうぞ脇で遊んで下さんせいなア。

善六　ヤア侍客ぢや、侍、なんぢやい、なんの刀さすかさゝぬか、侍も町人も客は客ぢやわえ。

太兵　ハテ何ぼさしても、五本も六本もさしはしよまい。ハヽヽヽ。

善六　ハテようさして脇差でたつた二本ぢやわえ、侍ぐるめ貰うた、コリヤ小春殿〳〵さま、何ぼう抜けつ隱れつなされても、緣あればこそ出會ひ申すは。

お杉　そりやいたみで御座んす。

太兵　ナニしたみとは。

善六　アヽコリヤ伊丹ぢや〳〵。

太兵　さうかいヤイ、サア貴樣一杯やれ。時に花車、此頃仲居仲間の流行文句、小春よう聞きや、善六、覺えた通りやつて見い。

善六　そりや合點ぢやが、然しつるがあるか。

太兵　成程そりやおれがやらう。

ト箒を持出て、兩人こなしあつて。

善六　結ぶの神の紙屑に、貧乏紙屋の治兵衛の女房、おさんに子があるドッコイ、その子は鼻だれお京と勘太郎、貧乏小春に命ちり紙の紙屋姿ぞ薬袋紙。

太兵　モウよい〳〵、小春、何とよい文句であらうがの。

ト此時孫右衛門下手から、善六門口を見て。

善六　太兵衛さん〳〵、紙屑が來てゐる〳〵。

太兵　ナニ紙屑が來た。

善六　表へ來てゐるは。

太兵　それはよい所へ來をつた、サア貰ふかえ。

善六　ム、貰へ〳〵。

ト兩人表へ出て孫右衛門を引張り、いろ〳〵手をとつて。

太兵　サア治兵衛、われに借した金、今戻せ〳〵。（トいろ〳〵いふ。）

孫右　此大小が目にかゝらぬか。

トこれにて兩人びつくりして、向うへ逃げて入る。

ハテサテ慌てた奴ではあるわえ。

お杉　オヽあなたは、旦那様では御座りませぬか。
孫右　そちやお杉ぢやないか。
お杉　よい所へお越下されました、サア／＼お入りなされませ。
孫右　入つても苦しうないか。
お杉　サア／＼こちらへお入り下さりませ。
孫右　然らばゆるしやれ。

ト捨臺詞にて二重よきところへ住ふ、下手より以前の嘉助出て。

嘉助　ヘヱ御免、小春さんの今晩のお客様は、どなたで御座りまする、見て來ぬというて内でえらう叱られました。
お杉　ハテ氣の惡い、今晩のお客様は、藏屋敷のお侍様ぢやわいなア。
嘉助　左様で御座りませうが、一寸お顔をばお見せ下さりませ、ツイ一寸さへ拜見致しますればよいので御座ります。
お杉　そのやうに云はしやんするなれば、そこにお出なさるお侍ぢや程に見やしやんせ。
嘉助　ヘイ／＼御免下さりませ、一寸お顔を。

ト孫右衛門の顔を提灯にて覗き。

へイ／＼よろしう御座りまする、内がまことにやかましいので困つて居りすま。よろしう御座ります、イヤモシ小春さん、あのお客様なら、今夜はしつぽりとお勤めなされませ。イヤ申し大に御面倒いたしました。（ト門口へ出て。）ドレ／＼これからモウ一軒廻つて行かう。

ト下手へ入る。

孫右　何ぢや、今の男は身共の顔を、茶入か茶碗のやうに目利して行きをつた、さうしてこれがあの小春殿か、イヤテント御器量、手前が屋敷は晝の出入を堅くいましめ、それ故家來も連れず只一人にて參りしが、どうぞ一夜の情は受けられまいか、これはしたり小春殿、そのやうに俯向いてゐて、首筋は痛みはせぬか、物を云はつしやれ、小春殿。

小春　申しお侍樣、同じ死ぬるというても、首縊るのと自害するのは、どちらが苦しう御座んすえ。

孫右　これは又迷惑な、手前とても首を縊つて見た事も、自害して見た事もないが、マア小氣味の悪い女郎ぢやわえ。

お杉　これはしたり小春さん、初對面からあんまりな御挨拶、こちの人も今夜は留守、幸ひ隣に座敷淨瑠璃の會が御座ります、それを肴に、奥で御酒に致しませう、奥へお出なされませ。

孫右　オヽ何樣、酒よからう、小春殿も不機嫌なら、淨瑠璃なと承らう。

お杉　それがよろしう御座ります。

孫右　然らば案内致しておくりやれ。

お杉　それをつゝとお出なされませ。

孫右　然らばから參るのか。

ト孫右衞門刀を忘れて行かうとして、顔を見合せ。

三人　ハヽヽヽ。

ト蹈地にて三人上手へ入る、床の淨瑠璃になり。

〽天滿に年經る千早振る、神にはあらぬ紙樣と、世の鰐口にのるばかり、小春に深くあふぬさの、腐り合うたる御注連縄、今は結ぶの神無月、堰かれて逢はれぬ身となり果て、あはれ逢瀬の首尾あらば、それを二人が最期日と、名殘の文の云交はし、毎夜々々の死覺悟、魂ぬけて、とぼ〳〵うか〳〵身を焦す。

ト向うより治兵衞着流し一本差、頬冠にて出で來り、花道にて。

治兵　今向うの煮賣屋で、高聲で小春が噂、侍客で河庄方、何卒首尾して逢ひたいものぢやナア。

へ覗く格子の奥の間に、客は頭巾の頤の動くばかりに、聲聞えず。

アレ〳〵可愛や、小春が行燈にそむけた顔の、あのマア痩せた事わいの、心の中はみな俺が事。

へこゝにゐると吹込んで。

連れて退くなら、梅田か北野、アヽ知らせたい、呼びたい。

へと心で招く氣は先へ、身はうつ蟬の脱殼の、格子に抱付きあせり泣き、奥には客の聲として。

孫右　アヽ思ひのある女郎衆にかゝつて、とんと氣が滅入る、表へ出て行燈でも見て氣を晴さう、サア小春おぢやれ。

へ連立出れば南無三寶、身付けられじと身を忍び、隱れて聞くとも内には知らず。

宵からの素振といひ、花車が話の紙治とやらと、心中する心と見て取つた、死神の憑いた耳へ

一は、意見も道理も入るまいとは思へども、さりとは愚痴の至り、先の男の無分別は云はず、家一門そなたを恨み、萬人に死顔を晒す身の恥、サ親はないかも知らねども、若しあれば不孝の罰、極樂へは愚か、地獄へも温かに二人連れでは落ちられまい、一見なれども武士の情、見殺しになるまい、これ定めて金づくの事であらう、どうか五兩か十兩の事なら用達つて命が助けたい、何と死ぬる氣に相違あるまい、神八幡侍冥利、他言は致さぬ、コレサ小春、心底殘らず打明きやれ、どうぢやく。

〽と囁けば、手を合はせ。

小春　ア、忝い、有難う御座んす。

〽馴染、誼みもない私、御誓言での情のお詞、涙が溢れて、うれしう御座んす。

思ひ内にあれば、色外に顯はるゝと、お前樣の御推量の通り、紙治樣とは死ぬる約束、元はと云へば身請の張合、南とこゝとにまだ。

〽五年ある年の內、人手に取られては。

私は元より。
〽主は、猶、一分立たず、いつそ死んでくれぬか。

アイ。
〽アイ死にましよと、引くに引かれぬ義理詰に、ふつと言交はし、首尾を見合はせ、合圖を定め。

モウ脱けて出よう〳〵と。
〽いつ何時を、最期とも。

その日ぐらしの敢ない命、私一人を賴みの母さん、死んだ後では袖乞非人、餓死もなされうかと思へば、ほんの事は死にともない、私とても命は一つ、水臭い女と。
〽思召しも恥しながら。

その恥を捨てゝも、死にともないが第一、死なずに事の濟むやうに、どうぞお賴み申します。
〽語ればうなづき思案顏、外には、はつと聞いて驚き、思ひがけなき男氣に、木から落ちたる如くにて。

治兵　そんなら死なうと云うたは、皆嘘か、三年此方誑しくさつた野狐め、いつその事踏込んで、面恥かゝせて腹癒よか。

〽と歯切ぎり〳〵口惜し涙、内にも小春が喞泣き。

小春　このやうに云へば、卑怯なお頼みなれども、お侍様のお情にて、今年中、來春二三月の頃までも、私に逢うて下さんして、彼の人の來る度々に邪魔をして、期を延して下さんしたら、自ら手も切れる道理、それで向うも殺さず、私も命助かるといふもの、何の因果で死ぬる約束した事ぞ、と思へば悔しい、悔しう御座んすわいなア。

〽口と心は裏表、絞る袂は雨露の、膝に凭れて泣き居たる。

孫右　表が近い、人や見る。

〽格子の障子ばた〳〵と、立聞く治兵衞は氣も狂亂。

治兵　流石、賣物、安物め、切らうか突かうか。

〽どう障子にうつる、二人の横顔。

アレ〳〵何をぬかすやら、うなづき合ひ、あのマア吠える態わいヤイ、モウ料簡が。

〽心も急きに關の孫六、一尺七寸拔放し、格子の間より小春が脇腹、こゝぞと見極め、ぐつと突くに、座は遠く、侍透さず飛びかゝり、刀の下緒で手ばしかく、格子の柱に括付け。

ト治兵衛刀を拔き格子の間へ突込む、孫右衛門手を引入れ、下緒にて格子へ括付け、此内奥よりお杉出て見てびつくり、手を叩き。

お杉　ア、申し／＼、誰ぞちやつと來て下さんせ、格子の間から、刃物を突込むあばれ者、皆さん、ちよつと來て下さんせ。

孫右　ア、コレ／＼騷ぐな、格子の間より刃物を突込む程のあばれ者、身が腕をいましめ置きたれば、氣遣はないサア小春行て寢よう。

小春　アイ。

〽あいとは云へど、見知りある脇差の、突かれぬ胸にはつと貫き。

コリヤ確に治兵衛さん。イヤサ慈悲といふ事を知らねば、人は難儀するげな、あんまり酒を飲過して、かういふ事は色里にはある習ひ、モウ大概なら沙汰なしに、解いていなして、上げさんした方が、よさゝうなものぢやぞえ。

お杉　オヽそれ〳〵、いつそ私が解いて上げようわいなア。
孫右　アヽコリヤ〳〵その縄解くな、仔細あつて身がいましめた、身共に任して奥へ行きや。
小春　それぢやというて。
孫右　ハテサテ行けというに。

〽と侍は跡にも心置く露の、打連立つて、奥の間へ。

ト孫右衛門、小春、お杉を連れこなしあつて、奥へ入る。治兵衛口惜しきこなしあつて。

治兵　エヽ四足を一思ひと思ひしに、仕損うたが口惜しい〳〵ハアヽヽ。

〽格子手摺に腕けば締り、身は煩悩に繋がるゝ、犬に劣つた生恥を、覚悟極めし血の涙、絞り泣くこそ不便なれ、ぞめき戻りの身すがら太兵衛、善六伴ひ立帰る。

ト善六、太兵衛酒に酔うたる思入にて出で来り。

善六　太兵衛さん〳〵、向うに誰やら居るぜ〳〵。
太兵　又最前の侍ぢやないか。
善六　イヤ〳〵確に今度は治兵衛めぢや。

太兵　一體何處にゐるのぢや。
善六　向うの格子の際に、ちよつくぼつてゐる。
太兵　ありや犬ぢやないか。
善六　何をいふぞい。
太兵　そんなら貴樣行て見てくれ。
善六　よし〳〵、おれが行て見て來よう、一寸こゝに待つてゐてくれ。
太兵　よし〳〵、モシ侍なら、早う知らせてくれ、おりや先へ逃げる。
善六　何をいふぞい。（ト舞臺へ來て、治兵衛を見て。）オイ〳〵太兵衛さん、紙屑ぢや〳〵。
太兵　そんなら、ほんまに治兵衛めか。
善六　早う金を戻して貰へ〳〵。
ト兩人舞臺へ來る
太兵　サア治兵衛、二十兩の金今戻せ〳〵。
治兵　ナニ二十兩の金とは。
善六　コウ〳〵呆けまい〳〵。

太兵　そんな事云はさん爲め、まて〳〵、それ確に證文が取つてあるわえ、え丶、一つ、金二十兩也、右は今日入用に付、難儀致し候處、お取替下され候段、御慈悲の程忘れ申さず、有難奉存候、何時なりとも此手形を以て、きつと返濟可申候、あとはお定りぢや、江戸屋太兵衞殿、紙屋治兵衞、判。こりや、われが直筆ぢやぞよ。

ト證文を出して見せる。

治兵　そりや此間石町の隱居樣に。

太兵　エ丶何を吐かすのぢや、此證文が確な證據ぢやわえ。

善六　太兵衞さん、そんな事いうてゐずと、代官所へ引張つて行かう〳〵。

太兵　サアきり〳〵うせい。

ト善六、太兵衞手を縛られてゐる治兵衞を引張る、治兵衞痛いといふ思入。

治兵　アイタ丶丶。

善六　何ぢや、治兵衞が痛いというてゐる、一寸待つてや。ア丶治兵衞の手が、格子の間に括つてあるわ。

太兵　何ぢや、手が括つてある、ア丶知れた、大方治兵衞めは、こそを働きやると見える。

善六　オヽさうぢや〳〵。
治兵　どこでおれが盗人したヽ
太兵　何をぬかすのぢや、盗人せんものが、何で手を格子の間へ括つてあるえ。
善六　あのこヽな大騙りめ。
太兵　強盗め。
善六　紙屑がこそを働いた、盗人ぢや、生掏賊ぢや、皆來い〳〵。

ト治兵衛を蹴飛し、張廻し、大聲にていふ。橋懸より大勢棒を持ち出て。

ヘと呼はり喚けばゆきこふ人、あたり近所も駈集る、内より侍飛んで出で、善六太兵衛を突飛し。

ト孫右衛門奥より慌てヽ出て留める、善六太兵衛を打ちにかヽる、トヾ善六を突飛し、太兵衛内へ逃げて入る、門口を内より締めて、いろ〳〵あつて。

孫右　ヤイこの治兵衛が何を盗んだ、イヤサ何を騙つた、その譯言へ、サヽ早く申せ〳〵。
善六　サアその盗んだは。
孫右　仔細あつて、某がいましめ置いた、それを汝等が土足に掛け、盗人呼はり、おのれ、何を以

てこの狼藉、盗み騙りとは、何ぞ確な證據でもあるか。

善六　その證據と申しまするは。オイ〳〵太兵衞さん〳〵、何處にゐるのぢや、太兵衞さん〳〵。

太兵　オイ〳〵こゝぢや〳〵。

善六　太兵衞さん、早う來て證據を見せてんか。

太兵　よし〳〵、今見せる。（トこは〳〵外へ出て、孫右衞門と顏見合せ。）

孫右　サア早く見せえ。

太兵　ヘエ御ち證據はこれで御座ります、二十兩の證文、確な證據、この通りに書いたものが御座ります。

孫右　その證文、これへ見せい。

ト太兵衞の持つてゐるのを、孫右衞門引取り。

太兵　何と確な證據で御座りませうがな。

孫右　誠にコリヤ、確な證文ぢや。

ト云ひ〳〵引破る、太兵衞びつくりなし。

太兵　エヽめつさうな、二十兩の證文、コリヤどうなるのぢや。

孫右　サアよいわい、今金を戻すわえ。

太兵　金も出さずに、大切の證文を破るとは、あんまり無茶ぢや御座りませぬか。

孫兵　ヘテよいと申すに。ソレ二十兩受取れ。（ト二十兩包を出し。）さゝきり〳〵と持つてうせう。

ト投る、兩人こなしあつて。

太兵　オヽ持つて行かいで、只貰ふのぢやあるまいし、俺が貸した金を取るのに、何の遠慮があるものか。（ト取りにかゝり、孫右衛門と顏見合はせ、氣味惡きこなしあつて。）ナア善六、あの金一寸取つてんか。

善六　よし〳〵貸した金を取るのに、そのやうに遠慮はいらぬ事。（ト行きかけて。）ナア太兵衛さん、お前が貸した金ぢや、スリヤやつぱりお前が取りんかいナア

太兵　そんな事云はずと。エヽ何ぢや〳〵、おれの金をおれが取るのに、遠慮もへちまもあるものか、（ト云ひながら足にて取り。）取つた、サアお出。

善六　オヽよう取つた、サア行かう〳〵。

ト捨臺詞にて行きかゝるを、孫右衛門思入あつて。

孫右　コリヤ待て〳〵。

兩人　まだ用が御座りますか。

孫右　跡で小言のないやうに、一兩〳〵改めて行きやれ。

太兵　ヘイ〳〵、何のお前さん、金改めるには及びませぬ。

孫右　さうでない、改めた上にて立歸れ。

太兵　何のマアよろしう御座ります、お侍さまといふものは義の堅い。（ト行燈の傍にて改め見て。）ヘイヘイ確に請取申しました。

孫右　この治兵衛に言分ないか。

太兵　何の〳〵、金さへ受取ますれば、言分は御座りませぬ。

孫右　いよ〳〵これなる治兵衛に、申分はないな。

兩人　ヘイ〳〵御座りませぬ。

孫右　その方に言分なくば、此方に申分があるのぢや。（ト兩人の首筋を押へ。）場所が場所故、今日はさしゆるす、以後は急度愼みをらうぞ。

ト兩人を突放す、ひやいなるこなしにて向うへ逃げ入る、跡より大勢追駈けて入る、孫右衛門向うを見て。

〽人立すれば、孫右衛門立歸つて、縛目解き。

紙治とやら、嘸窮屈であつたであらう。

治兵　これは〳〵、何誰さまかは存じませぬが、難儀のところをお救ひ下され、有難う御座ります。

孫右　身が面體を、とつくりと見やれ。

〽頭巾を取捨て。

治兵　大枚の金子をお立替下され、何れ近日の内に金子を調へ、急ぎお禮に上ります、さうしてあなたさまのお屋敷はどこで、お名前は何と仰いまする。（ト孫右衛門の顔を見て。）オヽお前は、兄者人ぢやないか。

孫右　治兵衛。

治兵　御免なされておくれなされ。（ト花道へ逃げようとするを。）

孫右　エヽ動きおるまい、門中でみともない。

治兵　兄者人、どうぞ料簡して下さりませ。

ト又逃げかゝるを、引留め。

孫右　言ふ事がある、みつともない、内へ入れ。

ト治兵衛を内へ引入れ、孫右衛門門口を締め、思入。

治兵　ア、面目ない〳〵。

へ小春は奥より走り出。

小春　さては、兄御様かいの。

治兵　えゝ、畜生め、狐め、太兵衛より先に、うぬを。

へ足を上ぐれば孫右衛門。

ト治兵衛小春引付け、打擲し、足を上げて蹴ようとするを、孫右衛門よろしく留めて。

孫右　ヤイ〳〵、その癡愚から事が起る、マア待て〳〵。コリヤ人を誑すは遊女の習ひ、それをおのれは今氣が付いたか、この孫右衛門は、たつた今一見なれど、逢うた女郎の心底を見抜いて居るわい、小春を蹴る臑で、うろたへた、そのおのれが根性を何故踏まぬ、われに云つて聞かす事がある、マア待て、エヽきり〳〵と待ちをらうぞ。（ト無理に坐らせ。）ハヽアしんど。

ト誂への合方になる。

弟とは云ひながら、三十に押掛り、勘太郎お末といふ六つと四つの子の親、六間々口の家を持ち、その身代の潰れるといふところへ、氣が付かぬか、兄の意見をうくる事か、舅は叔母

聟、姑は叔母者人、親同然、女房おさんはそちが爲にも從弟同士、モがんぜがらみに結合うた、重ね〳〵の縁者、親子仲、一家一門の參會にも、おのれが曾根崎通ひの悔みより、外に話の出た事はありやせんわい、おいとしいは叔母者人、連合五左衞門はにべもない昔氣質、女房の甥御にかゝつて、娘一人を棒に振つた、おさんを取返し、天滿中に耻かゝさんとのお腹立を、叔母者人ひとりが敵となり味方となり、病になる程心を苦しめ、おのれが耻を包まるゝ、それを思はぬ恩知らずめ、この詞たつた一つでも、碌なことはありやすまい、アヽ所詮これぢやア家は立つまい、小春に逢うてとつくりと心底見屆け、その上での一思案と、こゝの亭主に工面して貰つて、そちが病の源をおりや能く見て置いた、成程女房子に見替へるだけあつて、あつぱれな女郎ぢや、イヤサあつぱれなお女郎さまぢやナア、アヽお手柄〳〵、マア結構な、弟を持つて、人にも知られた粉屋の孫右衞門、祭の練衆か、氣違ひか、つひに差さぬ大小ほつこみ、藏屋敷の役人と。

〽歌舞伎役者の眞似をして、馬鹿を盡した此刀。

おりや。

〽捨所がないわいヤイ。

小腹が立つやら、可笑しいやら、餘りの事で、え丶胸が痛いわい〳〵。

へ胸が痛いと、齒ぎりし、泣顔隱す澁面に、小春は始終むせ返り、わが身の上は得も云はず、兄の意見と母親の心遣ひを思ひやり、皆御道理とばかりにて、言葉も涙に暮れにける、治兵衛涙を押拭ひ。

トよろしく思入あつて。

治兵　ア丶、あやまつた〳〵、あやまりました兄者人。ナア申し兄さん、どうぞ堪忍して下され、どうぞ御料簡なされて下さいまし。

ト合方になり。

三年此方、あの古狸に魅されて、妻子は元より一家一門袖になし、身代の手纏れも、小春といふ屋尻切りに誑されて。あの今といふ今日が覺めた、ナア申し、これえ、ほんまに今思ひ知りました、皆私が惡う御座りました、が、まだ迷ひまする、あんな顏はしてゐますけれど、あれでも元らいすはつたやつで御座りますぜ、儂、あんた、五六ぺん、イヤサ二度か三度いたら、モウちやんとこんな事云ひますのぢや。申し、治兵衛さん、私のやうな者でも贔屓にして、こないに呼んで貰ふのは、まことにうれしいけれど、何ぼう私が思うた所が、お前樣には可愛し

いお子はあるし、美しいお家さんはあるし、所詮末の遂げぬ話ぢやによつて、モウしんきでしんきでならん、といふによつて。ハ、あほらしい、何のお前さへ、さういふ氣なら、あんな女房はとつとゝ暇やつて了ひ、さうしてお前と夫婦になつて、二人一緒に。イエそんな事、誰が云うたえ、イヤサおれは云はぬが。此間は何というた、あのモウ嫌ひで／＼ならん太兵衛や善六が、私を呼出して、何のかのといふによつて、そんな事したら、治兵衛さんに濟みませぬと、ぽんというたら、サア腹を立て、そんならおれもあの治兵衛への面當に、いつその事身請して、女房にすると親方へ金の相談、モシそんな事があつた時には、お前さんも立たず、又私も生きてゐる氣はない、といふに依つて、マア待て、そりやアお前、何をいふのぢや、私こそ義理は缺いて了ひ、世間へ顔出しはならず、死ぬる氣なら、治兵衛さんどうぞ一緒に死んで下さんせ、とは何故いうてくれぬ、そりや我身水臭い、とてもの事に、こつちも太兵衛への面當に、派手に心中せうかというたら、そんなら派手に心中するというて、かういふ揃ひまで拵へて、そんなら死んで下さんす。イヤそんな事、いつ、云うたえ、私は云はぬが、われ云うたがな。よう今まではだましてくれた、狐め、狸め、今日といふ今日、思ひ切つた、オヽ思ひ切つた、ナア申し、兄さん、今といふ今、ほんまに思ひ切りました。今までは大に御心配をかけま

した、モウふつゝりと思ひ切りました、モウ〳〵こんなところへ、足向けする事ぢや御座いません、どうぞ兄さん、料簡して下さりませ。

孫右　コリヤ治兵衛、そんならお前、何といふのぢや、今日といふ今日、ふつゝりと思ひ切つたによつて、どうぞ堪忍してくれいといふのぢやナ、あゝさうか、が、治兵衛、そりやお前、何べん云うた、イヤサ何べん云うた、モウ今度ばかりは、そんな事は聞きたうない、置いて下され、私のやうな者ぢやというて、あんまり何返も〳〵欺しておくれな、ようマアそんな事が云はれたものぢや、じやら〳〵と阿呆らしい、人を馬鹿にするも程がある、あた、阿呆らしい。

治兵　そりやマア、今迄に二へんや、三べんの事やおまへんによつて、そないに仰るは無理はおまへん、けれどナア、さうやというて、あんた、思ひ切つたといふより外に、なんにも云ふ事がありやしまへんがな。

ト云ひながら、懐を見て。

よろしうおます、そんなら兄さん、ほんまに思ひ切つたといふ、私が證據を見せますわ、オ、證據を見せますわ、オ、證據を。（ト小春に當てゝいふ。）

孫右　何ぢや、證據を見せる、コリヤ面白い、サア證據見ませう。

治兵　ほんまに思ひ切つたといふ、確な證據を見せませう。

孫右　オヽどんな證據ぢや、サア早う見せいなア。

治兵　今見せます。

孫右　サア〳〵證據を早う見せい〳〵。

治兵　そないに、やかましういひなはんないナア。

孫右　證據を見せるといふによつて、早う見せといふのぢや。

治兵　今見せます、せはしないお方ぢやナア。（ト云ひながら、守袋より起請を前へ出して。）サア見ておくれなされませ。

孫右　何ぢやいナア、心の悪い、血のべと〳〵付いた、こんなもの、證據の何のかのと、じやら〳〵とした、あた心わるひ。

治兵　モシ〳〵勿體ない事、いひなはんないナア、並大抵の事で、これが貰へるもんやと、思つてゐなはろか。コリヤ、な申し、日本國の神々さまへ、誓ひをかけてナ、互の心變らぬやうと取交してナ、又も此上に變らぬやうと、月頭に一枚宛取交しますのや。

孫右　何ぢや、まだあるのか。

治兵　エヽ、モウ皆見せますわ。
孫右　オヽ私の分るやうにいうて、皆見せておくれ、こんなものが、有難いものやら結構なものや・ら、さつぱり譯が分らぬ、私の腹へ入るやうに、聞かしておくれ。
治兵　ナア申し、兄さん、足掛三年に、月頭に一枚づゝ取交して三十枚おますのや、これをあんたに見せるのは私の潔白でおます、どうぞ、これをば、あいつに歸しておくんなはれ。
孫右　アヽよし〳〵。
治兵　さうしてナア、兄さん、私の方からも、やつぱりあいつに、こんだけいておきますのや。それをばこつちへ取返した跡は、燒くなりと破るなりと、どうなと勝手にしなはれ。
孫右　そんなら何か、これをば小春に返して、さうして我身の方から行てあるのを、こつちへ取返してくれいといふのか、よし〳〵、さう我身がやうに云やると、私ぢやテ、兄の事ぢやもの、お前の引けのとるやうな事はしやせぬ、私に任しておきや。
治兵　ハイ。
孫右　何の、我身のひけを取るやうな事、私がせん、兄が附いてゐる、凝としてゐや。
治兵　ハイ。

ト孫右衛門こなしあつて。

孫右　情ない、これを持つてゆかんならんかいナア。（ト起證を持ち、小春の傍へ行き、それを置き。）サテ小春さん、今聞いての通り、弟は私が意見で、結構なお前の事はふつゝりと、思ひ切つたというてゐるによつて、ナア小春さん、コリヤあの起證といふものぢやさうな、數改めて受取つておくれ、さうしてあの弟からお前の方へも、こんだけ行てあるさうな、それをば此方へ貰ふのが、私への弟が潔白ぢや、というてゐるによつて、どうぞ、それをこつちへ返しておくれ。

ト小春いやといふこなし。

治兵　コレ小春さん、それでは互に氣が殘つて、いかんによつて、どうぞこつちへ返しておくれ。申し〳〵兄さん、そんなやさしい事で行きやアしません、張倒してひつたくりなされ。

孫右　サア〳〵エヽといつたら、私に任して置かんかいナア。小春さん、弟があのやうにいうてゐるによつて、早うこつちへ返しておくれ、私の意見で、弟はお前の事を思ひ切つたというてゐる、その思ひ切つた男の起證を、大事にかけて持つてゐても、どうも仕樣がないぢやないか。小春さん、三年が間、ようお前、あんな弟ぢやと思うて、よう付合うてやつておくれだ

ナア、その禮はきつと云ひますぞや、イヤサその禮は、私がきつと云ひます。モウ長い短いはいらんによつて、それをこつちへ返して。小春さん、お前出さぬといふと、懷へ手を入れても取るぜ、小春さん返しておくれ。

ト小春の懷へ手を入れ。

ア、これ程持つてゐながら、ごて〳〵いつて出さぬによつて、懷へ手を入れたりせんならん。何ぢや、手紙、紀の國屋小春樣まゐる、紙屋内より。

ト孫右衞門讀むを、小春惡いといふこなし、治兵衞耳立て。

治兵　これ兄さん、何でおますのや。
孫右　何でもあらせん〳〵。
治兵　手紙とは何處から來たのぢや、イヽイヤ、何處の客から來た手紙ぢや、一寸見せておくれなさいまし。
孫右　イヤ何でもありやせん〳〵。
治兵　一寸見せておくんなはれナア。
孫右　何ぢやいナア、たつた今思ひ切つた女の手紙、どこから來ようと、かしこから來ようと、構ふ

事ありやせん、凝としてゐんか、私に任して置きといふに、なんの文のと、あだしつこい、ごてごて〳〵〳〵。(ト云ひ〳〵手紙を讀んで。)そんなら、此手紙の客人へ、義理を立て。

小春　アモシ、(ト孫右衛門の袂を引く。)

孫右　コリヤ見せともながるはずぢや。小春さん、最前は侍冥利、今は粉屋の孫右衛門商ひ冥利、女房子に限つて、私や見せやせん、起請と共に火にくべる、テモマアお前は。勤の中にもそれ程までに、眞實な。イヤサ眞實のないは女郎の常、ナアちつとも知らず、うか〳〵とあんまりの事、おりやをかしいわえ、ハヽヽヽヽ。ハヽヽヽヽ。ハヽヽヽヽ。

〽笑ひに紛らす眞實は、口に云はれぬ心の禮。

小春　それで、私も立ちますわいナア。

〽と又伏沈めば。

治兵　何ぢやい、立つの立たぬのと、あんまり人間らしい事いふない、申し兄さん、今の状、一寸見せて下されいイナア。

孫右　何ぢやいナア、ひつこい、何でもありやせんというたら、何で、そのやうに私の云ふ事を聞かんのぢや、イヽヤイ私のいふ事が、何で聞かれぬのぢや。(ト氣を替へていふ。)

治兵　そないに、ぽん／＼いふものやおまへん、悪いと思やこそあやまつてゐるやおまへんか、それをば兄甲斐に、ぽん／＼。

孫右　何も私かテ、ぽん／＼云ひたい事はありやせんけれど、お前がひつこういうによつて、ツイわしかて、ぽん／＼いうのぢや。

治兵　ナア兄さん、私も思ひ切つた女の所にゐるのは、ふつ／＼厭やによつて、モウいにませうか。

孫右　オヽさうぢや、いなう／＼。

治兵　サアいにませう／＼。（ト孫右衛門の手を引張る。）

孫右　一寸待ち、羽織を着んならん、お前先へ出かけ、直に私は出る。

治兵　サア早う行きませう、早うお出なされいナ。

孫右　よし／＼羽織さへ着たら、直に出る。

治兵　私、先へ出かけますぜ。

ト治兵衛先へ出る、孫右衛門行かんとするを、小春袂を控える、治兵衛の事頼むといふこなし、孫右衛門呑込んでゐるといふ思入、治兵衛傍へ行き。

兄さん、早うお出なはらんかえナア。

孫右　ア、よし〳〵。ナア弟や。私の意見を聞いて、よう思ひ切りやつた、内へいんで、この事、叔者人に話をしたら、定めてお悦びになるであらう、よう得心してたもつた、私も誠に嬉しう思ひます。しかし弟、我身も今夜は定めて氣がむしやくしやしてゐるであらう、かうしや、これからいんで一杯つけて貰うて、さうして四方山の話をして。さうしよ、今夜は、我身の内で、私や留めて貰ふ。

ト云ひながら治兵衛の脊中を撫る、治兵衛氣の濟まぬこなし、孫右衛門見て

治兵衛、今迄はいなう〳〵とやかましう、云うてゐて。治兵衛、どこぞ惡いのかイ、腹でも痛むといふやうな事ぢやないか、どうぞせぬか。

治兵　イヤどうもしやしませぬけれど、ナア中し兄さん、一言、云殘した事があますのんやがな、是を云はんと、どうも胸がさばけませんのやがな、一寸云うたら惡うおますか。

孫右　そりやお前、さうお云ひぢやけれどな、今夜は、はなやひが惡い、どうぞ今夜は此儘いんでおくれ、その代りに、二三日したら、私が連れて來る、其時に、お前、何なりといふがいゝ。

ト云ひながら、治兵衛の脊を撫でさする、治兵衛、孫右衛門を振切る、孫右衛門思入あつて。

そないに、お前のやうにいうたかテ、どうも仕樣がありやせんがな。そないに思うてゐる事

を、云はさんのも悪い、そんなら、えい、ちつと位の事なら、いてお出、やつて上げる。

治兵　そんなら、やつておくれなはるか。（ト治兵衛行きかゝるを。）

孫右　オイ〳〵一寸待ち。

治兵　なんでおます。

孫右　なんでおますやあらへんがな、ナアお前、最前あの小春を蹴つたり踏んだりしやつたが、あんな事おかんか、ひよつと目鼻でも毀うたら、お前どうしようと思うてや、あんな事しやんなや。

治兵　よろしうおますがな、私も思ひ切つたというたら、思ひ切つたのでおます。

孫右　サア一寸いふ丈ならよいが、手荒い事はしいなや。

治兵　どうもしやしませぬ、一寸いうたら直に出ます、ちつとの間、そこに待つてゐておくれなはれ。

孫右　云ふ丈ならよいが、手荒い事すると、私や案じるによつて、それで云ふ事はいはんならん。

ト云ひながら、治兵衛の跡を付いて行く。

治兵　モシ〳〵兄さん、あんた、おいなはつたら、何もいふ事がいはれやしませぬが。

孫右　それでも、私や案じるに依つて、ツイ付いて行くのぢや。

治兵　ちつとの間、そこに待つてゐておくれなはれ、というてゐるのに。聞分のない、茶屋の二階へ上つた事のない人といふ者は、しやうのない不粋な、ちつとの間位、待つておくれなされナア。おいなはんなや。

孫右　ハイ〳〵行きやしませぬ。

ト云ひながら、治兵衛内へ入る、跡より孫右衛門、門口にて見てゐる、治兵衛、小春の胸をつかまへ。

治兵　足掛け三年此方、戀し床しも、いとし可愛も、今といふ今、エヽ愛相が盡きた。

ト手を握り振上げるを、孫右衛門見て。

孫右　オイ〳〵、治兵衛〳〵、そりや何ぢや。

治兵　なんでおますのや。

孫右　今、から振上げた手は何ぢや。

治兵　なんにもしてやしませぬが。チヤンと膝に手を置いてゐますがな。

トいろ〳〵こなしあつて。

今生の思ひ出に、たつた一つ。ヤイ赤狸め、たつた此足一本の暇乞ひ。

〽と額際を、ハッタと蹴て、わつと泣出す男氣を、思ひやる程堪へ兼ねて。

小春　コリヤ、モウいつそ。

孫右　アヽコレ、蹴られうが叩かれうが、そこを、ぢつと辛抱せずば、この狀の容へ義理が立つまい。立つまいがの、小春どの。

ト孫右衛門、小春双方よろしくあつて、

〽孫右衛門に制せられ。

兩人　ハヽヽヽ。

〽と、ばかりに泣別れ、歸る姿もいたく＼／しく、あとを見送り聲を上げ、歎く小春も酷らしさ、不心中か、心中か、誠の心は、女房の、そのひと筆の奥深く、誰が文も見ぬ戀の道。

ト孫右衛門、治兵衛の姿を見て思入、羽織を着せる、治兵衛いやといふ思入、小春莨入より櫛を出し、孫右衛門に渡す、孫右衛門は治兵衛の髮を撫付ける、治兵衛その櫛を取り、小春へ投げようとするを、孫右衛門よろしく留めて、小春へこなし、小春もいろ＼／あつて。

小春　アヽモシ。

〽別れてこそは。

ト双方よろしく思入あつて、三重にて。

幕

# 下の巻

## 炬燵の場

役名　紙屋治兵衛、粉屋孫右衛門、治兵衛悴勘太郎、丁稚三五郎、舅五左衛門、紀の國屋才兵衛、江戸屋太兵衛、五貫屋善六、ちよんがれ坊主傳海、治兵衛女房おさん、娘お末、紀の國屋小春等。

紙屋治兵衛内の場　本舞臺三間の二重、向う店戸棚、納戸口、暖簾、鼠壁、狀差、諸帳面の書割、帳箱、上手折廻して障子屋體、下手落間、後へ寄せて中庭口、こゝに柿色の暖簾。紙屋と記しある、店戸棚にいろ〱の紙類積重ねし書割、都て天滿紙屋店の體。通神樂にて幕明く。トこゝに三五郎、縞の着附、紺前垂、丁稚の形にて、人形廻して傳をしてゐる、箱にいろいろの人形、風車

など入れあり、傍に勘太郎人形を持ち、お末折鶴を持つて遊びゐる見得。

三五　これ、坊さん泣かんすな、この間淨瑠璃で見て來た、三十三間堂棟木の由來、柳のお柳を一段語つて、人形を使うて見せるぞや、東西〳〵、この所にて相勤めまするは三十三間堂棟木の由來、平太郎住家の段、始まり左樣。（ト柏子木を鳴らすことあつて、口三味線で。）和歌の浦には名所がござる、一に權現、二に玉津島、三に下り松、四に鹽釜よ、ヨウイ〳〵ヨイヤサ。

ト人形を使ひ、淨瑠璃を語りゐる、このうち下手より仕出し出て。

○　へイ、御免なされませ〳〵。

トやかましく云ふ、三五郎夢中になつて淨瑠璃を語り、人形を使ふ。

○　コレイナ申し、御免なされ。

三五　エ、誰ぢや、びつくりするわい。

○　びつくりするもないものぢや、最前からあれ程云うてゐるに、えらい小僧さんぢやな。

三五　さうして、何ぢや。

○　半紙二折と、ついだ卷紙二本下され。

三五　エ、、邪魔をいふ人ぢやナ。

○　お客様を摑まへて、邪魔なとは何ぢや。

三五　今、柳のお柳の木遣音頭の性根場ぢや、あた邪魔。（トぼやき〳〵、店戸棚のうちより、半紙二折、巻紙二本取り来り。）さア〳〵半紙が四十八文、巻紙が二十四文ぢや。

ト仕出し銭を出し。

○　オイ〳〵、四十八文に二十四文、〆めて七十二文。（銭を渡して、半紙と巻紙を受取る。）大にお邪魔でござりました。

三五　邪魔は始めから分つてゐるわい。

ト唄になり、仕出し下手へ入る。

三五　サア〳〵、これから今の續きぢや、これ〳〵嬢様〳〵、お前さまは、マアおとなしいお方ぢや、最前から押黙つて、鶴を折つてゐなさるが、おとなしいお子ぢやわい、その鶴が折れましたら、糸を引張つて、鶴の宙釣をして、お目にかけませうわい。

お末　この鶴が折れたら、この脊中へ秀之助を乗せて、芝居でもして見せて下されや。

三五　芝居事なら、何なりともお望み次第ぢや。

勘太　コレ、早う、坊に見せてや。

三五　オツト、承知〳〵。（ト人形を持ち、こなしあつて。）皆いよ〳〵、このところ、只今の續き、その爲め口上左樣。（ト口三味線にて、人形を使ふ。）母の柳を、都へ送る、ヨウイ〳〵ヨイヤサ。

ト淨瑠璃を語り、いろ〳〵と人形を使ふ、このうち下手より、ちよんがれ坊主傳海、破衣小形の木魚二つ持ち出る、後より善六尻からげ頰冠三味線彈の體にて出て來り。

傳海　歸命頂禮、やれ〳〵〳〵皆さん、聞いてもくれねえ、佛說阿房陀羅經。

善六　ノコ〳〵サイ〳〵。

ト善六三味線を彈き、傳海木魚を叩き、やかましく云ふ。

三五　通れ〳〵。

傳海　オイ相棒、通れとやい。

善六　通れとあらば、通らうぢやあるまいか。

傳海　通れ〳〵。

ト兩人ずつと上手へ通り、よき所へ住ふ。

三五　やい〳〵、薄汚い形をして、何處へ通るのぢや、きり〳〵と出さらぬかい。

傳海　そこな丁稚め、通れと吐す故通つたのぢや、ハヽアン分つた、內で阿房陀羅經云はして聞く氣

ちやな。

善六　さうであらう〳〵、お好きとあれば、さらばこゝで、やらかしまをす、オイ和尚、一調子はり上げてやり給へ。

傳海　オツト合點。エヘン、これは此の頃、町中は申すに及ばず、色里は專ら御評判の阿房陀羅經、新物の始まり〳〵。

トこれにて善六三味線を取上げ、傳海木魚を叩く。

やれ〳〵〳〵、歸命頂禮、どら如來、やれ〳〵〳〵、皆さま聞いてもくんさい、花の浪花の新地の小春に、貧乏紙屋の治兵衛が馴染んで、惡性狂ひが杉原紙でナ、節季は斷り、仕切は延紙、得意は塵紙、内には小半紙、一束ならで二束三文に負けてしまつた、着顏着そげも茄子の淺漬、淡味噌くさい、内のお嬶に愛想もこつそり、盆も正月も小春の屋形へ、忍紙とはうるさいこつたよ。

善六　ノコ〳〵サイ〳〵、野良サイ〳〵。

傳海　おやま狂ひに男は濡紙、小春は青土佐、内儀は結構な阿呆の唐紙、これが天滿で噂の書置。

三五　ヤイ〳〵おのれ、そりや何を云ふのぢや、うぬら、誰ぞに賴まれて、内の旦那の治兵衛殿の惡

口を吐すのか、やかましうてならぬわい。

傳海　やかましいもないもんぢや、やかましう云ふのが惡けりア、何で通れと云うたのぢや。

善六　さうぢや〳〵、またこの文句は、誰にも頼まれもせぬ、この節の流行文句ぢやわい。

傳海　治兵衛と云うて、こゝ一軒ぢやあるまいし、この内の事やら、誰が事やら知らぬが佛、阿房陀羅經。

善六　歌うて貰はにや喰はれぬ、こつちの商賣。

傳海　この文句、さう歌うても、惡いとお上からお觸もなければ、御法度といふお達もなし。

善六　さうぢや〳〵、これだけ喋つて、一文も貰はずにはいなれぬ、こゝな旦那か、お家樣に逢うて錢貰うまで、こゝで一服しようぢやあるまいか。

傳海　それがいゝ〳〵、これ素丁稚、貰盆なと貸して、咽喉も渇いた、茶を汲んで來い。

三五　エヽ知らぬわい、勝手にさんせ。

ト善六、傳海貰を喫む、謠への合方になり、向うより太兵衛、羽織着流しにて出て、直に本舞臺へ來り。

太兵　治兵衛内にゐるか、さア金受取らう、こんな贋金はいらぬ、正眞正まへの金返して貰ふかい。

三五　ヤイ〳〵今日はけたいな日ぢやわい、旦那の惡口を云うて來る阿房陀羅經やら、旦那に金を返せとわめいてうせるやら、一體、おのれは何者ぢや。

ト太兵衞ずうつと内へ入り、傳海、善六と顏を見合して思入。

太兵　エ、おのれが何云うぞい。こりや、治兵衞が内に居るなら、奧へ行て、太兵衞樣がお越しなされましたと云うて來い。

三五　いやぢやわい、用があるなら、このおれさまに、事の次第をありやうに吐せ、仕儀によつたら取次いでくれるわ。

太兵　こいつ、いま〳〵しい素丁稚ぢやなア、この太兵衞樣が出て來た用と云ふは、この開治兵衞から受取つた廿兩は贋金ぢや、今日問屋の仕切にやつたれば、その尻が割れて、この太兵衞までが疑はれる、小春と腐付いた二人の仲、揚代にせばまれて、ぎちかはしてゐるを氣の毒に思ひ、借してやつた廿兩、贋金を摑ませるとは太い奴ぢや。何かい、こりや侍めと云合はせて、この太兵衞をやつたのぢやな、その侍めも、さつきに道でちらりと見た、大方こゝらにへちまうてをらう、合點の行かぬさぶめぢやと思うた、何ぢやゝら、人にむね打を喰はしやァがつて、さアその侍に逢はう、こゝへ出され、贋金師の大盜人め、ヤイ權押しに騙をひろぐか。

三五　えらさうにぽん〳〵云いナ、今日はナ、朝からお客樣があるによつて、旦那樣もお家樣も奥に話して御座るのぢや、そこでこの三五郎が店番をして御座るに、いろ〳〵な奴めが出てうせてからに、こんな事云うて來て、何奴こいつもけたいな奴等ぢや、待つてけつかれ。

卜云ひながら、勘太郎、お末を連れ奥へ入る、跡に三人思入あつて煙草喫む。合方になり、向うより紀の國屋才兵衞、茶屋亭主の拵へにて出る。

才兵　どうぞ、太兵衞樣に逢ひたいものぢやナア。（卜本舞臺に來り、）オヽ、太兵衞樣こゝにか、お前樣の在所を尋ねた事ぢやござりません。（卜内へ入る。）

太兵　尋ねたとは、何の用ぢや。

才兵　何の用かも凄じい、すました顏付で、これ此廿五兩は返しまする、ようマア小春に惡性根をつけて、駈落をさせてくれた、サア臺詞は後に廻して置いて、マア何より小春を出して貰ひませう。

太兵　ヤイ〳〵才兵衞、手水を使うて來い、寢呆けて、何を寢言吐すぞい、小春を駈落させたの何ぞのと、そりやマア何の事ぢや。

才兵　何の事とは、ても、さても鐵面皮な物ぢや、ごて〳〵云はずと、小春を返して貰ふかい。

太兵　コリヤ小春を返せの出せのと、この太兵衞が隱したやうな云分、これには何ぞ、確な證據があるかい。
才兵　證據のない事云はうか、きつとした證據があるのぢや。
太兵　面白い、ならば見ようか。
才兵　見せいで。確な證據は、この書置。（ト懷中より書置を出し、）これ讀んで見さんせ。
ト太兵衞の前へ投付ける、太兵衞取つて見て。
太兵　何ぢや、小春の書置ぢや、へゝゝ、書置といや、こゝの治兵衞の胸に堪へやうわい、さらば、これにて讀上げてやらうわい。（ト書置をひらき。）ナニ〳〵、耻しながら書殘しまゐらせ候、これまで厚うお世話になり候身に候へども、いとしい人の顏立ち申さず、是非なく斷落致しまゐらせ候。
傳海　いま〳〵しいげん妻ぢやなア。
善六　それから後は、何と書いてあるナ。
太兵　待つたり〳〵、何ぢや、今まで紙治さまと、深う云交せしは。
傳海　どうやら、文句が合ひさうなぞよ。

太兵　今まで紙治さまと深う云交せしは、みな、嘘にて候。ヤア〳〵。

善傳　ヤア〳〵。

太兵　これまでつれなう當りしは、眞實ある太兵衛樣に張を持たし、請出されてほん〴〵の女夫になつて、末永う添遂したき願ひにて、わざとつれなく致しまゐらせ候。ヤア〳〵、こりや、大分風が變つて來たぞよ。

傳海　太兵衛さん、どうやら色事師のやうに見えて來たぞえ。

善六　小春の眞實が見えて來た、何やら甘くさい文句ぢやなア。

傳海　後が聞きたい、早う讀んで、

善傳　聞かしたり〳〵。

ト　やかましく云ふ、このうち上手障子屋體の内には孫右衛門、納戸口よりは治兵衛、立聞きしてゐることなし、治兵衛だん〴〵腹の立つ思入、太兵衛うれしきこなしにて讀續く。

太兵　ハテせはしない、どうやら胸がどき〳〵と、何ぢやゝら、勝手が違うたやうな、エヽ、何ぢや、今まで紙治さまに云うたは皆嘘、まことは主に添ひたい心、その太兵衛樣が親方樣へ廿五兩の手付金、皆々よろしからぬお心にて候へば、所詮添せては下さんすまい。となんの添はぬ事

があるものか、添はいぢや〳〵、オヽ可愛い奴なう。この身に飽果て候故、私ばかり死ぬる心にきめまゐらせ候。ヤア〳〵、そんなら俺故、一人死ぬる氣かいやい、尤ぢや〳〵、エヽくれ〴〵酷いは太兵衛様、身請さんすが眞實か但しは私を欺すのか。何の欺さうぞいやい〳〵、オヽ可愛や、可愛や。どうか心が濟み申さず候故、太兵衛様の存じよりの方へ駈落いたし、暫く忍びまゐらせ候。オヽ可愛や〳〵。エヽ若しも願ひが叶はずば、この文を篤と御覽下され、せめて御回向願ひ上げまゐらせ候。アヽ南無阿彌陀佛〳〵、オヽ可愛や〳〵。

〽アヽ可愛やと大聲上げ、啜上げ〳〵、赤子の時に泣いたまゝ、廿餘年の溜淚。

傳海　オヽ尤ぢや〳〵。

傳善　オヽ道理ぢや〳〵。

〽傍の二人も貰泣き、身を揉む太兵衛が袂より、落つる狀を孫右衛門、拾取るとも知らばこそ。

トこのうち太兵衛袂より狀を落す、孫右衛門三五郎を呼び、そつと叩く、三五郎心得、落ちたる狀を拾ひ、孫右衛門へ渡す事あつて奥へ入る。

太兵　これ才兵衛、私や小春の書置を見たので、癪が差込む、アイタヽヽヽ、これ傳海、貴樣の世話にして下さつたも、元はこれから。

傳海　サヽさうぢや〳〵、太兵衛樣、こりや手延びになつたら、死ぬるぞえ、早う身請をさんせい。

善六　今の書置に書いてあつた、お前の存じの處とは、心當りが。

傳善　御座りますかな。

太兵　サアその心當りは、これまで夢中の心意氣、存じの方とは、とんとないてや、なう才兵衛。

才兵　イヽヤさうは拔けさせませぬ、この書置が確な證據、サア代官所へ連れていて、この詮議をするのぢや。（ト引立てにかゝる。）

太兵　マア待つてくれ〳〵、さう思ふのも尤ぢやが、アヽ時に心當りとは、オヽ兎にも角にも落付いてはゐられぬ、これ傳海も善六も來てくれ。

傳海　早く、小春の命を、

善六　取留めねば、

太兵　安心ならぬ。

傳善　サア行きませう。

ト三人行きかゝる、孫右衞門思入あつて、上手から出る。

孫右　太兵衞殿、待つた、二人の奴等も用がある。

太兵　何ぢや。

傳善　私等に。

孫右　オヽ用がある、性根を据ゑて、きり〱そこへ出さらぬか。

太兵　ハヽア。

ト誂への合方、三人顏見合せて、ハツと下にゐる、孫右衞門こなしあつて、よきところへ來て住ふ。

孫右　こりや、坊主、われが名は傳海と云ふんぢやナ。

傳海　ハイ、それがどうぞ致しましたか。

孫右　こりや、この間、坊主客になつて、石町の隱居と欺はり、宛名のない二十兩の證文を書かしたのはおのれじやナ。

傳海　エヽ。

孫右　太兵衞と一つ穴の賣主坊主であらうがナ。

傳海　イエ〳〵滅相な、太兵衛とやら、太郎兵衛とやら、つひに見た事もない。
孫右　その見たこともない太兵衛が、これ傳海、貴樣の世話にして下さつたも、元はこれから。オ、さうぢや太兵衛樣、コリヤ手延びにしたら死ぬるぞえ、早う身請をさんせとは。
太傳　ヤア。
孫右　何故吐した。
兩人　サアそれは。
孫右　それはとは。まだ〳〵見せろ物がある。
ト以前の狀を出しひらく、太兵衛見ていろ〳〵こなし。
一寸申上候、この間浮む瀨にて賜り候拾兩、最早この頃の丁半に、なめられて仕舞候、今日紙治方にて、彼の預り手形の儀、首尾よく參り候はゞ、拾兩お貸下さるべく候、直に申すも如何と、お願ひかくの如くに御座候、太兵衛樣、傳海より。何と、これでも知らぬと云ふか。
兩人　サアそれは。
孫右　サア。

兩人　サア。

三人　サア／＼。

孫右　何と、動きはとれまいがナ。

太兵　モウやけぢや、それ。

兩人　合點ぢや。

　ト傳海、善六打つてかゝるを、孫右衛門引外づし、太兵衛が箒にて打つてかゝるを、ひつたくり三人を散々に打据える。

孫右　騙ひろいだ白紙の僞筆、うぬ等が企みをありやうに、サア吐せ、吐さにや猶も筆の峰打、ドヤどうぢやえ。

傳海　マア／＼待つて下さりませや、吐します／＼、アイ／＼太兵衛様に頼まれて、坊主客になつたは自分ぢやわいナ。

孫右　オ、よう吐した、サア善六、其の時小春の身請の客と吐したは、おのれであらうナ。

善六　かうなるからは、隱立は致しません、お察しの通り。

孫右　ム、よし／＼、そこな色事師殿も、手序に。

太兵　ハイ〳〵いやもうその通りで御座ります、これ迄小春が臆かなんだ色の意趣、ほんまにやれやれ、ア丶戀程せつないものはないわい。

孫右　うぬ等三人も、よい獄門道具ぢやわい。

善六　これはお見立、

三人　有難う。

孫右　コリヤ三人共代官所へ引摺つて行く奴なれど、格別の情で何にも云はぬ、この上治兵衛に云分はあるまいがナ。

太兵　イ丶エ勿體ない、何のマア申分が御座りませう、今では結局治兵衛から、私にお恨みはあらうけれど、イヤ申し紙治樣、小春が私への心中をお聞きなされて、ほんにやれ〳〵オ丶さぞお腹が立ちませう、けれどもこりやもう惚れられたが私の因果と、お諦め下されませや。

孫右　エ丶ごて〳〵云はずと、とつと丶早う歸らぬかい。

ト三人を門口へ突出す、三人いろ〳〵こなしあつて外へ出る。才兵衛うろ〳〵する。

これ、小春の親方、お前樣には云分はない、心配せずと行んだ〳〵。

才兵　ハイ〳〵初めて參じまして、えらくおやかましう存じまする。

ト云ひながら、下手へ行つて、門口へ出て三人と顔見合せこなし。

コレイナ太兵衛様、身請が遲いと、小春は死ぬるぞえ、さうなつたら下手人、そのまゝでは濟まさぬぞや／＼。

太兵　オツトそれはよう合點してゐるわいの。

才兵　きつと念を押しましたぞよ。（ト下手へ入る。）

太兵　色故に酷い目に逢ふは、色事師のお仕着、役者で云うたら、二枚目の色立役ぢや。

傳海　その色事師のお相伴で、

善六　どえらい箒の御馳走、

太兵　このみすぼらしい太兵衛の姿、

傳海　それも誰故、

善六　元の起りは、

兩人　小春殿、

太兵　戀は切ないものぢやナア。

〽何をいふやら、魂と共に拔けたる腰の骨、互に勞り勞つて、跛ちが／＼

歸りける。後見迯つて孫右衞門。

ト三人をかしみのこなしにて向うへ入る。孫右衞門思入あつて。

孫右　これ三五郎、治兵衞とおさんを呼んで來てくれ。

三五　ヘイ旦那さん、お家樣、堂島の旦那が呼んでゞ御座りまする。

ト納戸の内にて。

治兵　ハイ只今、それへ參りまする。

〽納戸を出づる主の治兵衞、跡におさんも附添うて、面目なげに立出づれば。

ト治兵衞出て來り、あとよりおさん好みの形にて出で來り、下手に住ふ。

孫右　これ治兵衞、最前からの樣子、殘らず聞いたであらうナ。

治兵　一間のうちで、始終の樣子を聞きまして御座りまする。

孫右　聞いたとあれば、改めて云ふには及ばぬ、あのやうに云うていんだからは、小春の身請は太兵衞がするに極つた、これ治兵衞、あの小春の文を見て、よもや心は殘るまいがなう。

さん　ほんに私も聞いて居りました、あれではよもや、小春さんの事は思ひ切らしやんしたに違ひはあるまい、こればかりはこちの人に、微塵も嘘は御座りますまい、その證據には私が立ちます

る。

孫右　それ聞いて、この兄も安心しましたが、おやぢさまやおふくろは、昔氣質の御氣性故、つい口先ばかりでは御得心はなさるまい、おやぢさまの疑を晴すため、何と誓紙を書いてはくれまいか。

治兵　何がさて、誓紙なれば、何枚なりとも。

孫右　さうなうてはならぬ筈、それ、おさん、硯箱を。

さん　ハイ〳〵。

〽硯と紙を差出せば、比翼の誓紙に引替へて、今は天罰起請文、小春に緣切る、思切る、僞りならぬ文言は、神や佛へ誓ひの一書、やう〳〵に書終り。

ト治兵衞、起請文を認め、小刀にて指を切り、血判据える。

治兵　これ御覽じて下されませや。

孫右　オヽ、これでよし〳〵、これもおやぢさまや、おふくろへの心休めぢや。

さん　兄さんのお蔭で、私も落付きました、子なかなして遂に見ぬ固めごと、これで二人の子供も仕

合せといふもので御座んすわいなア。

孫右　この氣になれば、商賣も繁昌しやう、得意大切、一家親族の喜び、このやうにやきもきと云ふも皆治兵衛が爲、家の爲、兄弟の子供が可愛さ、オヽ子供の事で思出した、嘸しや孫には目のないもの、この誓紙も私が持つて行なうより、孫の手から、おやぢさまの前へ出すが納りがよい、お末を呼んで下され。

さん　アイ〳〵。（ト納戸へ向ひ、）お末〳〵。

お末　アイ〳〵、母様。呼んでかいナア。（ト納戸から出で來る。）

さん　オヽそなたは叔父さまと一緒に、おぢいさまのところへ行ておぢや。

お末　アイ〳〵、そんなら叔父さまと一緒に、おぢいさまの內へ行くのかえ。

さん　さうぢやわいなう。

孫右　それぢや、お末を治兵衛の名代に、この誓紙を持たして、おやぢさまへ詫言さゝう。

ト　お末の手を引き下手へ行く、兩人見送るこなし。

治兵　それではもうお歸りでござりますか、今日は何かと、いかうお世話をかけまして。

孫右　何の、禮に及ぶこと、他人ではあるまいし、いつ何時、この孫右衛門が世話になるやら、明日

の事は知れぬで持つた憂き世の中。

治兵　變り易い人ごゝろ。

さん　變らぬものは、親子の情愛。

孫右　夫婦仲を睦まじう、商賣大事にして下されや。」

治兵　左樣なれば、兄者人。

孫右　治兵衛、おさん、おさらばでござるぞや。

兩人　ようお出なされました。

〽お末の手を引き立歸る。

ト孫右衛門、お末の手を引き向うへ入る、治兵衛、おさん思入あつて。

治兵　ア丶最前からのもやくやで、ほつくりと氣が盡きた、どれ一寢入して來よう。

〽すまぬ心の納戸口、暖簾押しあけ、奥へ行く、折からひよこすか三五郎。

トこれにて、治兵衛納戸口へ入る、ト三五郎目をこすりながら中庭から出て來り。

三五　お家樣〱、もう何時で御座ります。

さん　三五郎とした事が、夜よなかのやうに何事ぞ、日も暮れるに間もあるまい、いつものやうに店を

締めて火を點し、神明へも燈明上げましやヤ。

三五　オツト合點、承知仕つて畏り候。

さん　テモ言葉數の多い子ではある、さうして勘太郎は。

三五　坊さんは奥の炬燵で、私も添乳をしてゐて、いつの間にやら、ツイうと／＼と寢てゐるうち、道頓堀の芝居を見物に行た夢を見た、これお家樣、明日は芝居を見にやつて下されませや。

さん　何を云やるやら、最前からのどさくさを知らずに、寢てゐたのかや。

三五　何ぢや、どさくさぢや、鼠を猫が追廻すより外に、どさくさと云ふ事は知らぬのぢや。

さん　テモマア困つた子ぢやなア。

ト唄になり、おさんこなしあつて、納戸のうちへ入る。

三五　何が困るのか、とんと合點が行かぬわい。（ト四邊を見て、傳海が忘れて行つた木魚を見付けてこなし。）こりや何ぢや、よう木魚が二つ、これ阿房陀羅經の持つてゐる木魚ぢや、成程、いごらいごらと遊んでゐる者を阿呆といふ、そこで阿房陀羅經、この間千日前で聞いて來た、なんたら心中の阿房陀羅經、さらば、これからお經の文句にかゝらうか。

ト三五郎をかしみの見得よろしく。

幕

同紙屋内奥座敷の場　平舞臺向ふ小形の襖、上手折廻し障子屋體、下手燒板の塀、格子戸のはまりし入口、こゝに紙屋勝手口と記せし表札、その傍に用水桶、取合ひに燒板の塀、都て紙屋内奥座敷の體。こゝに炬燵に蒲團をかけ、丸行燈、莨盆、などよろしく、治兵衞炬燵に寢てゐる、傍におさん、針箱を置き、針仕事の體、此見得よろしく幕明く。ト直ぐ床の淨瑠璃になり。

〽門送りさへ、そこ／＼に、治兵衞はそばに有合す、定木を枕、うたゝねの、あたる炬燵の小春時、まだ曾根崎を忘れずかと、退ける蒲團の内さへも、涙に濕る其の風情、おさんは呆れ、つく／＼と顔打まもり／＼。

さん　これいナ申し、治兵衞さん、よう誓紙を書いて下さんした、私もこれで落付きましたわいなア。

ト　おさん思入あつて、炬燵の蒲團をのける、治兵衞こなし。

エヽあんまりぢやぞえ、治兵衞さん、それほど名殘が惜しいなら、誓紙書かぬがようござんす、なぜにお前はそのやうに、私が憎うござんすえ。

ト　おさん泣く、治兵衞起上って思入。

治兵　これ〳〵そりや、マア何を云やるぞいなう、子までなした仲に。

さん　いえ〳〵、憎いさうな〳〵、憎ましやんすが、嘘かいな。

〽一昨年の十月、中の亥の子に、炬燵明けた祝儀とて、これこゝで枕並べてこの方は、女房の懐には、鬼が住むか蛇が住むか、それ程心殘りなら、泣かしやんせ〳〵、その涙が蜆川へ流れたら、小春が汲んで飲みやらうぞ、あんまり酷い治兵衞さん、なんぼうお前がどのやうな、せつない義理があるとても。

二人の子供は、お前、なんとも無いかいな。

〽と心の限り口說き立て、恨み嘆くぞまことなる。

ト　おさんよろしく泣落す、治兵衞さうぢやないといふこなしあって。

治兵　オヽ尤ぢや〳〵わいの、悲しい淚は目より出で、無念な淚は耳からなりとも出るならば、云はずと心見すべきに、同じ目からこぼるゝ淚、足掛三年がその間。

〽露ほども悋氣せぬ、そなたに云ふも恥しながら。

マア聞いてたも、この間も曾根崎で殘らず聞いた、小春めが不心中、今といふ今夢も覺め、思ひ切つてはゐるけれど、ソレさつきにも話せし如く、あの太兵衛めが急に身請をするとのこと、退いて十日もたゝぬうち、請出さるゝ義理知らずの、小春めがことは心殘らねど。

〽問屋中の付合ひにも、金の工面の盡きし故、小春を退いたの何のと、得知らぬ奴の口の端にかゝる無念さ。

口惜いと、思はず涙を流したわいなう。

〽聞いて、おさんは摺寄つて。

トこれにておさん思入あつて。

さん　エ、そんなら、ほんまに小春樣は、お前に愛想づかしを云うて、太兵衛が處へ行く筈で御座んすかいなう。

治兵　ハテきよと〳〵しい、その聲わいなう。

さん　オ、そんなら、小春さんは、生きてゐる氣ぢやないわいな、死なしやんすわいなア、こりやどうしよう、何としようぞいなア。

へと立ちつ居つ、騷ぐ女房、騷がぬ夫。

治兵　ハテサテ、何ぼう發明でも、流石は町の女房ぢや、あの不心中者が、何の死なうぞ。

さん　いえ／＼さうぢやござんせぬ、小春さんに不心中は芥子程もないけれど、いつぞやよりお前の素振、何を云うてもうか／＼と。

へ悲しい日を見ようかと、案じ過して。

小春さんへ、いとしいと思はしやんす、治兵衞殿の爲ぢや程に、思ひ切つて下さんせと、搔口說いてやつた文。

へ退かれぬ義理と合點して、親にも代へぬ戀なれど、思切るとの嬉しい返事。

これ程の眞實の心で、何の太兵衞の所へ行かしやんしよ、請出されたら其儘に、死ぬる覺悟に違ひはない。

へ小春さんを殺しては、このさんが義理立たず。

どうぞ命が助けたい、思案して下さんせ。

へ初て明かす女房の實。

治兵　ム丶そんなら、アノ不心中と見せたは、そなたの頼みか。

さん　あいなア。

へ聞いてびつくり。

治兵　ム丶すりや、やつぱり俺を大切から

へさうとは知らず、今までも。

義理知らずの、畜生のと、恨んだ心が恥しい。

さん　ア丶コレさういふ手間で、こなさん行つて、どうぞ殺さぬやうにして進ぜて下さんせいなア。

へと急立つ女房。

治兵　と云うて、小春が命助けるは百五十兩、せめて半金なりとも手付に渡し、取留むるより外はないが、何を云うても、金の工面に盡きた此身。

へ途方に暮るれば、おさんは摺寄り。

さん　ナウ仰山な、それで濟む事なら、安い事ぢやわいなア。

〽立つて簞笥の小抽出、開けて取出す綯交ぜの、紐つき袱紗押開き。

トこのうち、おさん向う見付の小襖を開ける、中に白木の簞笥、おさん抽出より、袱紗に包みし五十兩を出し、治兵衞の前に置く、治兵衞びつくりこなし。

治兵　ヤアこりや五十兩、どうして、マアそなたが。

さん　サアこの金の出所も、後で語れば知れること、この晦日に、岩岡の仕切の金に才覺はしたれども、それは兄御と談合して、違ひの尼は見せぬわいなア、小春さんの方は急なこと、その五十兩と、あとの殘りは。

〽と掻立つて、明けて取出す染小袖、かねてかうとは白茶裏、黑羽二重も色變へぬ、淺紫の糸目結ひ、たつた鹿の子も惜氣なう、子供の物も掻集め、內端に見ても二十兩。

これだけあれば。

〽よもや貸さぬと云ふ事は、ないものまでも有顏に、夫の耻と我が義理を、一つに包む風呂敷のうちに、情ぞ籠りける。

私や子供は何着いでも、とかく男は世間が大事、小春さんを身請して、あの太兵衛めに一分立て、下さんせ。

へと云へど、いらへも涙聲、治兵衛思はず手を合せ。

トおさんよろしくこなしあつて、治兵衛の着るものを出し、治兵衛思入あつて着る、おさん手傳うて着せる。

治兵　オヽ過分なぞや、したが手付渡して取留め、請出して圍うて置くか、内へ入れるにしてからが、マアそなたは、何と。

へ云ひさして打萎るれば。

さん　マヽ何のいなア、必ず案じて下さんすなえ、ハテもう子供の乳母か、飯炊か、面倒ながら眞實の妹、眞實の妹持つたと。

へ思うて下さんせいなあ、云ふも胸まで突きかける、涙呑込み／＼て、夫に立てる貞節は、傍で見る目もいぢらしき。

治兵　何にも云はぬわいなう、コレおさん、親の罰、天の罰、神佛の罰は當らずとも、女房の罰が恐しい。

ヘ赦してくれとばかりにて、伏拜む手を。

ト治兵衞手を合せて拜む。

さん　ア、コレ／＼勿體ないわいな／＼。手足の爪を剝しても、皆夫への爲ぢやもの、後の間では詮ないこと、サア／＼早う、コレ三五郎／＼。

ヘ呼出し。

トおさん、治兵衞の手を取つて泣落し、思入あつて急くこなし、三五郎を呼ぶ。

三五　お家さん、何ぢやな。（ト出て來る。）

さん　そなた、これを持つて、旦那樣のお供して行きや。

三五　旦那樣のお供なら、北の新地か、そいつは嬉しい／＼。

治兵　これ、無駄口云はずと、この風呂敷包を脊負ふのぢや。

ヘ渡す風呂敷、懷へ金押入れて立出る。

トこのうち治兵衞金包を懷中する、三五郎風呂敷包を背負ふ、このうち五左衞門老爺への拵にて出で來り、勝手口より入り、奥の間より出る。

五左　治兵衞殿、お宿にか。

〽ずつと入れば、夫婦はうぢ〳〵。

トこれにて、治兵衛　おさんびつくりこなし。

治兵　これは舅殿。

さん　父さん、何と思うて、悪いところへ。

五左　ヤア。

治兵　ようお出なされましたなア。

〽三五郎が脊負うたる、風呂敷見付けて。

五左　コリヤ阿呆め、その包みを何處へ持つて行く、また質屋へうせるのか、こつちへおこせ。

〽ひつたくられ、びつくり拍子、拔參りの宵に知れたる心地にて、一間の内へ入りにけり。

トこのうち、五左衛門、三五郎が背負ひし風呂敷包を、無理に引おろす、これはと寄るを五左衛門睨付ける、三五郎びつくりして奥へ逃げて入る。

五左　大方からであらうと思うたわい、よう聞きさらせよ、着類着そげを質に入れて、をやま狂ひに仕上げるのぢやなア、コリヤやい、女郎の實となア、鬼瓦の笑顔とはないものぢやぞよ、サア手

短氣におさんに暇やりや、女子の子は母へ付くのが世間の大法、お末は先刻に孫右衛門が連れて戻つた、その時に何ぢや、（ト懐より誓紙を出し。）コレこの誓紙を、ひけらかしておれに見せた、アヽえらいやうでも、何處か若い、こんなで行くのぢやないぞよ、誓紙の代りに去狀書け、誓紙は役に立たぬわいの。

へと引裂き〳〵、治兵衛が顏に打付けて、お上へどつさり大臼形、おさんは聞兼ね。

トこれにて、誓紙を引裂き捨て、きつとなる。おさん思入。

さん　コレ父さん、そりやお前聞えませぬわいな〳〵。こちの内の身代の衰へたのも、みなお前から起つたこと、ないもせぬ銀山に掛つたというて、三十兩借り、五十兩借り、揚句にはその銀山が潰れたとやら、元も子もないやうにして了はしやんしたぞえ、男氣な治兵衛殿、舅の事なり、云出せばこつちの恥と、證文を殘らず戻し、濟ましやんした其時には、コレその恐い顏に淚を滾して、俺が爲の氏神樣ぢや、と悦ばしやんしたことを、お前、よもや忘れはさしやんすまいがなう。また、主の惡所通ひも、元の起りは、こなさんから起つたこと、れつきと仕分けて貰うた身代、マア何にして金が減つたぞ、と本家の不審が立つた時、ハテ舅殿にとられま

したと、鼻毛らしう云はれもせず、口へこそ出して云ひこそさつしやらね、志を推量して、初手の間の茶屋通ひは、世間への聞えでさつしやるか、とほんにやれ／＼、行かしやんす度々に、私や、コレ後から拜んでゐたわいな／＼、その大恩を打忘れ、阿呆ぢやの、いや白痴のと、かりそめにも勿體ない、堪へて下され、こちの人。父樣去んで下さんせ。

〽宥めつ叱りつ、兩方へわが身一つの切なさつらさ、思ひやられて道理なる、思ひは同じ憂おもひ、身の言譯に紀の國屋、小春はこゝへ來かゝりて、樣子ありげな内の體、逢うては如何と、用水の蔭に隱れて聞き居たる、とは知らずして、治兵衛は手をつき。

トこれにて、向うより小春好みの拵へ、頭巾を被り出で來り、勝手口にて内の樣子を窺ひ、思入あつて下手へ忍ぶ。治兵衛こなしあつて。

治兵　御立腹の段は御尤、したが、おさんが申すは皆無駄言、私が心に存せぬこと、おさんとは、何卒このまゝ添はせて下さりませ。

ト云ひかけるを、押冠せて、五左衛門捨臺詞よろしくこなし。

五左　いゝやならぬわい、何にも云ふこと聞くことないわい、おさんを戻せば事は濟む、しかし拵へ

おこせし道具衣裳、改めて封付けて置かうわい。（トずんと立つ。）

へ立上れば、おさんは驚き。

さん　ア、これ父様、衣類道具も揃うてある、改めるには及ばぬわいな。

へ驅塞がれば、突飛ばし、ぐつと引出し。

トこれにて治兵衞立上らうとして、立惱むこなし、おさん立塞がるを、五左衞門突退け、捨臺詞にて箪笥の抽出をあける。

五左　ヤアこりや、どうぢや。

へ一重二重抽出の數もありたけ押入まで、底を叩いて五左衞門、口あんぐりとあき入れ物、さすにもさゝれぬ言葉さへ、しばし呆れて居たりける。治兵衞とつくと心を定め。

トこのうち五左衞門箪笥の抽出殘らずあけ、中を見てびつくり、呆れたるこなし、治兵衞きつと思入。

治兵　これ舅殿、この五十兩は、女房おさんが衣類諸道具の代り、不足にはあらうが持つてござれ。

ト以前の金包を差出す、五左衞門こなしあつて、金包を取上げ。

五左　持つて歸らいでか、いや、まだ何と云うても大身代ぢや、したが、あのしだらを見るからは、いよ〳〵娘は連れて去ぬ、サア〳〵立たう。

〽と引立つれば。

さん　モシ、あゝ云出しては聞かぬ父樣、私や、マア歸ります、云ふまでもないけれど、勘太郎が事賴みますぞえ、朝飯前に忘れずと、桑山の丸子〳〵、どうぞ飲まして下さんせえ。（ト泣く。）

治兵　オヽ氣遣ひしやんな、思ひも寄らぬ今この仕儀、とんと心も落付かねど、そんなら暫く別れて居ませう、舅殿も、娘のこと、まんざら酷うもさつしやるまい、つい、戻るやうになろぞいなう。

ト治兵衞よろしくこなしある。

さん　これ、治兵衞さん、必ず短氣の出ぬやうに。

五左　エヽ小面倒な暇乞、きり〳〵と行かぬかい。

〽聲に目覺ます勘太郎。

勘太　母樣いなう〳〵。

〽聞捨てに、後に見捨てる、子を捨てる、藪に夫婦の二股竹、長き別れと出

で丶行く。

ト これにて、炬燵に寢居りし勘太郎起きて、よろ〳〵纏れる、おさんが抱かうとするを、五左衞門割つて入り、勘太郎を酷く突飛ばす、治兵衞これを抱起し、おさんと顏を見合せて愁ひのこなし。おさん後へ引かるゝこなしにて、後へ戻らうとするを、五左衞門睨付ける。

五左　コリヤ何をめそ〳〵泣く事がある、かう緣切つたらあかの他人、たとへ翌が日、何處で逢うても、女房などゝ云うたなら、聞くことぢやないぞよ。

〽口では云へど、五左衞門心殘して出で丶行く。

ト これにて五左衞門先に、おさん、奧へ入り、下手の勝手口より出で、泣く〳〵急立てられて向うへ入る。

〽後影、見送り〳〵、としや遲しと駈入る小春。

ト 下手の用水桶の蔭から、小春兩人を見送つてこなし、勝手口より駈入り、奧より出る。

小春　治兵衞さん、逢ひたかつたわいなア。

治兵　そなたは小春、こゝへはどうして。（ト思入。）

勘太　母様いなう。

〽慕ふ子を見るに二人は、いとゞ猶思ひくづをれ、抱きしめ、賺せばすやすや、稚子をいぶりながらも口說きごと。

ト勘太郎泣くを、小春抱き上げていぶしつけ、炬燵の中へ寢かす。

小春　何から云はうぞ、治兵衛さん、いつぞや曾根崎で、愛想づかしの悲しいお別れ、思ひ切つては居るけれど、太兵衛に身請しられては、所詮生きては居ぬ覺悟、この世の名殘にたつた一目と、來ごとは來ても、折惡しく立聞した内の樣子、あれほど貞女なおさんさんに、あふぎの別れさせますも、皆私から起つたこと、勘忍して下さんせいなア。

治兵　眞實な入譯を、聞けば聞く程、この身のあやまり、あのやうな女房が、三千世界にあらうかいなう、この言譯には、そなたも私も。

小春　そんならお前も。

治兵　おいの。

小春　嬉しうございます。

〽抱きしめたる泣じやくり、胸と胸とに云はせけり。

トこの時、奥にて三五郎謠ふ。

三五　高砂や、この金箱に餅入れて。

ヘ片言まじり、阿呆の三五郎、机に載せし三つ具足、兩手に抱へ、二人が眞中。

トこれにて、奥より、三五郎經机の上に、佛壇の鶴龜の花瓶、供物臺に、白餅の供物載せしを、目八分に差上げ、片手に銚子を持ち出る。

サア〲氣疎いもんになつたぢやないかえ、あの先刻に、お家さんの云はんすには、こりや三五郎よ、おれが留守になつたら、大方小春さんが御座んす程に、さうしたら旦那樣と祝言さすのぢや、われを賴むと云うて置かんしたわいな、そこで俺が思付いて、花瓶の松に鶴龜、酒の取つたのがなかつたによつて、水を銚子に入れて來た、仲人役の俺樣ぢや、禮には好きな虎屋の饅頭、これ今から阿呆と云はんすなえ、さア〲早う飲んせ〲。

ヘ云へど二人はいらへさへ、死なねばならぬ知らせかと、覺悟ながらも今更に、目はうろうろとなりにける。

ハア、こりや二人ながら泣んすの、これ泣んすないの〲、ハヽンさては嬉し涙ぢやなア。

小春　さいなア、そなたの云やる通り、嬉し涙がこぼれたわいなう、さりながら、治兵衞さんと祝言し

ては、どうも、おさん様に。

三五　エ、何の、済まぬことはござんせぬわいの、お家さんは出殻になつて、これ程甘い鰹節を、お前にやらんすこつちやもの、志を無足にせずと、きり〳〵飲んで差さんせいなう。

治兵　オ、こりや、三五郎が云ふ通り、祝言ぢやと思や、無理もある、互に末期の水盃。

三五　オ、さらば、お酌を申さうかい。

〽涙ながらに取上ぐる、酒と水とは土器の、土になるまで葬禮の、一本花や鶴亀の蠟燭立も、消ゆる身と、思へばいとゞ胸せまる。

トこのうち、三五郎土器を取つて酌する、小春、治兵衛飲むこなし。

サア〳〵、目出度うなつて來た、誰ぞ、マア謡うたひが來いでな。

〽と見やる外面へ、七つ子の墨の衣に草鞋がけ。

トこれにて、下手より、お末白斎附、墨染の衣、網代笠を冠り出て、勝手口へ來る。

お末　安養寺尼寺、常念はつち。（ト大きな聲にて云ふ。）

三五　そりやこそ來たわ。

〽と阿呆は駈出で、連れては入るを、顔見てびつくり。

トこれにて三五郎、お末を連れて入る、皆々顔見てびつくりこなし。

治兵　ヤアお末ぢやないか、わが身一人戻つたか、さうしてマア、變つた形をして。

お末　アイ祖父様に、こんな美しいべゝ着せて貰うた、あまりこのべゝは白いによつて、何やらたんと書いて下さつた、この書いたのを、父様や叔母様に、ちやつと見せて來いと云うて、祖父様がそこまで連れて來て下さつたわいなう。

治兵　ナニ書いたのを見て貰へとは、どれ／＼。

〽あたふた脱す墨染の、下には何か白無垢に、おさんが筆の散書き。

ト小春、治兵衛立寄つて、お末の衣を脱す、白無垢の着附に、何か書いてあるを見て、兩人こなしある。治兵衛讀む。

ナニ／＼、涙ながらに一筆示しまゐらせ候、先程、父様に連立ち歸り候節、小春様御忍ばせの姿確に見受け候へども、御存じの譯合故、お目もじもなり難く、書殘し申上まゐらせ候。

小春　ア、これ申し、治兵衛さん、私にも讀まして下さんせ／＼いなア。エヽ、とかく連合の命が助けたさ、小春様へ、わりなきお願ひ申上候ひしに、お聞届け賜はる嬉しさ、海山にも替へまほしく、何ぼう忝う存じまゐらせ候。

治兵　ア、。この御恩を送り候には、末々お二人を御夫婦となし参らせ候より、外なく候。

小春　その上、夫様の眞實を聞き、私事は、これまでの縁と諦めまゐらせ候、また、お末ことは、こなたの乳にて育て申すべく候、勘太郎がことを小春樣へ、くれ〴〵も願上げまゐらせ候。

（トこなしある。）エ、何の事ぢやぞいなう、こりやマア何の事ぢやぞいなう、そりや聞えませぬ。おさん樣、わしやお禮うける覺えはない、こりや私をば術ながらすのかいな、私やよう諦めてゐる程になア、ちやつと戻つて下さんせいなア、これ治兵衛さん、呼戻して下さんせいなア。

へと立つて見、居て見、うろ〳〵と譯も涙にくれ居たる、治兵衛はまたも取上げて。

治兵　ナニ〳〵、舅五左衛門申入候、エ、何の、アノ舅老爺の恩知らずめ、うぬが、何の、碌なことを書上げるものぢや。エ何々、舅五左衛門申入候、六年以前、あたはぬ銀山にかゝり、御損失をかけ候ところ、聟舅の由緣を以て、證文殘らず返し下され、千萬忝う奉存候。エエそりや知れたこつちやわい。エ、金子の減少、本家への聞えを思召し、それ故の遊所通ひ、初めの嘘が實となるは、われ人、若年の時を思出し申候、ム、先頃、娘に右の入譯、委細に承知仕候故、輕少ながら金子百五拾兩、先刻衣裝相改め候節、簞笥の大抽出へ差入れ置

き申候。エ、すりや、金子を簞笥の抽出へ、オ、これ、これいの、その簞笥の抽出をあけて
見や、エ、その下の方ぢやわいなう。

ト治兵衛、小春へこなし、小春うろ〳〵抽出をあけて、金包を取出す。

小春　オ、こゝにござんした。

治兵　オ、あつたか。エ、右の金子を以て、小春殿を請出し、長くお添ひ下さるべく候。

小春　そんなら、さつきの無慈悲なことも、みんな、情で御座んしたかいなア。

治兵　ナニ〳〵、娘さんことは、お末諸共、今日尼に致し。オ、これ、小春いなう〳〵、おさんが尼
になつたといなア。（ト泣く。）

小春　エ、おさん様が尼にならしやんしたら、私や、何とせうぞいなア。（ト泣沈む。）

治兵　テモおさんは尼になつたといなう〳〵。（ト泣く。）エ、娘さんことは、お末諸共、今日尼に致
し、貞玉、智月と法名つけ、天下茶屋尼寺、安養寺へ連行き、先刻下されし五十兩は、二人の
者の飯料、則ち寺へ祠堂金に上げ申候。

ト皆まで讀まず、兩人はわつとばかりに聲を上げ。

治兵　そりや胴慾ぢや、これおさん、そりや私を術ながらすのぢや〳〵、所詮死なねばならぬ此身、

子供の養育は誰がする、聞えぬぞや、これおさん。

〽情が仇となるわいやい、と悔み歎けば、阿呆も涙、小春は涙にむせ返り。

小春　そりや胴慾な。

〽おさんさま。

これまで悋氣もなされずに、逢してたまはる其御恩、こま〴〵文のお頼みを、聞入れたのが枷になり。

〽こんなことなら其時に、なぜさう云うて下さんせぬ。

これなア申し、治兵衛さん。

〽おさん様を呼戻し、千年も萬年と添遂げて下さんせ。

その身ばかりか、このやうな。

〽この子は可愛う、エヽマアないかいな、見れば見る程いたけな、愛に溺るヽ稚子の、乳房を離るヽいぢらしさ、孤子となしたるも、みんな私から起つたこと。

堪忍して。

〽とばかりにて取亂したる詫涙、晴間もわかず降りしきる、折からうそ〳〵善六太兵衞。

ト小春こなしあつて泣落す、治兵衞思入、下手から太兵衞、善六出で來り、勝手口から捨臺詞よろしく入り、奧より出て來て。

太兵　ヤイ治兵衞め、大方こんな事であらうと思うた、俺が請出して女房にする小春、うぬはまた何で引込んだ。

善六　コレ太兵衞さん、小言云うにや及ばぬ、これまで重々意趣ある治兵衞め、撲殺して腹癒せなされませや。

太兵　オヽ合點ぢや。

〽双方より打つてかゝるを、こなたもこゝぞ一生懸命、さへぎる利腕、しつかと捕へ。

ト太兵衞、善六の兩人脇差を拔いて切つてかゝる、治兵衞よろしくこなしあつて立廻つて。

治兵　コリヤ三五郎、お末勘太郎を連れて、堂島の舅の所へ。

三五　これでも、私が居ぬと、便りなからうがな。

治兵　エヽ阿呆云はずと、早う行け。

三五　合點ぢや。

〽おつと心得、三五郎手早く二人を伴うて、表の方へ出でゝ行く。

ト治兵衞、小春をかばうて、太兵衞、善六の兩人と立廻りのうち、三五郎勘太郎を背負ひ、お末の手を引いて、勝手口から出て、下手へ入る。

太兵　ソレ善六。

善六　オツト心得た。

〽云ふうち打込む善六太兵衞、折よく外づせば、二人は同士打ち。

太兵　そりや治兵衞めが、斬りおつた。

〽と云ふにびつくり、氣も顛倒、日頃の意趣に滅多打ち、乘掛つて止めの刀。

トよろしくどつちやの立廻あつて、トヾ太兵衞、善六同士打してへたる、治兵衞頭へながら止めをさす、小春びつくりこなし。

小春　アレ。

治兵　小春、こはいことは、何にもない、凝としてゐや。

ト小春、治兵衞に抱付く、治兵衞思入。

小春　ひよんなこと、ヤアすりや、二人を。

治兵　ア、これ。

ト合方、メリヤスになる。

コレ小春、こはいことはない、モウかうなる上は是非に及ばぬ、かねて云合せし如く、最期所は網島の大長寺、そんなら直に。

小春　人なきうちに。

治兵　サアおぢや。

〽手を引き急ぐ惡緣の、末は涙の藻汐草、噂の種となりにけり。

ト治兵衞、小春の手を取つて、勝手口へ出る、この見得よろしく。

幕

# 増補(ぞうほ)月(つきの)桂川(かつらがは)

# 増補月桂川

## 序幕

石部宿棒鼻の場
同　油屋の場
同　奥座敷の場

**役名**　帯屋長右衛門、片岡幸左衛門、丁稚長吉、家主六兵衛、村役人孫兵衛
油屋作兵衛、宿引長藏、馬士仁三、雲助又六、信濃屋お半、娘おきち、同お
かね、同おとく、おちやれお蔦、同お勘等。

石部宿棒鼻の場　造物一面の淺黄幕、ところ〴〵に松、石部と記せし傍示抗建てある、やアとこ
せいの唄にて幕明く。
ト向うより仕出大勢伊勢參の拵へにて出る、橋懸より仕出し旅形にて大勢思ひ〳〵の拵へにて、後
より抜參りの仕出し藁包を背負ひ、柄杓を持ち出て。

お半　長右衛門

拔參　ヘイ〳〵お願ひで御座ります。（ト柄杓を出す。）

△　エヽしつこいやつぢや。（ト云ひながら錢をやる。）

拔參　ヘイ有難う御座ります。

△　時に二人の衆、まだ暮るゝに間もあるが、やつぱり石部泊としようかの。

□　それがよう御座る、今日はよつぽどくたびれた。

○　イヤ又泊りが晩うなると、湯はぬるうなるし、ぢゝむさう御座る。

△　何でも、綺麗な宿を取りませう。

□　それがよう御座る、これ〳〵伊勢參の兄い、この石部宿では、旅籠屋はどこが綺麗だな。

拔參　さやうで御座りまする、讃岐屋か、油屋がよう御座りまする。

□　そんなら、讃岐屋か、油屋がよう御座りませう。

○　何でもよい、ひめのたんとある家にせうぢや。

△　又そんな事をいふわいの。

皆々　サヽ行きませう、御座れ〳〵。

ト皆々橋懸と臆病口へ入る、右の唄にて、向うより家主六兵衛旅形、ふけた親仁の拵へにて杖をつき、

あとよりおとく、おかね、おきち娘の拵へ筒袖浴衣を上つぱりにして出る、あとよりお半同じ筒袖娘の拵へ、あとより長吉丁稚にて芋を喰ひながら出て來る、あとより男一人雨掛を擔ぎ附添ひ出て來り、花道にて。

とく　モシお半さん、お前、さぞくたびれたで御座んせうなア。

お半　何の、わしや駕にばかり乘つてゐて、今日は晝から歩くのも、氣が晴れてよかつたわいなア。

かね　私も、大體面白い事ではなかつたわいなア。

きち　お前方は面白いか知らぬが、わたしや駕に乘つてゐては、思ふやうにだんごやお芋を喰べる事が出來ぬによつて、歩いて見たが、足が痛うてならぬ、おかねさん、お前もふともゝが擦れたであらうなア。

とく　そのやうな事云はずと、早う歩きいナ、おそうなるわいなア。

六兵　イヤモウ道草するも今明日、あしたの晩は京へ入つて、内でゆるりとおかアさまの乳が飲めるぞや、イヤモ娘子供をたんと預つてこの參宮、まだ時分の來た娘ではないが、しかし、今時の子供には油斷がならぬ。

ト皆々本舞臺へ來ると、長藏宿引の形にて出で來り。

長藏　モシあなた方、お泊りで御座りませうな。

　　　ト六兵衛こなしあつて。

六兵　ナニ泊れと云ふのか、わしは定宿が御座る、油屋へ行かねばならぬ。

長藏　左樣で御座りまするか、恰度よろしう御座りまする、私はその油屋のもので御座りまする、サア御案内いたしませう。

　　　ト六兵衛耳の聞えぬこなしにて。

六兵　ハテ聞分けの惡い、定宿があるといふに。

長藏　ハイ私がその定宿の油屋の者で御座りまする、御一緒にお供致しませう。

六兵　ハテハテ旅籠をねぎるやうな、そんなさもしい男では御座らぬ、定宿へ行かねばならぬと云うに、聞分のわるい。

　　　ト長藏合點の行かぬこなしにて。

長藏　ハヽアお耳がよつぽど遠いと見えますなア。

　　　トおきち見兼ねて、六兵衛の傍へ來て、大きな聲にて。

きち　モシおぢさん、この人は油屋の男衆ぢやといなア。

ト六兵衛うなづいて。

六兵　油屋の男衆か。そんなら、早うさう云へばよいに。

長蔵　ハヽヽヽサアお出なされませ。

トやはり右の唄にて、この人数皆々臆病口に入る、直にばた／＼になり、橋懸より、片岡幸左衛門布團を着て、縄の帯を締め雲助の拵へ、あとより馬士仁三、雲助又六外に大勢雲助附添ひ出で來り。

皆々　サア金はどうするのぢや。

幸左　これさ／＼、何もそのやうに、泥棒を捕へたやうにせずとも、いゝぢやねえか。

仁三　あんまり泥棒でない事もあるまい、われはよう此宿へのめ／＼と來たなア。

又六　こりやよう聞けよ、わりや此宿に居る内、立場の錢と、問屋行の荷物を盗んで、此宿をぽいとこた。

仁三　その跡で、おいら達仲間から錢を出して、償うて置いたわ、それでなけりや、此宿の仲間のやつらの顎にかゝるわ。

又六　うぬ一人、ふとい事をしやアがつて、仲間に難儀をかけて、それでうぬ濟まうと思ふか。

皆々　サアその錢を、今こゝへ出しやアがれ／＼。

トロ々にいふ、幸左衛門あやまつて。

幸左　まア〳〵静にしてくれ〳〵、成程手前達に、さういはれて見りや、ぎうの音も出ねえが、これ聞いてくれ、わいらが知る通り、まけて〳〵つまらねえから、ちつとのうち江州から、美濃路を働いて見たが、どうして〳〵東海道のやうに、うまい仕事はねえ、それで此宿へこけ込んで来た、此宿へ足を踏込からは、わいらの借も何もかも、済さずに置くものか、今日油屋へ持込みの三度荷、その取引さへ済めば、わいらの借位は、済ます程に、さう引摺る事はねえ、見つともねえ、マアこゝを放してくれなう。

仁三　われがさういふなら、打叩きするには及ばぬわ。

又六　どうで、その態では、一文もあるまい、よいわ、油屋の軒下まで一緒に行くわ、なアみなよ。

皆々　オヽさうするがよい〳〵。

幸左　そんなら一緒に行くか。

皆々　早う行け〳〵。

トわや〳〵いうて、幸左衛門を引立て、残らず臆病口に入る、と浅黄幕を切つて落す。

石部の宿油屋の場　造物常足の二重、上手一間の白壁に油屋と大きく書く、下の方大なる冠木門いつもの所門口、軒に伊勢大神宮月參と書きし掛札大分かけあり、向う一面に襖あけたてあり、下手に莨盆、行燈など取散しある、こゝにおきち、おかね、おとく、お半、緣結のこよりをひねつてゐる、長吉傍に手傳ひゐる、都て石部の宿油屋に泊りし體、馬士唄にて道具納る。

ト直に名古屋ぶしの合方になり。

きち　サア〳〵おとくさん、出來たわいなア。

とく　ほんに下草結びと云へば、出雲の國とやらでする事ぢやないかいなア。

かね　イエそれは十月になると、神さんが寄らしやんして、緣を結ぶさうで御座んす、なアお半さん。

お半　さうで御座んすといなア、とても神さんが結ばしやんすなら、人柄のよい、コウきつとした堅い殿御と、結んで下さんすりやよいけれど。

長吉　そんなら、お半さまの心と、この長吉の心とよう似てをりまする、わしは茶漬が嫌ひで、かちが好きぢや、かちめしを好きなものは、堅い女を女房に持つといふ事ぢや、それが私の樂しみぢやわいなア。

きち　それ〳〵、わしも嫁入するなら、アノ帶屋の長右衛門さんのやうな、さつぱりとした男を持ちたう御座んす。

ト此時六兵衞日記をつけてゐて、フト忘れた思入あつて。

六兵　長吉〳〵。（ト大きな聲でいふ。）

皆々　エヽ。（トびつくりする。）

長吉　エヽびつくりするわいの、自分がつんぼぢやと思うて、人を呼ぶのにまで、大きな聲をして何で御座んす。

六兵　今日晝飯を喰うた茶屋は、何とやらいうた屋名ぢや、われ覺えてゐぬか。

長吉　何ぢやゝら、そんな事を、おれが知るものかいなア。

六兵　何と、なにはやぢや、おれもたしかさう思うた。

ト眞面目にて日記をつける、此うち皆々こよりを拵へ。

皆々　サア〳〵始めようわいなア〳〵。

きち　モシ〳〵此中に、麩屋町の助兵衞さんも、入つて御座んせうな。

お半　わたしが隣の長右衞門さんも、書いて御座んせうな。

かね　そりやモウお前を、可愛がらしやんす長右衞門さん。

とく　一番に書いてあるわいなア。

長吉　モシおとくさん、この長吉の名も書いで御座んせうな。（トいやらしう眞中へ割つて入る。）

とく　エヽいやらしい、そつちへ寄らしやんせいなア。

トおとく突退ける、長吉わざとお半の方へ寄り添ふ。

お半　エヽ何をしやるぞいなう、そのやうに邪魔しやるなら、モウ〳〵長吉はしんに入れぬわい、ほ
ぢや〳〵そつちへ行きや。

きち　アレお半さん、可愛さうに入れておやりいなア。

お半　あんまり人を嬲ると、うちへ歸つて、かゝさんに告げるさかい、よう覺えてゐや。

きち　これ長吉どん、お前もおとなしうしいや。

ト六兵衞これを見て。

六兵　これ〳〵みんな仲ようして、遊ぼうぞや、翌は又草津の名物の姥ケ餅を、たんと喰さす程に、
機嫌よう遊ぶがよいぞや。

かね　サア〳〵機嫌直しに、早う結ばうでは御座んせぬか。

きち　ドレ〳〵わしが結ばうわいなア、わしや、ちつと望みが御座んす。

トおかねこよりを持つてゐる、おきち上の方を結ぶ、長吉傍から手を出すと。

皆々　これ長吉どん、手を出すまい。
とく　もつとしつかり結ばんせいなア。
皆々捨臺詞にて結ぶ、二本宛取分ける。
皆々　サア〳〵早う取分けて、開いて見なさんせ。
トおかねこよりをひろげる、皆々見て。
おかねさんぢやわいなア。
かね　おとくさん、早うこちらをひろげて見やしやんせ。
ト又一つをひろげて。
皆々　六兵衛さんぢや、オホヽヽヽ。
長吉　六兵衛さんとおかねさん、をかしや〳〵。
ト皆々立騒ぐ、六兵衛聞付け。
六兵　何ぢや、六兵衛〳〵と何をいふのぢや、此頃おれが逆上せて、耳がちつと遠うなつたと思うて、長吉わりや、馬鹿にしをるな。
長吉　ちつと遠いも、よく出來たハヽヽ。

六兵　又口答へしをるか。

ト眞面目になる、おきち大きな聲にて。

きち　モシおぢさん、口答へするのぢや御座んせぬ、今千草結びをして、お前とおかねさんと結んだので御座んすわいなア。

六兵　何ぢや、千草結びぢや、ませた遊びぢやの。

お半　サア〳〵あとを早うあけて、見なさんせいなア。

かね　今度は、わしがあけて、見ようわいなア。

お半　イエ〳〵わしにあけさせて下さんせ。

とく　そんなら一緒にしようでは御座んせぬか。

皆々　それがよう御座んせう。

ト おきち一組取る、おとく一組とり分けて、ひろげ見て。

とく　お半さんぢや〳〵、相手は誰で御座んせうな。
かね

きち　オヽをかし、こつちは私ぢや、相手は誰であらうな。

ト兩方にて、かた〳〵をひろげ見て。

皆々　長の字ぢやく。

きち　こりや、私の方も長の字で御座んす。

とく
かね　長の字ならば、長右衛門さん、嘸うれしいで御座んせうなア。

お半　あんまりなぶつて下さんすな。

トお半うれしきこなし、長吉は自分と心得うれしきこなし、おきちだんくひろげ見て。

きち　おまちく、長右衛門様はこちらで御座んす。

トおかねも段々ひろげ見て。

とく
かね　ほんにこちらは吉の字ぢやわいなア。

長吉　しめた。

きち　長右衛門さんと私だよ、わしやどうせうぞいなア。

トおきちうれしきこなし、長吉喜び騒ぐ、お半は腹の立つ思入にて、こよりを投付け。

お半　イエくこりや間違うたのぢや、おきちさんの結びやうが悪いによつて、何とも思ひもせぬ長吉と、それぢやによつて、私に結ばしやんすとよいものを。

きち　お半さん、無理ばつかり云ひぢや、私がしたのぢやあるまいし。

お半　イエ〱、お前がわざぢや〱。

ト　せり合ふ、六兵衛皆々の顔ばかり見てゐる。

皆々　こりや、何でも長吉のてんがうから、おこつた事で御座んす。

長吉　又人のわざにするのかいなア、面白うもない。

かね　サア〱これから、むくろじとりをせうでは御座んせぬか。

お半　イエ〱私や、そんな事は嫌ひで御座んすわいなア。

ト　腹立てる、皆々しらける、六兵衛推量して。

六兵　何ぢや〱、又お半坊がすねたのか、サア〱機嫌直したがよい〱、長吉われが、女の中へ入つてゐる故むづかしい、こりや、そつちへ退いていや、蜆貝共は世話のやけたものぢやハヽヽヽヽ。

ト　馬士唄になり、向うより長右衛門旅形一本差、あとより男雨掛かつぎ附添ひ出で來り、直に本舞臺へ來る。

長右　御亭主、今戻りました。

ト　これにて奥より、作兵衛宿屋亭主にて出で來り。

作兵　これは〱、旦那お早いお下りで御座りました。これ〱、お茶を持つて來ぬか、おみあしの

湯も持つて來やうぞ、サア〳〵お入りなされませ。

長右　アイ〳〵。

ト長右衛門供の男を連れて内へ入る、奥よりおかんおぢやれの拵へにて、茶を汲んで持ち出る、おつた同じくおぢやれにて、奥に湯を汲んで持つて來て。

つた　サア〳〵おみあしを。

トおつた長右衛門の足を洗ひにかゝる。

かん　コウおつたさん、このお客のおみあしは、私が洗ふ、そつちへ退いてゐいなア。

トおかん茶をそこへ置いて、長右衛門の足を洗ふ、

長右　ヤレ〳〵くたびれた〳〵。

ト此内始終お半すねてゐる、長吉長右衛門を見て。

長吉　ヤア長右衛門さんが御座つた〳〵。

トこれにてお半見付けて。

お半　ほんに長右衛門さんぢや〳〵。

ト長右衛門皆々を見て。

長吉　これは長吉、イヤお半坊、友達衆も一緒に、ハヽアコリヤおかげ參りぢやなア。

とく　アイお家主のおぢさんと、お伊勢参りの戻りで御座んすわいなア。

長吉　モシ〳〵六兵衛さん、長右衛門さんが御座つたわいの。

ト此内六兵衛横になつてゐたが、長吉に起されて。

六兵　何ぢや、長右衛門殿ぢや。(ト長右衛門を見て。)イヤこれは長右衛門さん、よう御座つた、扨はお前、伊勢参宮なされたのか。

長右　イエ〳〵わしはちつと商賣向の用で、清洲へ参りましたが、名古屋の方に用事もあり、東海道へ廻りましたが、お前さんは子供を連れて、よう参宮なされましたなア。

六兵　イヤモウ世話ばかりやけてなりませぬ、ハヽヽヽ。

ト此内お半長右衛門に茶を出す、おきちも同じく茶を出す事、お半長右衛門の煙管を取て、莨を吸付け出す。

長右　ヤ〳〵お半坊、嘸くたびれたであらうなう、わしも歸りぢや程に、明日一緒に連立つて歸りませう。

皆々　そんなら翌は、長右衛門さんと一緒で御座んすなア。

お半　早う夜があければよいなア、皆さん。

皆々　ほんに面白い事で御座んせうなア。
長吉　それではちつと、こつちの勝手が。イヤ勝手と云へば、モウ飯を喰はせさうなものぢやが。
ト此内おかん出て、長右衛門の前へ來て。
かん　ハイあなた、直にお風呂がよろしう御座りまする。
長右　アイ／＼、先客の衆はよう御座るな。
かん　あなた方はモウ濟みまして御座りまする。
長右　そんならドレ、くたびれを揉んで來ようか。
トやはり右の鳴物にて　長右衛門先に供の男、おかん案内して奥へ入る。お半跡見送りうれしきこなし、引違へて奥より、作兵衛出で來り。
作兵　ハイあなた方、御膳をあげませう、あちらへお出なされませ。
きち　そりやまゝぢや／＼。
長吉　六兵衛さん、おめしぢや／＼。
ト六兵衛聞付け
六兵　何ぢや、おめしぢや、シテわしらが座敷は何處で御座る。

作兵　ハイあなた方は、お二階へお出なされて下さりませ。
六兵　何ぢや、二階ぢや、何處でもよい。
とく
かね　そして長右衛門さんも、二階で御座んすかいなア。
作兵　イエ〳〵長右衛門さんは、奥座敷の見通しで御座りまする。
お半　やつぱり二階にしなさんすとよいけれど。
長吉　お半さん、そんな事云はずと、早くお出なされませ。
皆々　サア〳〵行きませう。
作兵　私が御案内いたしませう。

ト右の唄にて、作兵衛案内して、此人數皆々奥へ入る。トバタ〳〵にて冠木門の内より、幸左衛門逃げて出る、跡より以前の雲助皆々追駈け出て、内へ入る。

雲
皆々　うぬ、ふとい奴ぢや、逃すな〳〵。

ト大勢にて捕へる。

又六　この油屋へ持込みの錢を取るとぬかして、逃げやアがるは、やつぱりおいらを一杯欺しやアがるのぢや。

仁三　いつその事、錢がなけりや、叩き殺せ〳〵。

ト擲りにかゝる、奥より作兵衛出て。

作兵　これ〳〵、お客があるに、靜にさんせ〳〵。

皆々　イヽヤ構はんすな〳〵。

又六　いつその事、そんな奴は引括つて、問屋場へ連れて行くがよい〳〵。

皆々　こんな奴は殺しても大事ない〳〵。（ト立ちかゝる。）

作兵　まア〳〵待んせいの。

ト作兵衛いろ〳〵挨拶する、皆々構はず立ちかゝる、幸左衛門むつとする。

幸左　これまで〳〵待ちやアがれ、こつちにあやまりがあればこそ、先刻から默つてゐりやア、何だ、ぶち殺して大事ない、こいつは面白い、サア〳〵殺せ〳〵、借貸しは相對づく、殺されるなら殺して見ろ、殺しやア此石部宿の雲助めらは、みんな下手人、サア切れ〳〵、とサア云つちやア物に角が立つ、わいらも一つ鍋のものを喰つた中ぢやねえか、これ手前達に、損はかけぬ、まアもうちつと待つてくれ〳〵。

仁六　イヤならぬわえ、その口車で、何ぼう、むだ骨を折つたか知れぬ。

又三　無駄口をきかすど、問屋場へ引張つて行け〳〵。

皆々　オヽそれがよい、サアうせい〳〵。

ト皆々幸左衛門を引立てる、作兵衛とめる、此前より長右衛門出かゝり、此體を窺ひ居て、此時つか〳〵と出て、皆々を留め。

長右　これ待つしやれ〳〵、最前から大分騒々しいが、こりや、アア一體、事の起りは何した譯ぢやの。

皆々　客人の知らしやつた譯ぢやない、退かんせ〳〵。

長右　イヤ何もおれが構うた事ではなけれど、今聞けば借貸しの出入の様子、まアその譯を聞してたも、まんざら損も行くまいぢやないか。

又六　そんなら云うて聞しませう、この野郎は一體元はわしらが仲間で、此宿に居る内に、立場割の錢と問屋行の荷を盗みやアがつて、すつとこな。

仁三　その尻拭ひを、仲間がよつて償うて置いた所を、またのめ〳〵と此宿へうせやアがつて稼ぐ故、その勘定を取らうといふのが、元の起りぢや。

長右　ムヽシテその高は、どれ程ぢや。

又六　その金高は、木綿荷を持つていた償代が十五貫。
仁三　立場割の錢が四貫五百、二口合して、十九貫五百。
長右　オヽそれは思うたより僅な事、云はば人一人助ける事、わしも定宿のこゝへ泊り合したが他生の緣、ちつとこつちに。志の事もあり、その錢はわしが償うてやりませう。
皆々　エヽ。
　　　トびつくり、幸左衛門これを聞いて、長右衛門を見てびつくりして。
幸左　ヤアこなたは。
　　　ト逃げやうとする、皆々捕へて。
皆々　逃げやアがるな／＼。
長右　アヽコレ何も云はずに、云はゞ身の耻、借つたが不肖、十九〆五百とあるからは、金に直せば、丁度三兩、サアこれ持つて行かつしやれ。
　　　ト懐より小判三兩出して、作兵衛に渡す。
作兵　流石は京の商人衆、皆より禮を云はつしやれ／＼。（ト雲助に金を渡す。）
皆々　これは有難う御座ります。

仁三　これ又よ、打つても叩いても、出ぬ所を小判で三兩。
又六　それ〳〵結構な旦那が御座つた故、こつちも仕合せ、あつちも仕合せ。
仁三　えてこんな跡は、ひどい目に逢ふものぢや、足元のあかい內行かうか。
又六　オヽそれがよい〳〵、これは大におやかましう御座りました。旦那へイ、
皆々　有難う存じまする。

ト皆々がや〳〵捨臺詞にて向うへ入る、幸左衞門もぢ〳〵して。

作兵　イヤモウ旦那が御座つたばかりで、仕合せな男ぢや、サア早く歸らつしやれ〳〵。
長右　イヤどうせ明朝平人足を二人雇はねばならぬが、これを緣に此男を賴みませう。
作兵　左樣で御座りまするか、そんなら翌の朝早う御座れ、イヤ今のどさくさで奧のお客に御膳を上げなんだ、旦那お早うお休みなされませ。

ト作兵衞奧へ入る、幸左衞門もぢ〳〵表へ出かける。

長右　幸左衞門樣、待つしやりませ。

ト褄はず行くを、長右衞門捕へて。

マア下に御座らつしやりませ、エヽお前樣はなア〳〵。

ト合方になり。

この形は何で御座りまする、誰あらう。今出川の御家中片岡幸之進様の御子息、幸左衛門様ともあらう身が、この街道の宿場人足、馬士、船頭、お乳の人とあんまりなおちぶれやう、今もそこで雲助共が打ちやうちやく、氏も素性も正しい身を、何處の馬の骨やら知れぬやつらに、アレ泥棒よ盗人よと、それがお前の本望で御座りまするか、この長右衛門代々今出川のお出入、殊に御恩のある幸之進様、表向こそ憎い奴と仰つて御座つても、段々寄る年殊にたつた一人の御子息様、親旦那様がもしもの事があつた時には、片岡のお家は誰が立てやうと思ひまする、この長右衛門も御存じの通り、年に四五度は清洲へ參りまする、道中筋もしもひよつと逢うたなら、お連れ申して歸らうかと心を付けてをつたれど、これまではお目にもかゝらず、此度は清洲から大神宮へお禮がてら、この街道へ廻つたばかりで、お目にかゝるもお伊勢様のお引合せ、アレ御覽じろ、軒に並んだ掛札の内宮外宮を誓ひに立て、向後心を入換へて、元の侍になる心なら、直にこれからお供致して。お前様の心では、此形が面白いか知らねども、二本さす身に引變へて、息杖一本素裸で、往來端の野伏り同然、よもやこんな形で御座らうとは、此長右衛門も夢さら存じませぬ、私は格別親御様が御覽じたら、どのやうに御座りませ

う、思へば〳〵見下げ果たるお心ぢやなア。

ト いろ〳〵思入あつていふ、幸左衞門もぢ〳〵して。

幸左　イヤモ段々のお志、さういはれては此幸左衞門、このまゝこゝへ消えてしまひたい、不孝の罰かおちぶれて、在るに甲斐なきこのしだら、おぬしが手前面目ない、心は遠うに改めてゐれど、何をいふも身のあがきさへ出來ぬしだら、親人へ執成をして下さるなら、此後は侍冥利、親仁を地獄へ落す法もあれ、きつと心を入替へます、何にも云はぬ長右衞門殿、これぢやこれぢや。

ト手を合せ拜む、長右衞門こなしあつて。

長右　エ、らちもない、お前がさういふ心なら、此形では置かれませぬ、お待ちなされませ。(ト懐より金を二兩出して。)これでお前の身の廻り、髮月代でもして此油屋へ御座りませ、翌の朝一緒にお供いたしませう。

ト幸左衞門に金を渡す。

幸左　何から何まで忝い、しかし元の侍までは行くまいが、せめて雲助の足を洗うてなりと。

長右　必ず心を改めて、親御に孝行つくさつしやりませ、ほんに思へば、人の身と水の流れは知れぬ

もの。

幸左　昨日までも今日までも、つゞれ纒うた此體。

長右　翌はさう〳〵お供して、故鄕へ歸る錦の晴着。

幸左　洗濯袷でもうけませう。(ト門口へ出る。)

長右　そんなら歸らつしやるか。

幸左　これは旦那。イヤ長右衞門殿、お世話になりました。

ト馬士唄になり、幸左衞門思入あつて向うへ入る、長右衞門殘り思入あつて。

長右　ヤレ〳〵日頃尋ぬる幸左衞門樣、お供して歸れば、親御樣にも嘸御悅び、それはさうと信濃屋のお半坊、翌は一緖に連れて行かずはなるまい、ア、世話のやけた事ぢや。それはさうと淸洲のお屋敷から硏ぎに來たあの刀、大切な名作さうな、兩掛の中へ入れて置いたれば、反て氣遣ひはあるまい、ドリヤ荷物を調べて、早う寢ようか。

ト長右衞門奧へ入る、向うより以前の長藏先に、旅人の仕出三人附いて出て來り。

長藏　マア〳〵いづれ御相談いたしませう、マア〳〵お出なされませ。

三人　イヤ〳〵今の値でよければ泊らう。

長藏　マア〱お出なされませ。（ト舞臺へ來り。）左樣なら、明日のお辨當つけまして、百五十文でお泊りなされませ。

□　わしらは永い旅を抱へてゐるもので御座る。

△　辨當ぐるめ、百三十文でなけりやいやぢや。

○　よつ程安上りでなけりやならぬテ。

長藏　よろしう御座ります、左樣ならお泊申しませう、サア〱お入りなされませ。

三人　ヤレ〱くたびれた〱。

ト三人内へ入り、草鞋を脱く。

長藏　これ〱おみ足の湯を持つてお出で。

□　時に風呂はどうぢやな。

長藏　お風呂は直によろしう御座りまする。

○　そんなら足をすゝぐにも及ぶまい。

二人　さうとも〱。

長藏　そんなら直にお入りなされませ。

三人　サア〳〵行きませう。

ト神々捨臺詞にて奥へ入る。

返し

同油屋奥座敷の場　造物三間の間常足の二重、上手廊下付一間の障子屋體、向う唐紙襖、其次茶壁、床の間掛物、花生等よろしく、都て油屋奥座敷の體。下手板塀の前紫垣、右二重の上におつた二枚折の屏風を建て、下の方へも一組床を取つてゐる、直中におかん行燈の傍に鏡臺を直し頭をしてゐる。時の鐘合方にて道具納る。

トおかんおしろひを塗りながら。

かん　かう押し並んで、その床をもつとそつちへお敷き、全體この座敷は京のお客様が、一人の筈で御座んしたに。

つた　イエ〳〵旦那さんが、今夜は混合ふに依つて、こゝへモウ一人寢さしませいと、云はしやんしたわいなア。

かん　さうして、そのお客は、どんな人で御座んすえ。

つた　そのお客さんは、女の連れで御座つた、つんぼの親仁さんで御座んす。

かん　ハヽアそんなら、アノつんぼの親仁さんかえ、それなればよう御座んす、それではわしが鼻いきも聞えまい、ほんに心遣ひをさしたわいなア。

つた　お前の鼻いきとは。

かん　オヽわたしとした事が、オヽすかん。

つた　お前そこを仕舞つて下さんせ。（ト鏡臺をとりにかゝる。）

かん　ハテ意地の惡い、マアお待ちといふに。

ト此時奥より作兵衛出で來り。

作兵　これ〳〵床を敷いたら、あちらのお客に、お茶をあげいよ。

かん　ハイ〳〵只今上げましたわいなア。

作兵　早う行け〳〵。

トおつた鏡臺を持ち奥へ入る、おかん小言をいひながら奥へ入る、奥より長右衛門出て來り、作兵衛莨盆を持ち行く。

長右　これ御亭主、どこで御座るな。

作兵　ハイこちらで御座りまする、これへお出なされませ、今晩はごふせうなされて下さりませ。

ト上手障子屋體の内へ連れて入る。

長右　アイ〳〵毎度お世話になりまする。

作兵　左樣なら、おやすみなされませ。（ト行きにかゝるを。）

長右　アヽモシ〳〵あちらに置いた雨掛に、銘付のあるのを、そのまゝ持つて來て貰ひたい。

作兵　ヘイ〳〵承知いたしました。

長右　次手に茶を一つ下されし。

作兵　ハイ〳〵畏りました。お茶を上げませう。

ト奥へ入る、長右衞門着物を脫いで夜着を着て、莨を喫みゐる、おかん雨掛の荷を持ち出て來り。

かん　ハイお荷物をこゝに置きまする。

長右　オイ〳〵お世話で御座んす。

トおかん長右衞門の傍へ荷を置き、直に入つて又盆の上に茶を載せ、片手に枕一つ持ち出て思入あつて傍へより。

かん　ハイお茶上りませ。

長右　アイ〳〵。

ト茶を取る、おかんいろ〳〵思入あつて。

かん　モシあなた、今晩はおくたびれなされたで御座んせうなア。

長右　サアくたびれたから、宵寢と出かけるのぢや。

かん　そんなら私は、おあしでもさすりませうかいなア。

長右　イヤ〳〵おりやこそばゆうて、按摩はきつい嫌ひぢや。

かん　そんならどこぞ外のところをさすりませうかいなア

ト傍へ寄ると、長右衛門びつくりして飛退き。

長右　ヤレ情ない、そつちへ行かんかいなア。

ト突退け、前側の障子を立切る、おかん思入あつて。

かん　ほんに女の据膳を喰はぬといふは、恩知らず、粋な男と折角しかけて來たものを、エヽすかんお方なア。

トぴんしやんして奥へ入る。長右衛門捨臺詞にて寢る、奥よりおつた案內して、六兵衛出て來り。

六兵　どこへ寢るのぢや〳〵。

つた　ハイあなたはこゝで御座りまする。

さやうなら、ごゆるりとおやすみなされませ。

ト下の方へ六兵衛を寢かす。

トおつた奥へ入る、六兵衛寢道具を見て。

六兵　これ〳〵姐よ、錢は出してもよいから、もつとよい布團を借さぬかいの、せめて枕でも取替へてくればよい、これでは頭が痛うてならぬ。（ト云ひながら布團を敷く事あつて。）今晩一晩ぢや、辛棒せう、ドレ一ぷく喫んで寢よう。

ト莨を喫んでゐる、奥より孫兵衛宿帳を持ち、矢立帳面と石部宿問屋と記せし弓張を持ち出で來り。

孫兵　ヘイお宿帳を付けに上りました。

六兵　ハイ何ぞ、賣らつしやるか。

孫兵　ヘイお宿帳で御座ります。

ト六兵衛提灯を見て。

六兵　これ〳〵お前、わしは今あちらの座敷で、宿帳は付けて了ひました、お前二文宛取つたぢやないか、二階座敷が狹いから、わし一人こゝへ寢るので御座る。

トこれにて六兵衛をよく〳〵見て。

孫兵　左様なら、京都の女子連のお方で御座りますか、これは大に不調法申しました。

六兵　ナニお前年寄れば、一人寝るが氣樂でよう御座るわいの。

孫兵　イヤこれは、西の宮のおゑびすと來てゐるわえ。

六兵　ハイ後生も隨分願ひまするが、イヤ又太神宮様は有り難う御座る、なんでも去年の御遷宮から、今年へかけてのおかげ參り、古市の町などは、道者でとほりきれぬ、わしも子供を連れて、よう〱と參宮いたしました、お前方も錢儲けで御座りませう。

孫兵　これはけしからやぬ長談議ぢや、こんな事を聞いて隙ゐるがない、ドリヤ行から〱。

ト立つて行きかけるを、六兵衛留めて。

六兵　マア〱もつと話して御座ればよいに。

孫兵　そんな事は、庚申の晩に聞きませう。

六兵　左様ぢや、もう四つでも御座りませう。

孫兵　つんぼの間拔親仁め。（ト辭儀していふ。）

六兵　ハイ有難う御座りまする。

ト孫兵衛奥へ入る。

宿の内の衆は、叮嚀なものぢや、ドレ寢ようか。

ト此内始終時の鐘、六兵衛いろ〳〵あつて、枕につき布團をかぶる、合方になり、バタバタにて奥よりお半投帶形にて逃げて出る、あとより長吉シイ〳〵云ひ乍追うて出る、お半アレ〳〵と逃廻る、長吉シイ〳〵と追廻す、立廻の内行燈をこかし灯消える、時の鐘、太鼓の音、長吉お半の投帶を解き、着物を捉える、お半長襦袢のまゝすつぽり拔けて、上の一間へ逃込む。長吉慌て奥へ入る、お半は長右衛門の布團の傍へ行て

お半　おぢさん〳〵、長右衛門さん〳〵。

ト ゆり起す、長右衛門寢入ながらうつゝのこなしにて。

長右　ムウ今朝、石部宿からよう〳〵今着いた、くたびれた〳〵。

お半　オヽしんき、京へ戻つたと思うてぢやさうな、これおぢさま、目を醒して、長吉を叱つていなア。

ト長右衛門やはりうつゝにて。

長右　これはしたり、せはしない、おきぬ、内外の者もまだ寢ぬぢやないか。

お半　アレまだおばさんぢやと、思うてぢやさうな。

トこれにて障子入れる。長吉奥より行燈をさげながら、そろ〳〵出て、そこら方々を探しながら

長吉　お半さん〳〵、何處にぢやなア、モウ〳〵てんがうしやせん程に、早う戻つて寢やんせ、エ、これはしたり、何處へかくれてゐやんす、エヽわしが思ふやうにもない、風を引くぞえ、エ、さつきにこゝの菩薩がいうた、長右衛門さんはあの一間に寢てぢやというたが、大方長右衛門さんの枕元へ逃げていたのか、ア、何にも告げさんせにやよいが、長右衛門さんの耳へ入れて、ひよつとこちの後家御へ知られたら。何でも様子を。（そつと上方を窺ひに行き、耳そば立て、）やア〳〵こりや、（トさし足して障子の内を覗き。）サア〳〵存じの外の事拵へをつた。

トお妻八郎兵衛の唄になり。

今隣の宿で、おぢやれが歌ふは、アリヤ古手屋八郎兵衛、惚れたお妻を香具屋彌兵衛に寢とられた腹立、丁度おれが身の上とおんなじ事、

トツカ〳〵と床の間の前へ、行き刀を取つて來て、ふんどしの上へさし、手拭にて頰冠して、花道へ行き。

千人萬人の男の中に、誠を立るは此長吉ばかりぢやわい、お半この世で面は見ぬぞや、いつそ踏込んで二人共、イヤ〳〵向うを切れば、こつちも首が飛ぶ、戀の意趣を晴らす近道はハテナア、オヽ最前、表の座敷で聞いた後付に入つてある脇差は、清洲の屋敷から京で研がせと誂

へ、長右衛門が預つた大事の棒鞘、擦り替へるには幸ひ隣の騷ぎ。

ト流行唄の合方になり、さし足ながら、廊下より障子をそつと明け、刀の箱を引出して下手へ持つて來て、六兵衛の煙管にて錠をこぢあけ、棒鞘の身とわれが脇差の身を入替へ、元のやうにする內六兵衛大きな聲にて寢言をいふ、長吉びつくりして胸を撫でおろし震ふ。奥よりおかんちり紙を咬へ片手に手燭を持て出ち來る、長吉これに驚いて下手の垣の前に震ひながらかゝんでゐる、おかんフト長吉を見て。

かん　そこにゐるのは、誰ぢやいの、（ト手燭を持ち下手へ行く。）

長吉　オイけたゝましい、何ぢやいなう、びつくりするわいの。

かん　お前は女中達の丁稚さん、此夜の更けたのに、そこに何してゐるのぢや、早う行て寢さんせいの。

長吉　エ、おりや、アノ今こゝへ小便しに來たのぢやが、お前又今頃こゝへ何しに來たのぢや。

かん　エ、わしかえ、わしは。

ト行きかけるを、長吉留めて。

長吉　これ。

トおかんに囁く。

かん　エ、そんなら。

長吉　アコレ。

トあたりを窺ふ、此模様よろしく。

拍子幕

# 二幕目

祇園社內の場
同二軒茶屋の場
四條河原惣嫁小屋の場
同幸左衞門殺しの場

役名　帶屋長右衞門、甥儀兵衞、丁稚長吉、片岡幸左衞門、針の宗兵衞、佛壇屋才二郎、國侍鐵右衞門、家來可助、坊主一人、惣嫁ぞめき大勢、長右衞門女房おきぬ、藝子雪野、仲居お竹、同お梅、同お京、下女お松、橋下のお六、惣嫁おくぼ、同おいく等。

祇園社內の場　造物向う淺黃幕、上手の方に繪馬堂、下手に葭簀の茶店、床几三脚ばかり出しあ

お半　長右衞門

り、都て祇園社内の體。辻打にて幕明く。

ト仕出大勢坊主一人出て、床几にかけ。

△　何といつでも、祇園樣は賑はしい事ではないか。

□　イヤモウ流石は花の都で御座る。

○　祇園清水智恩院とて、こゝらが京の眼目で御座る。

坊主　イヤ又此祇園樣でも、清水でも、願掛けるなら、お百度も錢ざしでせうより、やつぱり錢で一文宛くじを取つてさつしやる方がきゝめが早いテヤ。

△　それでは此方衆の勝手はよからうが、時節柄ぢや、たゞで拜むが勝手ぢやわいの。

坊主　そなたの損の行くのは、我ら構はぬテ。

□　イヤその神も佛も、當世は兎角れそづくぢやわいの。

○　イヤモれそめは、なにかにつけて調法なものぢや。

△　ハヽヽ貴樣も好きぢやなう〳〵。

○　どれ〳〵、これから輕業なと見ませうわい。

皆々　よからう〳〵、サア〳〵御座れ〳〵。

ト捨臺詞にて皆々入る、又辻打になり、臆病口よりお絹ぼうし着流し抱帶にて日傘をさし、お松下女にて惣袋を持ち附いて出で來り。

お松　お家樣、結構なお天氣ぢや御座りませぬか。

お絹　さいなう、お天氣がよいと賑かな事いなう、オヽそなたが最前いうたお土産を、大儀ながら買うて來てたも。

お松　ハイ／＼畏りました。惣袋はこれに置きます。

お絹　早う往て來てたも、こゝにをります程に。

トしかじかあつて上手へ入ると、又辻打にて橋懸より儀兵衛着附羽織にて出で來り、お絹を見て。

儀兵　オヽこれはお絹樣か。

お絹　儀兵衛樣、ようお參りなされました、四條の芝居でも見物に御座んしたかえ。

儀兵　何の、見物どころかいの、お前が此祇園樣へ日參と聞き、お前の跡を追うて來たれど、とんと群集にもまれて見失うた、よつて一へんと尋ねてゐる所ぢや、奇特に毎日／＼ようお百度なされまする、いかなる願にてましますぞ。

お絹　さいなア姫御前の願といふは、いつまでも夫婦仲よう、第一は姑御さまのどうぞお氣に叶ふや

うにと、此祇園樣へ御苦勞かけるのぢやわいなう。

儀兵　したり貞女かな〳〵、その心と美しい顏に、首たけいきついてゐるわれら、明暮れくどけど、一つも埒の明かぬ事ぢや、その埒の明かぬ處で、兄貴は玉がかへつてあるぞえ、美しいお前を置いて、川東へ入り込んでゐらいなう、まだそれでしたらいで、隣のお半にまでひどれを入れたを知らずかいなう、ア、結構な人ではあるわいなう。

お絹　ア、これ儀兵衛樣、やくたいもない、折ふしの東通ひは殿御のありうち、又まだ柄といひ年も行かんお半さん、殊に主の世話で、私が弟才二郎の方へ片付ける相談、そんな事があつて、たまりますものかいなア、すつかり皆世間のいひなし、てんがうにも云うておくれな。

儀兵　お前、おだてると思うてか、證據はこれ此状、長さまゐる、半より、何と、こんな状があつても、さうでないかえ。

ト紙入より、状を出して見せる、お絹こなしあつて。

お絹　いかさまなア、どうやら合點の行かぬ、その文一寸私に見せて下さんせ。

儀兵　イヤそれから御覽らうじ、ちつとこつちに入用な證據の状、めつたに人の手に渡されぬぢや、それとも又わしがいふ事、ウンといふ心なら、大事の状ぢやけれど、ハテやるまいものでもな

いが、ウントいふ氣かえ、やつぱりいやか、サアどうする氣ぢやえ。

トいやらしう寄添うていふ、お絹思入あつて。

お絹　そのやうにいうて下さんす事、私ぢやとて、滿更厭ぢやなけれども、主のある私、なぶらしやんすと思うてゐたが、ハテ誠の氣なら、折を見てどうなとするわいなア。

儀兵　エヽ忝い、お前さへその氣なら、長右衞門は常住留守なり、おふくろにはちつとも遠慮はなし、内で何ぼも首尾がある、その禮やら、手付やらに、一寸お口を。

ト抱付きにかゝるを、おきぬ突飛して。

お絹　アヽこれ人が見るわいな、門中でぢやら〳〵と、そんな浮氣な事では面白うない、内へいんでから、どうなりとなるわいなア。

儀兵　オツト近年の不調法、あやまり〳〵、こゝでぐづ〳〵隙入らうより、先へいんで待つてゐるぞえ、お前早う戻つてお出え。

お絹　マア先へいなしやんせいなア。

儀兵　どりや仰せに從ひ、ちやつと歸らう、とは云へ、一寸念の爲め。

ト又抱付にかゝるを。振拂ひ。

お絹　エヽこれは又聞分けのない。
儀兵　アノ此倅めぢやなア。

ト唄になり、むづかしう向うへ入る、お絹あとを見て。

お絹　現在の兄嫁に不義いひかける道しらず、こちの人に告げて、憎さも憎しと思へども、姑御のつれ子なれば、荒立ては主の爲になるまいと、じつと虫をしなしてゐても、あんまりで胸がくらくらする、何よりかより、今の文持して置いては、長右衞門殿のいひぬけが、ハテ何としたものであらうかなア。

ト辻打になると、橋懸より、長吉紋付の着附にて、肴籠を持ち出て、花道へ行く、お絹見て。

これ〳〵そこへ行くのは長吉殿ぢやないか。

ト これにて、長吉振返り見て。

長吉　オヽあんたは、隣のお家さん。
お絹　長吉、よいところへ、今日は何所ぞへ使にか。
長吉　ハイ、ツイそこな下河原まで、肴持つて參りました、お前は芝居御覽じますのか。
お絹　イヽヤわしや祇園樣へ參つたが、ちつと此方に話したい事がある、一寸こゝへ來て下され。

長吉　ハイ私や早ういなんと、又お家さんに叱られますよつて、お先へさんじます。（ト行かうとするを。）

お絹　アヽこれ長吉、どうぞ、わしもモウいぬる道、連立つていぬわいなう、マア〱待ちやいなう。

長吉　それでも隙が入ると、又芝居でも見てゐたやうに、ゑらうかみ付けられますによつて。

お絹　ハテ内へいんで叱られぬやう、わしが断いうてやらう程に、マア〱こゝへかけやいなう。

トこれにて本舞臺へ來り。

長吉　そりやもう、お絹様がさういうておくれなさつたら、叱つてゞは御座りませぬ。

お絹　此間から、そなたに逢うて、云はう〱と思うてゐたが、丁度よい所で逢うたわいの、マアマア一寸こゝへごんせ。

長吉　ハイ左様なら、掛けまして御座ります。（ト床几へ腰をかける。）

お絹　扨話したいと云うは外でもない、そなたの所のお半さんと、こちの長右衛門殿との譯を知つてゐやるか。

長吉　エヽ。

お絹　かくしやんな〳〵、知つてゐやうがな。

長吉　ハイ。イエ何もそんな事は存じませぬ、滅相な事仰れ、何の私がそんな事知りませうぞいな。

お絹　イヤ〳〵かくしやんな、よう知つてゐる癖に、わしに云うたら悋氣して、怒らうかと、そなたまでが知らん〳〵、とそのやうに云やるけれど、よもや知らぬ事はあるまい、又此事を詳しうわしに聞かせると、そなたの爲によい事もあり、ありていにコレ聞かしやいなう。

長吉　ハイさう仰しやらば、云ひませうが、知つてをります、外の者は格別、私ばかりはどうゑらい所を見て知つて居ますわいな。

お絹　それ見や、よう知つてゐる癖に、そりやマアいつからの事いの。

長吉　いつからの段かいな、ソレ此春伊勢參りの戻り道で、内方の旦那長右衛門さんは、清洲のお屋敷とやらへ御座つての歸りがけ、石部の宿で出逢うた晩に、エ、思ひ出しても、けたいが悪い、モウ〳〵腹が立つやら、どこもかしこもいき〳〵と、只話すさへ、身顫ひが出ますわいの。

お絹　オ、道理〳〵々々、日頃から我身が惚れてゐやるお半殿、寝とられた事ぢやもの、腹立いで何とせう。

長吉　アヽイエ〳〵滅相な、何の私がそんな事。

お絹　イヽヤかくしやんな、知つてゐる、これ粹ぢやわいの〳〵、何のわしに隱す事がある、そなたも子供心によく〳〵思うてゐやるが、いぢらしさと、又わしもあんまり心ようない故、そなたの戀を叶へてやるが、何と此談合には乘る心はないか。

長吉　モウさういうておくれると、隱すは惡いによつて云ひますが、エヽけたいが惡い、お前の手前も恥しいが、有樣はお半樣にけたいに惚れてけつかるぢや、お前の智慧で、どうぞ女夫にしてくれる事なら、どんな事でもきつと聞く氣ぢや、マア云うておくれんか。

お絹　その氣なら談合せう、近い内にこちの内で、此事をわしが打割つてもやつかすわ、その時そなたが出て、お半に外のねんごろ男はない、慮外ながらお半さまとこの長吉は深い仲ぢや、伊勢參りの道からねんごろしてゐる、とつゝぱつていやると縱へでんどへ出ても、互に女なし夫なし、そなたの女房に立つ、又長右衞門殿がどのやうにあらがはしやつても、何所までもそなたの女房、主であらうが家來であらうが、一度でも抱いて寢る事さへ云ひぬくと、夫に立つが世界の掟、そこでわしも悋氣も助かり、そなたの戀も叶ふといふもの、何と合點がいたかいの。

長吉　ゐらいきようといヽ氣のつけどころ、どいつが何う云はうが、お半さまはわしがねんごろして

ゐると、龍宮の底までも、いひつゝぱる事は呑込んでゐるが、それではこちの後家御が、わしをぼい出すは知れてある、さうなる時はとんと詰らぬ臺詞ぢや。

お絹　こりや又そなたにも似合ぬ、そこらの事を案じてゐて、色事がなるものかいな、きついおぼこ者ではある、追ひ出さるゝに極つたら、お牛はおれが女房ぢやと大きな顔して出たがよい、誰が一人點の打手はないわいの。

長吉　成程さうぢや、お牛はおれが女房ぢや、というて手に手を引いて出ていたら、後家御でも何とでもいふ事はならんわ。

お絹　さうして出て了うたら、二人暮す程にわしがつゞけてやる、マア當分小遣をやつて置かうか。

ト惣袋より、金入の一歩五つ、紙に載せてやる。

長吉　こりや一歩が五つあるわい、お絹さま、これを私におくれかえ、お家さん、モウ〳〵お前の下知は何でもそむきはいたしませんぞ。

ト此時上手よりお松、袱紗包を持ち出で來り。

お松　お家さん、おみやを買うてさんじました。

長吉　オヽお松どん、土産の饅頭買つてお出でたか。

お絹　サアその心悶つたら、連立つていにませう。

長吉　ハイ〳〵お供いたして歸りませう。

お松　サアお家樣。

ト惣袋を持ち、日傘をお絹に渡す。

お絹　ドリヤ連立つて歸りませうか。

長吉　サアお出なされませ。

ト又辻打になり、お絹日傘をさし、お松を連れ、長吉跡より肴籠片手に金をなぶりながら嬉しさうに附いて入る、これにて絵馬堂引取、淺黄幕切つて落す。

返し

祇園二軒茶屋の場　造物少し奥深に、祇園石の鳥居、臆病口と橋懸は藤屋中村屋の心にて、青竹の境界、此うしろ障子屋體、葭簀の屋根、軒に紅摺提灯、横手に暖簾を掛け入口のこゝろ、よきところに床几二脚並べ、都て祇園二軒茶屋の體よろしく、騒唄にて道具納る。

ト誂への鳴物になり、向うより片岡幸左衞門着流し大小にて、藏屋敷の侍の形、可助中間の形にて附添ひ出て。

幸左　日和がよいと、さて賑やかな事だ。

ト捨臺詞にて本舞臺へ來る、橋懸より長右衛門着附羽織にて、風呂敷包みの梓箱をさし、これも捨臺詞にて出て、舞臺附際にて行合ひ、互に顏見合せ。

長右　これは片岡幸左衛門樣では御座りませぬか。

幸左　さいふは、帶屋の長右衛門殿、此程は御無得申された。

長右　あなたさまにも、御機嫌よい體珍重に存じます。

幸左　お手前も無事で重疊に存ずる。

ト兩人前の床几に腰かける、可助は下手につくばふ、

長右　先づもちまして、此度清洲表の御用先、御實父樣の御執成忝う存じまする。

幸左　これは〳〵、お世話のお禮は、此方よりこそ、先達て親共の勘當を請し拙者なれども、貴殿のお執成故、元の侍に立ち歸つた幸左衛門、なか〳〵おろそかには存じ申さぬ。

長右　これは又痛みいつたるお詞、扨て貴公樣へ折入つて、お尋ね申したい儀が御座ります。

幸左　ナニ身共にあの折入つて、そりや何事で御座るな。

長右　イヤその儀は外でも御座りませぬ。

ト フ ト可助を見てこなしあつて。

可助　ナニ御家來衆、御苦勞ながら奥へ御座つて、追付け旦那を御同道申すから、座敷を明けて置いてくれいと、吩咐けて下さりませ。

ト可助上手の屋體口へ入る、跡合方になり。

長右　ネイ〳〵畏りました。

　云はゞ他聞を憚る大切な事、幸左衞門樣必ずお腹はお立て下さりますな、お尋ね申したいと申すは此刀の事。

ト腰にさしたる風呂敷包を開き、棒鞘を出す、幸左衞門合點の行かぬこなしにて。

幸左　ム、そのお手前の刀がどう致した。

長右　されば此刀、當春貴殿へお目にかゝつて、御同道申した折、尾州淸洲のお屋敷にて、研にかけよとお預り申して持歸り、早速研に遣し、よう〳〵今日お屋敷へ持つて上つた所、これ御覽じませ、似ても似つかぬ鈍刀物。

幸左　ム、これがなまくらになつたら、どうする。

長右　近頃疎忽な事ながら、よもやあなたには御存じ御座りますまいが、幸左衞門樣、お屋敷へお連

立申して御親父にお詫申して歸りました折から、あなたのお差料とかはりましたといふやうな事は御座りますまいかと、存じまして。

幸左　これサ／＼長右衛門、そりや何を申す、その名作身共も知つた殿の御秘藏牛王吉光、それを身共が屋敷に待つてをつた間に、摺替へて盗み取つたと、しかと見届けおいやるか。

長右　イヤ全く以て、左様では御座らぬ共、もしや物の間違で。

幸左　これ／＼長右衛門、かりそめならぬ大切の儀、疑ふも事による、證據もたい事おいやつて、此幸左衛門を盗人におしやるか。

長右　滅相な、どういたしまして、あなたさまを。

幸左　左様でなくば、此方に覺えはない、あた馬鹿／＼しい。（ト灰吹を叩く。）

長右　左様にお腹お立下さりましては、なか／＼お氣の毒に存じまする。

トつぎほなきこなし、又はでなる鳴物になり、橋懸より才二郎着附羽織にて出て、兩人を見て。

才二　これは長右衛門様、幸左衛門様では御座りませぬか。

幸左　おぬしはこれなる長右衛門が親類。

才二　ハイチト用事が御座りまして、此邊まで。イヤ早速ながら長右衛門様へ、ちつとお願ひ申さに

やならぬ儀が御座りまする、外の儀でも御座りませぬが、チト急に金子入用が御座りまして、宿元へ歸りましたら、早速お歸し申しまする程に、お手元にお持合が御座りませうなら、どうぞ三十兩お出しなされて下さるまいか。

長右　よく〳〵急な事なればこそ、つひにないおぬしが無心、今日幸ひとお屋敷の爲替の金、請取つて來た内三十兩、用立てませう。

ト小判三十兩出して渡す。

才二　これは有難う存じまする。明日は早速お戻し申しませう。

長右　呉服所へ手附金に渡す金ぢや程に、翌日夕方までに持つて來てくりやればよい。

才二　間違なう、きつと持參致しまする。

ト金を財布へ入れる。

長右　幸左衞門樣、あなたにも金子入用の儀でも御座りますれば、必ず御遠慮なう仰つて下さりませ、時に御家來も退屈して待つて御座らう、藤屋の座敷で一つ參りませうか。

幸左　イヤ〳〵屋敷に用事もあり、これにてお別れ申さう。

長右　マア〳〵左樣仰らずと、サア〳〵お越しなされませう。

幸左　成程達て遠慮も失禮なれば、參らうか、長右衞門。

長右　才二郎、靜に行きや、サアお出なされませ。

ト唄になり、幸左衞門先に長右衞門暖簾へ入る、才二郎殘り。

才二　よい所で、長右衞門樣のお目にかゝり、三十兩借り受けたれば、これで雪野の身の上も片付くといふものぢや、ヤレうれしや〳〵。

ト下手の中村屋より雪野茂子他所行の形にて出で。

雪野　才二郎樣逢ひたかつたわいなア。

才二　オヽ雪野、おれもそなたに逢ひたかつた、さつきから來てゐやつたか。

雪野　アイなア、お前に急に話さにやならぬ事があつて、文を上げたは、兄さんの云はしやんすは、百兩の身の代を渡して、急に私を引すといふ客が、今日中とやら翌までとやら、金渡さう程に、お前の所へ行く氣なら、才二郎樣に此事をいうて、早う金を才覺せいと、兄樣のいうてゞ御座んす、お前その心當りが御座んすかえ。

才二　さればいなう、おれもその事を聞いた故、マア百兩の手付として、三十兩渡さうと思うて、長右衞門殿に三十兩借つたわいなう。

雪野　エヽ嬉しう御座んす、シテ長右衞門様も來てゞ御座んすかえ。

才二　たつた今商賣向の金ぢやというて、借受けたが、それは又身内なりやこそ、他人にいうて、此やうに早速に埒が明かうかいなう。

雪野　さうで御座んす、それにつけても、あやかりものといふは、お前の姉さまのお絹様、心立なら、發明なり、アノ粹な長右衞門様に添ひ遂げさんす、と思へば、ほんにわたしや嬉しいわいなう。

才二　さればいなう、わしが姉貴や、長右衞門殿を褒めるではないが、實に惡氣は微塵もなし、ほんによう似た女夫ぢや。

雪野　追付け、私等二人も女夫になつて。

才二　なんたらいうて悦ばしたり。

雪野　エヽ〳〵、憎やの、こちやほんまにいうてゐるのに。

トつめる、才二郎つめり返す、此内幸左衞門生醉にて出て、うしろよりこれを見てゐて、此時前へ出て。

幸左　よう〳〵、才二郎うまい事〳〵。

ト これにて兩人びつくりして。

才二　あなたは幸左衞門樣。

幸左　才二郎、雪野もてるわ〳〵。

雪野　オヽはづかし。

ト兩人思入、幸左衞門こなしあつて。

幸左　恥しいとはまだしも、才二郎もので御座るわえ、ありやうは身共この雪野にちと執心あつて、一兩度呼びに遣した事もあつたれど。イヤから致さう、此後雪野が事は、ふつ〳〵思切つて、お身に逢さう程に、隨分見捨てぬやうに目を掛けてやつてくりやれ。

才二　これは又改つた、あなたがお呼びなさる事存じたら、何しに、私が。

幸左　イヤ〳〵それはお身が義理といふもの、雪野も今から心置かずと、逢うたがよい。

雪野　それで私が心もさつぱりと、エヽ幸樣、うれしう御座んす。

幸左　アノ嬉しさうな顏はいの、アノこゝな色事師め。

ト才二郎を扇で煽ぐ、才二郎じつなきこなし。

幸左　時に才二、お身に話したい事がある、外の事でもないが、先刻これへ參りがけに、道具屋に逢

うたれば、押付賣に是非なく腰の物を調へたが、折節持合せがない、歸宅いたしたら、早速持せて遣さうから、金子所持なら一寸用立てくれまいか。

才二　それはお氣の毒に御座りまするが、御存じの通り、最前兄貴に借受けまして、金子はこれに御座りますれど、私もちと急に入用の儀が御座りまして。

幸左　成程左樣の儀もあらうなれど、さしあたつて幸左衛門恥をかく事、最前も聞きやる通り、長右衛門に無心が云ひにくい、そつちの用事は晩程まで延してはおくりやるまいか、幸左衛門武士のすたる儀で御座る、聞分けておくりやれサ。

才二　シテ御用は何程で御座りますな。

幸左　イヤその金子は、三十兩借受けたうおぢやる。

才二　成程十兩お貸し申すも、三十兩御用立まするも同じ事、左樣なら、晩ほど間違なうお返し下さりませ、このまゝ差上げまする。

ト幸左衛門へ金を渡す、幸左衛門思入あつて。

幸左　聞屆けてたもつて忝い、これで身共も顔が立つ、忝い、したが金銀づく、一寸證文を認めて遣さう。（ト床几に掛り、腰より矢立を出し、一札を書く。）

才二　晩までの事、それには及びませぬ。

幸左　イヤ〳〵晩ほどの事でも、さうでは御座らぬ、念に念を入れても、金づくは不沙汰になるものぢやテ。（ト一札を書き。）一つ預り申す一札の事、一つ金三十兩、我等據處なく入用につき、借用申候所實正也、返濟の儀は今日暮時迄に、急度返濟致可候、念爲金子預り一札、仍而如件、佛壇屋才二郎殿へ、片岡幸左衞門、判。念の爲め改めておくりやれ。

ト渡す、才二郎讀んで懷中する、雪野此内奧へ來いと仕方する、才二郎今は惡いといふ仕方、兩人いろ〳〵思入あつて、幸左衞門と顏見合せ、幸左衞門氣の毒のこなし。

才二　成程〳〵、何の身共に遠慮、コレ〳〵才二郎、あの座敷に身共が扇を落して參つた、一寸取つて來ておくりやれ。

才二　ハイ〳〵畏りました。

幸左　その傍に莨入を置いた程に、雪野も往て取つて來てくりやれ。

雪野　アイ〳〵合點ぢやわいなア。

才二　左樣なら、一寸取つて參じませうわいなア。

幸左　ア、待つたり〳〵。（ト云ひながら懷紙を出して。）疊に酒が、それ。

ト鼻紙を投つてやる、才二郎取つて。

兩人　これは。（ト顏を見る。）

ト心いき、兩人顏を見合して耻しいこなし、幸左衞門はよろしく扇子を顏へ當て。

幸左　ふきやれサ。

ト唄になり、雲野才二郎手を取合ひ、上手の暖簾へ入る、幸左衞門跡見送り、舌を出してにつたり思入。

よくふけハヽヽヽ。

今時の人間にも、あんなおぬくがあらうとは、實に太平の腹つゞみ、拍子にかけて粹らしう、情を表に舌三寸、うまく喰した狸汁、紙一枚が正金で三十兩とは有難い、さうとは知らず、證文を金の代りに懷へ納めた面の大馬鹿め、自體あんな二才に金を持して置くは、實に無駄といふもの、こつちにあればさま／＼と上段下段の遣ひ分け、いくらあつてもあきのない、アヽよい愛もつた世界の寶、身共もこやつにあやかりたいものだテ、ハヽヽヽ。

ト件の金を見てこなし、此時唄になり、揚幕より針の宗兵衞すいほうの形にて、捨臺詞にて出で來り、幸左衞門を見て。

宗兵　これは幸左衞門樣、よい所でお目にかゝりました。

幸左　雪野が兄の針の宗兵衞、丁度えゝところで逢うたわえ。

宗兵　時に昨日お約束申した妹の身の上、外から相談も御座りまするが、アリヤどう致しませう。

幸左　外からというは、大方佛壇屋才二郎めであらう。

宗兵　その才二郎が今日中に、手付を渡すつもりで御座りまする。

幸左　才二郎が今日中というたら、幸左衞門は今こゝで渡してくれう、幸ひ小遣金がこゝに二三十兩もあるわ、ハテ妹の緣に引かるゝその方、行く〱はそのまゝにも置かれまいわサ。

宗兵　これは有難う御座りまする。

幸左　得心ならば、百兩の手付金として、二十兩改めて受取りやれ。

ト以前の金の内二十兩渡し、殘りを財布へ入れる。

宗兵　これ程直に埒のあく事を、いかいたわけの。（ト金を改め懷中して。）念の爲め、二十兩の手付證文を書いて上げませう。

幸左　成程外へやるまいといふ、證文を書いて貰ふ。

宗兵　畏りました、一寸矢立をお貸し下さりませ。

ト矢立を借り、一札を認め渡す、幸左衛門請取り。

幸左　かうなる上は、雪野と才二郎互に顔見合つても、料簡がならぬが、よもや如才はあるまいな。

宗兵　ハテわしも針の宗兵衛というて、一分のふんどしもしめた男で御座ります、二人共何處にをりますえ。

ト幸左衛門頷いて、暖簾の口を顔にて教へる、宗兵衛呑込み身拵へして暖簾口へ入る、直にばたばたにて、才二郎雪野を引摺つて出で來り。

うしやアがれ〳〵、こいつらはいけしぶとい、晝日中に見苦しいこの態はえ。

ト兩人を突放す。

才二　宗兵衛殿、才二郎をこりや何とするのぢや。

雪野　わたしやわたしとも思ふが、才二郎樣を手籠めにして、何とさしやんすのぢやいな。

宗兵　何ともせぬ、今日から才二郎に逢ふ事はさておき、顔見合しても料簡せぬ、宗兵衛が見る前で、才二郎さつぱりと切れて貰はう。

才二　合點の行かぬ身請の相談までしながら、今となつて此の仕儀、エヽ聞えた、約束の手付が遲うなつた故、腹立かよい〳〵、たつた今渡さう。（ト幸左衛門の傍へ行て。）幸左衛門樣、御覽の通

りの譯合で御座りますれば、最前御用立ましたる三十兩の金子、お返しなされて下さりませぬか、差當つての難儀故、どうぞお返しなされて下さりませ。

幸左　才二郎、そりや何を云ふのぢや、酒に喰べ醉うたと見えて、いかう取り逆上してをると見える、マアく氣を鎭めたがよい。

才二　申し幸左衞門樣、此才二郎は御酒に喰醉ひも致しませぬ、又逆上も致しませぬ、先刻御用立ました三十兩の金、唯今お戻し下さりませ、その爲あなたが此通り證文まで。（ト以前の證文を出して。）一金三十兩、我等據處なく入用に付、借用申候處實正也、佛檀屋才二郎殿へ、片岡幸左衞門、これでも覺えは御座りませぬか。

幸左　どれ。（ト證文を取つて見て思入あつて。）返濟の儀は暮時までに、急度返濟可致候、爲念一札仍而如件、ハテ能く似せたわく、この方に書いた覺えはない、殊に判のない證文は反古同然、カウカウく。（ト引裂いて。）ハテ恐しう、企んだなア。

才二　ヤア證文の一札を引裂いて、こりや三十兩の金を騙つたのぢやナア。

幸左　默れ、おのが心に引較べ、盜み騙りするやうな幸左衞門ぢや、と思うか、こゝな大騙りめ。

ト持たる煙管にて、額を割る、才二郎こなしあつて。

才二　金を騙られ、剩へ手疵を負せし幸左衛門、モウ料簡が。

ト飛びかゝらうとする、雪野留めて。

雪野　尤ぢや〳〵、腹は立たうが、どうぞ料簡して下さんせ、モシ幸左衛門樣、そりやお侍にも似合ひませぬ、最前私も見てゐたれば、暮方までに戻さうと、證文までして置いて、戻さぬのみか、このやうに、こりやあんまり胴慾で御座んすぞえ。

幸左　胴慾とはそもじの事、今までは藝子の雪野、今日からして幸左衛門が女房、可愛がつて貰はにやならぬ。

雪野　そんなら、どうあつても、私は。

宗兵　幸左衛門樣の奥樣ぢや。

才二　それでは此才二郎が。

宗兵　顏が立てたきや、金渡すか。

才二　サアその金は。（ト幸左衛門へ見入る。）

幸左　此方にかつた覺えはないぞ。

ト才二郎、雪野無念のこなし。

それ程いとしがる才二郎めは、云ひかけひろいだ大騙り、以後の見せしめカウ〳〵。

ト財布にて才二郎を擲ぐる、此拍子に財布飛んで、暖簾口へ飛込む。

南無三、今の殘りの金。

ト尋ねに行かうとするを、才二郎足にしがみ付き。

才二　幸左衛門樣、そりやあんまりぢや〳〵わいなう。

宗兵　何があんまり、金も出すまい、嫐も外へやるまいとは、うぬがあんまりぢやわい。

ト引付ける、雪野支える。

幸左　エヽ手ぬるい〳〵、もそつとはき〳〵方を付けてしまへ。

宗兵　合點ぢや〳〵。

ト兩人して才二郎を散々に打擲する、よき程に奧の暖簾口より長右衛門出る、跡よりお京、お竹、お梅仲居の形にて附いて出る、長右衛門宗兵衛を投げて、幸左衛門が手をしつかりと取り。

長右　幸左衛門樣、まだこれに御座りまするか。

幸左　長右衛門、貴樣と同道致さうと存じて。

宗兵　これ長右衛門殿、何で此宗兵衛をひよいと云はせたぞよ、事によつたら此方も盗人の同類にな

るが合點か。

長右　盜人の同類より、嫐をえばの惡工み、殊に今こゝへ出會頭に此財布、少々金の入つたが、何處やらから落込んだが、こりやマア誰のぢや知らぬテ。

ト右の財布を出す、幸左衞門見て。

幸左　そりや身共が財布、今腹立紛れに、思はず投げたその金、お身に當らいで仕合せ〳〵。

長右　落した主に戻さうと思ふ間に、この騷動、マア〳〵お納めなされませい。

ト幸左衞門に渡す、幸左衞門懷中する。

幸左　畢竟お手前ならこそ、忝う存ずる。

才二　イヤ申し長右衞門樣、最前お前にお借申した三十兩、又候證文の上あなたへ貸しましたれば、その證文を引裂き、大勢の中で、このやうにうち打擲、どうも料簡がなりませぬ。

長右　マア〳〵おれに任して置くがよい、時に幸左衞門樣、その金子はお手前樣の金子に、相違御座りませぬか。

幸左　成程こりや身共が扶持米を賣拂ひ、藏屋敷より請取つた金子に相違御座らぬ。

長右　此度淸洲の御用先、吳服物の代金に請取つた金子は、お家の極印、一兩〳〵に三つ星の隱し極

印、此極印のすはつた金子は、まだ明日からでなくは出さぬ金子、よそ外へ出やう筈はなし、只今あの金改めて見ますれば、その金子にはなぜ三つ星の極印が御座りますな。

幸左　ムウ、サアそれは。

長右　知るまいと思はしやるか、才二郎が手よりお借なされた三十兩の金子、才二郎へお返しなされませ。

幸左　成程三十兩返すまいものでもないけれど、こゝにその端金よりない、歸宅の節才覺致して遣はさう。

長右　さう仰つては此場が濟みませぬ、マア宗兵衛よりお取りなされた二十兩の手付證文を、これへお渡しなされませ。

ト幸左衛門の證文を取上げ。

これで三十兩は濟んだといふもの、コリヤ〳〵宗兵衛、三十兩今こゝで渡す程に、證文を書直しや。

宗兵　廿兩の證文が三十兩になるなら、證文は何時でも書直しませうが、宛名は何と書きませうな。

長右　ハテ知れた事、才二郎が名前に書直せ。

宗兵　モシ幸左衞門様、この證文を書直せば、お前の方の手は切れますぞえ、よう御座りますか。

長右　ハテ惡いとあつては、才二郎になり代つて、金の詮議をする分の事、サア早う認めい。

ト二十兩の證文を引裂き、懷中より十兩取出し宗兵衞に渡す。宗兵衞證文を書直して、長右衞門に渡す。

幸左　跡金の七十兩は勝手次第に、長右衞門方へ請取に來い、濟むまでは預つた。

長右衞門、これを請取つておくりやれ。（ト財布を渡す。）

長右　これは何で御座ります。

幸左　ハテ三十兩の內二十兩は、證文で相濟んだれど、殘り十兩を、貴樣の助力を受くるも氣の毒、ソレ請取つておくりやれ。

長右　これは、どうで御座ります、申さば僅かな、マア〳〵これはお納めなされませ、そのかはりには、先刻も申します通り、彼の刀の事を。

幸左　ハテ扨てくどい事をおいやる、紛失させたは手前の馬鹿、幸左衞門決して心當りは御座らぬ程に、それ程ぐちむらなお手前に、筋なき金子申受くるも氣の毒、ハテ何がな、オヽ幸ひ〳〵。（ト刀の小柄を拔取り。）此小柄は、貴樣の知つてゐやる殿の御秘藏、後藤祐乘が獅子に牡丹、親

共が拜領いたしたを貰ひ受けたが、これを貴樣に讓り申さう、落手いたしておくやれ。

長右　これは餘り、急度としたなされ方、しかしながら御辭退申すは、反て無禮、左樣ならば頂戴いたしませう。此證文は當座の腹癒せ、暮れぬうち才二郎も早う戻つたがよい。

トオ二郎證文を戴さて。

才二　お志しの此證文、有難うは御座れども、思廻せば幸左衞門。

長右　ハテ扨て言ひたい事もあらうが、長右衞門にめでゝ、雪野も一緒に、宗兵衞も氣を付けてやつてたも。

雪野　何から何まで有難う存じます、此上とても、主の手を放れませぬやうに。

長右　跡金さへ濟めば、世間晴れての夫婦中、心殘さず早う去んだがよいわいの。

才
雪　有難う存じまする。

長右　宗兵衞、頼んだぞや。

宗兵　心得ました。

才二　雪野、おぢや。

ト唄になり、才二郎、雪野、宗兵衞附いて向うへ入る、此內幸左衞門むつとしたこなし、花道へ行

からとするを。

長右　幸左衛門様、あれへお出なされませ。

幸左　宿元へ心も急げば、幸左衛門、お先へ罷り歸り申す。

長右　私もお宿までお供いたしませう、御家來〳〵。

ト雨車になり、可助暖簾口より合羽を着て出て。

可助　イヤお旦那、雨が降つて參りました。

長右　これ〳〵仲居衆、傘も借りたし、旦那ばかりでよいから、下駄も一足借りたい。

仲居三人　畏りました。（ト印付の傘下駄を持つて出て。）もうお歸りなされまするか。

ト長右衛門金を包み、仲居にやり。

長右　これは少しながら、最前からの座敷料、御亭主へ屆けて下され、そして賑かに河原まで送つてはたもらぬか。

三人　アイ〳〵、河原まで御見送り申しませう。

幸左　身共はこれでお別れ申さう。

長右　ハテ扨て、左樣仰せられずと、マア御座りませ。

三人　サアお出なされませ。

ト祇園囃子になり、皆々二軒茶屋と記した傘をさし、長右衛門、可助は跣足、幸左衛門は下駄がけ仲居茶屋と書いた提灯をともし、此人数皆々向うへ入る。

返し

四條河原惣嫁小屋の場　造物向う黒幕、正面三間葭簀囲ひの惣嫁部屋、両方に入口あり、此傍蒲鉾なり非人小屋等、都て四條河原の心。時の鐘にて道具納る。

ト騒ぎ唄になり、向うより、おくぼ、おいく惣嫁の拵へにて、調子外れのいやみ唄を歌ひながら出て來り。

いく　おくぼ、今夜は大分早かつたなう。

くぼ　どうやら、空が曇つて來たによつて、早う仕舞うて去なうと思うてぢやわいなア。

いく　何ぼ早う仕舞うというても、どうやら今夜は錢になりさうもないぞや。

くぼ　やつぱり四條の河原が、チト晴がましいけれど、人通りが多い故よいわいの、翌の晩からあちらへ行かうわいなう。

いく　イヤモウ何處へいたとて、此頃の時節ぢや故、錢がないかして、ぞめきばかりぢやわいなア。

くぼ　今夜は、とくさんが來る筈ぢや故、何でも逢うて、せりふせにやならんわいなア。

いく　又かいなア、これうけ賃に、建仁寺町の八幡かばやき、いにしなに立さすぞや。

くぼ　おゆるしぢや、頼んである事が成つたら、三本立るわえ。

いく　たつた三本かえ、安いうけ賃ぢや。

トこんなこと云ひながら、小屋の前へ行く、おいくは西の入口、おくぼは東の入口へ立つと都々逸の地ばかりになり、上下よりぞめきの人數大勢出て行違ふ中に、ぞめきの一人おいくと連立ち小屋へ入る、おくぼぞめきを引留める事いろ／＼ある内、おいく客と連立出て、客は上手へ入り、おいくは錢百文を口に咬へながら、帶締め直す事。

くぼ　おい／＼、口あけがよかつたなア。

いく　えらいうけにいりをつた。

くぼ　わしも口あけせにやアならぬわいなア。

ト仕出連立ち出て、かはりばんに小屋へ入る、橋懸より鐵右衞門國侍の拵へにて、酒に醉ひたる體に出て來る。おくぼ袂を捕へ。

手輕ぢや、遊んでおくれぬか。

鐵右　こりや／＼、放しをらぬか、身共は、さやうなむさくろしい惣嫁は求める所存はない、たゞ後

學の爲め、見物致すのだ、放しをれ〳〵。

くぼ　オヽなめ買はにや買はぬで分つてある、これそのやうに惣嫁〳〵と、安ういうたものぢやないぞえ。

いく　さうとも〳〵、これでも辻君というては、昔は歌の一つもよんだものもあるわいな。

くぼ　後學の爲めもいしてうしい、あのこゝな洟たれさぶめが。

鐵右　ナニ洟たれさぶめぢや。

くぼ　知れた事、百姓めが、またげめが。

鐵右　うぬ、武士に向つて、言語同斷な、惣嫁め、鼻かけめらうめが。

いく　何ぢや、鼻かけめらうぢや、あのこゝな田樂め、惣嫁に鼻がある位なら、此商賣してゐるものか、十二の后に譬へらるゝ身の上ぢや。

くぼ　コリヤおいくの云ふ通りぢや、どこの國にか、姫御前を捕へて、鼻かけと云はれては、先祖へ濟まぬ。

いく　どれ〳〵、どたまいがめてこますぞヤイ、おのれ、よう鼻かけといひをつたなア。

くぼ　サアどうするか、此分では濟しやせんぞ〳〵。

ト兩人鐵右衞門を捕へて、頭を喰はす、仕出皆々阿呆〳〵といふ。

鐵右　おのれ、武士に向つて、無禮過言。

ト三人摑み合ふ、仕出わや〳〵云うてゐる、こゝへ橋懸より、橋下のお六半纒安下駄、ぎうの拵へにて出て來り、此中へ割つて入り。

お六　これはしたり、どうしたものだな、まだ口あけもしねえ店先で、延喜でもねえ、モウごたつくかあやまるぜ。モシお侍様、おめえさんも御仁體でもねえ、高が相手は女の事、殊にしがない商賣先で、見つともねえわな。

くぼ　お六さん、放つて置いておくれ、此さぶめがわしらが事を鼻かけといひをつたわいなア、それぢやによつて立たんわいなう〳〵。

いく　それ〳〵無性に刀をさしへけらかし、だみそあげをるが、その二本ざしが恐うて、田樂は喰えぬわい、アノこゝな田樂さぶめが。（ト鐵右衞門を張倒す。）

鐵右　おのれ、武士のどたまを張りをつたな、ヤイこゝ放せ〳〵放しをれ。

いく　イヤ聞かぬ、放さぬ〳〵。

お六　これは又困つたものだねえ、エヽ放しといふのに。

ト眞中よりお六引分ける。此機みに鐵右衞門こける。

鐵右　ア、イタ、、、、。

お六　それお見な、人が留めるに、怪我でもしたら、どうする、見つともねえわな。

鐵右　イヤ料簡ならぬ〳〵。

ト仕出いろ〳〵捨臺詞にて、鐵右衞門を笑ふ。

おのれらまで推參千萬、うぬら眞二つだぞ。

ト立ちかゝるを、お六いろ〳〵留める。

いく　お六さん、退いておくれ、あんまりぢやわいな。

お六　ハテマアわつちに任せなせえ、コウお屋敷さん、わつちも口を聞くのだからね、何も延喜直しだ、何がなしに、ちよつぴり遊んでお出な。

ト此内鐵右衞門、お六の顏を見詰めてゐて。

鐵右　そんなら何といふ、延喜直しに、身共に遊べと申すのか。

お六　さうでもして、淨めておくれな。

鐵右　ナニ淨めとは、そりや願うたり叶うたり、然らばおぬしと。（トお六の手を取る。）

お六　イヤわつちぢやア御座りやせん、あの子達とサ。

鐵右　ム、シテ貴様は何ぢや。

お六　ぎう。

鐵右　ナニぎうとは。

お六　一體わつちや江戸生れ、身上がわるさに苦しがり、せう事なしに此土地へやう〳〵この頃來やしたが、江戸ぢやア夜鷹、こゝぢや惣嫁、其辻君の世話をして、素見手合のぞめきふせぎの始末方、大店の女郎屋ならば遣手若衆おつくるめ、送迎ひの提灯の明りが禁物、まつくらな所から引出すそのゆかり、江戸ぢやア牛といふのさねえ。

鐵右　ナニぎう、ハテぎうにしては美しい、ア、美なるかな〳〵。姿といひ形といひ、腰はすうわり柳しま、ハテぎうとした代物ぢやなア。

仕出皆々　ヤレ大和家ア。

ト仕出ほめる、おくぼ此内茶碗を持出で水をまく。

鐵右　おのれ、武士に向つて溝水をかけるな。

いく　これ〳〵大概にぞめきんか、惡い癖なさぶぢやなア。

皆々　阿呆よ、べらぼうめ。やい〳〵。

鐵右　うぬら、身共をなんとぬかす。

トきつとなつていふ、仕出皆々捨臺詞にて笑ふ、鐵右衛門刀の鞘のまゝ拔いて追かける。仕出皆々逃げて入る、鐵右衛門ひよろ付ながら追かけ入る。

いく　お六さん、いつもながら大きにお世話で御座んした。

お六　何の阿呆らしい、あんな唐變木は構ふと殖えてなりやアしねえわな、そりやさうと今夜は油がなかつたけ。

くぼ　ほんにあたすかんぞめきづら、わしやきゐんが惡うて氣色に障る、お六さん、今お出たのに氣の毒ぢやが、何も祝ひぢや、まん直しにごんつく取つて來ておくれ、一生のお賴みぢや。

お六　モウお使かえ、今やう〳〵と片附けてくると間もなく、ほんに人遣ひのよい姐さん達だの。

いく　お六さん、お前お出なら、わしもなんぞはづむけれど、酒は一合廿六文、祝ひに冷酒は氣色が惡い、半四郎というた所が火はなし、杜若くいたいものは喰ふがよし鮨なと一緒に買うて來ておくれえ。

くぼ　おきんが口合ひ、まぜりの鮓はこつゝく、お六さん呑込んでおくれえ。

お六　仕方がねえ、どうで今夜はつぶしだから、往つて來ようが、又立換はあやまるの。

くぼ　モシお前の來やうが遲ひよつて、わしが三つぶり預つてこゝにある、サア持つていておくれ。

ト錢をお六に渡す。

お六　オヤたつた三杯ぶりかえ。

いく　サアわしが百出すから、二百ありやよからうなア。

ト又錢を出す、お六取つて。

お六　そんなら此二百を伊勢又へ投込んで、酒をごんつく、あとは錢つきりに肴よ。（ト錢を見て。）

オヤ此錢は足りないやうだねえ。

いく　そんなら讀んで見ておくれ。

トお六錢を數へる、此内兩人捨臺詞ある事。

お六　これお見、四五文めりが立つてゐるわな、お前方もちつと氣をおつけな。

いく　それでも、わしぢやとて色を賣る商賣、お客の前で萬更錢を讀めんわいなア。

お六　違ひねえ、こりやわつちが惡かつた、そんなら往つて來ざアなるめえかな。

兩人　お六さん、早いがよいぞえ。

お六　承知だわな。（ト二百の錢を肩へかけて、花道にて空を見て）又ばれにやいゝが。

ト四ツ竹になり、向へ入る、兩人あとにこなし。

くぼ　時におなかさんは大ぶん遲いな、今夜はずらすのかしらん。
いく　てつきり夕の蟹があたつて寢てゐるのであらう。
兩人　ハヽヽヽ。

ト此内又ぞめき大勢出て買ひに入る、此内鐵右衞門又出て來て、花道にて頰冠りして形を變へ、おいくの小屋へ連立ち入ると、おくぼは出て袂を引きなどしてゐる、内より鐵右衞門逃げて出る、おいく追はえて出て。

いく　最前の生醉侍めが、喰逃げを働くがな。
皆々　喰逃げなら、打殺せ〳〵。
くぼ　何ぢや喰逃げぢやとは、どいつぢや〳〵。
いく　このりやんこめが錢もない癖に、喰逃げとは、ほんに大道具の太い奴ぢやわいな。
くぼ　そりや最前のけちを付けた奴ぢやわいな。
いく　こんな奴は見せしめの爲に、河原で三番叟を踏ますがよい。

皆々　さうせい〳〵。

ト仕出皆々立ちかゝる、鐵右衛門よろしく留め。

鐵右　ヤアぎやう〳〵しい愚人めら、我一人の喰逃げに、大勢をもつてからめんとは、卑怯未練なひやかしめ、われら如きに刃物はいらん、目に物見せん、覺悟しろげ。

ト思入あつて刀を拔く、竹光故皆々捨臺詞にて打落し鐵右衛門をさし上げ、皆々連れて入る、これにて此道具引いて取る、向ふ黒幕切つて落す。

返し

四條河原幸左衛門殺しの場　　造物向う打拔きに四條河原夜の景色、繩手石垣の燈籠遙に見え、雨車に踊地を冠せ、道具納る。

ト向うより以前の仲居三人幸左衛門、可助提灯を持ち出て、花道にて。

可助　何のかのといふ內、とう〳〵日も暮れた、お宿にもお待兼ねで御座りませう、お二人樣もつとお急ぎなされませ。

お竹　この奴さんとした事が、それ程早う行きたくば、先へ行かしやんせいなア。

お京　お竹さん、そのやうに云はしやんすな、主ぢやとて待るゝ者があるまいものでもないわいなア。

**お梅**　いつそ奴さんを先へ返しなされて、池谷でゝも一寸上りませぬか。

**長右**　いかさまなア、今一つ喰直してはいかゞで御座りませう。

**幸右**　そりや貴様の心任せに召され、身共はこれでお別れ申さう。

**長右**　これはしたり、あなたさまに一つ上げたさの、ヤ、おすゝみなくば是非がない、そりや〱おぬし達は大儀であつた、こゝから直に歸つて下されこ

**お竹**　そんならお近いうちに、

**三人**　必ずお待ち申しまする。

ト唄になり、仲居三人引返し向うへ入る、長右衛門、幸左衛門、可助は舞臺へ來り。

**長右**　これ〱御家來、貴公は先へ歸つて、追付お歸りなさるゝと、お知らせ申したがよい。

**可助**　左樣ならば、提灯をお頼み申しますな、そりや參らうかこ

と提灯を渡し、合羽を脱捨て、橋懸りへ入る、時の鐘になる。

**幸左**　ハテ夜が短い、たつた今日が暮れたと思へば、モウ初夜ぢやさうな、長右衛門ちと道を急いで參らう、その提灯をおこさつしやれ。

**長右**　ハテそのやうにおせきならずと、御一緒に御座りませ。

幸左　イヤハヤあきれた男だ、何か物案じ顔に、そろ〳〵と身共に附隨うて御座るは、合點が行かぬ。

長右　成程御合點が參りますまい、唯今これでお別れ申せば、翌中に差上げねばならぬ刀、どうぞお返しなされて下さりませ。

ト合方になり。

幸左　默れ長右衛門、覺えない幸左衛門にひたすら返してくれいと申すは、身共がすり替へ盜み取つたと、何ぞ確かな證據があるか。

長右　サアその證據が御座りませぬ故。

幸左　たわけ者め、證據もない事を申出して、幸左衛門に盜賊の惡名をつけるか。

長右　左樣では御座りませねど、先刻も申します通り、此刀につきましては。（トこなしあつてちやつと氣を替へ。）幸左衛門樣、何卒、長右衛門めが迷ひをお晴しなされて下さりませぬか。

幸左　何といふ、覺えもない身共に、一度ならず二度三度、身共が刀をすり替へたから、兩刀共に見せいとでもいふのか。

長右　申し兼ねた事では御座りますれど。

幸左　これ、その方も町人ながら、お國へ出入、あと先揃はぬ麁相をいひかけ、あとで後悔致すなよ。

長右　なか／＼麁相は申しませぬ。

幸左　いかにも改めさゝうが、もしその刀でない時は。

長右　そりや御存分になされませう。

幸左　ムウ面白い、サア早く改めて見ろ。

　ト腰にさしたまゝ突付ける、長右衛門こなしあつて。

長右　エヽ忝い。

　ト小の刀を抜いて提灯のあかりにて、我棒鞘と改めよく／＼見て、違ふ故これは違ふといふこなし、幸左衛門どうぢやといふこなしにて、一腰を突付ける故、又大の刀を抜き比べて、違ふといふこなしにて當惑する。

ハテなア。

　ト合點の行かぬこなし、これを靜なる踊地になり。

幸左　どうだ、われが尋ねる吉光の刀に違ひないか。

長右　サアそれは。

幸左　それはとは、こゝな大騙りめが。（ト引付けて。）武士に向つて、さま〴〵の言掛け、のみならず大小まで、素町人の分際で改めさらした慮外者、それといふもうぬが心に一物は、誰が頼みもせぬ親父へ勘當の詫、こりや譬へ一旦勘當受けても、たつた一人のお世繼樣だ、親父がてこねると手分けしても尋ね出し、大手ふつて親父の跡式、われが自由にする身の上だ、生中親父ががんぜうだけ、どうも身共の手許が困るから、先刻才二郎に旨くやりかけたを、女房の義理立てさらして、武士たるものを人中で恥つらかゝした粹狂者、それがよいか、これがよいか、約束通りにかうかう〳〵。（ト散々に打据える。）

長右　成程そのお腹立は御尤なれど、かやうな事も御座つた此方故。

ト云ひかけるを打消し。

幸左　まだ〳〵ぬかす横道者、エヽうぬどうしてくれう。（トいろ〳〵腹の立つこなしにて。）大切ない牛王吉光を餘人にすり替へられ、證據も見とめぬ大たわけ、翌までに詮議のならぬ刀の行場、どうで命は根ぐさりもの、胴と首との生き別れ、しやつゝら見るも胸が惡い、エヽいま〳〵しい。

ト長右衛門の顔へ唾をはつかける、長右衛門堪へ兼ね。

長右　チエ、。（ト無念のこなしにて、思はずきつとなる。）

幸左　ムウ何だ、こりや身共に手向ひさらすか。

ト きつとなる、長右衛門氣を替へ。

長右　イヤ全く左樣な事は。（トじつと控へる、思案のこなし。）

幸左　イヤ〱さうだ、わりや、いにがけの駄賃に、身共を切る氣ぢや、オヽ面白い、サア切れ。

ト體を突付ける。

長右　アヽ何をわつけもない、どうして私が。

幸左　イヤ何處までも、身共を疑ふうぬが腹綿、幸左衛門が血潮でなくちや流れまい、待て〱町人だから刀もあるまい、待て〱我刀で切られるも約束だ、サア刀はうぬに貸してやろ、それですつぱりとばらして了へ。（ト我刀の小を拔き、長右衛門の前へ放り出し。）

長右　これはさま〲の御難題、マア〱此お刀は。（ト取上げて渡さうとするを。）

幸左　手にとるからはおれを切るのか、面白いサア切れ〱。

ト又體を突付ける故。

長右　アヽ申し、おあぶなう御座りまする。

トよろしく刄物を持ちながら、幸左衞門を支える、兩人よろしく捨臺詞にて、よきところにて思はず幸左衞門のほうべたを切る、これにて幸左衞門びつくりして。

幸左　やアこりや身共を切りさらしたな。

　トきつとなる、長右衞門氣のつかぬこなしにて。

長右　エヽ何をわつけもない、かりにもそんな事を。

　ト云ひながら、思はずしたゝる血汐にびつくり、鳴物となる。

幸左　エヽうぬも覺悟の、こゝは加茂川、刀の錆か、落ち際淸き末期の水、喰つて觀念しろ。

　ト云ひながら切つてかゝるを。

長右　手が廻つたが越度、とても命は南無阿彌陀佛、未來でいひわけいたします。

幸左　オヽよい覺悟だ。

　ト云ひながら切つてかゝる、長右衞門傍にある傘を取つて支える、又蹈地になり一寸立廻つて、幸左衞門の刀を落す、幸左衞門又傘を取つてよろしく立廻つて、よき程に長右衞門落ちたる刀を取上げ一かせ切る、これを待宵の唄になり、兩人いろ〳〵面白き立廻あつて、トヾ幸左衞門を切伏せて、ホツト一息これにて本釣鐘、忍び三重めいたる合方になり、向うより橋下のお六以前の形、德利に竹の皮包みを手拭にて提げ出て、捨臺詞にて本舞臺へ來る。長右衞門は刀を慌てながら鞘に納め

刀を踏みし足の痛むこなしにて、手拭を引裂き足を括り、以前の小柄を落せし故これを探しゐる内お六と思はず行當る。お六これにて德利竹の皮包みを落し、下駄を飛し傍を探ぐる手に小柄を拾ひ上げ、星明りにてすかし見て懐中する、長右衛門はやはり小柄をさぐりよる、お六長右衛門が刀に手をかけびつくり思入、兩人よろしく立廻つて、お六捨てある合羽を、立廻りの内着る事、長右衛門刀を抜きかける、お六は膝をつくを木の頭、長右衛門びつくり飛退き、きつとなる、お六合羽を冠る、これをキザミにて、よろしく。

柝子幕

# 三幕目

帶屋内の場

桂川道行の場

**役名**　帶屋長右衛門、針の宗兵衛、甥の儀兵衛、丁稚長吉、四つ井竹八、長右衛門女房お絹、信濃屋後家おいし、娘お半、下女おまつ、婆おくま、橋下のお六、三すぢのお糸等。

帶屋內の場　造物見付赤壁、納戸口暖簾、戸棚、上手に折廻し障子屋臺、いつもの所門口、此次に黒塀忍返し附、其次に隣の門口、信濃屋と書いた柿の暖簾、此取合に用水桶杯積上げ、この後早替りの穴あるべし、右二重の上に酒樽一荷、鰹節卷物等直しある、傍にお熊婆の形、莨盆を控へ、前幕の儀兵衞帳面にかゝり、算盤置いてゐる、此見得合方にて幕明く。

お熊　儀兵衞、さうこんつめて帳合せずと、ちと休みやいなう。

ト此內儀兵衞帳合してゐて。

儀兵　マアこれで一服やらう、ヤレ／＼ほつとした事ぢや。

お熊　さうであらうとも、我身が精出して働く入合ひに、長右衞門がのら／＼とばかりさらして、ほんに大體いま／＼しいやつではないわいの。

儀兵　それ／＼ア、又うんでれがんの長右衞門が仲人するというて、隣のお半を佛壇屋の才二郎へ肝入つたは、親切ではなうで、うぬが喰ひあまりを、名はしろ立ぬうち片付ける算段。

お熊　サそこで嫁のおきぬもとも／＼悅んで、世話燒をつたに、どうした事やら賴みの印にやつた樽の肴卷物まで、あのやうに今朝隣から返しに來たが、そのわけのある事を、隣のおいしもづいたか知らぬテ。

儀兵　オ、そこもごんせうし、此婚禮がぐれると、かのお半めの手紙から云ひ出して、長右衞門めを

ほいまくる算段、何もかもして置いた。

お熊　オヽ出來たく\、さりながら最前からお絹が見えぬが、どこへ入つてをるしらぬ。

儀兵　イヤ幸に、此たのみの變替で、隣の信濃屋に相談にいたやうすぢやテ。

お熊　オヽそんなら誰も聞くものはなし、うれしや今夜から夜が寝ようなつたテ。

儀兵　時に拙者人聞かつしやれ、一昨日兄貴が取りに往た駿河の替錢、まだ金を見ぬに依つて、合點が行かぬと、飛脚屋へ往て問うたら、一昨日長右衞門殿に渡したと、手形を出して見せたわいなう。

お熊　ヤヽヽヽ。

儀兵　てつきり兼ての百兩も、兄貴が懐にくすねをろと見えるわいなう。

お熊　さうあらうと思うてゐた、戻りをつたら手痛い目に逢はして、吟味の上ほい出す魂膽、よいたのしみぢやないか、まだ一つよい事がある、昨日上つた清洲の五十兩、今戸棚の合鍵してこれ見や、ちよろりといがめておいた、これも皆我身にやりたさ、此科も長右衞門めにぬり付けるつもり、何とぬかりはあるまいがな。

儀兵　おゝあつぱれく\、流石はわしが拙者人、此金はこれから。（トさゝやき。）まだ言合す事もあれ

ど、あとからゆる〳〵。

お熊　オヽそれまでは裏の隠居で、晝寝してよい果報でも待つてゐよう。

儀兵　母者人行かんせ。

ト唄になりお熊、儀兵衛奥へ入る、ト合方になり、向うより長右衛門羽織着流し、手を組み思案のこなしにて出で來り、直に内へ入り、跡先見廻し。

長右　どう思ひ直して見ても、合點の行かぬ刀の行端、幸左衛門が持つてゐるとばつり思詰め、清洲の屋敷で今日中に差上げませうと、請合うたが、もうこれ僅の時刻、所詮晩までには手に入らず、殊に夕の河原のしだら、幸ひ雨で河原に水が多かつた故、死骸はそのまゝ流して了うたれば、二三日は此噂もまだあるまいが、遲かれ速かれ人殺しの科は遁れず、こりやマアどうしたらよからうやら。

ト思案の思入、此時お半駒下駄をはき、表の口より差覗き。

お半　長右衛門さん、戻らしやんしたかえ。

ト長右衛門びつくりして、ちやつと氣を替へ。

長右　オヽお半か。

お半　長右衛門さん、逢ひたかつた〳〵わいなア。

長右　これお半、聞けば油の小路へ嫁入を、我身や得心せぬとの事、そりや耻しいは聞えてあれど、いつまでもさうしてはゐられない、先の親達も結構なお人達、又聟の才二郎も若いけれど、ずんと氣立のよいもの、當分の内はお絹も一緒にやつて置く程に、心遣ひせずと、油の小路へ行たがよい、ハテどうで一度は嫁入をせにやならぬわいなう。

お半　お前までがそのやうに聞えぬ事をいうて下さんす、わたしやどうでも嫁入する事はいやぢや、いやぢやわいなア。

長右　そのやうにいうてはすまぬ、これよう聞けや、尤おれが仲人した譯は、そなたも可愛し、わしが身をも思ふから、そなたの父御治兵衛殿が臨終の枕許へ、おれを呼付けいはるゝには、ただ案じらるゝはお半が事、年寄つての子は猶不便な、そなたおれに成り代つて成人さして、よい聟を取りあれが身の片付を賴むぞやと、くれ〳〵との遺言は、長右衛門をたのもしう思はしやつての末期の賴み、お氣遣なされなと請負うたはこゝの事、これこゝのところを聞分けて、機嫌よう嫁入してたも祝言してたも、これ拜むわいなう。

お半　そのとゝさんや手習ひのお師匠さんの仰には、女子といふものは一生に男といふは唯一人、

二人と肌をふれるのは、女子でないと仰つたを、わたしやよう覺えてゐるわいな、お前も忘れはさんすまい、此春お前と連立つて、お伊勢參りの戻り道、石部の宿の新枕、これがほんの殿御ぢやと思込んだ心から、外へ嫁入すると、わしやお師匠様に叱られるわいなア、縦へこの末かゝさんに叱れうか、人さんが笑ふが構はねど、可愛がつて下さんすお絹様の思惑と、お前を人に誹すがわたしや悲しいけれど、何ぼでも嫁入する事は厭ぢやわいなア。

ト此内長右衛門面目のなきこなしにて、入口を締め。

長右　いやるところは尤ぢやが、そりやほんの子供心、色の戀のといふは似たか寄つたかの年ばひ、おれは三十八の何のといへど、これ。（ト帳箱のそろばんを取つて來て。）これぢや、そなたはまだ十四なりや、あんまりの違ひ、おとなげないと人の口の端にかゝらぬ中、どうぞ嫁入してたもや、ヤ、これ長右衛門が手を合して頼みぢや、これ拜むわいなう。

お半　イエ／＼どうあつても、嫁入のならぬ譯が御座んすわいなア。

長右　ムウならぬ譯とは、どうした譯。

お半　サその譯は。

ト長右衛門の手を取り、懐へ入れる。

長右　何ぢやいの、譯なら、口で云はぬかいの、手を取つて。（ト思入あつて、びつくりのこなし）そんなら。

お半　アイ。

長右　しもたハア、、、。

トうつむきこなし、お半長右衛門にすがり、泣落す。

ア、よしないおれ故いぢらしい、年端も行かぬ身に、きつい苦勞をさす事ぢやなア。

トお半を抱き締め泣く。此時信濃屋の内にて。

お絹　左樣なら、歸りましてお待ち申して居りまする。

ト合方になり、信濃屋の内よりお絹出て來て、門口を開け入る、此音に驚き、長右衛門お絹が戻ると仕方して、お半を突放し、ちやつとそしらぬ顏をして、お絹を見て。

長右　お絹か、どこへ行ていやつた。

お絹　わたしや、最前からお隣へ參じて、おいしさまと段々の相談、その內あの子はこちの內へおこして置きましたが、合點の行くやうにいうて聞して下さんしたかえ。

長右　さればおれも今の先、戻つて來たところへ、此子が來た故いろ〳〵というて見れど。

お絹　得心行かぬかえ。

長右　嫁入はどうあつても厭ぢやといふて、コレあやまつた、稲荷さま見るやうにしていうても、得心行かぬ、我身が代つてとつくりいうて聞してたもいなう。

お絹　アイ／＼合點で御座んす、何というてもお前さまには遠慮も御座んせう、女子は女子同士と私が代つて、得心の行くやうに、とつくりといふて聞しませうわいなア。

長右　そんなら、わしは奥へ行て。（お半に一寸心いきあつて。）どりやとろ／＼とやらうか。

ト唄になり、長右衛門はすまぬこなしにて奥へ入る、跡合方になり、お絹始終うつむいてゐるお半の側へ坐り、こなしあつて髪を見て。

お絹　オヽお半さん、綺麗に、髪が出來たなア、このマア髪のすぢが、ほんにお前の髪は河原町のお花さんぢやな、アノお方は第一手はなれは早し、きつい上手ぢやが、わしの髪は松原のお琴さんやが、とんともう一息、氣に入らぬけれど、永う結うてゐる故、今更斷りもいへず困つてゐるわいなア。

ト此内信濃屋の内より、おいし出て來り。

いし　おゆるしなされませ。（ト云ひながら内へ入り。）

お絹　オヽおいしさま、只今はさんじまして、大に長話いたしまして、おやかましう御座りました。

いし　何をいひなされますぞいなア、いつでもお構ひ申しませぬ。

お絹　マアく\こちらへお出なされませ。（ト莨盆を上手へ出す。）

いし　モウく\お構ひなされますな、左様ならおゆるしなされませ。

トお半の上手へ坐る、お絹下手へ、お半眞中にうつむきゐる。

扨てマア最前からも申しまする通り、此間から段々と此子の事、どうぞ合點の行きますやう、そこはよろしういうて聞かして下さりませ、お頼み申しまする。

お絹　よろしう御座ります、マア私にお任せなされませ、時にお半さん、そりやお前惡いぞえ、此間からもいろく\というた上、こちの人に手を替へていうて貰うも、お前がいとしさ故、それにいやいやとばかりいうてゐさんしては濟むまいぞえ、アヽ聞えた、こりや何ぞものがあるわいな、それ先度大阪へつれてゐた時、半四郎が八百屋お七イヤ面白い事ぢや上手ぢや、狂言とは思はれぬ、いぢらしうてならぬ、と戻しなの夜舟で口々の評判、わしや一つもいぢらしうない、なぜと云はんせ、得手勝手な色事に引され、親の定める緣付を嫌ふお七は不孝者、その心故わけもない事仕出して、江戸中を引廻され、浮名を流した鈴ケ森、親に不孝にあつた罰、お前は

さうぢやなけれども、親御のきめた縁談を厭はんすれば、お七が手本、不孝の罪で、その身ばかりか誰が名までも出やうやら、そこもよう思ひ直してなア、これ程いうても、かぶりふらんすは、どうあつても厭ぢやな、そんならもうない縁ぢやと思うて、わしが弟に取る縁、さつぱり變替いたします、アイ結納も確に受取ました、わたしの方から今戻しにやりまする、お前のやうな聞分けのない子があらうか、モウ〳〵あいそもこそも盡きたわいなア。

トわざと腹の立つこなしにていふ、お半思入あつて。

お半　おばさま、堪忍して下さんせいなア。

ト泣落す、お絹こなしあつて。

お絹　イエ〳〵料簡しませぬといふは嘘ぢやわいなア、何のお前に愛想が盡きてよいものか、今いうたのは皆嘘ぢや程に、惡い事はいはぬ、得心して嫁入したがよいわいなア。

トお半默つてゐる故。

よし〳〵是程にいうても得心のないは、よく〳〵縁のないといふものぢや、仲人も長右衛門殿なり、私が弟に取る嫁の事ぢやに依つて、この縁談をさつぱりとやめに致しませう。

トおいしに仕方して、マアからいうておくのぢやといふこなし、おいし氣の毒なるこなしあつて。

いし　常からお半〱と可愛がつて下さります、御夫婦の御世話なされた此縁談、變替うけるも娘の氣隨、いやでも應でも得心させ、是非此子は嫁入さします、これお半、そなたもいつまで子供ではないぞや、よう聞分けて見やいなう、父樣には早う別れ、母の手一つで育てた上、此通りに大きくなりやつて、似合の縁をいやぢやというては、母の育てが甘いからと、世間で笑はれるは厭はねど、長右衞門樣御夫婦へ何と顏が合されうぞ、これこゝのところをよう考へて、どうぞ聞分けて嫁入してたもいなう。

トいろ〱お半にいうても、やはりうつむいて。

お半　アイ。（ト思入。）

いし　アイといやるからは、得心が行きましたか、お絹樣、アイと申しましたわいなア。

トおいし悦ぶ、お半かむりふる。

かむりふるのはやつぱり厭か。

お絹　ア、これおいしさま、いやな所へ無理にやつては、ナア申し。（ト短氣な事をしては惡いといふ仕方して。）何ぼもある事、病ひでも出ては惡い。

いし　ぢやと申して、お絹さま。

お絹　ハテマアどうなと、思案も御座んせうぞいなア。
トいろ〳〵あり、おいし、お半を連れて入る。誂への合方、向うより針の宗兵衛前幕の形、跡より合羽笠を冠つたお六の吹替と連立ち出来り、花道にて一寸囁き、吹替は用水桶の脇へ隠れ。
宗兵　帯屋の長右衛門殿は、内方で御座んすか。
お絹　帯屋長右衛門といふは、こちらで御座んすが、聲高にマアどこから御座んしたかえ。
宗兵　サア長右衛門殿に逢ひに來た、早う逢して下され。
お絹　見ればつひに見た事もないお方、何の御用か存じませぬが、ちつと内に取込んだ事もあり、全體お前は何處から御座んしたえ。
宗兵　何ぢや、取込んだ事がある、ハヽアそれで樣子が知れたわえ、わしやこゝの内に縁のある才二郎樣の事に就て、チト談合があつてわざ〳〵と參りました。
お絹　そんならあの才二郎が。（トこなしあつて。）ハテなア。
宗兵　サア才二郎さんの事に就て、話といふ事は外でもないが、おれが玉に遣ふ妹を引上げて知らぬ顔は何の事ぢや、長右衛門に逢ふ、おれが聲聞いたとて留守使ふのか、但し針の宗兵衛がこはうて隠れるか、サア長右衛門に逢ふ、お内儀どうぢや。

お絹　これは又大きな聲をして、みつともない、聲高に云はずと、譯を云はしやんせいなア。

ト此内奥より長右衛門出て來て。

長右　お絹、我身聞くに及ばぬ、長右衛門が直々に聞かうわい。

お絹　オヽこちの人、聞かしやんしたか。

宗兵　ほんによぶより謗れと、此位に聲を張らにやア、滅多に出まいと思うたテ。

長右　錺の宗兵衛とやら、昨日祇園で初めて逢うたが、きよと〳〵しい、何の用ぢやぞいの。

宗兵　問はれずとも云はにやならぬ、昨日祇園で一寸逢うて、手付金は請取つたが、跡金の七十兩だ濟まぬうちは、何所までも雪野はおれが妹、その妹を返して貰ふ、サア〳〵、出して貰ふわい。

長右　こりや味な事をいふナ、百兩で極めた雪野が身の代、跡金の濟まぬうちは、おぬしが妹に違ひはないが、三十兩といふ手付渡した上からは、雪野が身の上に出入があれば、おれが方から理屈を云はにやならぬが、又あれが身の上に變つた事でもあつて來たか。

宗兵　來たのかも凄しい、變るの變らぬのと此頃の天氣ぢやあるまいし、高がかうぢや、昨日祇園で三十兩請取つて、その事の根浚ひに、今朝祇園町へいて見たら、雪野は夕驅落したと追手を出

すやら亂騷ぎ、そこでおれが親方にいふには、氣遣ひさつしやりますな、今日中にわしが連れて戻りますと受合つて來た、雪野が行先、長右衞門のお內儀隱さずとおれに渡して下さんせ。

お絹　いろ〳〵の事いふ人、それをわしが知らうかいなア。

宗兵　知るも知らぬもいるものか、高が雪野が首丈惚れてゐる俳崎屋才二郎、こなたの爲めには現在の弟ぢやないか、たにもかも知り拔いてゐる宗兵衞に隱しても、埒が明かぬ、サア早く戻して貰ふかい。

お絹　何のわしが、その雪野殿とやらを。（ト云ふとするを。）

長右　お絹マアそなた默つてゐや。成程女房の緣により、雪野をかくまうて置いたとの疑ひは聞えたが、これそのやうな惡計するやうな長右衞門でもない、しかしながらさういうたばかりでも疑ひは晴れない、殘金の七十兩たつた今渡してやらう、百兩の身の代を請取つた上は、翠雪野を引取らうがよも言分はあるまいなア。

宗兵　百兩の身の代請取つた上なら、この內に居ようが居まいが、又くたばつて仕舞うが、それからはそつちの物入り。

長右　成程身の代渡さう、兎やかういへば一家の恥、昨日祇園で渡した三十兩の殘り七十兩、確に請

取れ、これで雪野が身の上につき、一切文句がないといふ證文が書いて貰ひたい。

宗兵　そりや金さへ取れば、何木でも、硯箱かして下され。

ト帳箱の硯を長右衞門、宗兵衞に渡す、宗兵衞證文を書く、此内長右衞門胴卷より金を出して。

長右　幸ひお屋敷から受取つた有合せの金、改めて請取れ。

宗兵　跡金の七十兩、どりや請取らうか。

ト取らうとするをお絹中へ入つて。

お絹　これ待つた、その金は渡されぬ。

宗兵　とは又何故に。（ト證文を油斷なく懐へ入れる。）

お絹　その金はわたしが渡しませう。

長右　ヤ、なんといやる。

お絹　宗兵衞とやら、さう思うて下さんせ。

宗兵　スリヤその金は、内儀のこなたが。

お絹　アイ。

ト合方きつぱり、お絹こなしあつて。

長右衛門殿こちの人、お前の志うれしう御座んす、弟才二郎をかばうてのこの親切、うれしいはうれしいが、日頃から口やかましいお袋さん、又甥御儀兵衛様の手前、お屋敷から渡つた爲替の金、才二郎が放埒に遣はせましては、何ぼう夫婦の仲でも、こればかりは私が頼みぢに、此金はマア納めて置いて下さんせ。

ト長右衛門ウムトこなし、お絹宗兵衛に向ひ。

仰しやんす通りの譯なれば、七十兩才覺して、私がお前に渡さう程に、どうぞ翌まで待つては下さんせぬか。

宗兵　エ、そんなら、アノこなたが渡すといふは、今日ではならうて翌の事か。

お絹　待ちにくう御座んせうが、聞しやんす通りのわたしが義理づく、縦へどのやうな事があつても、きつと私が拵へて渡す程に、どうぞ聞分けて、明日まで。

宗兵　成程さうこなたが譯をいうて頼ましやる事、よもや違ひはあるまい、ようござんす、翌まで待つて進ぜませう。

お絹　そんなら聞分けて下さんすか、嬉しう御座んす、それで私が義理も立つて、落着いたわいなア。

宗兵　こなさんの義理も立て、長右衛門殿の顏も立て、翌まで待たうが、それはそれにしてちつと外に、長右衛門殿へおれが世話して賣りたいものがあるが、何と買うては下さるまいか。

長右　ムウ此長右衛門に賣りたいものとは、シテその品は。

宗兵　その賣手は、今呼びませう。（ト表の方を見て。）オヽイ〳〵、お六〳〵。

　トこれにて用水桶のうしろより、お六出て來て。

お六　コウ宗兵衛さん、素敵に待せたなう。（ト云ひながら内へ入り。）御免なさいませ、宗兵衛さん、それぢやアお前、えて者はよかつたかえ。

宗兵　マアよかつたやうなものゝやうぢやテ。

　トお絹、お六を見て。

お絹　モシ〳〵、お前はめつそうな、人の内へ天氣のよいに、紙合羽を着なさんして、をかしな女中さんではあるわいな。

お六　アノわつちやアをかしな形サ、日和のよいのに赤合羽、したが味な所から拾つて來たも、何かの役に立たうと思つて、マアお笑ひならば脱ぎやせう。（ト合羽を脱いで、内をじろ〳〵と見廻す。）

宗兵　サアその賣らうといふものを、早う出して賣つたがよい。

お六　そんなら出して見せてもいゝかえ、遠慮ねえな、モシおかみさん、一服喫せておくれな。

ト お絹こはゞゝ煙盆と煙管を出す。

長右　アイおかたじけ。宗兵衛殿が世話で、賣たいものとは。ム、見なれぬお人、シテそのしろ物は。

ト お六懐より、萌黄の小補を出して見せる、長右衛門見てぎつくり思入、宗兵衛も見て。

宗兵　此小柄は昨日祇園で、幸左衛門から長右衛門殿に渡した小柄、賣物といふはこれか。

ト 初めて知つたやうにいふ。

お六　さうよ。

長右　成程これはその時の、それがどうして此方の手に。

お六　味な所でひらいやした。

長右　ヤなんと。

お六　覺えがあるかえ。

長右　ムウ。

ト 思入、合方きつぱりとなり。

お六　しかも、夕、四條の橋下で、四つかつきりに、夜鷹小屋しまつて歸る雨上り、かまぼこの火も薄ぐらい河原千鳥か辻斬りか、血まぶれ仕事にわつちやびつくり、どうしやうと逃げる機みに泥の中、つまづいたのが此小柄、獅子に牡丹の高彫は後藤とやらが細工だと、商賣相場はいくらとも、値打やアまつくらやみの夜に、命とつりがへ七十兩、いゝ買物だ、長右衞門さん、なんと安いものぢやねえかねえ。

長右　そんなら、その時その小柄を。

お絹　エヽ。（ト思入。）

宗兵　こいつア、買はにやなるまいてや。

長右　ムウ。（ト思入。）

お六　外へ賣つては、お前も濟むめえ、いざこざなしに買つておくれな。（ト云ひながら長右衞門の顏をつく〴〵見て。）オヽさうだ〳〵、道理で先刻から似てゐる人と思つたが、長右衞門さんとは、お前の事か、なんの事だ。

ト宗兵衞、お絹不思議の思入。

お絹　何ぢやゝら、こちの人をなれ〳〵しう。

お六　なれ〳〵しくなくつてサ、長右衞門さん、お前わつちを知つてゐるだらうねえ。
長右　ナニおれがどうして。（トつく〴〵お六を見て。）成程さういへば、どつか見たやうにもありし

ト合點の行かぬこなし。

お六　見たやうにもよく出來た、モシつかねえ話だが、おめへは九年程後に、江戸へお出の事があつたらうね。
長右　成程久しいあとに、一遍は江戸を見ようと思ふ内、幸ひ店の用向で、ム、數へて見れば九年跡、變つた事を尋ねる女中。
お六　そのかはつたはこつちの事、今ぢやアこんなくるしがり、これでも江戸の深川で、勤めといふも氣恥しいが、わつちが客の帶長さん、よくマア考へてお見なねえ。

トこれにて長右衞門思出したるこなしにて。

長右　ムウ成程さう聞けば、覺えがある。
お六　オヽ思ひ出しなさつたかえ。
長右　いかにも時分は丁度八月の、月見のはてが付合ひで、友達衆に引張られ、さや町河岸とかいふ所から、小船に乘つて四五人連れ。

お六　初會の客は上方者、うすのろけたしこなしで、座敷ばかりで振つたのを。
長右　こゝらが粋と腹立てず、連れをはぶいて唯一人、鼻毛延して裏とやら。
お六　一度が二度の義理詰に、話して見りやア、滿更に野暮でもねえと打解けて。
長右　腰を据えたる雨の朝、流連するやら、夜明しやら、大事の用も投げやりに。
お六　馴染んで見りやア情のある、どつか意氣だと思込み、無暗に惚れたおさきもの。
長右　こつちも獨身、あとさき見ず、
お六　末は夫婦の約束も、
長右　どうなとせうとたはむれを、
お六　眞面目にうけたうぬぼれから、
長右　箱根を越してはる〴〵と、
お六　尋ねた野暮の行當り、
長右　東女郎に、
お六　京男、
長右　かわつた所で、ハテ、

お六　逢阪ぢやなア。

両人顔見合せ、お六くだける思入、長右衛門ムヽトこなしあつて、お絹もこなし。

お絹　そんなら此女中さんは、こちの人の。ほんにマア油断のならぬ。

お六　サアからたつちやアいざこざなし、帯屋の内には引摺るが、今日からわつちやアおかみさん、お前の気には障らうが、いはゞわつちが初めから女房約束、その時分には鬼も十七、相應に手も握られたり、畜生めと背中をとんと叩かれた、その時のわつちの嬉しさ、今日が日までも忘れはしねえよ、これ程思ふわつちだが、今ぢやアちつとふけたねえ、今更こつちの内は動かねえといふた處が、どうで始終は泣別れ、手切れ足切れ取れやアすめえ、その代りにやア此小柄、値切りこなしに七十両、買つてくれてもいゝぢやアねえかえ。（トお六こなしあつていふ。）

長右　いかにもその品、七十両に買うてやるまいものでもないが、雪野が身の代にさへ、買はさぬお絹が手前、今更なんとも。

お六　そんなら女房になつてもいゝかえ。

長右　サアそれは。

宗兵　買はずば、雪野が跡金取らうか。

長右　サア。
お六　買つておくれか。
宗兵　跡金出すか。
長右　サア。
六宗　サア。
三人　サア〳〵。
宗兵　こいつは恐れながらと、出ねばなるまいな。
お六　どうでさうでもしざア、力が付くめえわな。
宗兵　どれ代官所へ連立たうか。

ト兩人立上る、長右衛門始終こなしあつて、お絹、お六を留めて。

お絹　江戸の女中さん待つた、宗兵衛さんとやらも待つて下さんせ。
宗兵　又お内儀が留めるのか、留めとんしても雪野の金さへ、明日まで待せて置いて、此場をばどうせうと思はんすのだ。
お絹　どうといふたら、その小柄、私が買うたらよう御座んせう。

宗兵　シテその金は何處から出る。

お絹　あの後とも云はず、今こゝでこの絹が渡しませう。

ト合方になり、お絹、長右衞門の側へ行き、櫛と笄を抜いて出し。

最前からの樣子といひ合點の行かぬ小柄のあり所、これもどうやら弟の。イヤ女の魂、此櫛笄、こりや死しやんしたかゝさんの形見の品、片時つむりを離されぬものながら、夫の爲には賣しろなすも、随分世間にある習ひ、雪野殿とやらの身の代には出させて詰らぬ金ながら、夫婦の仲にも違うは金づく、此二品を賣るまでは、質物がはりに取つて置き、その七十兩の金、私に貸しては下さんせぬか。

長右　頭の道具は、女の身だしなみ、殊に母御の形見の品、それを連添ふおれに渡し、此場の難儀を救はうとは。（ト一寸こなしあつて。）ムヽよし、いかにもこれを抵當に、七十兩は我身に貸さう。

ト櫛笄を取つて、以前の金を出す。

お絹　そんなら貸して下さんすか、エヽ嬉しう御座んす。

ト金を取つて、お六、宗兵衞の前へ出し、

サア望みの通り、六十兩しつかり請取らんせ。

宗兵　オヽ、取らずにゐて堪るものか。

　　ト金を取らうとする、お六その手を止め。

お六　待ちな、此金はわつちのだよ。

宗兵　途方もない、おれが取るのだ。

お六　エヽ、虫のいゝ、おめへのさがりはこゝのかみさんが請合うて、翌まで待つたぢやねえか。

宗兵　ヤア。

お六　物覺えの惡い人だなう。

宗兵　サアそりやさういうたものゝ。（ト手を出す。）

お六　ハテわつちが方は今日中に、此小柄、質はせにやア女房とうるさがり、こゝのかみさんが出した金、こりやアわつちが方へ。（ト金を取つて。）サア長右衞門さん、代物はそつちへ上げるか。

　　ト小柄を長右衞門へ渡す。

長右　そんなら小柄は。

宗兵　イヤこいつは大笑ひだ、こつちの仕事の横合から、これが庇を貸して母屋とやら、けしからぬ算用ぢや。

お六　そんなに力を落しやんな、こゝの内はから見えても、餘程くどきのきく家だ、櫛笄で七十兩、かみさんが借りたからは、こつちも小柄で七十兩、したが金を持つて夜道はあぶねえ、夜の更けぬ内宗兵衞さん、一緒に行かうぢやねえか。

宗兵　サア行くは行くが、何ぢや、おれは。

お六　宗兵衞さん、おめへそれ程金が欲しいかえ。

宗兵　サア欲しけりやこそ、取りに來たのぢや。

お六　成程さうだらう、そんならいつそかうしよう、この金はお前にあげよう。

宗兵　エヽナニ、金をくれる、そりやマア夢ではないか。

お六　何サ、わつちもお六だ、此金はおめへに上げる、その代りには、今の證文をおくれな。

宗兵　アノだいなしの雪野の證文、アノこれをか。（ト證文を出す。）

お六　それをわつちの方へおくれな。

宗兵　何の事ぢや、それではやつぱり同じ事、おりや又その金を、たゞくれるのかと思つた、大間違だ。

お六　そんならやつぱり此金は。（ト金を仕舞ひにかゝる。）

宗兵　アヽイヤ〳〵成程なア、現在ある金を取るが徳の形、エヽ仕方がない、どつちへ出すも同じ事、この證文は貴樣へ渡して。（ト證文をお六に渡して。）サア金を請取らうか。

お六　うるさく金を欲しがるの。

ト金を宗兵衞に渡す。

宗兵　有難い、そんなら直に。

お六　これでこつちも。

宗兵　エヽ。

お六　行かうわな。

ト門に出る、時の鐘暮六つを打つ。

ほんにこつちの云ふ事ばつかり、小柄を賣ればお得意のこゝの內、皆さん大きにおやかましう御座りました。したが、折角仕込んだ小柄のもくろみ。

宗兵　どうやらこうやら七十兩。

お六　取ると思へば反古一枚、とても の事に、長右衞門さん、緣を切つたといふ證據に、去狀代りに女の方から、取つて置きな。（ト證文を內へ投込む。）

長右　こりやこれ、雪野が。
お絹　そんなら女中は。
宗兵　眞實、男に。
お絹　モシ。
　　ト長右衞門を見る、長右衞門思入あつて。
長右　何にもいはぬ。
お六　たくさんだよ。
　　ト唄になり、お六思入あつて、宗兵衞を先に立て、向うへ入る。お絹跡を見送り、長右衞門を見る。
　　長右衞門うつむき。
長右　面目次第もない。
　　トこなし、奥より、儀兵衞、お熊連立つて出て。
お熊　オヽよがりの旦那お歸りか、十町かそこらある屋敷へ、半日の上かゝつて、内の事は何になるぞいなう、朝から晩まで藝子おやま狂ひも。米の俵がてつぺいへ登つた、ほんに穀つぶしではあるわいの。

儀兵　母者人やくたいもない、兄貴に限つて何のそんな所へ行つしやらうぞいの、大方長半の屋敷へ入つて居られたものであらう。
長右　儀兵衛そりや何をいふ、此長右衛門つひに一文の勝負もした事はないぞよ。
お熊　イヤ滅多に違うた事もあるまい、何でも金が入る穴がなうては叶はぬ、倸りげいしう正直な弟にひしかゝつて物をいやんな、ヤイ長右衛門一昨日取りに行た爲替の百兩、どれ今見よう、サアこゝへ出しや。
長右　イヤその金は、折角參じましたれど、折節留守で御座りました、明日參る約束で御座ります。
儀兵　これ〳〵兄貴、ぬけ〳〵しう嘘いはしやんな、おりやたつた今先へ行て來たが、金は一昨日こなたに渡したと、爲替手形出して見せたが、それでも此方請取らんといふのか。
長兵　サそれは。
儀兵　金は翌の約束ぢやに、先へ手形がどうしてあるの。
長右　サそれは。
お熊　これ〳〵儀兵衛、詮議にや及ばぬ、モウ川東へ飛んだであらう、清洲から取つた五十兩も心許

ない、サアこゝへ出して見しや。

長右　そりやお目にかけませう。(ト腰の鍵にて戸棚を明け。)　ヤアこりや、入れて置いた五十兩がないわ。

お絹　エヽ。

ト二人立つたり居たり狼狽へるこなし。

お熊　エヽ長右衛門、金はどうぢや、それ鍵のおりた此戸棚の、鍵を持つてゐる者が取らいで、誰が取らう、これもおゆがめ遊ばしたか、嫁御嘸嬉しからうなう。

儀兵　イヤ母者人、こんな事ばかりぢやない、まだ〳〵どめつさうな事があるわいの、隣の娘お半と兄貴とがねんごろしてゐるを、近所から云ひ立れど、よもやと思ひ聞捨てにしたが、違ひないこれこの痴話文、マア〳〵口の所は退けて置いて、伊勢參りの下向道、石部の宿の假枕、今しも忘れ兼ねまひらせ候、どうぞ〳〵今一度嬉しき御見顏上まひらせ候、長さままゐる、半より、ハア、ア、ゝませたよな〳〵、これ見やしやんせ。

お熊　マアそりや大それた不義いたづら、兄弟同然と云ひ、恩のある隣の娘をそゝのかし、嫁入の邪魔ようしたなア。

お絹　成程さうお聞きなされては、お腹立は御尤で御座りまするが、長右衛門殿に限り、あの不埒があつてよいもので御座りませう、それは相手が違うて御座りまする。

儀兵　イヤ申しお絹さん、しつかりとした長さまゝゐる、半より、といふ確な證據があるが、なんと貧乏ゆるぎもなるまいがな。

お絹　さいなア、その長さまゝゐると書いてあるによつて、猶間違で御座んすわいなア。

儀兵　テモ變つた事をいうてぢや、全體誰と間違うてあるえ。

お絹　その間違は、隣の丁稚の長吉で御座んす。

儀兵　こりやおかしいわい、臍が西國するわいハヽヽヽ、これ長吉の長の字は。やつぱり長の字ぢや。

お熊　そのやうにせり合うてゐる手間で、長吉を呼んでおぢや。

儀兵　ほんにさうぢや。（ト門口へ來て。）長吉内に居るか、長吉〳〵。

ト隣りの内にて

長吉　ハイ〳〵〳〵。（ト出て來て内へ入り。）申し、儀兵衛さん、何の用で御座りまする。

儀兵　貴樣を呼んだは別の事でもない、我身とそちの内のお半女郎とねんごろしてゐると、こちの兄嫁が云はれるが、よもやわれにさういふ事はあるまい。さう〳〵の面ぱれぢや、さつぱりとい

ひわけをしやいなう。

お絹　これ〳〵長吉どん、こゝぢやぞえ、覺えのある事なら、必ずあると噓をつかずと、ほんまにいうてしまわんせ。

儀兵　われは覺えはあるまいがな。

お絹　サア覺えがあるか

二人　サア〳〵どうぢや。

長吉　ハア、、。（トうつむきこなしあつて。）誠や、惡事千里とやら、隱すより顯はるゝと、皆さまの手前、面目お耻しいが、わたしやとうから、お半さまとねんごろしてゐますわいなア。

儀兵　コリヤ〳〵長吉大事の所ぢや、しつかりと言譯をせいやい。

長吉　イエ何をかくしませう、此春お伊勢參りの下向の時、石部の宿やで、つい女夫事したお半さまのねんごろ男といふは、何處までも少分ながらこの長吉で御座ります。

儀兵　ヤイ〳〵そりや何ぬかすのぢや、こりやヤイ此狀の名宛長さままゐる、半より、こりや長右衞門の長、ナ長さままゐる。

長吉　エヽ何ぢやいな、長さままゐるは、おはもじながら、此長吉の長の字ぢやわいなア、儀兵衞さ

ん、お牛さんの男は私ぢや、何ぞお前の構ひになるまいなア。

儀兵　エヽいま〳〵しい。

お絹　オヽ長吉どんよう云はんした、それでさつぱりと分つたといふもの、イヤ申し母様、現在不義の相手が出たからは、旦那殿に不義は御座りますまいがな。

お熊　あんた極道めが出てうせたが因果ぢや、儀兵衛、そいつを早くいなして了へ。

儀兵　いま〳〵しいたうしもののめ、きり〳〵いにさらせ。

ト長吉を表へ放り出す、長吉捨臺詞にて暖簾へ入る。

お熊　それはそれで濟みもせうが、二口の傷替の金どこへやりをつた、詮議もせねばならんが、アノしん兄で拍子ぬけがした、横町のでつち生洲で一杯入れて來てからの事にせう、我身もおぢや。

儀兵　それ〳〵さうぢや、腹でも丈夫にして、金の行方吟味せにやならん、エヽ折角うまくやりかけたを。

お熊　エヽ構はずとおぢやいなう。

儀兵　そんなら伯母貴。

お熊　サア行かう。

ト唄になり兩人こなしあつて橋懸へ入る、此内長右衞門はうつむいてゐる、おきぬこなしある、奥よりお松下女の形にて、行燈に灯をともし持ち出て直に入る、跡合方になり。

お絹　申し、長右衞門さん、おまへはきつふ濟まぬ顏付、必ずひよんな思案して下さんすなえ、姑御や小舅につらい氣兼ねも、お前といふ人あればこそ、十年連添ふ女房ぢやもの、私が手前立ぬ事もなんにもないぞえ、又お半女郎の事も、私が知つたかと言譯にさしやんす仲人、愚鈍な私でも女房と思うての心遣ひ、わたしや心で拜んでをります、それ故縁組を變替したも、年端も行かぬあの子でも、若しやお前の樂しみになりもせうかと心の奉公、悋氣どころか顏へも出さぬは、お前に氣の毒がらすが笑止なと、意地惡の姑御や儀兵衞樣の耳に入らうかと、それが悲しさ、私も女子の端ぢやもの、大事の男を寢取られ心ようもなし、悋氣のしようも知つてゐれど、大事のお前に氣を遣はし、病でも出やうかと案じ過して何にも云はず、祇園樣へお百度もどうぞお前へ他かれぬやう、お半女郎と二人の噂が立ぬやうにと願立、はかない女子の心根を不便と思うて、必ず見捨てゝ下さんすなえ。

長右　お絹忝い、百兩の金は最前の仕儀で、才二郎が爲にするではない、そなたの親御へ心の義理、又五十兩の盜人も知れてはあれど、義理といふ字に詮議もならず、此二口は濟みもせう

が、濟まぬのは隣、ありや一體からぢや、此春の清洲行御用が多うて隙が入り、廿四五日の長逗留、その中には内の事を案じ、我身の事や兎や角と案じて、やう〳〵石部まで戻つて、アヽ嬉しや翌の晩は内へ戻つてどうしてかうしてと、思ひ〳〵ツイ寢入つた所が、そなたの事を夢に見てゐる最中、何か隣の長吉が色氣付いてお半を追歩いた故、ツイ寢所へ入つたさうなが、誓文隣とは知らぬ夢心に、やつぱり我身ぢやとばつかり思うて、サアこゝまでは夢、これから先は。僕るに煩惱、どうも言譯がない〳〵。（トうつむく。）

お絹　エヽ、女房に何の言譯、わたしや大方そんな事の間違ひであらうとは、思うてゐます、必ず〳〵氣にかけて下さんすなえ、モウ云ひますまい〳〵、ほんにさうぢや、最前からのもや〳〵で、まだ夕飯上るまい、肴拵へて來う程に、一つ上つてちやつと休ましやんせいなア。

長右　イヤ〳〵、もう酒も飮みたうない、放つて置いてたも。

ト云ひながら帳箱に凭れ、寢入る振をする、お絹布團着せかけ、傍へ寄つて。

お絹　長右衞門さん、女房といふものは、兎角男の機嫌のよいのが樂しみで御座んすぞえ、エヽ、どりや燗をつけてこようか。

ト獨吟になりこなしあつて、そつと簞笥の脇差の類を抱へて、思入あつて奥へ入る、長右衞門起上

つて。

長右　お絹、忝い、そなたのやうな女房が、この世の中にもう一人と有らうかいの、不所存な長右衞門を男と思ひ、辛棒する心意氣の嬉しさ、過分なぞよ、千年も萬年も連れ添うて、禮が云ひたい堪能させたい、取分け五つの年からお世話になつたこの家の親仁樣、あと〳〵の弔ひもせぬのみか不孝者の義理知らず、二つにはお絹が心底、骨身を碎く苦しみも、どうも濟ぬはお半の腹、二月三月は隱されうが、アノ小さい者が、（ト腹を抱へて。）こんなものになつた時、どうも世間へ顏が、その上清洲のお屋敷から預つた刀、何處ですり替へられたやら、今宵中に詮議せねば呉服所も取上げられ、どのやうな祟りがあらうやら、というて何處を詮議も雲をあて、まだまだその上夕河原での仕儀、幸左衞門殿を手にかけたも同然、證據となる小柄は幸ひと戻つたれど、御家老片岡幸之進樣の御子息、惡人ながらも我子の仇とは仰りもすまいが、所詮生きてゐては言譯立たず、死なうとは覺悟極めたれど、せめて女房に餘所ながらの暇乞ひと内へ戻つて、結句女房に苦勞をかけ、不孝に不孝のふくりんかけ、此身は何たる、エヽ我身ながら愛想が盡きたわい。

ト大泣き、これより帳箱にかゝり、半切を出し書置を書く事、此内隣の内より、お半そろそろと出

て、門口より見て、内へずつと入り。

お半　長右衛門さん。

長右　お半か、そなたまだ寝やらぬか。（ト書置をちやつと隠す。）

お半　アイ最前嫁入せいと意見して下さんした、返事を云ひに来ましたわいなア。

長右　返事をいひに来たとは、そんならそなたは合點が行て、おれが事はとんと思切り、油の小路へ嫁入する心か。

お半　お前の仰る通り、これまでの事はふつ／＼思ひ切りまする。

長右　オヽ出来しやつた／＼、よう得心してたもつて、それで互の身の納り、世間の噂もひとりやむ。又腹の巾分も、お絹がよいやうにするであらう、何も案じる事はない、随分毒養生しやヤ、サア人が見たら縁の切れた事は云はず、何のかのと云へば悪い、サアちやつといにや／＼。

ト納戸の方を見て手を持って出さうとする。

お半　アイ、アイこれを限りに、わたしや内へ歸りまする、お前は随分病はぬやうに、コレ顔見せて下さんせ。

ト手を取交し、互に思入。

長右　病はぬやうとは、そなたの事、何もきな〳〵思はずと、随分母御へ孝行にしやいなう。

お半　アイ〳〵御機嫌よう、今まではよう可愛がつて下さんした、長右衛門さん、必ず病はぬやうにして下さんせ。

長右　そなたも随分機嫌よう。

ト此時奥にて。

お絹　こちの人、長右衛門殿〳〵。

長右　ありや、お絹の聲。

トこれにて長右衛門慌てゝお半を門口へ突やり跡締める、お半名殘を惜しむこなしにて、懐より書置をそつと出し、駒下駄に結付け窺うてゐる、長右衛門は内にて氣のもめるこなしにて、門口へ出ようとする、これにてお半花道の中程にてつくばひ窺うてゐる。

どうやらをかしい今の云ひやう、いにをつたかしらぬ、どうぢや一寸隣へ行て。イヤ〳〵どうか行きにくいやうなもの。

ト門口へ來て隣の内を見込み、又戻つて駒下駄につまづき、書置を取上げて見て。

何ぢや、書置の事、ヤア。

ト大びつくり、これにてお半ツイと向うへ入る、長右衛門あちこち身をもがき、いろ〳〵あつて、行燈の傍へ寄つて書置をよむ、これを看經の叩鉦の合方になり。

お前と緣切り、外へ嫁入する心もなく、殊にたゞならぬ此身、世間へ知れても私が恥は厭はねど、お前の名を出すのが悲しさに、お絹樣への詫事や、かゝさまにしかられぬ內、桂川へ身を投げ候、ヤヽヽ、桂川。かつら川。（トうろ〳〵して、どつと下にゐて。）可愛や〳〵、アノちつぽけなもの、マア一人何とやられう、道理で病はぬやうにして下されと、こつちは死ぬ氣でゐるものを、向うは向うでおれに生殘つて、われ一人死ぬる覺悟で、暇乞をしに來たのか、もうもうどうもならぬ、おれも行くぞよ。（ト花道まで行きかけ。）お絹〳〵、堪忍してたも〳〵、親仁樣、御免なされて下さりませ、私はめつさうな事致します。お半やアイ〳〵。

ト初夜の鐘にて、長右衛門向うへ入る、絲懸より針の宗兵衛袋入の刀を提げ出で來り、隣の內より長吉出て。

長吉　兄貴ぢやないか。

宗兵　長吉か、よい所で逢うた。

長吉　だんない、こゝへ入らんせ、扨て儀兵衛から請取つた五十兩、約束の骨折賃請取らつしやれ、

シテ件の脇差持つて御座んしたか。

宗兵　それ渡さう、請取りや。（ト金と引換へ。）おりや何やら譯も知らぬが、此脇差はどうしたもので、骨折賃に五十兩、儀兵衛はよう出すの。

長吉　ハテその五十兩も、根はこゝの內の婆が合鍵して盜んだのぢや、此どすは長右衛門が清洲の屋敷より受取つた誂へ物、遺恨の意趣に石部の宿ですり替へたは、おれが細工。

宗兵　それを又儀兵衛がどうするのぢや。

長吉　さいなう、長右衛門のうつそり贋物とも知らず、研ぎにかけ、今日藏屋敷へ持つていて、ふらい贋玉貰うて戻り、今夜四つまでに正眞のを渡さぬと、どういふぼくが來やうやら知れん。ところで此正眞を儀兵衛の手から尋ね出したと、屋敷へ持つて行くと、長右衛門は呉服所を上げられ、儀兵衛へは褒美に二代の呉服所、我らには內のお半と女夫になつて、どこもかも納るわいの。

宗兵　儀兵衛といひ、おのれら二人ながら、よう揃うた大惡人。

長吉　ヤア。

宗兵　こりやヤイ、おれの死れた親仁殿は、此家の隱居繁齋樣のお情にて八百屋商賣、大恩うけたる

帶屋に緣ある才二郎殿と義理ある妹雪野が情を、お世話なさるゝ長右衛門樣の難儀となつたと聞いてびつくり、表面ばかり敵役、心は御恩を送らん爲、わざと仲間へ入つてゐるは、うぬらが工みを聞出さんばかり、今うぬに渡したはやつぱり贋物、實の刀はこゝにあるわい。

長吉　ハア、、仕舞うた、こなたが立役になつては、こりや叶はぬ。

ト逃出さうとするを、引戻して立廻り、ト長吉逃げて入る、奥よりお絹出て。

お絹　樣子は聞きました、八百屋宗兵衛殿、いかい働き、何かと世話で御座んした。

宗兵　私の働きは御恩報じ、マア紛失の五十兩、すり替へた刀を渡しませう。

お絹　ヤレ〳〵嬉しや、ちやつと旦那殿に、長右衛門さん〳〵。

ト呼ぶ、この時隣よりおいし慌て走り出て。

いし　申しお半が見えませぬ故、尋ねて見れば此書置。

お絹　エ、アノお半さんが。

ト云ひながらあたりにある長右衛門の書置を見つけ、開き讀む。

宗兵　ム、扨ては夕の人殺しを名乘つて、長右衛門殿も行かしやつたのではないか。

絹い　ナニ人殺しを、名乘つてとは。

宗兵　四條河原で、悪者片岡幸左衛門といふ侍を、長右衛門殿が殺した故、最前のお六が身にかゝり、その事の濟んだ事は知らんせぬ故。

お絹　さてはその事を思うて、お半と一緒に桂川へ、かうしてはゐられぬ、男共〳〵。

いし　皆、ちやつとおぢや〳〵。

大勢　ハイ〳〵。

ト兩家より下男大勢提灯を持ち出て。

宗兵　これ〳〵狼狽へまい、高が桂川が長右衛門様で、お半様が長右衛門様ぢや。

いし　こゝでもや〳〵いうてはゐられん、足の達者な衆は桂川へ、早う〳〵。

お絹　此刀は宗兵衛殿、お屋敷へ賴みます。

ト宗兵衛脇差をさし、

宗兵　確に宗兵衛が預りました。

皆々　サア道を分けて行かう〳〵。

ト皆々、お絹、おいし書置を持ちながら行かうとする、儀兵衛、長吉兩方より取付いて。

儀長　その脇差を。

トかゝるを宗兵衛立廻り。

お絹　そんなら宗兵衛殿。

宗兵　こゝ構はずと御座りませ。

トお絹、おいし、皆々よろしく向うへ入る、あと宗兵衛、儀兵衛、長吉の三人をかしみの立廻あつて、兩人を捕へてぐつと踏付け、尻をまくり鼻を抓む、此見得よろしく。

柏子幕

造物一面の淺黄幕、時の鐘にて幕明く。

ト上手より帯屋、信濃屋と記したる弓張提灯を持ち、下男大勢出て兩方へ別れ入ると、役人觸口上あつて。

〽月の桂の川水に、浮名を流すうたかたの、泡と命を信濃屋の、お半を脊に長右衛門、時雨をしばし足休め。

トこれにて淺黄幕を切つて落す。

桂川道行の場　造物向う一面の打抜き桂川の景色、眞中三間の間二重舞臺蹴込み砂の書割、兩方

に蛇籠樹、上手に寄せて柳の立木、一面に柳の釣枝見事にして、上手に出語臺、二重眞中に長右衛門着流し頬冠り一本差、お半振袖にて長右衛門に負はれ居る見得、都て桂川の體よろしく、尤一面に所作舞臺を敷く事。

へ御池通も影凄さ、柳の馬場をあとに見て、急げば名殘押小路、妻にも別れ鐘の音も涙ふくみて、雨ぞ降る。

ト此内長右衛門脊中からお半をおろす。

へ堀川過ぎて、やう／＼と急ぐとすれど捗らず、脊をとりなりもまだ振袖のはら／＼と、あとや先なるおくれ髮、後の世照らし給はれと、願ひをかけて闇を行く、梅津の小橋渡れども、縁の淺瀬かれ枯れて、鰍も今は鳴つくし、男心をかこつにぞ、ほんに思へば昨日今日、小さい時からお前に抱かれ、手習ひせいと云はしやんして、お手本書いて貰うたり、色のいろはのお師匠さん、それから思ひ染浴衣、伊勢の戻りに合宿の石部とやらの木枕が、堅いお前と新枕、添寢の夢をさませとや、その馬士節に起されて。

へ笠にてる／＼紅の紐、戀を鈴鹿に袖くゝる、雨の土山ナアヱ、ぬれてぬるゝ

ナアエ、心のたけをむすぼれて。

長右　これお半、よう聞きやヤ、わしこそは幸左衛門様を手にかけた人殺しの身の上なれば、死なねばならぬ、そなたは跡に永らへて、後世弔うてたもるのが私への貞女、親御への孝行、よう聞分けてこゝからいんでたも。

〽聞いてお半はさしうつむき、何にも云はず振袖の袂かざして、顔のぞき。

お半　これいなア長右衛門さん、年も行いで恥しい、この腹帯はどうせうえ、殿御持いでやゝうんで、永らへ居よとは、そりや胴慾ぢや。わたしや死んでも、お前よりいとしい人があろかいなア、惚れたが、因果、勘忍して一緒に殺して下さんせ。

〽露の命をませ垣の、消えも入りたき風情なり、お半が歎きいぢらしく、長右衛門も胸せまり、その心根の不便さに、涙の淵に底意なく共に沈まん、覺悟ぞと涙に涙濺ぎけり。

〽人事をいうて、二人がみすぎとは、あぢな世すぎや四つ竹に。

ト在郷唄になり、竹八讀賣の形、三味線かたげ本を持ち、あとよりお糸本と行燈を持ち出て、花道

にて。

お糸　これは皆さま御存じの、四つ竹新内で御座ります。

竹八　上下揃へて、はんこは僅か紙代、お急ぎでない方は。時々默つてゐるも、あんまり張合がない
ゆゑ。

〽色の情や戀の道、くらい夜道も、看板のあんどな中の氣さんじは、お邪魔
にちよつと成駒屋、越えて川邊へ來りける。

ト兩人よろしくあつて本舞臺へ來て、長右衛門お半を見て。

よう〳〵何ぢや、美しい娘を連れて、お糸見たか。

お糸　さうで御座んすなア、どうでも一朱の口と見えるわえ。

長右　イヤ〳〵私や、何にもあやしいものでは御座らぬ、此桂川邊の知邊へ、この子を送り屆ける者
ぢや。

お糸　ム、そんならそのお子を。お娘御さん、さうで御座んすかえ。

お半　アイ。

竹八　イヤ〳〵どうでも合點が行かぬわえ、どうやら二人は。イヤサわしら二人の身の上も、元は戀

故この通り、新内節や四つ竹で、粹が身を喰ふ讀賣の今の身の上、

お糸　お二人へ意見ぢやないが商賣の、

竹八　この四つ竹で、なア嬶ア、

お糸　歸り仕事に張込んで、

竹八　くぜり掛けうか。

〽こゝに都の戀の淵。

〽情にはまる堀川の。

〽名うて娘におしゆんとて、

〽よいじゆそいしゆの花嫁ざかり、貰ひかゝれど。

〽この娘自體米屋の傳兵衛とは。

〽親には云はぬ忍逢ひ、それでよそへの。

〽嫁入りを。

〽嘸や世間の口の葉に、かゝりやつながる傳兵衛さん。

〽お内儀あんへ濟ねども、惚れたが因果、浮世ぢやと。
〽思ひ定めし戀紅葉、色も今宵がちしほ染。

お糸　お前もマア、あの娘御の傍で、ぎえんの悪い心中のやうな事は、おきなさんせいなア。

竹八　成程そんなら目出度、ぎえん直しに女夫になつた、お定りの。

〽高砂や。
〽この浦船に帆をあげて、四海波間に入る月や、可愛〱の明烏。
〽聲にびつくり心なし、ひとりおくれて歸り足、見渡す向うにあら不思議や年ふる螺と思はれて、かの畔道に駈上り、ころりと寝たるその態は、日向ぼこすと見えにけり、かゝるところへおそろしや、泊烏の朝歸り、これを見るより時分はよしせしめばやと思ひつゝ、螺の胴中ひつ咬へ、梢遙に飛上れば、こりやたまらぬとさそくの螺、ちよく〱ら節にてやつてくりよ。
〽さつてもやさしや、伽羅の古木にやんれさも似たり、お目のすゞしさは瑠璃の壺とも申すべしヤレコリヤナア、イヤナア囀り給ふおん聲は、春の林

の梅ヶ枝にホウ法華經の鶯よりもしほらしや。

〽烏大きにだまされて、悦ぶはづみに手を放し、川へざんぶとおつことし、螺大きに悦んで、ヤイそこな、まぬけの馬鹿烏、おのれが色の黒き事、おはぐろどぶのあげ土か、まなこの内のちさき事、鹽辛壺ともいひつべし、ガア〳〵〳〵と鳴聲は、年貢の訴訟する如く、あほう烏といひ捨てゝ、浪間へこそは入りにけり。

〽とかういふうち明烏、われも寢ぐらへ急がんと、打連れ急ぎ行く向うに、見ゆる人影は、もしや追手と心せき、イザと手に手を鷄の聲、はや東雲の空のいろ、石を袂に糸と針、繻子の帯屋と信濃屋の。

大勢　お半ヤアイ、長右衛門ヤアイ。

〽と呼ぶ聲に、見付られじと足許も、亂るゝ月の桂川、水上へとぞ急ぎ行く。

トこれにて捕手大勢、弓張を持ち出て取卷き、此見得よろしく。

幕

# 巻末に

「伊勢音頭戀寢刄」は、近松徳三の作で、寛政八年七月大阪角の芝居に上場されたものである。これには次のやうな事實がある。同年五月四日伊勢の古市に九人斬があつた。それは土地の醫者孫福齋宮が古市の料理茶屋油屋へ上つて、馴染の茶酌女お紺を相手にして飲んでゐた。別の座敷には、阿波の藍玉商人岩次郎、孫三郎等が芝居がへりに立寄つて、同じやうに茶酌女お岸、お鹿を相手に遊んでゐた。兎角して、その一座へ、お紺も呼ばれて行つた。それが齋宮には面白くない、丁度晩の九つ半といふから、今の午前一時だか、怒つて歸ると言出して、表口まで出たが、脇差を受取ると、いきなり下女の萬に斬りつけた。それから家内へ暴れ込んで、手當り次第に斬りつけ、即死二人、負傷者七人、合せて九人斬の慘事を引起した。齋宮は、ふだんから酒癖の悪い男だと云はれてゐるが、直接の動機は、お紺へ對する嫉妬であらうと思はれる。九人斬の評判は直に大阪へ傳へられた。そこで、當時角の芝居の立作者だつた近松徳三が、たつた三日で書上げたと云はれるのが、この作なのである。

役者は、中山文七の福岡貢、芳澤いろはのお紺、三桝徳治郎の伯母おみね、關三十郎の藤浪左膳、

坂東重太郎の今田萬次郎、藤川八藏の奴林平、嵐雛助の料理人喜助、三桝松五郎の德島岩次、中山文五郎の仲居まんのと正直正太夫等である。これと同時に、京都四條南側の芝居でも、奈河篤助が同じ九人斬を脚色して、嵐三五郎の遠山齋宮で、「いせみやげ川崎踊拍子」を書いたが、これは評判にならないで、「伊勢音頭戀寢刄」の方が有名になつて了つた。

この作は、並木五瓶の「五大力」から、大分暗示を得てゐる。五瓶は、この二年前の寛政六年二月中座で「島廻戲聞書」を書いて、翌年は江戸へ下つてゐる。又二幕目に、伯母のおみねが、貢とお紺が逢引して正太夫に引摺り出されると、お紺を自分の妹と言ひくるめて、あとで青井下坂の由來を語つて聞かせるところは、そつくり近松の「長町女腹切」の燒直しである。かうして、この「伊勢音頭戀寢刄」は、「五大力」と「長町女腹切」の燒直しであるが、貢の型にいゝ型が傳へられて、愛想盡しものゝ代表作になつたのであらう。東京には、音羽屋型といふ立派なものがある。それは、三代目彥三郎が文化五年二月中村座で貢をやつてから、同十一年七月中村座で三代目菊五郎がやり、その型が四代目彥三郎から、五代目菊五郎に傳へられて、すつかり洗練されたものである。

作としては、それ〴〵お手本のある二幕目、三幕目より、序幕の第二場、第三場、即ちおつかけから二見ヶ浦が面白い。これも全くは演出のよさであるが、「南蠻がらしに唐がらし」といふ唄で、假花道

から、歩み、本花道と、大藏、丈四郎、林平の手紙のやりとり、それから、二見ケ浦の日出で、貢が敵役の手紙を讀む件の、いかにもお芝居らしい、見事な場面であるのに感心する。全體、この作は、伊勢の大神宮を背景にしてゐるやうなところが、見物に親しみのある一つの理由であらうか。

「明烏夢泡雪」は、もと新内淨瑠璃の名題である。明和六年、吉原扇屋の抱三吉野と藏前の金持の息子伊之助とが心中した。江戸では上方程心中が多くなかつたので、この事實が新内淨瑠璃になると、忽ち市中の評判になつた。詞章、作曲共に、鶴賀若狹の手になると云はれてゐる。新内節は曲調の悽怨を以て優れて、その哀音は、餘りに若い者の血を荒すといふので、吉原では、文化の頃から新内語りの廓内へ入る事を禁じて、盆の十三日だけは、供養の意味で許した程である。かういふ淨瑠璃物の舞臺化であるだけに情緒纏綿たるもので、「廓文章」が京阪の特殊な氣分劇であるやうに、「明烏」は江戶を代表する一幕物の氣分劇である。さういふ意味で、これは歌舞伎劇の傑作の一つに數へられていい。

新内節は、豐後諸流のうちで、一番最後に盛んになつたもので、又一番はつきりと江戶情緒を表現した淨瑠璃である。宮古路豐後掾の門人、宮古路加賀太夫に起つた一派である。加賀太夫の門人に岡

のやうな民衆藝術家の願望ではないだらうか。だから、秀吉が三日で城を造るのとは違つて、かういふ即興詩人の立場も、脚本作家にはあつていゝ譯である。又同時に、かういふ際の興行者も、單なる商賈人でなくなる。この頃は、營業劇場が信用を失つて了つて、それは信用されなくつても仕方のないやうな狀態にあるが、昔から傑れた劇場經營者は全くの商賈人でない。昔ならば、竹本座の竹田出雲は立派な詩人であるし、近くば、明治の守田勘彌、田村成義と云つた人には、大分詩人の風格がある。劇場のコンマアシヤリズムを攻擊する結果、營利劇場は煮ても燒いても喰へないものゝやうに、今日では折紙をつけられた形であるが、築地小劇場のやうな演劇の實驗室ばかりでは、本統に演劇の進步は見られない。營利劇場の中から、早く本統の詩人が出て來て、演劇と一般の民衆とを結びつける必要があると思ふ。

大分筆が外れて了つたが、「心中天網島」が歌舞伎劇の方に入つたのは、江戸が先である。即ち書卸の翌年に、二代目團十郎が紙屋治兵衛を演じてゐる。二代目は「暫」や「助六」のやうな荒事の型を造つてゐると共に、この作や、紀海音の「心中二つ腹帶」の八百屋半兵衛を演じてゐる。藝の多方面もあらうが、傑れた見識を持つた人だつた事が、この一事でも知れると思ふ。併し後世になると、大近松の原作では、喰ひ足りないところから、安永七年四月竹本座に上場された、近松半二、竹田文七

兩人の改作になる「心中紙屋治兵衛」が、普通に行はれるやうになつた。今日の「河庄」の場や「炬燵」の場は、近松の原作でなく、半二等の改作に依つたものである。

近松半二等の改作「心中紙屋治兵衛」は上下に別れて、上の卷が浮む瀬と茶屋の段、下の卷が長町と紙屋の段で、前後四段に分れてゐる。浮む瀬は、太兵衛が乞食坊主傳海を使つて、治兵衛に三十兩の金を貸して、名宛のない借用證文を書かせる處、茶屋の段が「河庄」、長町の段は原作に「南邊に賃仕事して裏屋住み」とある文句から來た小春の實家で、母はめくら、妹のお市が看護してゐる。そこへ小春が別れに來て、母親の目が見えないのを幸に、暇乞ひをする件である。一寸「堀川」の與次郎内の場を思はせるものであるが、出來はまるで較べものにならない。小春を思切つた治兵衛が、米俵を馬に乘せて來て、それを置いて行きながら、小春とは縁の切れた話をして、それでも女への面當に、相變らず二人の面倒は見るといふやうな事を云つてゐる。何しに來たのか、よそながら樣子を見に來たのでもないのが變で、只母親に不人情な小春を娘でない、と思はせる筋立にしかなつてゐない。折角野心のある場面に筆をつけながら、物に出來なかつたといつた形である。紙屋の段は卽ち「炬燵」であるが、おさんが出て行くのが結末になつてゐる。「心中紙屋治兵衛」紙屋の段を更に改作したものが、院本「天網島時雨炬燵」で、卽ち今日の「炬燵」は改作の又改作から來てゐる。敵役と見せた五

左衛門が治兵衛の戀に同情してゐるのるや、お末の白無垢の書置や、善六太兵衛を治兵衛が殺し、折角小春身請の金が出來ても、どうしても死なければならなくなるのも、みんな改作の又改作の駄足である。かうなると改惡の行止りといふ感じである。只歌舞伎劇の「河庄」の場だけは、原作の上の卷の註釋として、見るに足る出來であると思ふ。治兵衛が小春といふ馴染を語るところは、大分通俗ではあるが、戀愛の醉ひごゝちを語り盡してゐる。註釋もこの位にゆけば、別に獨立の價値を認めてもいゝ。が、私の評價には、鴈治郎の至藝と云ふか　持味から來てゐる印象が可なり入込んでゐるのであつて、「天の網島」註釋劇「河庄」も、一寸老優鴈治郎の肉體と運命を共にしさうである。少くともあの老優が居なくなつたら、「河庄」の味ひは全く變つた不自然なものになるだらう。

それに引換へて、原作「天の網島」は、今後新しい脚光を浴びるに相違ない。先には堪彌猿之助が岡本綺堂氏の脚色で、從來殆ど手をつけられなかつた下の卷の上演をやるし、紙治役者と云はれる鴈治郎も、近松研究會の後援に依る原作の復興的演出を試みてゐる。

「おはん長右衛門桂川連理柵（かつらがはれんりのしがらみ）」は、安永五年十月大阪北堀江座上演の菅專助作の院本である。その「帶屋」の段は、分別ざかりの長右衛門が、ふとした事から子供の様なお半に關係して、釣合の取れない戀に苦し

むといふ、脚本としてはなか〳〵いゝ主題を掴へてゐる。その上、お半に夫を寝取られながらも、尚夫の苦しい立場を思遣ることの出來る程、世の中を知つてゐる貞淑な女房おきぬ、老ひの寂しさに手をつけた女中上りの後添ひに、一寸頭の上らない、それを一々口に出したくないと云ふ風の繁齋、さういふ善人同志が苦しんでゐる家庭悲劇で、昔の立派な社會劇であり、私の最も好きな芝居の一つである。

院本の筋を、ざつと書けば、上の巻の口が道行で、おはんが伊勢參の下向道で、長右衛門に逢ふ。中が石部宿屋の段で、無論幸左衛門の件はない。切が信濃屋、おはんは才治郎へ嫁入するのが嫌だといふのを、長右衛門は、自分は元捨子と、おはんの父に拾ひ上げられた話をして、是非共嫁に行つてくれと頼む。入代つて、お絹が芝居の事を引合に出して意見をする。下の巻の口が六角堂で、この本の二幕目第一場に當つてゐる。切が帯屋の段で、橋下のお六の件を除けば、殆ど同じである。院本も全體を見ると佳作でない、いろ〳〵例の無駄がある。お絹や長右衛門の性格も、隨分あやふやなものになつて來る。併しながら、帯屋だけを取上げると、「増補桂川」のやうな入れ筋もないし、獨立の一幕物として見れば、なか〳〵傑れてゐる芝居に相違ない。

殊に、飯焚に手をつけて後添ひに直したその女の目に餘る仕打を、凝と堪へてゐる繁齋の悲みが一

番私の心を打つて來る。この一幕物の陰影に富んで見えるのは、箸齋の悲哀が、長右衛門夫婦の上に蔽ひかぶさつてゐるからである。「一年々々尻がぬくもり、道も義理もしらぬばゝめ、追まくるも合點なれど、七十に近い箸齋、女房の離別がみめでもないと、堪忍の胸をさすつて居る。したが否といはふが應といはふが、近い內隱居へ呼取、おもやの事は構はすまい、女夫ながら夫を樂しみに、頬はぬやうにしてたも。」といふ老人の述懐は、人間そのものゝ悲哀を語つてゐるやうな氣持にさへなる。

「增補月桂川」は、その帶屋をも書き壞してゐるものであるが、寛政文化文政から江戸末期まで、これが舞臺に行はれた歌舞伎脚本なので、收錄する事にしたのである。無論脚本としては、邪道であるが、見世物本位の歌舞伎劇は、かういふ脚本を要求したのである。「桂川連理柵」が、さかんに舞臺に上るやうになつたのは、明治になつてからの話である。

「桂川」の道行淨瑠璃は實にいろ〳〵ある。最初が富本で、天明元年正月市村座「道行瀨川仇浪」、常磐津は、寛政八年正月都座「帶文桂川水」、淸元は、文政二年正月中村座「道行思案餘」が主なるもので、前の二つは櫻田治助作である。中村座の淸元の新淨瑠璃も、治助の作を補綴したものに過ぎない。この道行が、今日見るやうな賑やかな景事淨瑠璃になつたのは、都座の「帶文桂川水」からで、これは俗に「夜鷹入お半」と云つて、作曲は二代目文字太夫の妻お菊である。（濱村米藏）

大正十五年七月十五日印刷
大正十五年七月十八日發行

『世話狂言傑作集』第九巻
定價金參圓

編纂者　河竹繁俊
　　　　濱村米藏
　　　　渥美清太郎

檢印

發行者　東京市日本橋區通四丁目五番地
　　　　和田利彦

印刷者　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
　　　　瀧澤一郎

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
　　　　株式會社秀英舍

發行所　東京市日本橋區通四丁目五番地
　　　　春陽堂
　　　　（電話大手五一、四二一〇番
　　　　振替東京一六一七番）

河竹繁俊氏
濱村米藏氏　共編
渥美清太郎氏

# 歌舞伎劇大系（全三十卷）

## 時代・世話狂言傑作集各十五卷　各册

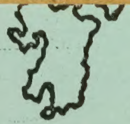
■四百頁乃至四百八十頁校訂
■嚴密解説詳細挿繪豐富
■定價　參圓　送料八錢
■春陽堂發行

### 世話狂言傑作集（全十五卷）

第一卷（既刊）　四谷怪談。法界坊。縁切り。梅川忠兵衛。
第二卷（同　）　天竺德兵衛。幡隨院長兵衛。酒屋。清玄。
第三卷（同　）　八百屋お七。鈴木主水。乳貰ひ。宿無團七
第四卷（同　）　唐人殺し。堀川。野崎村。五大力
第五卷（同　）　女歌舞伎。[illegible]。来山。名工柿右衛門、[illegible]の里、裏表心曲尺、（榎本虎彦集）
第六卷（同　）　累物語。白石噺。鬼神お松。夏祭り。
第七卷（同　）　め組の喧嘩。三人片輪。上野戰爭。松田の仇討。（竹柴其水集）
第八卷（同　）　朝顔日記。二人新兵衛。廓文章。梅の由兵衛。
第九卷（同　）　伊勢音頭。明烏。心中天網島。月桂川。
（以下續刊、卷次、内容には多少の變更あるべし）

### 時代狂言傑作集（全十五卷）

第一卷（既刊）　義經千本櫻。石切梶原。扇屋熊谷。蓮生物語。卅三間堂。
第二卷（同　）　高野山。嫗山姥。玉三。義經腰越狀。新薄雪物語。
第三卷（同　）　阿漕。菅原。板額。山門五三桐。
第四卷（同　）　先代萩。國性爺。辨慶上使。關平物狂。彥山權現。
第五卷（同　）　鬼一法眼。盛綱陣屋。阿古屋琴責。袖萩祭文、伊賀越。
第六卷（續刊）　廿四孝。平家女護島。宅兵衛上使。鎌倉三代記。
第七卷（同　）　ひらがな盛衰記、伊勢物語。岩姫松。輝虎配膳。
第八卷（同　）　伊賀越。古屋。盛綱。安達ケ原。有職鎌倉山。
第九卷（同　）　一の谷。富士見西行。楠昔噺。八陣。
（以下續刊、卷次、内容には多少の變更あるべし）



JAPAN

MAPS
ATLAS
GAZET

UNIVERSITY
MAP LIBR

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 02988 8237